

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第230集

富士山・愛鷹山麓の遺跡

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

富士市-3

総論（富士工区富士地区）

富士岡中尾遺跡（第二東名No.48地点）

平椎遺跡（第二東名CR20地点）

平椎第2号墳（第二東名CR20地点）

2010

中日本高速道路株式会社東京支社
財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

平椎遺跡　巻頭図版 1



1. 平椎遺跡の遠景（南東から）



2. 平椎遺跡の遠景（北東から）

巻頭図版2 平椎遺跡



1. 平椎遺跡全景（弥生時代～古墳時代、南西から）

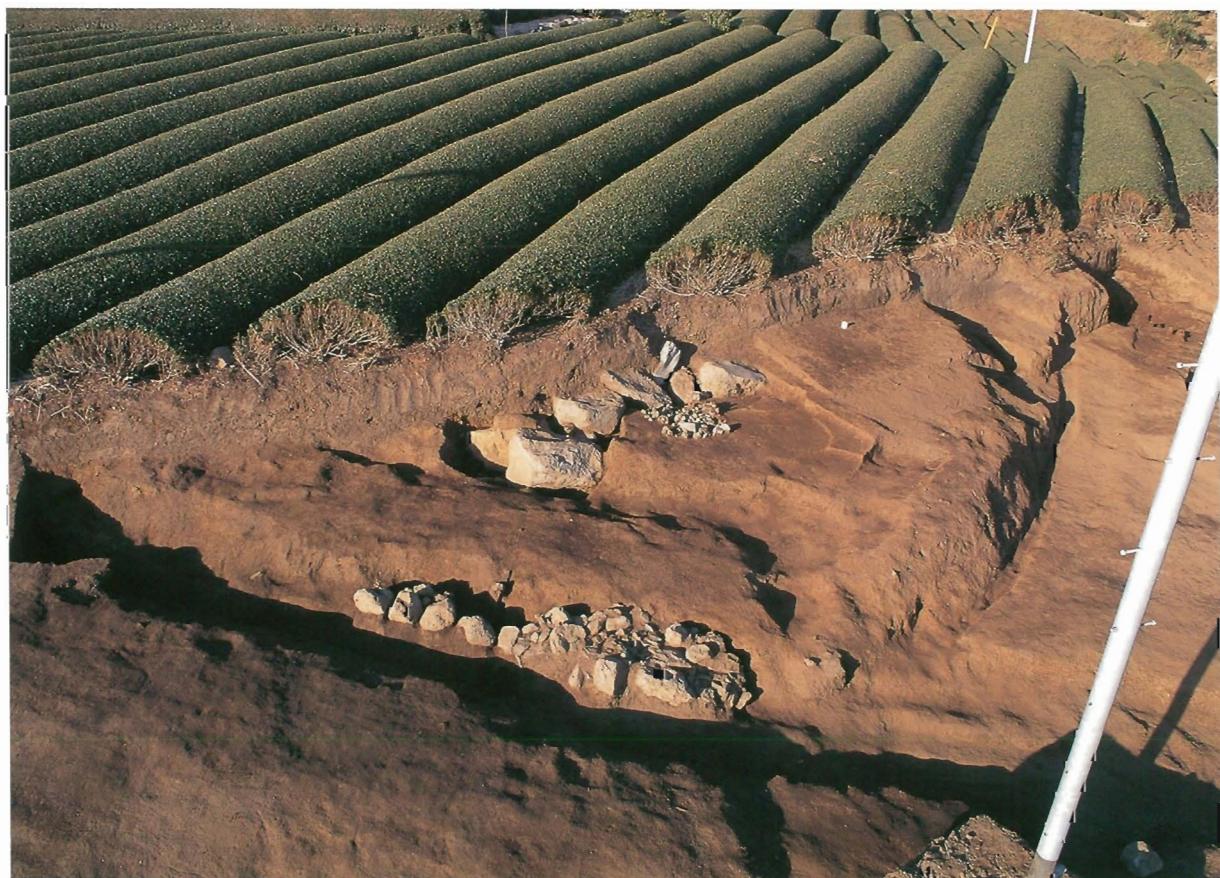


2. 平椎遺跡SH05全景（西から）

平椎遺跡・平椎第2号墳 卷頭図版3



1. 平椎遺跡SH08全景（南から）



2. 平椎第2号墳全景（南西から）

巻頭図版4 平椎遺跡



平椎遺跡出土 主な弥生土器

富士山・愛鷹山麓の遺跡

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

富士市－3

総論（富士工区富士地区）

富士岡中尾遺跡（第二東名No.48地点）

平椎遺跡（第二東名CR20地点）

平椎第2号墳（第二東名CR20地点）

2010

中日本高速道路株式会社東京支社
財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

序

富士市は富士山、愛鷹山、富士川、駿河湾や田子ノ浦という山川と海に挟まれた自然豊かな地域です。特に富士山は古く『万葉集』に「田子の浦ゆうち出てみれば真白にぞ富士の高嶺に雪は降りける」と山部赤人により詠われ、昔からこの地域の象徴的な存在がありました。一方で、このような地理的な状況と人間の活動は切っても切り離せないので、私たちの祖先も多くの影響を受けていたと考えられます。

この自然豊かな富士市には多くの遺跡が所在しています。第二東名高速道路は富士市を東西に貫く形で計画され、多くの遺跡が調査対象となりました。本書では、確認調査の概要を報告するとともに平椎遺跡、富士岡中尾遺跡について報告します。

平椎遺跡では堅穴建物16軒のほか、条濠（環濠）と想定される溝状遺構1条が確認されるとともに、多くの弥生時代後期～古墳時代初頭の土器が出土しました。特にこれまで富士市域では様相が不明確であった弥生時代後期前半まで遡る堅穴建物が確認されたことや、条濠（環濠）が発見されたこと、関東南部や天竜川以西の伊勢湾岸や東遠江に系譜をもつ土器が出土した点は注目できます。平椎遺跡の発見は、東駿河地域の弥生時代後期の歴史について再考を迫るものとなりました。

富士岡中尾遺跡では明確な遺構は確認できませんでしたが、縄文時代早期～後期に亘る遺物が出土したことで富士岡中尾地区に縄文時代の集落が存在する可能性が高まりました。また、近畿地方から持ち込まれた北白川下層式土器が出土したことは、この集落を営んだ人たちの交流の広さを窺うことができる貴重な資料です。

今後は、調査担当者が調査成果およびそれを基礎に分析した考察に対して批評を願うとともに、本資料を活用したさまざまな視点での議論が行われることを期待します。

現地調査および整理作業、本書の作成にあたり、中日本高速道路株式会社（旧日本道路公団）、静岡県教育委員会、富士市教育委員会、富士市博物館、地元自治会をはじめとする多くの関係諸機関・各位にご援助、ご理解をいただきました。この場を借りて深くお礼申しあげます。また、現地での発掘作業、地道な整理作業に従事された方々に、厚くお礼申し上げます。

平成22年11月

財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
所長 石田 彰

例　　言

1 本書は、静岡県富士市富士岡および増川に所在する富士岡中尾遺跡、平椎遺跡・平椎古墳群（第2号墳）の報告書である。各遺跡の所在地は下記の通りである。

富士岡中尾遺跡　　富士市富士岡字中尾2390-1（調査対象面積470m²）

平椎遺跡・平椎古墳群　富士市増川字平椎924ほか（調査対象面積478.5m²）

2 第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書の作成は、地区（旧市町村）単位にて実施している。富士地区では本書が3冊目であるため、「第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書富士市－3」とした。

3 発掘調査は第二東名高速道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査として、中日本高速道路株式会社（平成17年度途中までは日本道路公団静岡建設局）の委託を受けて、静岡県教育委員会文化財保護課（平成21年度まで文化課）の指導のもと、富士市教育委員会、富士市立博物館の協力を得て、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施した。

4 現地調査・資料整理の期間と担当者は調査体制で記載する。

5 本書の執筆は、大谷宏治、田村隆太郎、柴田亮平、加速器分析研究所が行った。執筆分担は下記のとおりである。

田村隆太郎　　第3章第2節2・3、第3節、同第5節1～3、第6節1・2、第10節1

柴田亮平　　第1章第2節2、第2章第3節3の石器、第3章第4節2の石器

株式会社加速器分析研究所　第3章第9節

大谷宏治　　上記以外

6 本書の挿図・図版の編集・作成は主に平成20年度に田村隆太郎が行い、一部を平成22年度に大谷宏治が編集・作成した。

7 現地の写真撮影は、各担当者が、遺物の写真撮影は当研究所写真室が行った。

8 金属製品の保存処理は、当研究所保存処理室が実施した。

9 石器石材の同定については、静岡大学名誉教授伊藤通玄氏の指導を受けた上で、当研究所職員との検討を経て、柴田亮平・森島富士夫が行った。

10 調査の概要については、当研究所や他の刊行になる出版物で一部公表されているが、本書と内容が異なる場合は本報告をもって訂正する。

11 本書の編集は財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が行なった。

12 発掘調査における指導・助言および協力者は次頁に謝辞として記載した。

13 記録類および出土品は静岡県教育委員会が保管・管理している。

凡 例

1 現地測量においては、日本測地系（旧測地系）を使用した。測量図・実測図もこれに準拠する。特に記載のない場合は日本測地系による位置である。

一方、国土地理院ホームページにおいて世界測地系におけるおおよその位置を確認し、記載している部分がある。この場合は、世界測地系であることを明記した。

2 土色は、小山正忠・竹原秀雄編、農林水産省農林水産技術会議事務局監修 1999『新版標準土色帖』に基づいて、分類した。

3 本書で使用した遺跡の表記は次のとおりである。

S H 壁穴建物 P (壁穴建物内) 柱穴 S K 土坑 S D 溝 (溝状遺構)

S X 性格不明遺構 S P 小穴

4 土器・陶器は、須恵器（黒ヌリ）、縄文土器・土師器（白ヌキ）、山茶塙・常滑焼（灰色）などの陶器に分けて、網掛をしている。

5 石器の網掛表記については、次のとおりである。



6 参考文献については、各章末に記載した。第1章は48頁、第2章は69頁、第3章は162頁である。

7 資料整理にあたり、平椎遺跡の遺構番号（遺構名）を変更した。本発掘調査時の遺構番号（旧遺構番号）と本書で用いる遺構番号（新遺構番号）の新旧対応表（76頁第16表）を記載した。本書をもつて正式遺構番号とする。

8 遺物番号については、確認調査時出土遺物、富士岡中尾遺跡、平椎遺跡・平椎第2号墳でそれぞれ1番からつけています。

【 謝 辞 】

現地における確認調査・本発掘調査および資料整理にあたり、中日本高速道路株式会社、富士市教育委員会、富士市立博物館、地元自治会に大変お世話になりました。

また、縄文土器の全般的な位置づけについて池谷信之氏、小崎晋氏、原田雄紀氏、弥生土器の位置づけについて、渡井英誉氏、篠原和大氏、鈴木一有氏、佐藤祐樹氏に御教授賜りました。

さらに、下記の個人・機関にお世話になりました。明記して御礼申し上げます。

石川武男 石川日出志 植松章八 菊池吉修 木ノ内義昭 黒沢 浩 小泉祐紀 笹原千賀子

佐野五十三 志村 博 白澤 崇 鈴木良孝 高尾好之 高野穂多果 竹内直文 藤村 翔

鶴田晴徳 中嶋郁夫 西川修一 前嶋秀張 前田勝己 松井一明 向坂鋼二 望月由佳子 山本恵一
沼津市教育委員会 沼津市埋蔵文化財センター

目 次

序

例言・凡例・目次・挿図目次・挿表目次・写真目次・図版目次

第1章 総 論

第1節 調査に至る経過

1. 第二東名建設に伴う埋蔵文化財の取り扱いの経緯..... 3

第2節 富士市の位置と環境

1. 地理的環境..... 5

2. 歴史的環境..... 7

第3節 確認調査の方法・体制・経過

1. 確認調査の対象地点..... 13

2. 確認調査の体制..... 16

3. 確認調査の方法と経過..... 17

第4節 本発掘調査の方法・体制・経過

1. 本発掘調査の方法..... 20

2. 本発掘調査の体制..... 21

3. 本発掘調査の経過..... 21

第5節 資料整理・報告書の作成の方法・体制・経過

1. 資料整理・報告書作成の方法..... 22

2. 資料整理の体制..... 23

3. 資料整理・報告書作成の経過..... 23

第6節 保存処理・自然科学分析の方法と経過

1. 保存処理の方法..... 24

2. 保存処理の経過..... 24

3. 自然科学分析の方法と経過..... 24

第7節 確認調査の結果

1. 各地点の概要..... 25

2. 確認調査出土遺物..... 40

第2章 富士岡中尾遺跡

第1節 富士岡中尾遺跡の概要

1. 富士岡中尾遺跡の位置..... 51

2. 富士岡中尾遺跡周辺の遺跡..... 51

3. 富士岡中尾遺跡の調査歴..... 52

第2節 調査の体制・経過

1. 確認調査および本発掘調査の体制..... 54

2. 確認調査および本発掘調査の経過..... 54

第3節 調査の成果	
1. 調査区の概要	55
2. 遺構	55
3. 出土遺物	61
第4節 富士岡中尾遺跡調査のまとめ	69
第3章 平椎遺跡・平椎古墳群	
第1節 平椎遺跡・平椎古墳群の概要	
1. 平椎遺跡・平椎古墳群の位置	73
2. 平椎遺跡周辺の遺跡	73
3. 調査歴	73
4. 遺構番号について	76
第2節 調査の方法・体制・経過	
1. 確認調査および本発掘調査の体制	77
2. 確認調査および本発掘調査の方法	77
3. 確認調査および本発掘調査の経過	77
第3節 平椎遺跡の基本土層と概要	79
第4節 繩文時代の調査成果	
1. 繩文時代の遺構	82
2. 繩文時代の遺物	82
第5節 弥生時代～古墳時代の調査成果	
1. 竪穴建物	85
2. 溝	106
3. 土坑および小穴	106
4. 出土遺物	110
第6節 平椎第2号墳の調査成果	
1. 立地と残存状況	132
2. 墳丘	132
3. 埋葬施設	135
4. 平椎第2号墳関連出土遺物	136
第7節 古代以降の遺物	138
第8節 平椎遺跡・平椎第2号墳出土遺物観察表	139
第9節 自然科学分析の成果	
1. 平椎遺跡SH05出土炭化材の放射性炭素年代（AMS測定）	143
2. 平椎遺跡SH05出土炭化材の樹種	146
第10節 平椎遺跡の評価	153
1. 平椎遺跡から出土した弥生土器について	153
2. 平椎集落の変遷	157
3. まとめ	158
第11節 結語	161
写真図版	
抄録	
奥付	

挿図目次

【第1章 総論】

第1図	富士市の位置と平椎遺跡・富士岡中尾遺跡の位置	5
第2図	富士市の地質図	5
第3図	富士市の主要遺跡分布図①	8
第4図	富士市の主要遺跡分布図②	9
第5図	富士工区富士地区の確認調査対象地点	15
第6図	各対象地点の範囲と周辺地形①	26
第7図	各対象地点の範囲と周辺地形②	27
第8図	各地点確認調査の出土土器実測図①	40
第9図	各地点確認調査の出土石器実測図①	41
第10図	各地点確認調査の出土土器実測図②	44
第11図	各地点確認調査の出土石器実測図②	45
第12図	各地点確認調査の出土金属製品・銅錢実測図	46

【第2章 富士岡中尾遺跡】

第13図	富士岡中尾遺跡の位置と周辺の遺跡	51
第14図	第二東名高速道路とNo. 48地点確認調査対象範囲	52
第15図	富士岡中尾遺跡の調査区の位置	53
第16図	富士岡中尾遺跡基本土層図	55
第17図	富士岡中尾遺跡調査区の配置図	56
第18図	富士岡中尾遺跡調査区全体図	57
第19図	富士岡中尾遺跡土器の出土位置	58
第20図	富士岡中尾遺跡土器の型式別出土位置	59
第21図	富士岡中尾遺跡石器および石材の出土位置	60
第22図	富士岡中尾遺跡石器の種別出土位置	61
第23図	富士岡中尾遺跡出土土器実測図①	62
第24図	富士岡中尾遺跡出土土器実測図②	63
第25図	富士岡中尾遺跡出土石器実測図①	65
第26図	富士岡中尾遺跡出土石器実測図②	66
第27図	富士岡中尾遺跡出土石器実測図③	67
第28図	富士岡中尾遺跡箇所別出土遺物	70

【第3章 平椎遺跡・平椎古墳群】

第29図	平椎遺跡の位置と周辺の遺跡	73
第30図	平椎遺跡調査区の位置	74
第31図	平椎遺跡調査区の配置	75
第32図	平椎遺跡基本土層図	79
第33図	平椎遺跡調査区全体図①	80
第34図	平椎遺跡調査区全体図②	81
第35図	平椎遺跡出土土器実測図①（縄文）	82
第36図	平椎遺跡SH01実測図	86
第37図	平椎遺跡SH02・03実測図	87
第38図	平椎遺跡SH04実測図	88
第39図	平椎遺跡SH05実測図①	90

第40図	平椎遺跡SH05実測図②	91
第41図	平椎遺跡SH05の炭化材出土状況と樹種	92
第42図	平椎遺跡SH06実測図	93
第43図	平椎遺跡SH07実測図	94
第44図	平椎遺跡SH08実測図①	96
第45図	平椎遺跡SH08実測図②	97
第46図	平椎遺跡SH09実測図	98
第47図	平椎遺跡SH10実測図	100
第48図	平椎遺跡SH11実測図	101
第49図	平椎遺跡SH12実測図	102
第50図	平椎遺跡SH13A～C実測図	103
第51図	平椎遺跡SH14実測図	104
第52図	平椎遺跡SD01実測図	106
第53図	平椎遺跡SD02実測図	107
第54図	平椎遺跡土坑（SK01～06）実測図	109
第55図	平椎遺跡出土土器実測図②（SH01・SK01）	110
第56図	平椎遺跡出土土器実測図③（SH01・SK01）	111
第57図	平椎遺跡出土土器実測図④（SH02・03）	113
第58図	平椎遺跡出土土器実測図⑤ (SH02・03, SK02, SP04・05)	114
第59図	平椎遺跡出土土器実測図⑥（SH05）	116
第60図	平椎遺跡出土土器実測図⑦（SH08）	118
第61図	平椎遺跡出土土器実測図⑧（SH08）	120
第62図	平椎遺跡出土土器実測図⑨ (SH06・07・09・10, SK03ほか)	122
第63図	平椎遺跡出土土器実測図⑩（SH11・13A, SK06）	124
第64図	平椎遺跡出土土器実測図⑪（SH14, SD02）	126
第65図	平椎遺跡出土土器実測図⑫（遺構外）	128
第66図	平椎遺跡出土石器実測図①	129
第67図	平椎遺跡出土石器実測図②	130
第68図	平椎第2号墳墳丘測量図	133
第69図	平椎第2号墳墳丘土層図	133
第70図	平椎第2号墳の列石実測図	134
第71図	平椎第2号墳埋葬施設実測図	135
第72図	平椎第2号墳出土土器実測図	136
第73図	平椎第2号墳出土鉄製品実測図	137
第74図	平椎遺跡出土遺物実測図（古代以降）	138
第75図	[参考] 残年較正年代グラフ	145
第76図	平椎遺跡SH05出土炭化材取り上げ位置図	146
第77図	平椎遺跡出土土器の時期区分	154
第78図	平椎遺跡出土の主な外来系土器	156
第79図	平椎集落における堅穴建物の変遷	157
第80図	平椎集落の変遷	159
第81図	沼津市八兵衛洞遺跡の条濠	160

挿表目次

【第1章 総論】

第1表 地質図の凡例	6
第2表 富士市の主な遺跡地名表	10
第3表 確認調査対象地点の概要	14
第4表 確認調査および本発掘調査の体制	16
第5表 富士工区富士地区確認調査期間一覧表	18
第6表 本発掘調査の対象地点と調査の概要	20
第7表 資料整理・報告書作成の体制	22
第8表 確認調査出土土器観察表①	40
第9表 確認調査出土石器観察表①	42
第10表 確認調査出土土器観察表②	44
第11表 確認調査出土石器観察表②	46
第12表 確認調査出土金属製品観察表	47
第13表 確認調査出土銅錢観察表	47

【第2章 富士岡中尾遺跡】

第14表 富士岡中尾遺跡出土土器観察表	68
第15表 富士岡中尾遺跡出土石器観察表	68

【第3章 平椎遺跡・平椎古墳群】

第16表 平椎遺跡遺構番号新旧対応表	76
第17表 平椎遺跡堅穴建物の概要	105
第18表 平椎遺跡溝の概要	105
第19表 平椎遺跡土坑および小穴の概要	108
第20表 平椎遺跡・平椎第2号墳出土土器観察表	139
第21表 平椎遺跡出土石器観察表	142
第22表 平椎遺跡出土銅錢観察表	142
第23表 ¹⁴ C年代測定結果	144
第24表 平椎遺跡SH05出土炭化材の樹種同定結果一覧	148
第25表 東駿河地域と周辺地域の土器編年対応表	153

写真目次

【第1章 総論】

写真1 確認調査の作業状況①	17
写真2 確認調査の作業状況②	17
写真3 確認調査の作業状況③	17
写真4 No.45地点の本発掘調査（石室解体）	21
写真5 CR20地点の本発掘調査（遺構掘削・実測）	21
写真6 No.45地点の本発掘調査（遺構掘削）	21
写真7 No.52地点の本発掘調査（石室解体）	21
写真8 資料整理作業①（接合）	23
写真9 資料整理作業②（図面編集）	23
写真10 資料整理作業③（遺物実測）	23
写真11 資料整理作業④（写真図版作成）	23
写真12 保存処理作業状況	24
写真13 No.40地点	25
写真14 No.41地点	28
写真15 No.42地点	29
写真16 No.43地点	29
写真17 No.46地点	31
写真18 No.47地点	32
写真19 No.49地点	33
写真20 No.50地点	33
写真21 No.51地点	34
写真22 CR29地点	34
写真23 No.52地点	35

【第2章 富士岡中尾遺跡】

写真31 確認調査 挖削作業	54
写真32 本発掘調査 表土除去作業	54
写真33 本発掘調査 遺構精査作業	54
写真34 本発掘調査 遺構掘削作業	54

【第3章 平椎遺跡・平椎古墳群】

写真35 確認調査 試掘溝掘削作業	78
写真36 本発掘調査 重機による表土除去作業	78
写真37 本発掘調査 遺構掘削作業①	78
写真38 本発掘調査 遺構掘削作業②	78
写真39 本発掘調査 遺構実測作業	78
写真40 本発掘調査 ラジコンヘリによる空中写真撮影	78
写真41 平椎遺跡SH05出土炭化材①	150
写真42 平椎遺跡SH05出土炭化材②	151
写真43 平椎遺跡SH05出土炭化材③	152

図版目次

【巻頭図版目次】

- 1 1. 平椎遺跡の遠景（南東から）
- 2 2. 平椎遺跡の遠景（北東から）
- 2 1. 平椎遺跡全景（弥生時代～古墳時代、南西から）
- 2 2. 平椎遺跡SH05全景（西から）
- 3 1. 平椎遺跡SH08全景（南から）
- 2 2. 平椎第2号墳全景（南西から）
- 4 平椎遺跡出土 主な弥生土器

【図版目次】

【第1章 総論】

- 図版1 No.54地点の確認調査による出土遺物①
- 図版2 1. No.54地点の確認調査による出土遺物②
2. No.54地点の確認調査による出土遺物③
3. 各地点の確認調査による出土遺物①
- 図版3 各地点の確認調査による出土遺物②

【第2章 富士岡中尾遺跡】

- 図版4 1. 富士岡中尾遺跡の遠景（南東から）
2. 調査区全景（西から）
3. 北端部の遺物出土状況（南西から）
4. 調査区全景（北から）
5. 北端部の遺物出土状況（北西から）
- 図版5 出土遺物①
- 図版6 出土遺物②

【第3章 平椎遺跡・平椎古墳群】

- 図版7 1. 平椎遺跡の遠景（北東から）
2. 平椎遺跡全景（西から）
- 図版8 1. 調査区（2区）全景（南から）
2. 調査区（1区）全景（西から）
- 図版9 1. SH01・SK01遺物出土状況（南東から）
2. SH01・SK01（東から）
- 図版10 1. SH02・03の掘方（南西から）
2. SH04の掘方（南西から）
- 図版11 1. SH05炭化材・遺物出土状況（西から）
2. SH05（西から）
- 図版12 1. SH05北西部の炭化材出土状況（北西から）
2. SH05北東部の炭化材出土状況（北西から）
3. SH05炉上の炭化材出土状況（南から）
4. SH05炉の検出状況（西から）

- 図版12 5. SH05北西部の遺物出土状況（南東から）
- 図版13 1. SH05 P5付近の遺物出土状況（南西から）
2. SH05 P4・P5（南から）
3. SH05北西縁の遺物出土状況（西から）
4. SH05西縁の礫破片出土状況（東から）
5. SH05の掘方（西から）
- 図版14 1. SH06（東から）
2. SH06炉（東から）
3. SH07炉（南西から）
- 図版15 1. SH07（西から）
2. SH07の掘方（南東から）
- 図版16 1. SH08遺物出土状況（南から）
2. SH08（南から）
- 図版17 1. SH08北縁の遺物出土状況（南東から）
2. SH08の掘方（南東から）
3. SH09（南から）
- 図版18 1. SH10（南から）
2. SH13A～C（南西から）
3. SH11北東部の遺物出土状況（南西から）
- 図版19 1. SH11の掘方（南東から）
2. SH12（東から）
- 図版20 1. SH14（南西から）
2. SD02（東から）
3. SK06（南西から）
4. SD02中層上位の遺物出土状況（北から）
5. SD02中層下位の遺物出土状況（北上方から）
- 図版21 1. 平椎第2号墳 検出状況（南西から）
2. 平椎第2号墳 列石検出状況（南西から）
- 図版22 1. 石室残存状況（南西から）
2. 石室完掘状況（東から）
- 図版23 出土土器①
- 図版24 出土土器②
- 図版25 出土土器③
- 図版26 出土土器④
- 図版27 出土土器⑤
- 図版28 出土土器⑥
- 図版29 1. 出土土器⑦
2. 出土石器
- 図版30 平椎第2号墳出土遺物①
- 図版31 1. 平椎第2号墳出土遺物②
2. 古代以降の遺物

第1章　総論

第1節 調査に至る経過

1. 第二東名建設に伴う埋蔵文化財の取扱いの経緯

混雑化する東名・名神高速道路の抜本的な対策として、昭和62年の道路審議会において第二東名・第二名神の建設が建議された。その後、第四次全国総合開発計画の閣議決定、国土開発幹線自動車道建設法の一部改正等を経て、平成元年1月に開催された第28回国土開発幹線自動車道建設審議会において、飛島村～神戸市間の第二名神とともに、横浜市から東海市に至る延長約270kmの第二東名高速道路の基本計画が策定された。静岡県内においては東西に貫く形となり、その延長は約170kmである。この基本計画策定を受けて静岡県は、平成元年12月、第二東名建設推進庁内連絡会議を設置したが、教育委員会文化課もメンバーとして協議に参加した（各組織名は当時のもの）。

その後、第二東名の基本計画については、文化財を含む環境影響調査等が行われ、他の公共事業や地域開発計画との調整を図った上、平成3年9月24日には静岡県内長泉町～引佐町間の都市計画決定告示がなされた。

こうした環境影響調査と並行する形で、埋蔵文化財の分布状況の把握作業もなされている。第二東名建設に関する調査の指示を受けた日本道路公団は、平成4年2月17日付で文化庁へ通知を行うとともに、平成4年5月11日付で、日本道路公団東京第一建設局長から静岡県教育委員会教育長あてに、長泉町～引佐町間の埋蔵文化財分布調査、その手続きの依頼を行った。また、平成4年8月27日付で日本道路公団東京第一建設局静岡調査事務所長から静岡県教育委員会教育長あてに、「第二東海自動車道の埋蔵文化財包蔵地の所在の有無について」の照会がなされている。これを受けた県教育委員会は、平成4年9月29日に関係市町村教育委員会を集めて、第二東名路線内の埋蔵文化財踏査連絡会を開催するとともに、第二東名路線内における埋蔵文化財の所在についての照会を行った。踏査結果については、各市町村教育委員会からの回答を基に協議を行い、県教育委員会が取りまとめたものを平成5年3月18日付で、静岡県教育委員会教育長から日本道路公団東京第一建設局静岡調査事務所長あてに回答がなされている。

この時点での調査対象箇所は136箇所、調査対象総面積が1,453,518m²となった。

その後、長泉町～引佐町間については、平成5年11月19日付で日本道路公団に施行命令が出された。これに伴い、日本道路公団東京第一建設局および静岡県土木部高速道路建設課、静岡県教育委員会文化課で、埋蔵文化財発掘調査の進め方について協議が行われた。調査対象範囲の確定、個々の遺跡の取扱い等について協議されるとともに、発掘調査の実施については日本道路公団が財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所へ委託を行うことが確認されている。しかし、第二東名建設に伴う埋蔵文化財調査については短期間に膨大な調査量が想定されたため、その調査体制をどのように確保していくかが、大きな課題となった。

さらに平成6年度には、県教育委員会文化課職員が上記の調査対象箇所について、具体的な調査を進めるための状況調査を行うとともに、前年示されたパーキングエリア・サービスエリア予定地についての踏査を当該市町村教育委員会に依頼、年度末にはその報告・取りまとめがなされた。こうした状況調査や新たな踏査結果を基に見直しがなされた結果、この段階での調査対象地点は133箇所、調査対象総面積は1,286,759m²となった。

平成7年度後半には、路線の一部では幅杭の打設が開始されており、埋蔵文化財の発掘調査の開始についてかなり見通しがたった。このような状況の中で、第二東名建設に係る埋蔵文化財の取扱いを協議する場として、日本道路公団静岡建設所（平成6年2月設置）と県教育委員会文化課による「第二東名関連埋蔵文化財連絡調整会議」が設置され、第1回の協議が平成7年12月13日に行われた。これ以後、

細かい埋蔵文化財の取扱いについては、この会議において協議していくこととなった。なお、日本道路公団静岡建設所は平成8年7月1日をもって日本道路公団静岡建設局に改組され、さらに平成17年度の民営化に伴って中日本高速道路株式会社横浜支社（平成21年度より東京支社）に引き継がれた。

平成8年度には、第二東名建設に係る埋蔵文化財の調査の実施が具体化し、日本道路公団静岡建設局と静岡県教育委員会は、平成8年9月24日付で第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財の取扱いについての確認書を締結した。さらに発掘調査実施機関である当研究所を交えた三者は、平成8年9月25日付で第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査実施方法等について定めた協定書を締結し、平成8年度内に一部埋蔵文化財の調査に着手していくこととなった。年度後半には、掛川市倉真のNo.94地点、浜松市（旧浜北市）市大平のNo.136地点、同市四大地のNo.137地点の確認調査が実施された。その後、平成9年度からは記録保存のための本発掘調査も本格化し、県内各地において確認調査から順次調査を開始した。

一方、長泉町～御殿場市間については日本道路公団に対し、平成9年1月31日付で建設に係る調査開始指示が出され、さらに平成9年12月25日付で施行命令が出された。この区間については、建設省の依頼により平成6年度後半に踏査が行われ、調査対象地点のリストアップが行われていたが、調査開始指示を受けて、再度平成10年9月2日付で日本道路公団静岡建設局長より静岡県教育委員会教育長あてに「埋蔵文化財包蔵地の所在の有無について」の照会がなされた。これを受けて、県教育委員会文化課は、関係する市町村教育委員会に平成10年9月25日付で再踏査の依頼をするとともに、10月2日には踏査の実施に関する打ち合せ会を行った。11月上旬には、長泉町・裾野市・御殿場市教育委員会から踏査結果についての報告がなされたが、県教育委員会文化課はそれを取りまとめ、平成10年12月17日付で県教育長から日本道路公団静岡建設局長宛てに回答を行った。この区間で埋蔵文化財調査の対象となった箇所は21地点、調査対象総面積は108,734m²であった。関係者協議の結果、これらの調査対象地点についても、当研究所が調査を実施することとし、平成11年3月5日付で協定変更を行った。

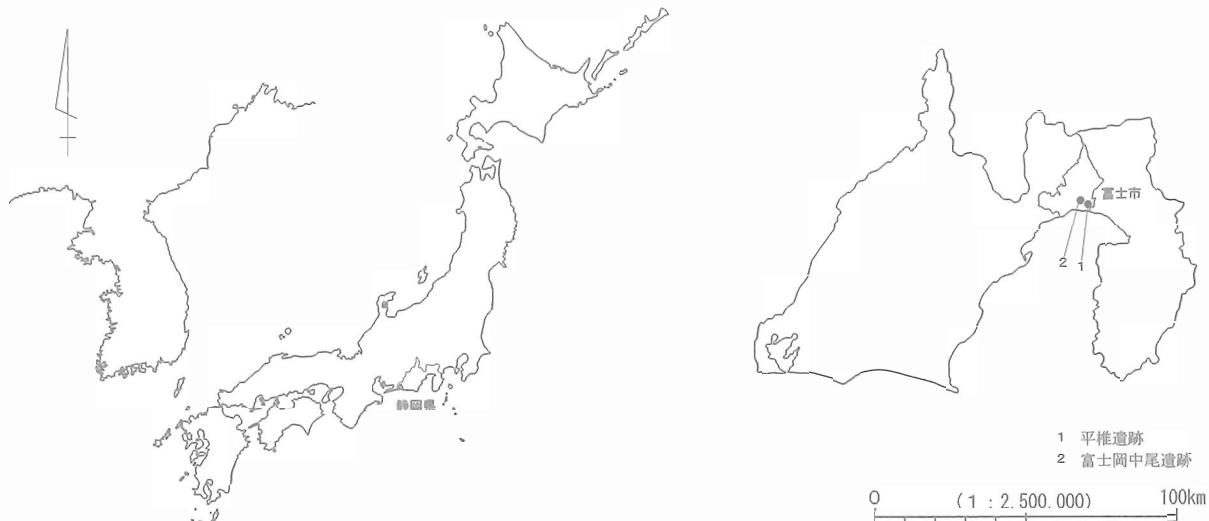
なお、第二東名に係る埋蔵文化財の調査は、関係機関の協議の結果、基本的には本線およびサービスエリア・パーキングエリア、排土処理場については当研究所が、工事用道路および取付道路部分については当該市町村教育委員会が担当することとした。しかし、調査すべき遺跡の増加に当研究所の体制が整わず、本線部分の発掘調査の一部についても沼津市や静岡市、浜北市、富士宮市、裾野市、富士市の各教育委員会が実施することとした。さらに、当研究所の調査においては、東部地域を中心に民間の発掘調査支援機関の導入を図った。

このような経過の中で、富士市域における第二東名建設に伴う埋蔵文化財調査について、最終的には後述する50地点を調査対象にした。発掘調査の実施については、当研究所が担当することとした。用地買収が進み、一部調査実施が可能となった平成10年度に、No.39地点（富士市船津）などの確認調査を手はじめに調査を開始した。その後、当研究所は平成14年度まで現地調査を実施したが、静岡県教育委員会、富士市教育委員会、当研究所の協議の結果、その時点では確認調査を実施していない地点は富士市教育委員会が調査を担当することになった。

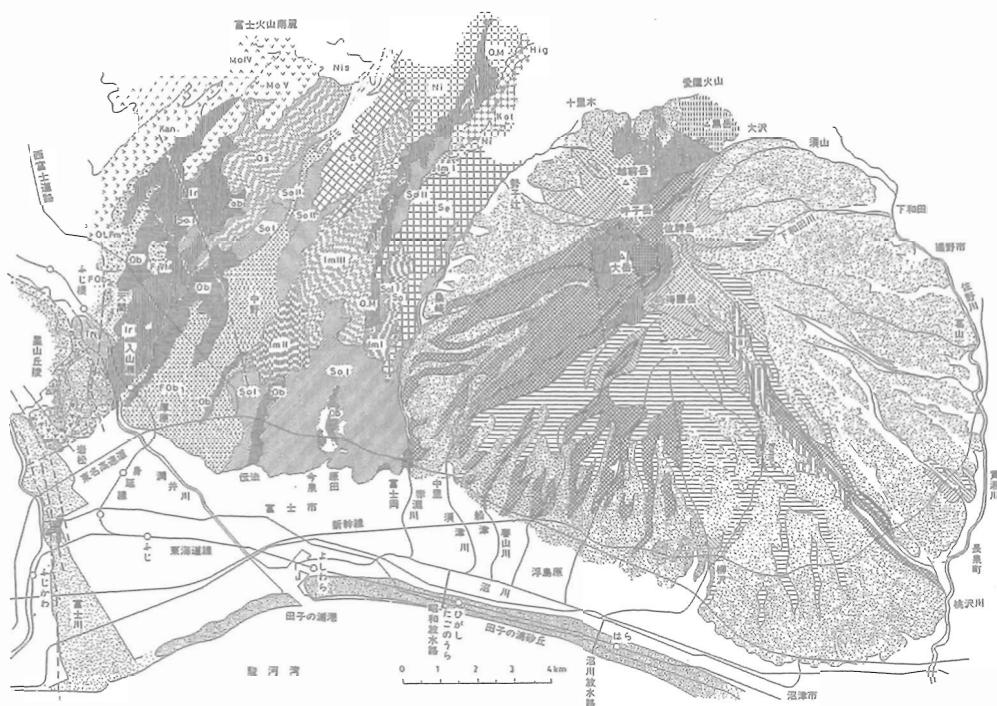
第2節 富士市の位置と環境

1. 地理的環境

地理的位置 富士市は、北緯35度00分、東経138度44分付近の静岡県東部に位置し、総面積は約214.10km²（発掘調査当時、旧富士市域）であったが、富士川町と合併し、総面積は245.025km²となり、周辺の市町の中では広い面積を有する。北側は富士宮市、西側は静岡市、東側は沼津市と接する。



第1図 富士市の位置と平椎遺跡・富士岡中尾遺跡の位置



第2図 富士市の地質図（富士市教委2005より引用）

地理的環境 第二東名の予定路線は、富士市の中でも南部を通過することから埋蔵文化財の発掘調査については富士山・愛鷹山南麓に集中する。

富士市は北側に富士山と愛鷹山がそびえたち、その裾野は緩斜面となり、両火山が流出させた溶岩流の合間に縫うように潤井川、伝法沢川、赤淵川、須津川などいくつもの河川が開析し、富士山・愛鷹山麓は熊手状に尾根が伸びる地形が広がる。南の太平洋側には現在は沖積平野が広がるが、元々は浮島沼とよばれたラグーンであり、田子ノ浦が形成されていた。この浮島沼の南側の駿河湾沿いには田子浦砂丘が形成されている。

地質の様相 富士山は富士山の土台となる小御岳火山が愛鷹山や箱根火山（箱根外輪山）とともに約40万年から火山活動を開始した。約40万年前から約17万年前の活動で北側の火口から主に玄武岩質の溶岩を流出させ、山腹に降下した噴出物は大量の凝灰角礫岩を生成した。約17万年前からは、主な火山活動の場所が南東側へ移り、噴出物は安山岩質のもので占められ、流れ下った溶岩流は沼津市方面に扇状のなだらかな丘陵地を形成した。約8万年前以前に小御岳火山の山腹に火口を開けた古富士火山はその噴出物で小御岳火山を覆い尽くし、標高は2,700mに達したとされる。その後、約1万5,000年前以前に古富士火山の火口に火道を開いた新富士火山は大小の噴火活動を繰り返し、その噴出物により古富士火山を覆い尽くした。有史時代に入ってからも引き続いて活動し、現在われわれが目にする標高3,776mの美しい円錐形の山体を形成した。

新富士火山は大量の玄武岩質板溶岩を主とする溶岩流を連続して発生させ、現在の富士山麓を形成する。大淵溶岩流および曾比奈溶岩流は新富士火山活動初期の大規模溶岩流で裾野に広く溶岩原を形成している。この溶岩原は富士市域では、大淵溶岩流により形成されたのが赤淵川・福間川間、曾比奈溶岩流は赤淵川・伝法沢川間に形成されている。この溶岩流によって形成された溶岩原は大小規模の河川によって開析され、富士山・愛鷹山麓の丘陵地を隔てている。この中の河川の一つである富士市中央部

を南流する赤淵川が富士山麓と愛鷹山麓の境界となっている。

約10万年前に火山活動を終えた愛鷹山は浸食にさらされるとともに、約3万5千年前～約1万1千年前の古富士火山と新富士火山の活動によって愛鷹上部ローム層が堆積した。上部ローム層は、風化の進んだ腐植質土壌とされる黒色帯と、激しい噴火で短時間に堆積したスコリア層が交互に折り重なる。この愛鷹ローム層で人為の痕跡が確認されており、日本でも有数の旧石器時代の遺跡が集中する地域として著名となった。

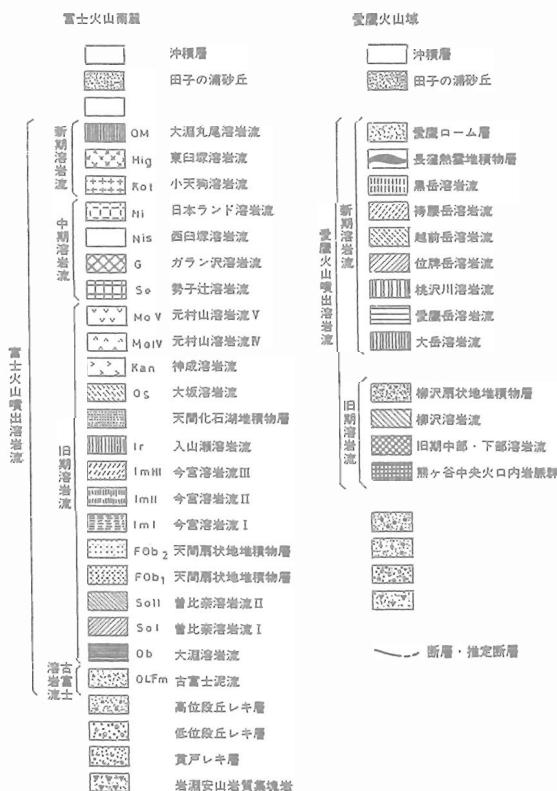
また、富士山・愛鷹山の溶岩流により形成された溶岩が横穴式石室に利用されるなど、富士山・愛鷹山は旧石器時代～現代までわれわれの生活に影響を与え続けている。

(大谷)

第1表 地質図の凡例

(第2図対応)

凡 例



2. 歴史的環境（第3・4図、第2表）

（1）旧石器時代

静岡県内の旧石器時代の遺跡は、県西部の磐田原台地、県東部の愛鷹・箱根周辺地域の二箇所に集中しており、愛鷹山では1964年の沼津市休場遺跡の発掘調査以降、沼津市や長泉町において数多くの遺跡が確認されるようになった。愛鷹山南西麓を市域に含むにもかかわらず、富士市内の旧石器時代遺跡は極めて少なく、遺物の多くは表面採取によって得られていた。富士山南麓では天間沢遺跡（11）でナイフ形石器等が採取されたとの記述がみられるが詳細は不明である。また、愛鷹山南西麓ではナイフ形石器や小型石刃等が採取された峰山遺跡（86）、陣ヶ沢A・B遺跡（165・166）、矢川上C遺跡（第二東名No.39-2地点、169）が知られていた。過去において旧石器時代と思われる遺物が出土した遺跡として高徳坊遺跡（16）などが挙げられる。また、第二東名建設事業に伴い、第二東名No.44地点の古木戸A遺跡（136）・古木戸B遺跡（137）・天ヶ沢東遺跡（135）で石器ブロック・礫群が確認され、ナイフ形石器・細石刃等が出土している。さらに、矢川上C遺跡では、多数の石器ブロックや礫群が確認され、ナイフ形石器や角錐形石器などが確認されている。

(柴田・大谷)

（2）縄文時代

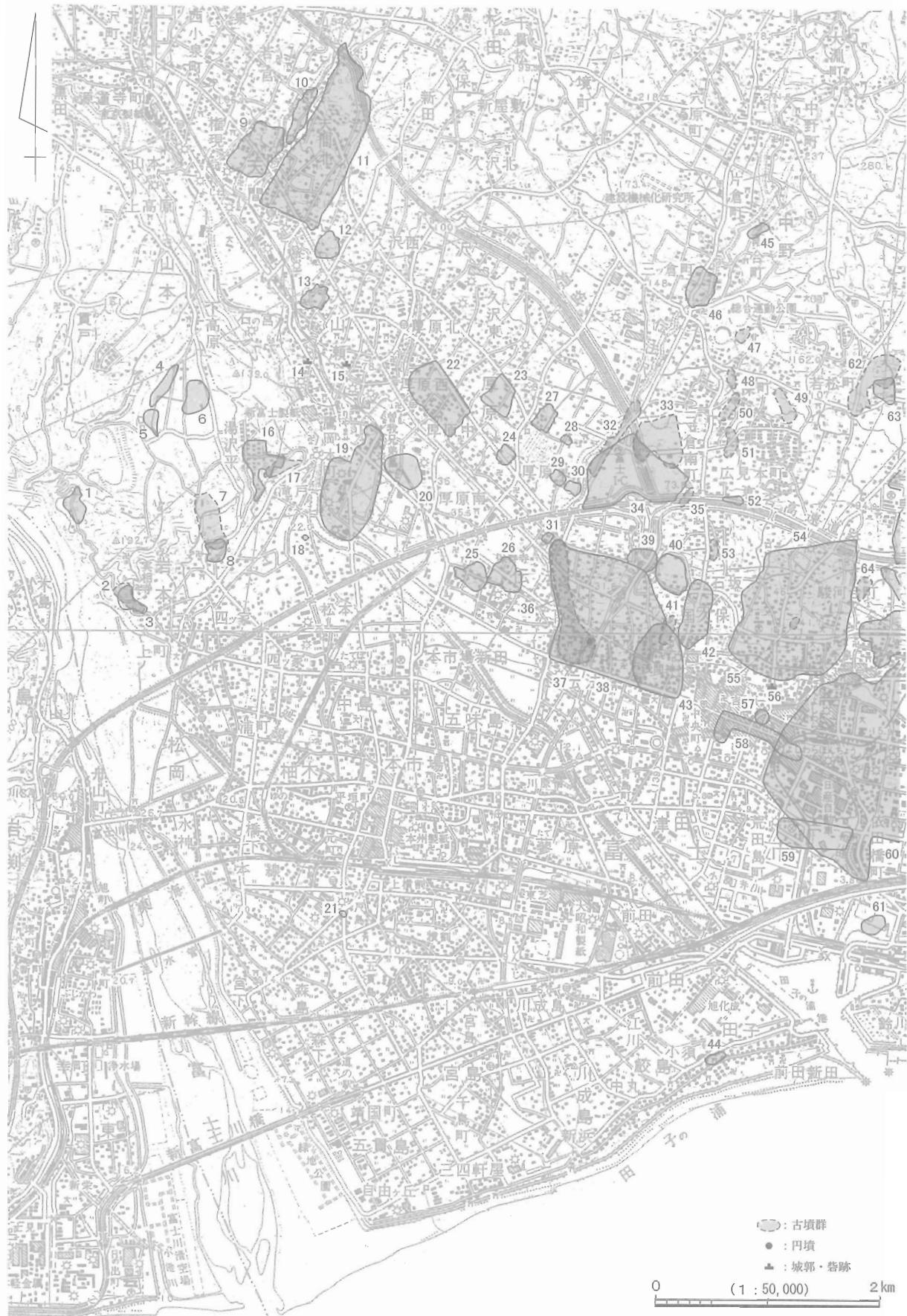
縄文時代の遺跡は愛鷹山南西麓、富士山南麓、岩本山丘陵に分布している。
 草創期の遺跡は検出されていない。早期は、富士山南麓に押型文や茅山下層式土器が出土したジンゲン沢遺跡（10）、押型文や田戸式土器が出土した万野遺跡（1）などがある。愛鷹山南西麓には押型文土器や絡条帶圧痕文土器が出土した陣ヶ沢A・B遺跡（165・166）、押型文土器が出土した矢川上A・B遺跡（167・168）、峰山遺跡（86）などがある。前期は遺跡数が少ないが、花川戸遺跡（104）、天間沢遺跡（11）などでは木島式土器が確認されており、時代幅の長い複合遺跡で当該期の資料が挙げられる。中期は遺跡数が多く、規模も大きくなる。天間沢遺跡は縄文時代から律令時代まで続く複合遺跡であり、堅穴建物・配石遺構・土坑が確認され、勝坂式・曾利式・加曾利E式土器が出土した。後期は遺跡数が減少し、規模も小さくなる。宇東川遺跡（70）は柄鏡形敷石住居を含む堅穴建物・土坑が確認され、中期後半から後期の曾利IV式～堀之内I式土器が出土した。中島遺跡（69）は、配石遺構が確認され、称名寺式・堀之内式・加曾利B式土器が出土した。赫夜姫遺跡（97）では、堀之内式の注口土器が出土した。また、当研究所が第二東名関連で調査した不動棚遺跡（88）、松坂遺跡（173）では遺構はほとんど確認できないが、堀之内式土器の良好な資料が出土した。晚期は、三新田遺跡（117）で土器片が出土している。

(柴田・大谷)

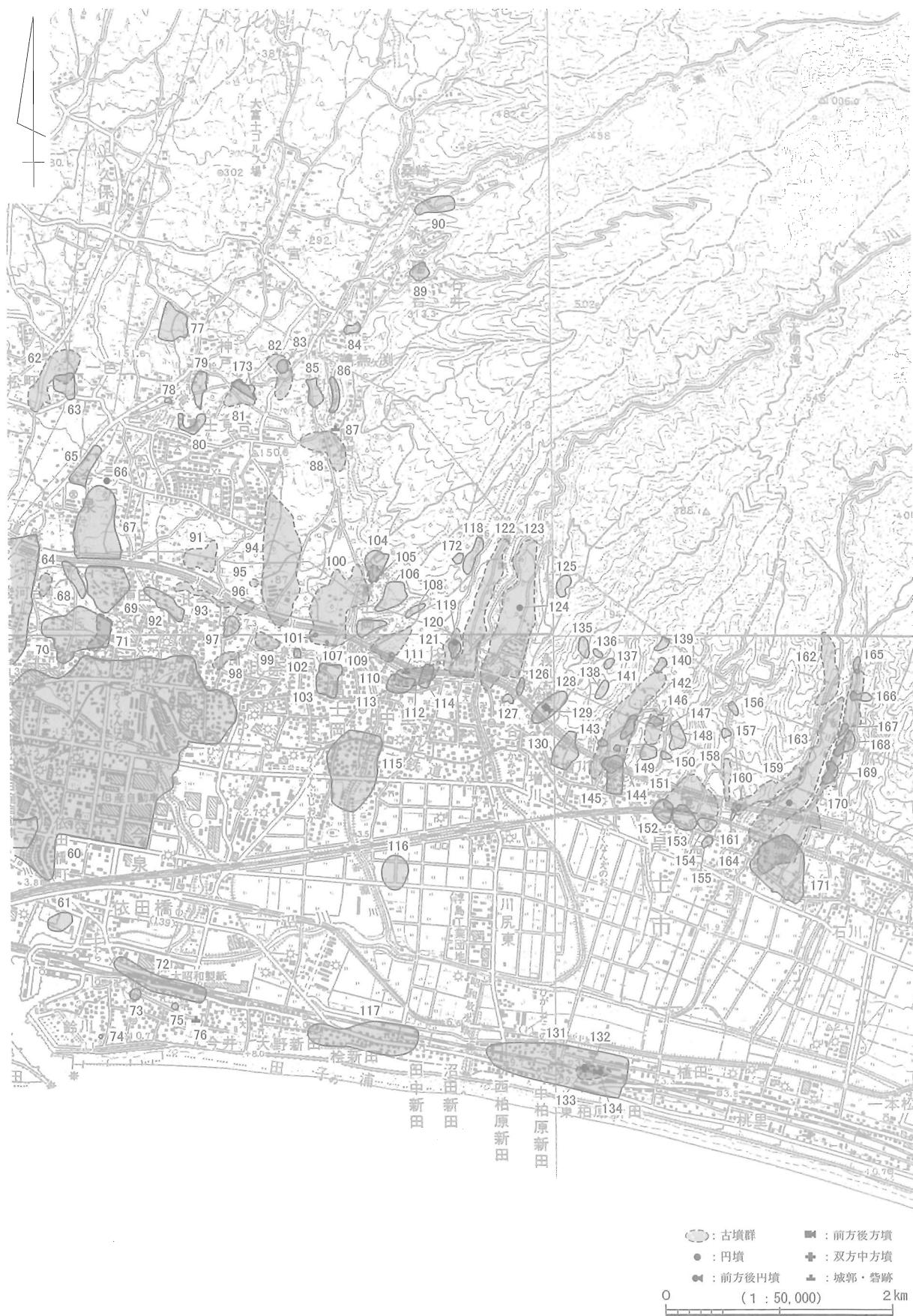
（3）弥生時代

弥生時代の遺跡は、湿地や低湿地に面する丘陵先端部に位置する遺跡が多い。富士市内では前期の遺跡は確認されておらず、中期の沖田遺跡（60）、大坂遺跡、後期の平椎遺跡（138）、向山遺跡（106）、花守遺跡（115）、宮添遺跡（130）、的場遺跡（152）が主要な遺跡である。沖田遺跡は、弥生時代から古墳時代に至る複合遺跡であり、中・後期の弥生土器に加えて大量の矢板や大足・杵などの木製品が出土した。宮添遺跡は弥生時代後期末～古墳時代初頭の集落で、堅穴建物が10数軒確認された。本書で報告する平椎遺跡と同一の尾根の先端に形成されているが、盛行時期が異なっており、この関係を調査することで弥生時代の集団の移動や盛衰について明らかにすることができる可能性がある。的場遺跡では、弥生時代後期～古墳時代前期に亘る堅穴建物が確認され、弥生土器・石器が出土している。

富士市周辺の遺跡は、沼津市に鳥形木製品や多量の石錐などが出土した浮島低湿地砂州上の雌鹿塚遺跡、堅穴建物が確認され中・後期の弥生土器が出土した的場遺跡（沼津市）、愛鷹山麓の標高100～180



第3図 富士市の主要遺跡分布図①



第4図 富士市の主要遺跡分布図②

第2表 富士市の主な遺跡地名表

1 万野遺跡	38 東平遺跡	74 富士塚遺跡	103 桃宜ノ前遺跡	141 船津古墳群
2 上井奈古墳群	39 出口遺跡	75 今井中世五輪塔群	104 花川戸遺跡	(船津1古墳群)
3 上井奈遺跡	40 滝下遺跡	76 天の香久山砦跡	105 富士岡古墳群	142 久保ノ上A遺跡
4 羽淵平遺跡	41 伝法B古墳群	77 澤添遺跡	(富士岡2古墳群)	143 江尾遺跡
5 奥の原A遺跡	(伝法3古墳群)	78 三度蔭A遺跡	106 向山遺跡	144 久保ノ上B遺跡
6 奥の原B遺跡	42 国久保遺跡	79 寺下遺跡	107 前の原遺跡	145 コーカン畑遺跡
7 鎌研古墳群	43 三日市廃寺	80 三度蔭B遺跡	108 中尾沢遺跡	146 ニッ塚遺跡
8 念信園遺跡	44 村添遺跡	81 神戸古墳群	109 中里古墳群	147 船津古墳群
9 川坂遺跡	45 落合遺跡	(神戸4古墳群)	(中里1古墳群)	(船津2古墳群)
10 ジンゲン沢遺跡	46 井倉遺跡	82 神戸古墳群	110 (富士岡)丸山遺跡	148 長四郎遺跡
11 天間沢遺跡	47 片倉古墳群	(神戸3古墳群)、 閻門E・第3号墳	111 天神川城跡	149 愛鷹遺跡
12 天間代山遺跡	(片倉3古墳群)	112 中里古墳群	150 竹ヶ沢遺跡	
13 清水久保遺跡	48 八ヶ窪古墳群	83 神戸石坂遺跡	(中里2古墳群)	151 船津古墳群
14 林泉寺砦跡	49 萩ノ原古墳群	84 鶴無ヶ淵遺跡	113 天念寺遺跡	(船津3古墳群)
15 入山瀬城跡	50 石坂古墳群	85 亀窪遺跡	114 児森遺跡	・船津蓑師塚古墳
16 高徳坊遺跡	(石坂2古墳群)	86 峰山遺跡	115 花守遺跡	152 的場遺跡
17 潤戸原古墳群	51 石坂古墳群	87 夷城跡	116 行僧遺跡	153 大道上遺跡
18 貫井遺跡	(石坂3古墳群)	88 鶴無ヶ淵・閻門古墳群	117 三新田遺跡	154 上の段遺跡
19 沢東A遺跡	52 桑原遺跡	・閻門松沢第1号墳	118 椎木平遺跡	155 船津遺跡
20 沢東B遺跡	53 石坂古墳群	・不動側遺跡	119 中里古墳群	156 (境)丸山遺跡
21 水戸島遺跡	(石坂10古墳群)	89 石井遺跡	(中里3古墳群)	157 野多場遺跡
22 厚原遺跡	54 舟久保遺跡	90 桑崎遺跡	120 琴平古墳	158 船津古墳群
23 厚原横道下遺跡	55 擦文字古墳群	91 滝川古墳群	121 大塚道東遺跡	(船津4古墳群)
・横道下古墳群	56 善得寺城跡	(滝川2古墳群)	122 中里古墳群	159 船津古墳群
24 溝上遺跡・ 溝上古墳群	57 和田町遺跡	92 斎藤上遺跡	(中里4古墳群)	(船津5古墳群)
25 中桁遺跡	58 新吉原宿遺跡	93 滝川古墳群	123 須津(神谷)古墳群	160 春山遺跡
26 中ノ坪遺跡	59 中吉原宿遺跡	(滝川4古墳群)	124 千人塚古墳	161 丸宗遺跡
27 大石遺跡	60 沖田遺跡	94 比奈古墳群	125 百間遺跡	162 船津古墳群
28 二本松遺跡	61 田子浦港遺跡	(比奈1古墳群)	126 神谷遺跡	(船津6古墳群)
29 金木A遺跡	62 一色古墳群	・東坂古墳	127 地藏畑遺跡	163 船津古墳群
30 金木B遺跡	(一色2古墳群)	95 比奈古墳群	128 増川古墳群	(船津7古墳群)
31 片宿遺跡	63 一色遺跡	(比奈2古墳群)	129 浅間古墳	164 稲荷塚古墳
32 横沢古墳、 土手内・中原古墳群	64 高山古墳群	96 比奈古墳群	130 宮添遺跡	165 陣ヶ沢A遺跡
(中原1古墳群)	(一色7古墳群)	(比奈3古墳群)	131 柏原遺跡	166 陣ヶ沢B遺跡
33 土手内・中原古墳群	67 三ヶ沢遺跡	(比奈4古墳群)	132 東田子浦砂丘1古墳群	167 矢川上A遺跡
(中原2古墳群)	68 水神堂遺跡	99 比奈古墳群	133 庚申塚古墳	168 矢川上B遺跡
34 中原遺跡	69 中島遺跡	(比奈5古墳群)	134 山ノ神古墳	169 矢川上C遺跡
35 石坂古墳群	70 宇東川遺跡	100 富士岡古墳群	135 天ヶ沢東遺跡	170 船津古墳群
(石坂5古墳群)	71 一色・飯森東古墳群	(富士岡1古墳群)	136 古木戸A遺跡	(船津8古墳群)
36 伝法A古墳群 (伝法1古墳群)	(一色8古墳群)	・花川戸古墳群	137 古木戸B遺跡	171 寺の上遺跡
37 伊勢塚古墳	72 元吉原宿遺跡	101 下前原遺跡	138 平椎遺跡・ 平椎古墳群	172 富士岡中尾遺跡
	73 砂山遺跡	102 竹の鼻遺跡	139 烏帽子形遺跡	173 松坂遺跡
			140 中尾遺跡	

はちべえやしき きたじんめどて うえだし しぶさわ
 mの丘陵に群集する八兵衛屋敷遺跡、北神馬土手遺跡、植出遺跡がある。富士宮市には中期の渋沢遺跡
 ゼンボウこうほうがたふんきゅうぼ まるがいと さわひが
 や前方後方形墳丘墓が検出された富士宮市丸ヶ谷戸遺跡があり、富士市域の弥生時代の様相が不明確な
 中で、隣接地域の弥生時代の遺跡の様相と比較することで、弥生時代像が描けるであろう。 (大谷)

(4) 古墳時代

古墳時代集落では天間沢遺跡(11)、東平遺跡(38)、沢東A・B遺跡(19・20)、祢宜ノ前遺跡(103)、宮添遺跡(130)、三新田遺跡(117)などに代表される。祢宜ノ前遺跡、宮添遺跡では、古墳時代前期と後期～平安時代までの竪穴建物が確認された。沢東A・B遺跡は古墳時代前期から奈良時代にかけての集落で竪穴建物のほか、子持勾玉など祭祀関連の遺構も確認されている。三新田遺跡は前期から平安時代に亘る集落で、竪穴建物が多数確認されている。

東駿河地域では近年古墳時代初頭に遡る大型古墳が相次いで確認され、日本における古墳の発生について検討する上で重要な地域となっている。最近発掘調査された沼津市辻畠古墳は弥生時代終末期～古

墳時代初頭の「前方後方墳」であり、それに続いて奈良県箸墓古墳と同時期とされる沼津市神明塚古墳が築造されるなど、全国的にみても早い時期から大型の古墳が築造された地域として注目できる。

これ以外にも古墳時代前期では、全長70mの前方後円墳で堅穴式石槨が確認された三島市向山16号墳、今回発掘調査した平椎遺跡に近接する全長93mの前方後方墳の富士市浅間古墳（129）が築造される。

古墳時代前期末～中期前半にかけては東坂古墳（94）や琴平古墳（120）などが築造されるが、中期中葉以降古墳の築造は停滞したようで大型墳は明確ではない。一方、古墳時代中期後半～後期の5世紀後半～6世紀前半には再び全長51.5mの富士市天神塚古墳（中里K-第91号墳、112）、全長41.5mの富士市山ノ神古墳（134）、全長64mと推定される沼津市子ノ神古墳、全長54mの沼津市長塚古墳などの前方後円墳が築造され、この時期に東駿河の集団が畿内王権との結びつきを強めたと考えられる。このほか富士市域では伊勢塚古墳（37）などがこの時期の築造と考えられるが、築造数は多くない。

一方、東駿河地域は、古墳時代後期後半（6世紀後半）以降、古墳が数多く築造される日本全国的に見ても特徴的な地域となる。富士市中原4号墳（32）や横沢古墳（32）などが後期後半に位置づけられ、6世紀終わりごろから古墳の数が急増し、船津（L）古墳群（162・163など、註1）、須津（神谷、J）古墳群（123）など100基を超える群集墳が築造される。この他にも富士山麓に石坂（C）古墳群（53など）、一色（D）古墳群（62など）、鵜無ヶ淵・間門（E）古墳群（88）、愛鷹山麓に富士岡（F）古墳群（100・105）、比奈（G）古墳群（94・95など）、増川（I）古墳群（128）、中里（K）古墳群（109・112など）など数多くの古墳群が奈良時代前半まで築造される。

その埋葬施設は無袖形石室のみが確認される独自色の強い地域として注目できる（井鍋2003、木ノ内1998、志村1981・87、鈴木一有2003など）。この無袖形石室は奈良県南部の葛城市寺口忍海古墳群などで確認される石室と類似しており、関連性が注目される。寺口忍海古墳群などの無袖形石室は鍛冶技術や馬匹生産などの技術をもつ集団の古墳と想定されており、こうした技術集団が移植して築造した可能性も想定される（井鍋2003、鈴木一有2003・2010）。また、非常に多くの古墳から鉄製馬具が出土しており、のちに牧が置かれることからも、騎馬軍団（岡安光彦氏は「東国舎入騎兵」と仮称する）が存在し、畿内王権の軍事的役割を担う集団が存在したことが想定されている（岡安1986）。

（大谷）

（5）奈良・平安時代

奈良時代直前には集落が増加し始めるよう、奈良時代～平安時代の富士郡衙と想定される東平遺跡（38）とその郡衙に伴う三日市廃寺（43）、宇東川遺跡（70）・舟久保遺跡（54）・沖田遺跡（60）・天間代山遺跡（12）・三新田遺跡（117）、沢東A遺跡（19）が代表的な遺跡である。

東平遺跡では、350軒以上の堅穴建物、72棟の掘立柱建物が確認され、駿東型甕、甲斐型壺、西駿型長胴甕、「布自」「厨」などの墨書き土器、中央政府との関係を考える上で重要な銅鏡金具が出土した。これらの遺構・遺物から官衙的性格の強い計画的集落の可能性が指摘されている。また、遺跡の南東部には多くの古瓦や「寺」と墨書きされた土師器壺が出土した三日市廃寺が位置しており、『日本三代実録』所載の定額寺「法照寺」と推定されている。舟久保遺跡では堅穴建物が確認され、「倉」と記載された墨書き土器が出土している。宇東川遺跡では、180軒以上の堅穴建物・4棟の掘立柱建物が確認され、「布」「寺」などの墨書き土器が出土した。沖田遺跡では、条里型畦畔・水田跡が検出された。また、中柄遺跡（25）では、10世紀まで続く集落が確認され、これまで様相が不明確であった平安時代の富士市域の様相について徐々に明らかになっていくだろう。

また、近年調査された宮添遺跡は、弥生時代後期～古墳時代前期と同様、古墳時代後期～平安時代にも集落となっていたことが判明し、竈付きの竪穴建物が確認されている。中でも注目されるのが「和同開寶」が出土したことであり、東平遺跡との関係や、東平遺跡から東へ向かう交通路との関係も注目できる。

(大谷)

(6) 中世

戦国期の城館跡では、後北条氏により築城された「河東十二墨」の一つあるいは武田氏に由来する大淵衆との関係が考慮される大淵城跡、後北条氏の「河東十二墨」の一つと想定される夷城跡(87)、応永24(1417)年に今川範政により河東一帯への今川支配の拠点として築城されたとされる善得寺城跡(56)、天神川城跡、入山瀬城跡、林泉寺砦跡などが所在するが、本格的な調査が行われたことはなく、詳細な様相は不明である。

(大谷)

註

1 駿河東部の古墳群の名称は、富士川西岸の古墳から沼津市の古墳群まで通じてアルファベット番号が付加されている。この名称が現在も使用されており、今回も踏襲する。この番号付加後に新たに発見された古墳や古墳群は別名称がつけられ、アルファベットは付加されていない。

第3節 確認調査の方法・体制・経過

1. 確認調査の対象地点

(1) 位置と現況

第二東名高速道路の計画路線は、東名高速道路にはほぼ平行する状態で富士市の中央を東西に横断する。富士市域では13.5km（直線距離で12km）前後が計画されている。また、富士市内においてはサービスエリア・パーキングエリア、インターチェンジなどは計画されないが、計画路線までの一般道路が狭く、工事用車両の通行が困難な場所については第二東名建設工事用の道路建設が行われる予定であった。

計画路線のおおよその位置について説明すると、富士市船津～入山瀬の、愛鷹山南麓、富士山南麓の駿河湾に向かって張り出す尾根の緩斜面地と、この尾根の谷筋を南流する春山川、須津川、赤淵川、伝法沢川などの河岸段丘の平野部から1～2kmに当たる部分を貫く。計画路線内に平野部はなく、基本的に両山麓の扇状地（尾根）の緩斜面や平坦地と河岸段丘のみである。

調査以前において、丘陵地は多くが樹林地や畠地として利用され、一部住宅地として供用されていた。

(2) 対象地点の選定

第二東名計画路線内において、静岡県教育委員会および富士市教育委員会が周知の埋蔵文化財包蔵地と踏査結果に基づき、確認調査を必要とする地点とその範囲を設定した。また、工事用道路（CR）対象地も計画路線と同様、確認調査の対象とした。最終的に計画路線内22箇所（No.39～60地点）、工事用道路28箇所（CR05～32地点）の計50箇所が確認調査対象箇所とされた。

なお、工事用道路のうち、CR15などについては、計画路線と重複する部分があることから、同時に調査を行った。

第3表に、対象地点50箇所の概要の一覧、第5図に対象地点を示した。

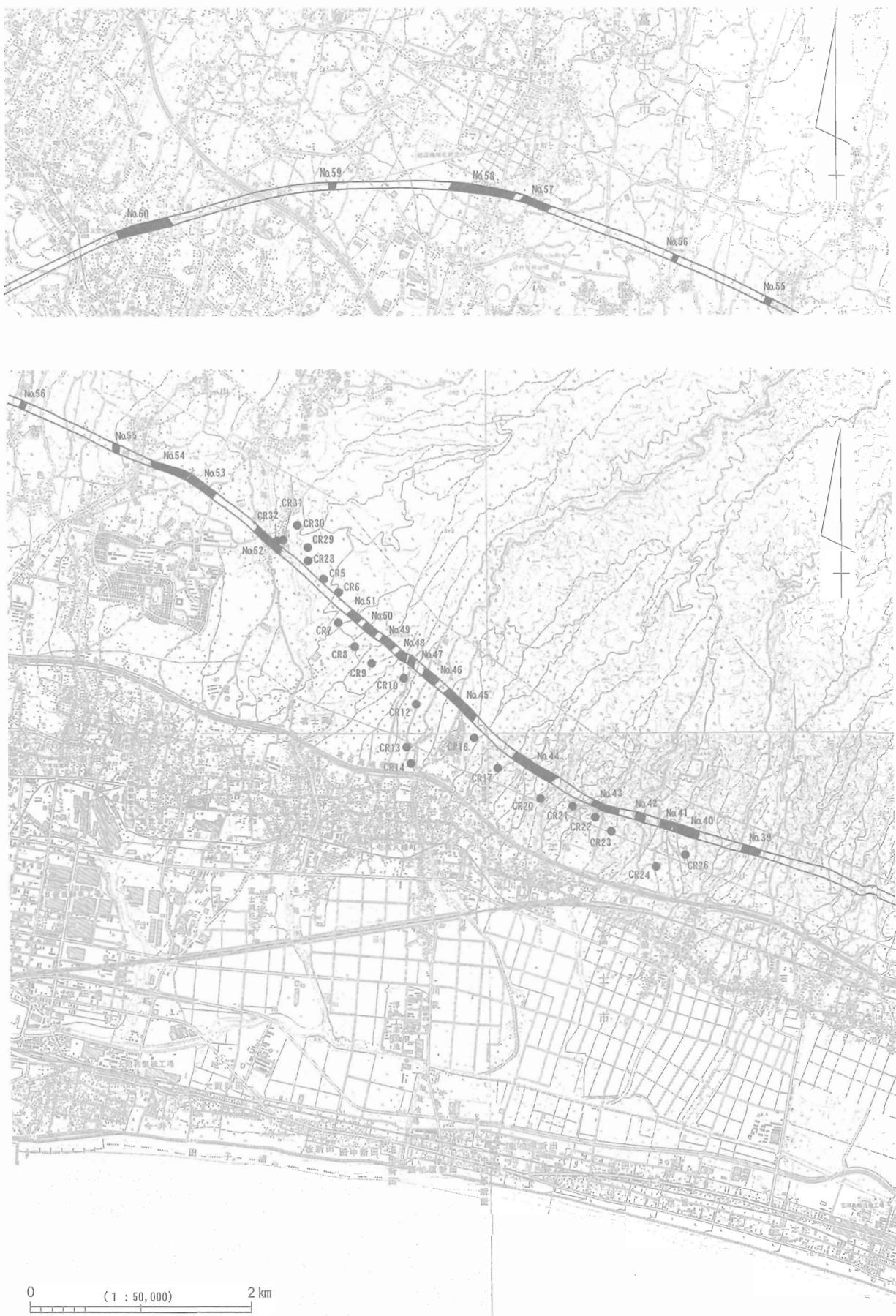
第3表 確認調査対象地点の概要

地点名	確認調査 対象面積(m ²)	周知の埋蔵文化財 包蔵地(遺跡)	確認調査結果	本調査面積 (m ²)	平成10年度	平成11年度	平成12年度	平成13年度	平成14年度	平成15年度
No39	27,090	矢川上C遺跡 船津古墳群	本調査	I期：300 II期：4,100	確認(1・2) 本(1)	本(II)				
No40	19,580	(野多場遺跡)	対象外	-	確認					
No41	17,770	野多場遺跡	対象外	-	確認					
No42	13,900		対象外	-	確認					
No43	24,890	(二ツ塚遺跡・長四郎遺跡)	対象外	-	確認					
No44	66,210	未周知 (古木戸A・B遺跡・天ヶ沢東遺跡)	本調査	I期：20,500 II期：5,500	確認	本(1)	本(II)			
No45	18,980	須津古墳群	本調査	900	確認 本(1)	本(II)				
No46	10,640	中里古墳群	対象外	-	確認					
No47	6,780	未周知	対象外	-	確認					
No48	11,480	未周知	本調査	-	確認					
No49	11,300	未周知	対象外	-	確認					
No50	10,900	未周知	対象外	-	確認					
No51	12,610	未周知	対象外	-	確認					
No52		鶴無ヶ淵・間門古墳群	本調査	I期：256		確認(1)	確認(2) 本(1)	確認(3・4)	確認(5)	※1
No53	16,310	神戸古墳群	本調査	-		確認(1)	確認(2)	確認(3)		
No54	13,226	寺下遺跡・神戸古墳群	対象外	-		確認(1)	確認(2)			
No55	6,586	(澤添遺跡)	対象外	-		確認(1)				
No56	1,173	新羅古墳	対象外	-			確認			
No57	4,602		対象外	-				確認(1)	※1	
No58	6,453	(井倉遺跡・片倉古墳ほか)	対象外	-				確認(1)	確認(2)	
No59				-						(富士市教育委員会が実施)
No60	30,122	(天間代山遺跡・清水久保遺跡)	対象外	-			確認(1)	確認(2)	確認(3)	
CR5	710	未周知	対象外	-	確認					
CR6	904	未周知	対象外	-	確認					
CR7	1,726	未周知	対象外	-	確認					
CR8	-	未周知	対象外	-		工事立会い				
CR9	1,286	未周知	対象外	-	確認					
CR10	1,036	未周知	対象外	-	確認					
CR11	No46地点内として調査									
CR12	-	未周知	対象外	-	工事立会い					
CR13	1,359	未周知	対象外	-	確認(1)	確認(2)				
CR14	1,996	未周知	対象外	-	確認					
CR15	No45地点内として調査									
CR16	456	中里古墳群	対象外	-	確認					
CR17	987	中里古墳群	対象外	-	確認					
CR18	No44地点内として調査									
CR19	No44地点内として調査									
CR20	833	未周知 (平椎遺跡・平椎古墳群)	本調査	487.5	確認・本					
CR21	1,950	未周知	対象外	-	確認					
CR22	450	未周知	対象外	-	確認					
CR23	1,347	未周知	対象外	-	確認					
CR24	720		対象外	-		確認				
CR25	No40地点内として調査									
CR26	336		対象外	-	確認					
CR27	No39地点内として調査									
CR28	1,670		対象外	-		確認				
CR29	639		対象外	-		確認				
CR30	3,690		対象外	-		確認				
CR31	520		対象外	-		確認				
CR32	490		対象外	-		確認				

※1 富士市教育委員会が担当

※2 対象面積については、(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施した対象面積

※3 本調査(本発掘調査)対象面積は、本発掘調査として実施した遺跡のみを記載した。



第5図 富士工区富士地区の確認調査対象地点

2. 確認調査の体制

富士市域（以下、富士地区）の確認調査および本発掘調査（以下、現地調査）は、平成10～15年度に実施した（静岡県埋蔵文化財調査研究所分）。その調査体制は、第4表のとおりである。

第二東名建設に伴う埋蔵文化財発掘調査（以下、本事業）においては、平成11～13年度では本事業担当の課を設けて対応した。さらに、日本道路公団静岡建設局各工事事務所の範囲に合わせて工区を設定し、数多い調査を工区単位で対応した。

富士工区内には富士地区以外に富士宮市域・富士川町域がある。その担当は、基本的に富士現地事務所を拠点として各現地調査を実施した。なお、各遺跡の調査担当者については、各報告書の報告で記載する。

また、静岡県教育委員会、静岡県埋蔵文化財調査研究所、日本道路公団静岡建設局の協議により現地調査を優先するという方針が合意されたことから、資料整理は多くの現地調査が終了した段階で実施することとなった。ただし、基礎的な整理作業（各種台帳作成、写真の整理・収納、図面の修正など、出土遺物の洗浄・注記など、遺構所見・遺跡概要の整理）については、富士現地事務所にて現地調査と並行して実施した（以下、基礎整理）。

第4表 確認調査および本発掘調査の体制

	職名	平成10年度	平成11年度	平成12年度	平成13年度	平成14年度	平成15年度	
總務部 （総務課）	所長	斎藤 忠	斎藤 忠	斎藤 忠	斎藤 忠	斎藤 忠	斎藤 忠	
	副所長		山下 晃	山下 晃	山下 晃	飯田英夫	飯田英夫	
	常務理事 兼総務部長	伊藤友雄	伊藤友雄	伊藤友雄	糸田徳幸	糸田徳幸	糸田徳幸	
	次長						鍛田英巳	
	總務課長	杉本敏雄	杉本敏雄	杉本敏雄	本杉昭一	本杉昭一	鍛田英巳	
	経理専門員	船瀬保幸	船瀬保幸	船瀬保幸	船瀬保幸	船瀬保幸	船瀬保幸	
	総務係長	田中雅代	田中雅代	田中雅代	山本広子	山本広子	山本広子	
	会計係長	杉田 智	大石真二	大崎 薫	大崎 薫	大崎 薫	野島尚紀	
	副主任			鈴木秀幸	鈴木秀幸			
	主事		鈴木秀幸			鈴木秋博	鈴木秋博	
調査体制 （調査研究部 （調査課））	部長	石垣英夫	佐藤達雄	佐藤達雄	山本昇平	山本昇平		
	次長	佐野五十三	佐野五十三	及川 司	栗野克己 及川 司	栗野克己 中嶋郁夫	栗野克己 中嶋郁夫	
	担当課長	羽二生 保	及川 司	及川 司	及川 司	中嶋郁夫	中嶋郁夫	
	工区主任	鈴木良孝	鈴木良孝	鈴木良孝	鈴木良孝	笛原芳朗	前嶋秀張	
	調査研究員（調査員）	佐野暢彦 石田 勉 望月由佳子 船垣聖二 中川律子 藏本俊明 浦田由美子 勝又直人 武田寛生 大谷宏治 丸杉俊一郎 富隈孝志 木崎道昭 田村隆太郎 高野健多果 山本重典 鶴葉義久	佐野暢彦 望月由美子 勝又直人 船垣聖二 中川律子 藏本俊明 浦田由美子 勝又直人 武田寛生 大谷宏治 丸杉俊一郎 富隈孝志 木崎道昭 田村隆太郎 高野健多果 山本重典 鶴葉義久	佐野暢彦 高野健多果 高野健多果 高野健多果 高野健多果 高野健多果 高野健多果 高野健多果 高野健多果 高野健多果 高野健多果 高野健多果 高野健多果 高野健多果 高野健多果 高野健多果	高野健多果 三井文洋	高野健多果	高野健多果	
	保有 処理	室長			西尾太加二	西尾太加二	西尾太加二	
		主任調査研究員	西尾太加二	西尾太加二				
実施内容		確認調査 本調査	確認調査 本調査	確認調査 本調査	確認調査 本調査	確認調査 本調査	確認調査 資料整理	
	整理作業・報告書作成			富士工区全体を対象として実施				

3. 確認調査の方法と経過

(1) 調査の方法

第二東名高速道路建設予定地内の周知の埋蔵文化財の所在について確認した後、周知の埋蔵文化財包蔵地を中心に周知の埋蔵文化財包蔵地となっていない場所でも予定地内あるいは近接地で遺物が採集されている地点を含めて予定地内を踏査し、確認調査予定箇所を選定した。

確認調査の方法は、予想される遺跡の種類と深さの関係から、古墳が想定される箇所については調査対象地内に5～10m間隔で試掘溝を設定し、重機にて表土除去を行った後、人力にて遺構の有無の精査を行った。また、一部墳丘が残る可能性がある古墳や、横穴式石室と想定する石材が露出している箇所については人力にて表土除去から遺構・遺物の確認を行った。

一方、集落跡が想定される遺跡については、10～20m間隔で2～5m四方の試掘坑を設定し、旧石器時代の遺構・遺物が確認される深さまで掘り下げて、人力にて精査を行った。

確認調査箇所については、本発掘調査や今後の埋蔵文化財包蔵地資料として利用するため、確認調査地点を記録した。

なお、各調査対象地点の確認調査方法については、それぞれの地点の報告に記入した。

(2) 調査の経過

確認調査は、平成10・11年度に集中して実施し、用地買収等の関係で一部については平成14年度まで断続的に行なった。なお、静岡県教育委員会、富士市教育委員会、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所の協議により、平成15年度以降については富士市教育委員会が実施することとした。

確認調査は、第二東名富士工区として調査体制を組み（第4表）、土地買収が終了した地点から順次開始した。調査年次や期間、対象面積については第3・5表に記入した。



写真1 確認調査の作業状況①



写真2 確認調査の作業状況②



写真3 確認調査の作業状況③

第4節 本発掘調査の方法・体制・経過

1. 本発掘調査の方法

本発掘調査は、確認調査の結果、遺構の存在が確定した地点に対し、下記の方法で実施した。

古墳 古墳周囲の表土除去は基本的に重機で行い、墳丘、埋葬施設や周溝については人力で掘削した。重機と人力による表土除去後、人力にて墳丘盛土、周溝、埋葬施設の検出を行い、順次遺構の掘削を行い、検出状況や遺物出土状況、埋葬施設の実測・写真撮影を行った。埋葬施設の精査が終了した段階で、ラジコンヘリコプターによる、調査区全体の空中写真撮影や空中写真測量を行った。この後、石室については石室の構築方法と墳丘との関係などを明らかにするために解体調査を行い、補足の記録や写真撮影を行った。また、石室内の土砂については、篩がけを行い、玉類等の微細な遺物の取り残しがないように留意した。

遺跡 表土は基本的に重機で掘削し、包含層がある場合には人力にて掘り下げた。確認調査で把握された文化層（面）ごとに人力にて精査し、遺構検出を行った。つづいて検出できた遺構から順次遺構の重複関係を見極めながら掘削を行い、遺物出土状況図や遺構の実測図を作成するとともに、写真撮影を行った。縄文時代や旧石器時代の遺物についてはトータルステーションを用いて出土位置、高さを記録しながら取り上げた上で、図化した。これらの作業が終了した段階で遺物を取り上げた。

遺構が掘り上がった段階で、ラジコンヘリコプターを用いて、空中写真撮影・空中写真測量を実施した。

なお、写真撮影について、空中写真撮影は中判カメラ（6×4.5インチ、白黒ネガフィルム）を用いて行い、個別写真については、中判カメラ（6×7インチ、白黒ネガフィルム）、小型カメラ（35mm、ポジフィルム、カラーネガフィルム、白黒ネガフィルム）を用いて撮影した。

第6表 本発掘調査の対象地点と調査の概要

地点名	遺跡名	調査面積 (m ²)／月	平成10年度					平成11年度					平成12年度					備考										
			11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	
39	船津L- 第171号墳	300																										本調査Ⅰ期
	矢川上C遺跡	4,100																										本調査Ⅱ期
44	古木戸A遺跡・ 古木戸B遺跡・ 天ヶ沢東遺跡	20,500																										本調査Ⅰ期
		5,500																										本調査Ⅱ期
45	須津J-第6・ 118・ 159号墳	300																										本調査Ⅰ期
		600																										本調査Ⅱ期
48	富士岡中尾遺跡	470																										確認調査
CR 20	平椎遺跡・ 平椎第2号墳	478.5																										確認調査
52	鶴無ヶ瀬・間門 E-第6号墳	256																										本調査Ⅰ期
	間門松沢 第1号墳	1,200																										確認調査 その1
	不動棚遺跡	510																										確認調査 その2
53	松坂遺跡	410																										確認調査

※1 富士市教育委員会による調査は除く。

※2 備考欄に確認調査とあるものは、対象面積が狭小なため、確認調査に継続して本発掘調査を実施したものである。

2. 本発掘調査の体制

本発掘調査の体制については、第二東名富士工区として、富士市・富士宮市に所在する地点の調査体制を組んで確認調査と併行して実施した（第4表）。

各遺跡の本発掘調査の担当については、個々の遺跡の報告で述べる。

3. 本発掘調査の経過

本発掘調査は、No.39地点、44地点、45地点、52地点、53地点などで実施した。本発掘調査について「富士地区」で合計4冊の報告書を刊行し、それぞれの報告書にて詳細は記載するため、ここでは全体的な期間や調査面積のみを記述する（第6表）。

なお、No.48地点の富士岡中尾遺跡、No.52地点の間門松沢第1号墳、不動棚遺跡、No.53地点の松坂遺跡、CR20地点の平椎遺跡・平椎第2号墳は確認調査から継続して「確認調査」として本発掘調査を実施した。



写真4 No.45地点の本発掘調査（石室解体）



写真5 CR20地点の本発掘調査（遺構掘削・実測）



写真6 No.45地点の本発掘調査（遺構掘削）



写真7 No.52地点の本発掘調査（石室解体）

第5節 資料整理・報告書作成の方法・体制・経過

1. 資料整理・報告書作成の方法

基礎整理は出土した遺物の台帳作成、洗浄・注記作業を実施し、次の資料整理に備えた。資料整理～報告書刊行までの作業は、静岡県教育委員会通知『静岡県埋蔵文化財発掘調査の作業標準・積算基準』に基づき実施した。

基礎整理 土器・玉類については取上げ後、台帳を作成し、遺物を傷つけないように慎重に洗浄・注記し、整理作業に備えた。金属製品については、現地にて劣化遅延処置を実施後、取り上げを行い、台帳作成し、保存処理に備えた。

記録類は現地で実測した図面の整合性を合わせるとともに、台帳を作成した。

整理作業・報告書刊行作業 出土品の分類、仕分け、接合、復原を行うとともに、復原が終了した遺物から順次実測を行い、版組を行った後でトレースした。また、実測が終了したものから写真撮影を行った。金属製品は、保存処理（クリーニング）を行った後で実測、版組、トレース、観察表の作成を行うとともに、写真撮影を実施した。写真撮影にあたっては、中判カメラ（6×7インチ、白黒ネガフィルム、ポジフィルム）で撮影し、集合写真については大判カメラ（4×5インチ、白黒ネガフィルム、ポジフィルム）を用いた。

第7表 資料整理・報告書作成の体制

職名	年度	平成16年度	平成17年度	平成18年度	平成19年度	平成20年度	平成21年度	平成22年度
所長	斎藤 忠	斎藤 忠	斎藤 忠	斎藤 忠	清水 哲	天野 忍	石田 彰	
副所長	飯田英夫							
常務理事				清水 哲	清水 哲	天野 忍	石田 彰	
事務局長				清水 哲				
(事務局)次長				大場正夫 佐野五十三 及川 司 福葉保幸	大場正夫 及川 司 福葉保幸	松村 亨 及川 司 福葉保幸 中鉢賢治	松村 亨	
常務理事 兼詫弼部長	平松公夫	平松公夫	平松公夫					
次長	鈴木英巳	鈴木大二郎	鈴木大二郎					
詫弼課長	鈴木英巳	鈴木大二郎	鈴木大二郎	大場正夫	大場正夫	松村 亨	松村 亨	
詫弼部 (詫弼課) 担当	専門監							福葉保幸
	経理専門員	福葉保幸	福葉保幸					
	詫弼係長	芦川美奈子	芦川美奈子	芦川美奈子	山内小百合	山内小百合	瀧 みやこ	
	会計係長	野島尚紀	野島尚紀	杉山和枝	杉山和枝	杉山和枝	杉山和枝	
	事業担当	中鉢京子	中鉢京子			中鉢京子	中鉢京子	
調査体制 (調査部) 担当	部長	山本界平	石川素久	石川素久				
	次長	栗野克巳 中嶋郁夫	栗野克巳 中嶋郁夫	佐野五十三 及川 司 福葉保幸				
	担当課長	中嶋郁夫	中嶋郁夫	及川 司	及川 司	及川 司	及川 司	中鉢賢治
	事業係長					福葉保幸	福葉保幸	
	事業担当		中鉢京子	福葉保幸	福葉保幸 中鉢京子	中鉢京子	中鉢京子	
	担当係長			前嶋秀張 中鉢賢治	中鉢賢治 笠原千賀子	中鉢賢治 笠原千賀子	中鉢賢治 笠原千賀子	岩本 貴
	工区主任	前嶋秀張	前嶋秀張 笠原芳朋					
	調査研究員(調査員)	高野健多果	高野健多果	高野健多果	矢島 一	田村隆太郎	岩本 貴	大谷宏治
			成田修一	矢島 一	柴田亮平	柴田亮平		
						高野健多果		
保存 処理	室長	西尾太加二	西尾太加二	西尾太加二	西尾太加二	西尾太加二	西尾太加二	
	調査員				大森信宏	大森信宏	大森信宏	
実施内容	整理作業・報告書作成		資料整理	資料整理	資料整理	資料整理	資料整理	資料整理
	富士工区富士地区全体を対象として実施							

2. 資料整理の体制

資料整理および報告書作成は、第二東名富士工区として体制を組んで実施した（第7表）。

3. 資料整理・報告書作成の経過

（1）基礎整理作業

基礎整理作業は富士工区の現地における確認調査・本発掘調査とともに平成10年度～平成15年度まで継続的に実施した。

現地で出土した遺物の台帳作成、洗浄・注記作業を行うとともに、記録類の整理、台帳作成を行った。

（2）資料整理・報告書刊行作業

資料整理のうち、土器の接合・復原については基礎整理作業と並行して行うとともに、富士工区全体が資料整理に移行した平成15年度～20年度に断続的に実施した。

接合・復原以外の本格的な資料整理は静岡県教育委員会の『静岡県埋蔵文化財発掘調査の作業標準・積算基準』に基づき、平成16～22年度に実施した。

矢川上C遺跡ほかについては、『矢川上C遺跡』で、天ヶ沢東遺跡他については『天ヶ沢東遺跡・古木戸A遺跡・古木戸B遺跡』はそれぞれ報告している。

本書および船津古墳群や須津古墳群については平成20年4月1日から遺構図の編集・版下作成、トレース、遺物の実測、拓本の採取、版下作成・トレース、観察表の作成などを行った。また、No.52地点（不動棚遺跡）、No.53地点（松坂遺跡）の調査区配置図や遺物の出土状況図については平成20年度に株式会社シン技術コンサルに委託して作成した。

報告書は、平成20年度に『矢川上C遺跡』（富士市－1）、平成22年度に『天ヶ沢東遺跡・古木戸A遺跡・古木戸B遺跡』（富士市－2）、本書（富士市－3）および『富士山・愛鷹山麓の古墳群』（富士市－4）を刊行した。また、報告書の作成と併せて、静岡県教育委員会へ移管するための収納作業を行った。



写真8 資料整理作業①（接合）



写真9 資料整理作業②（図面編集）

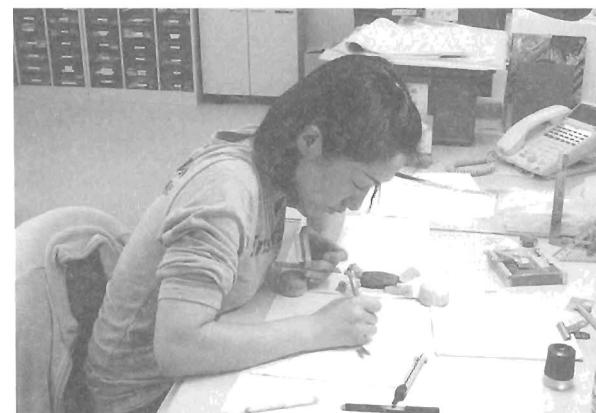


写真10 資料整理作業③（遺物実測）



写真11 資料整理作業④（写真図版作成）

第6節 保存処理・自然科学分析の方法と経過

1. 保存処理の方法

出土した金属製品について、現地調査終了後断続的に当研究所保存処理室においてクリーニング・保存処理を実施する。保存処理は、処理前記録の作成後、X線写真撮影、土砂・鏽を除去し、脱塩処理を行う。脱塩処理後劣化防止のための保存処理を実施する。すべてが終了した段階で処理後の記録を作成する。

2. 保存処理の経過

保存処理は、現地の本発掘調査が終了次第、富士工区内の他の遺跡と並行して行ったため、ここでは本書と『富士山・愛鷹山麓の古墳群』で報告する6遺跡の資料整理の計画について記録する。

保存処理作業は、平成19年度（平成19年9月1日～平成20年1月31日）、平成20年度（平成20年4月



写真12 保存処理作業状況

1日～7月31日）、平成21年度（平成21年11月1日～12月31日）、22年度（平成22年8月1日～9月30日）に平椎古墳群（第2号墳）、船津L-第171号墳、須津古墳群、鶴無ヶ淵・間門E-第6号墳、間門松沢第1号墳などの出土金属製品について、当研究所保存処理室が実施した。

作業は処理前状況記録の作成を行った後、X線写真を撮影し、この写真を参考にしながら土砂および鏽を除去し、脱塩処理を行った。脱塩処理後保存処理を実施し、それが終了した段階で、処理後の記録を作成し、保存処理を終了した。

3. 自然科学分析の方法と経過

（1）自然科学分析の方法

矢川上C遺跡など報告書刊行済の遺跡については、それぞれの報告書で記述する。

平椎遺跡SH05は焼失住居であり、炭化物が多量に出土したため、竪穴建物の構成材を復原するために樹種同定を行うとともに、遺構の絶対年代を特定するため放射性炭素¹⁴C年代測定を実施した。

（2）自然科学分析の経過

自然科学分析は、炭化物の放射性炭素年代測定（AMS測定）および炭化材の樹種同定を平成21年度に株式会社加速器分析研究所に委託して、実施した。

第7節 確認調査の結果

1. 各地点の概要

以下には、確認調査の方法や結果について、計画路線の対象地点を東から順次記載する。工事用道路(CR地点)については、近接する計画路線の確認調査対象地と併せて報告する。

なお、確認調査の結果概要や結果報告書、当研究所の年報等で各地点から出土した遺物が記載されているが、資料整理を進める中で記載された遺物の内容と異なることが判明したものがあり、必ずしも結果概要等と完全に一致するものではないことをあらかじめ断わっておきたい。

また、本発掘調査の対象とならなかった地点から出土した遺物の詳細については本節2において一括して記述する。

以下に、各地点の確認調査の結果を報告する。

(1) №39地点 (CR27地点を含む)

位置・立地と現況 №39地点は富士市船津字矢川上^{ふなつあざやかわうえ}に位置する。愛鷹山南麓の扇状地の緩斜面に位置する。当地点は春山川が開析した下位の平坦面と尾根上部の上位の平坦面があり、低位の平坦面には船津L-第169~174号墳の6基、上位の平坦面には船津L-第14号墳および矢川上C遺跡が周知されており、古墳および縄文時代の遺跡の存在が想定された。

調査地点の現況は、畠地として利用されていた。特に古墳6基が所在する箇所は、古墳に使用されたと想定する大型の石材が畠地の区画に利用されている状況にあった。

調査の方法 古墳が確認される可能性が高いため、調査対象地内に約5~10mの間隔で試掘溝を設定し、重機および人力にて掘削を行った後、人力にて精査した。また、古墳の確認終了後、古墳より下層に所在する可能性が高い縄文・旧石器時代の遺跡の確認のため、上段の尾根平坦部分に約20m間隔で試掘坑を設定し、重機にて掘削を行った後、人力にて精査した。

遺構・遺物の確認状況 確認調査の結果、下位の平坦面では想定された4基の古墳のうち船津L-第169、170、172~174号墳の5基については古墳が所在した可能性が高いが既に横穴式石室が破壊され、その石材が集石された状況であること、船津L-第171号墳は想定された箇所とは若干位置が異なるが横穴式石室をもつ古墳が残存していることが判明した。一方、上位面では船津L-第14号墳のほか古墳2基およびその可能性が高い溝状遺構のほか、縄文時代の土坑、旧石器時代の包含層が確認された。

結果 確認調査の結果、下位の平坦面では船津L-第171号墳、上位平坦面では古墳2基、同時期と想定する溝状遺構、縄文時代の遺構、旧石器時代の包含層が確認されたため、下位平坦面は古墳を対象とし、上位平坦面は古墳および縄文・旧石器時代の矢川上C遺跡の本発掘調査とした。

なお、確認調査終了後、新たに確認された上位面の古墳は、船津L-第217号墳と命名された。また、上位の平坦面の、矢川上C遺跡および船津L-第14・217号墳の本発掘調査についてはすでに報告済である(静岡県2009)。

(2) №40地点、CR25・26地点

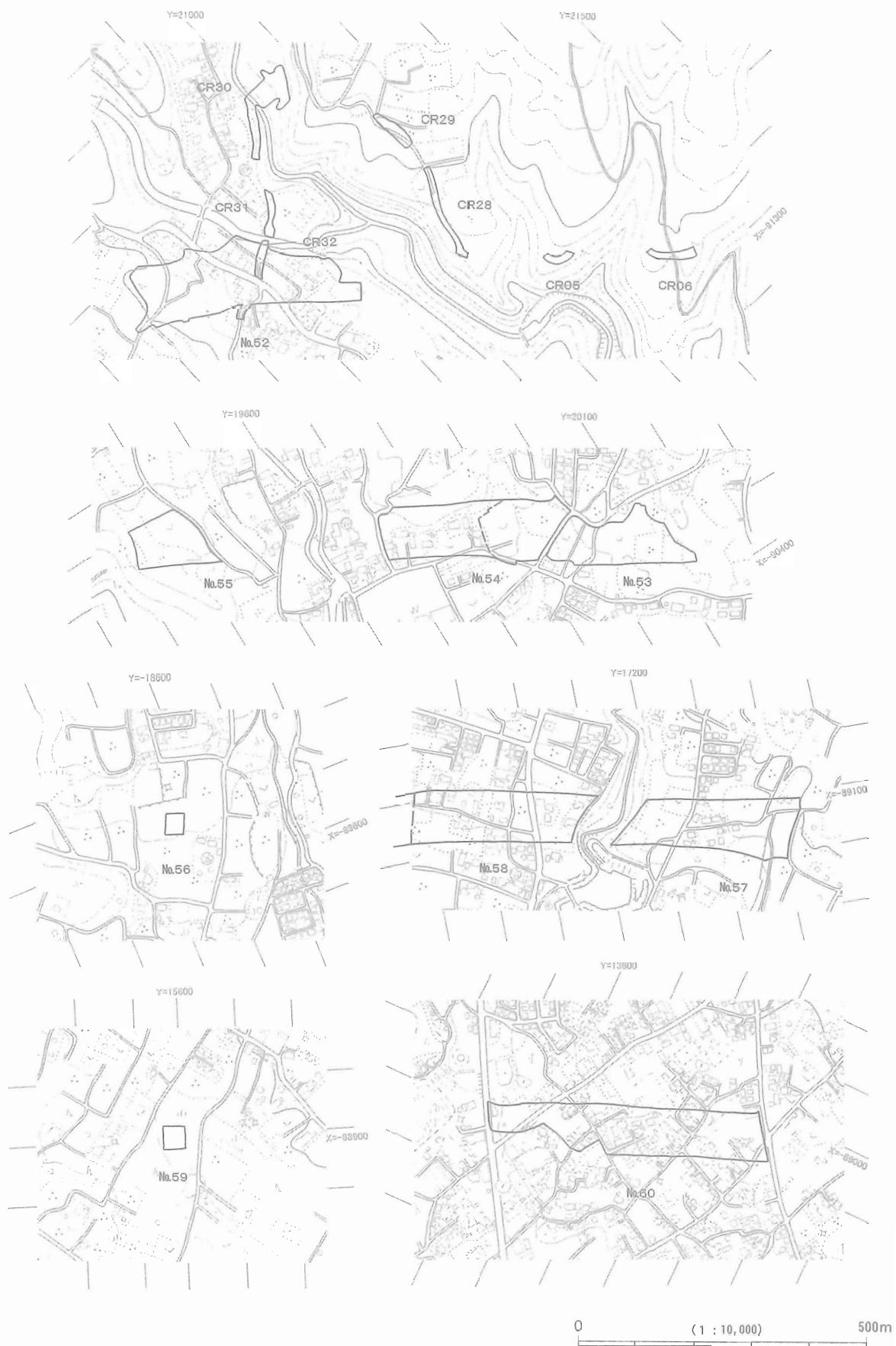
位置・立地と現況 №40地点 (CR25地点を含



写真13 №40地点



第6図 各対象地点の範囲と周辺地形①



第7図 各対象地点の範囲と周辺地形②



写真14 №41地点

む)は富士市西船津字トツラ沢、富士市境、富士市桜沢、CR26地点は富士市境に位置する。調査地点は愛鷹山南麓の扇状地の緩斜面に立地し、№40地点は標高110~130m、CR26地点は標高100m付近に立地する。

№40地点、CR26地点は埋蔵文化財包蔵地として周知されていないが、調査地点近くに野多場遺跡が所在し、調査地点内で須恵器が表面採集されていることから確認調査の対象とした。調査地点の現況は、畠地として利用されていた。

調査の方法 №40地点は調査対象内に約20m間隔で試掘坑を設定し、重機で掘削した後、人力にて遺構・遺物の有無の精査を行った。CR26地点は2箇所試掘坑を設定し、人力にて掘削および遺構・遺物の有無の確認を行った。

遺構・遺物の確認状況 №40地点は調査対象地内全体に削平、掘削が及んでおり、縄文時代以降の遺構が確認される層位まで破壊されていることが判明した。旧石器時代の遺構が確認される層位は一部残存していたが、遺構・遺物ともに確認できない。CR26地点は削平が行われており、遺構・遺物ともに一切確認できない。

結果 №40地点では表土や攪乱層から磨製石鎌（第9図16）や黒曜石剥片、須恵器片、陶磁器が出土したが、攪乱が著しく遺構は確認できない。遺跡が所在したとしても既に破壊されていると判断した。CR26地点は遺構・遺物は確認できない。したがって、両地点ともに本調査対象外とした。

(3) №41地点・CR24地点

位置・立地と現況 №41地点は富士市野多場^{のたば}に、CR24地点は富士市境に位置し、富士山南麓の扇状地の緩斜面に立地する。№41地点は調査地点の東西は谷が形成されており、調査地点内には浅い谷が形成され、平坦面が少ない。CR24地点は№41地点の南へ下った箇所^{のたば}に位置し、尾根の先端近くに当たる。

№41地点は古墳時代から平安時代の遺跡とされる野多場遺跡に該当する。両調査地点は畠地として利用されていた。

調査の方法 №41地点は調査対象地内に約10m間隔で試掘坑を設定し、重機にて掘削を行った後、人力にて遺構・遺物の精査を行った。CR24地点は1箇所の試掘坑を設定し、人力にて掘削および遺構・遺物の有無の確認を行った。

遺構・遺物の確認状況 確認調査の結果、№41地点では石鎌（第9図17）、黒曜石片、土師器片、青磁片などが出土したが遺構に伴うものではない。当地点では明瞭な遺構は確認できない。CR24地点は攪乱が著しく、遺構は確認できない。遺物は攪乱層以上から土師器小片が出土した。

結果 確認調査の結果、№41地点、CR24地点ともに遺構は確認できることから、本発掘調査対象外とした。

(4) №42地点

位置・立地と現況 №42地点は富士市境字中ノ段に位置し、愛鷹山南麓の扇状地の緩斜面に立地する。当地点の西側は深い谷、東側は一段高い丘陵に向かう急斜面に挟まれた場所であり、平坦面は少ない。当地点は周知の埋蔵文化財包蔵地には登録されていないが、縄文時代早期の押型文土器が採集されており、当地点は縄文時代早期の遺跡が所在する可能性が想定された。

当地点は茶畠として利用されていた。

調査の方法 調査対象地内に約10m間隔で試掘坑を設定し、重機による掘削を行った後、人力にて遺構・遺物の精査を行った。この段階で、遺構の可能性があるものが確認された試掘坑、遺物が集中的に出土した試掘坑については試掘溝調査に切り替えて拡張し、精査を行った。

遺構・遺物の確認状況 確認調査の結果、遺構は確認できない。縄文土器片（第8図1・2）、弥生土器片、土師器片が出土したが、いずれも遺構に伴うものではなく、遺物が出土した試掘坑は斜面の下部の試掘坑にほぼ限定されることから扇状地上部からの流れ込みと判断した。

なお、弥生土器、土師器については部位の不明確な小片であるため図示していない。

結果 確認調査の結果、遺物は出土したもの扇状地上部からの流れ込みと判断し、No.42地点は本発掘調査の対象外とした。

(5) No.43地点、CR21～23地点

位置・立地と現況 No.43地点、CR21～23地点は富士市江尾に所在し、愛鷹山南麓の扇状地の緩斜面に立地する。No.43地点は標高110～136m付近に立地し、当地点は東西を谷に挟まれた丘陵地であり、中央に浅い谷があり、平坦面は少ない。CR21・22地点は標高100m付近、CR23地点は標高85～90m付近に立地する。CR21地点は、No.43地点から谷を一つ隔てた西側の尾根、CR22地点はNo.43地点内の西側の尾根を南に下った箇所、CR23地点はNo.43地点内の東側の尾根を南に下った箇所に位置する。

No.43地点は周知の埋蔵文化財包蔵地として登録されていないが、周囲には縄文時代中期の二ツ塚遺跡や古墳時代の長四郎遺跡が所在する。調査地点は一部山林があるが、茶畠として利用されていた。

CR21地点は遺跡の北部に縄文時代早期の鳥帽子形遺跡が、南側の尾根の先端には久保ノ上遺跡や江尾遺跡といった縄文時代～古墳時代の遺跡が所在しており、それと関連する遺跡が発見されることが想定された。

調査の方法 No.43地点は調査対象地内に約20m間隔で試掘坑を設定し、重機で掘削した後、人力にて遺構・遺物の精査を実施した。調査の進行に伴い遺構の可能性がある溝状のものを確認した試掘坑を拡張し、全掘し、記録を作成した。CR21・22・23地点は、それぞれ6、2、2箇所の試掘坑を設定し、重機にて掘削した後、人力にて遺構・遺物の精査を行った。

遺構・遺物の確認状況 確認調査の結果、No.43地点は調査対象箇所のほぼ中央の試掘坑で溝状のものが確認されたが、遺物が一切出土せず時期不明である。これ以外では遺構は一切確認できず、攪乱層より縄文土器片（第8図3）、石鎌（第9図18）、灰釉陶器、陶磁器片が出土したのみであった。CR21～23地点では遺構・遺物とともに一切確認できない。

結果 確認調査の結果、遺物は攪乱層からの出土であり、遺構は溝状のものだけで時期を特定で



写真15 No.42地点



写真16 No.43地点

きないことから、No.43地点は本発掘調査の対象外とした。CR21～23地点については遺構・遺物とともに確認できることからNo.43地点と同じく、本発掘調査の対象外とした。

(6) No.44地点、CR16～20地点

位置・立地と現況 No.44地点 (CR18・19地点を含む)、CR17・20地点は富士市増川^{ますかわ}、CR16地点は富士市神谷^{かみや}に位置する。当対象各地点は愛鷹山南麓の扇状地の緩斜面に立地する。No.44地点は、扇状地が二股に分かれる位置にあたる。CR16地点はNo.44地点から谷を挟んだ西側の尾根に位置し、尾根の先端部に神谷遺跡、北側に百間遺跡が所在する。CR17地点はNo.44地点内の西側の尾根の先端近くに位置する。CR20地点はNo.44地点内の東側の尾根を南に下った尾根の先端近くに位置する。当地点は近接地に平椎第1号墳が所在するため古墳が確認されることが想定された。

No.44地点、CR16・17・20地点は調査以前には主に畠地として利用されていた。

調査の方法 No.44地点については、調査対象箇所に約20mの間隔で試掘溝を設定し、重機にて掘削した後、人力にて遺構・遺物の精査を行った。

CR16地点については2箇所の試掘坑、CR17地点については4箇所の試掘坑を設定し、重機にて掘削した後、人力にて遺構の有無の精査を行った。

CR20地点は、対象地内に12箇所の試掘溝を設定し、重機にて掘削を行った後、人力にて遺構・遺物の精査を行った。確認調査の結果、遺構・遺物が確認されたため、その範囲を拡張し、本発掘調査として調査を行った。

遺構・遺物の確認状況 No.44地点では攪乱が及んでいたが、旧石器時代～縄文時代の遺構・遺物が原位置を保持した状態で出土した。これらは広大な調査地点内の南に向かって伸びる尾根に位置しており、大きく3箇所に区分できる。

CR20地点では、竪穴建物と想定する弥生時代～古墳時代にかけての遺構や古墳の所在が確認できた。縄文時代以前の石器も出土しているため、さらに下位に遺跡が所在する可能性を考慮し調査したが、縄文時代や旧石器時代の遺構は確認できなかった。

CR16地点は比較的土層の残存状況が良好であったが、遺構は確認できない。遺物は縄文土器の小片であった。CR17地点は遺構・遺物ともに確認できない。

結果 No.44地点、CR20地点については遺構・遺物ともに確認できることから本発掘調査対象とし、No.44地点については、静岡県教育委員会と富士市教育委員会の協議の結果、確認された地点が3地点に及ぶことから「古木戸A遺跡」、「古木戸B遺跡」、「天ヶ沢東遺跡」と命名された。一方、CR20地点については、協議の結果「平椎遺跡」、「平椎第2号墳」と命名された。CR16・17地点は遺物が出土するものの、遺構は確認できることから本発掘調査の対象外とした。

なお、44地点の本発掘調査の詳細な報告については既に報告済である（静岡埋文研2010b）。CR20地点の本発掘調査については本書第3章で報告する。

(7) No.45地点 (CR15を含む)

位置・立地と現況 No.45地点 (CR15地点) は、富士市中里に位置し、愛鷹山南麓の扇状地の緩斜面、標高68～79m付近に立地する。当地点の西側は須津川が南流し、東側は一段高い丘陵尾根に向かう斜面地で、西側は平坦面が広く、東側は深い谷である。

当地点は、須津古墳群に該当し、調査対象地内には須津J-第5・6・118・159・162号墳の5基が周知されており、この他にも古墳の可能性がある大型の石材が露出する箇所が確認できる。

調査地は畠地として利用されていた。

調査の方法 調査対象地は古墳の存在が想定されたため、周知の5基の古墳については想定箇所に十字に試掘溝を設定し、重機および人力にて掘削を行った後、人力にて遺構・遺物の有無の精査を行った。それ以外の箇所については約5m間隔で試掘溝を設定し、重機にて掘削後、人力にて遺構・遺物の有無の精査を行った。古墳の有無については埋葬施設あるいは周溝の検出を主に行つたが、その存在が確定できない箇所については拡張して古墳かどうかの判断をした。

遺構・遺物の確認状況 確認調査の結果、周知の5基の古墳のうち、須津J-第5・162号墳については横穴式石室に使用されたと想定できる石材は確認できたものの、横穴式石室ではなかった。すでに破壊・集石されたと判断した。一方、須津J-第6・118・159号墳については周知の場所とは若干異なるが、古墳が所在することが確認できた。

これ以外の試掘溝では、遺構は確認できず、縄文土器片や黒曜石片、打製石斧が表土や流入土から出土しただけであった。

結果 確認調査の結果、須津J-第6・118・159号墳の3基が確認できたため、この3基を本発掘調査の対象とし、それ以外については本発掘調査対象外とした。

(8) №46地点、CR11～14地点

位置・立地と現況 №46地点（CR11地点を含む）、CR12～14地点は富士市中里に位置し、愛鷹山南麓の扇状地の緩斜面、標高90m付近に立地する。東側は須津川が開析した谷で、西側は尾根上部へ向かう急峻な斜面であり、調査地点が所在する尾根は南北に細長く延びる尾根の一角にあたる。調査対象箇所は中里古墳群内の北部にあたり、№46地点では2基（中里K-第44号墳・同43号墳）の古墳の存在が想定されたほか、これ以外の墳丘等が削平された古墳が確認される可能性が高かった。CR12～14地点も中里古墳群内にあたり、古墳が出土する可能性が高いため調査対象とした。

5地点ともに調査前は茶畠等として利用されていた。

調査の方法 №46地点では調査対象地点内に古墳の所在が想定されたため、約5mの間隔で試掘溝を設定し、重機で掘削した後、人力にて精査を行った。残存状況が良好な箇所で休場層が確認できた場所については縄文時代や旧石器時代の遺構の存在が想定されたため、周辺に試掘溝を拡張し、遺構の有無を確認した。CR13地点は調査対象地内に2箇所の試掘坑10箇所の試掘溝を設定し、重機による掘削を実施した後人力にて遺構の有無の精査を行った。一部の試掘溝では石室の可能性がある部分などが確認されたため、遺構かどうかを判断するため拡張して遺構・遺物の確認を行った。CR14地点は試掘溝を3箇所（そのうちの第3試掘溝を調査対象地の北から南まで約160m分）設定し、重機にて掘削後、人力にて精査を行った。

CR12地点については、道路を拡幅する範囲が狭小であったため、拡幅範囲の掘削時に立会いを行うこととした。

遺構・遺物の確認状況 №46地点では、明確な遺構の存在は確認できない。遺物は縄文土器、石器、近世以降の陶磁器が出土した。縄文土器（第8図4・5）、縄文時代の石錘（第9図19）、すりたたきたいし磨敲石（第9図20）を図示した。

CR13地点では、溝状のものが出土したが遺物を伴わないことから遺構とは確認できない。また、石材が集中する箇所があったが、古墳とは確認できない。出土遺物には縄文土器（第8図9～14）、



写真17 №46地点

須恵器（第8図15）などがある。

CR14地点は旧河川に土砂が堆積していることが判明し、遺構は確認できず、堆積土から土器片が出土しただけであった。

CR12地点については、立会いの結果、遺構・遺物ともに確認できない。

結果 №46地点、CR11～14地点について遺物は出土するものの、明確な遺構は確認できないことから、本発掘調査の対象外とした。

(9) №47地点、CR10地点

位置・立地と現況 №47地点は富士市富士岡字富奈山に位置し、愛鷹山南麓の扇状地の緩斜面、120～126mに立地する。調査対象箇所の東側は斜面地、西側は谷であり、南北に延びる緩斜面に位置している。調査対象箇所の西側は畑地の造成による大規模な掘削が行われていたため、その部分は確認調査から除外した。調査対象箇所は畑地として利用されていた。

CR10地点は富士市富士岡に位置し、須津川東岸の比較的幅の狭い尾根上に立地する。

調査の方法 №47地点は調査地点内に約10m間隔で試掘坑を設定し、重機で掘削した後、人力にて遺構・遺物の有無の確認を行った。CR10地点は5箇所の試掘坑を設定し、重機で掘削した後、人力にて



写真18 №47地点

遺構・遺物の精査を行った。

遺構・遺物の確認状況 №47地点は畑地の造成による掘削のため、攪乱が深く及んでおり、遺構は確認できない。土器片と石器剥片が出土したが、流れ込みと判断した。CR10地点も攪乱が深く及んでおり、遺構は確認できず、縄文時代の石匙（第9図22）が出土しただけであった。

結果 №47地点、CR10地点では遺構は確認できず、出土した遺物は流れ込みと判断し、本発掘調査の対象外とした。

(10) №48地点

位置・立地と現況 №48地点は富士市富士岡字中尾に位置し、富士山南麓の扇状地の緩斜面に立地する。当地点は東側には沢が、西側は尾根に向かう急斜面であり、周辺と隔てられている。

踏査時に土器片や黒曜石片が採集されており、遺跡の可能性が想定されたため確認調査の対象とした。調査地点は果樹園、畑地として利用されていた。

調査の方法 調査対象地点に約20mの間隔で試掘坑を設定し、重機の進入が困難であったことから人力にて掘削および遺構・遺物の精査を行った。

遺構・遺物の確認状況 調査対象箇所の北側で、縄文土器、石器が多数確認された。一方、中央から南側では石器や土器が数点出土するのみであった。遺構は確認できない。

結果 確認調査の結果、部分的に縄文時代の遺物が密に出土したため、その試掘坑の周辺を拡張して本発掘調査を実施した。その結果については、本書第2章で記述する。

なお、当地点は静岡県教育委員会と富士市教育委員会の協議の結果、「富士岡中尾遺跡」と命名された。

(11) №49地点、CR09地点

位置・立地と現況 №49地点、CR09地点は、富士市富士岡に位置し、愛鷹山南麓の緩斜面に立地する。調査地点の南東と北西にある谷に挟まれた細長い緩斜面である。当地点周辺で縄文土器が採集された記録があり、縄文時代の遺構が確認される可能性が高いため確認調査の対象とした。調査地点は茶畠、果樹園として利用されていた。

調査の方法 №49地点は調査対象地内に約20m間隔で試掘坑を設定し、重機で掘削した後、人力にて遺構・遺物の精査を行った。CR09地点は試掘坑を8箇所設定し、重機で掘削した後、人力にて遺構・遺物の精査を行った。

遺構・遺物の確認状況 №49地点は確認調査の結果、上部は近現代の攪乱が著しく、遺構が存在したとしてもすでに破壊されている可能性が高いことが判明した。攪乱が及んでいない下部については風倒木の痕跡と想定する落ち込みは確認できたが、明確な遺構や遺物は一切出土しなかった。CR09地点は土砂の堆積は比較的良好に残存していたが、遺構・遺物は一切確認できない。

結果 №49地点、CR09地点ともに本発掘調査対象外とした。

(12) №50地点、CR08地点

位置・立地と現況 №50地点、CR08地点は富士市富士岡字上白沢に位置し、愛鷹山南麓の扇状地の緩斜面に立地する。調査対象地点は比較的広い平坦面があり、調査以前に青磁片が採集されるとともに古墳のような高まりも確認されるなど遺跡の可能性が想定された。

調査の方法 №50地点は調査対象地内に約20m間隔で試掘坑を設定し、重機による掘削を行った後、人力にて遺構・遺物の有無の精査を行った。CR08地点は、調査対象とする箇所が狭小であるため、工事に伴う掘削時に工事立会いを行い、遺構・遺物の有無の確認を行った。

遺構・遺物の確認状況 №50地点は調査の結果、対象地は削平や攪乱が著しく、それらが行われていない箇所についても遺構は確認できない。遺物は縄文土器片、灰釉陶器片、天目茶碗片が出土したが、遺構に伴うものではない。

CR08地点は工事立会いの結果、遺構・遺物ともに確認できない。

結果 調査の結果、両地点ともに遺構は確認できない。№50地点は遺物が出土したものの遺構に伴うものではないことから、№50地点は遺跡であったとしても既に破壊されたか、あるいは周囲の遺跡からの遺物の流れ込みと判断し、本発掘調査の対象外とした。



写真19 №49地点

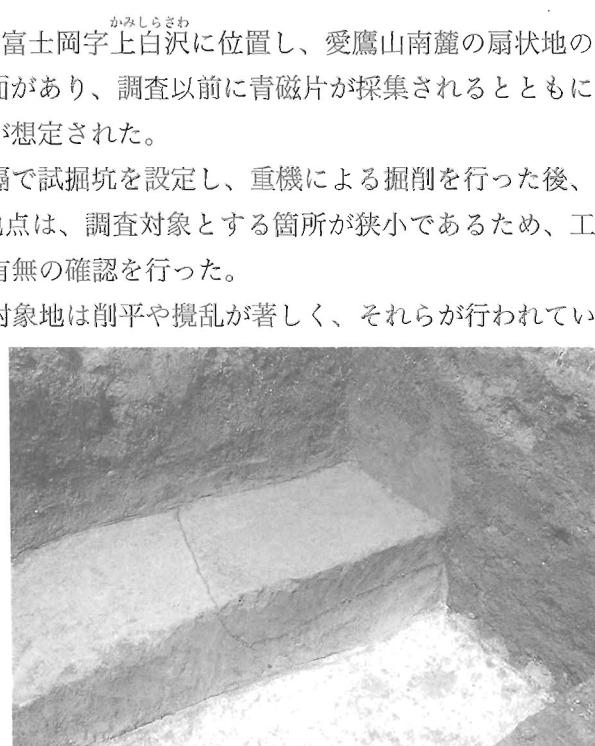


写真20 №50地点

(13) №51地点、CR07地点

位置・立地と現況 №51地点は富士市比奈字一ノ沢に位置し、愛鷹山南麓の扇状地の緩斜面、標高140～151mに立地する。当地点の東西には谷が形成されている。当地点周辺では縄文土器片や土師器片が採集されており、縄文時代や古墳時代～奈良時代ごろの集落の可能性が想定される箇所であった。

調査前は茶畠、花卉園、および樹林地であった。

CR07地点は富士市比奈に位置し、富士山南麓の、赤淵川の東岸の扇状地の緩斜面の先端に位置する。

調査の方法 №51地点では調査対象範囲内に20m間隔で試掘坑を設定し、重機にて掘削を行い、人力にて精査し、遺構・遺物の有無を確認した。CR07地点は調査対象地内に試掘坑を5箇所設定し、重機にて掘削した後、遺構・遺物の有無の精査を行った。このうち一部の試掘坑で遺構の可能性のあるものが確認されたため、試掘坑を拡張し試掘溝調査に切り替えて精査を行った。

遺構・遺物の確認状況 №51地点は調査の結果、現代の掘削が及んでいる場所が多く、それが及んでいない範囲においても自然の落ち込みや木の根の痕跡は確認されたが、遺構は確認できない。遺物は石鏃1点、黒曜石剥片1点、縄文土器片（第8図6）、灰釉陶器片、煙管1点（第12図37）、鉄製品2点

（第12図35・36）が出土した。CR07地点では柱穴状の落ち込みが確認できたが遺物が共伴しないこと、掘り込みが明瞭ではないことから、遺構ではないと判断した。CR07地点からは縄文土器片が若干出土した。

結果 №51地点、CR07地点ともに遺物は出土したが、遺構は確認できることから遺跡があったとしてもすでに破壊された、あるいは遺物は扇状地の上位にある遺跡からの流れ込みと判断したため、本調査の対象外とした。



写真21 №51地点

(14) CR05・06・28～31地点

位置・立地と現況 当工事用道路計画6地点は№51地点と№52地点の間にある。CR05・06地点は、富士市比奈に位置し、赤淵川の東岸、富士山南麓の扇状地の緩斜面に位置する。CR28～31地点は富士市間門の赤淵川東岸に位置し、CR29地点は富士山南麓の扇状地の尾根の先端、CR28・30地点は扇状地の斜面、CR31地点は赤淵川の河岸段丘の平坦面に位置する。

調査以前について、CR05・06地点は畠地、CR28地点は畠地・植林地であり、CR29・31地点は畠地、CR30地点は竹林であった。



写真22 CR29地点

CR28地点については調査区東側の工事用道路対象外の畠地では土師器が採集されており、古墳時代の遺跡が確認される可能性が高かった。

調査の方法 CR05・06・28・29地点は調査対象地内に試掘坑をそれぞれ2、5、6、3箇所設定し、CR30地点については古墳の存在が想定されたため、試掘溝5箇所設定し、CR31地点については平坦面であることから調査対象地全体に試掘溝を設定した。CR05・06地点は重機で掘削した後、CR28～31地点は人力にて掘削した後、人力にて遺構・遺物の有無

の精査を行った。

遺構・遺物の確認状況 確認調査の結果、CR05地点は遺構・遺物ともに確認できない。CR06地点では打製石斧（第9図23）は出土したものの、遺構に伴わない。CR28地点は削平が行われており、遺構・遺物は確認できない。CR29・30地点は遺構・遺物ともに確認できない。CR31地点は表土直下で縄文土器片（第8図7）、石器片が出土したが遺構は確認できない。

結果 CR05・06・28～31地点は遺構が確認できることから、本発掘調査の対象外とした。

(15) №52地点 (CR32地点を含む)

№52地点は、富士市教育委員会と当研究所が確認調査を分担して実施した。富士市教育委員会による確認調査結果については、富士市教育委員会の報告書を参照願いたい（富士市教委2005）。

位置・立地と現況 №52地点（CR32地点含む）は富士市間門^{まかど}に位置し、赤淵川西岸、愛鷹山南麓の緩斜面に位置する。当地点とCR05・06・28～31地点の間に赤淵川が南流し、富士山麓と愛鷹山南麓の境界となっており、地質的に大きな境界となる。

№52地点は鵜無ヶ淵・間門古墳群に該当し、鵜無ヶ淵・間門E-第6号墳などが所在することが想定されていた。当地点は、調査以前には住宅地、畠地として利用されていた。

調査の方法 調査対象地点は、鵜無ヶ淵・間門古墳群内であり、古墳が確認される可能性が高いことから約5～6m間隔で試掘溝を設定し、重機および人力にて掘削した後、人力にて遺構の有無の精査を行った。

遺構・遺物の確認状況 確認調査の結果、周知の鵜無ヶ淵・間門E-第6号墳が確認できた。また、これまで未周知であった場所で古墳1基、縄文時代の縄文土器、石器が集中して出土する箇所を確認した。この3箇所以外では、遺構は確認できない。

結果 確認調査の結果、№52地点では鵜無ヶ淵・間門E-第6号墳の所在が確認されるとともに、新規の古墳および遺跡が確認された。この3箇所について本発掘調査対象地とし、それ以外については本発掘調査対象外とした。本発掘調査の内容については、別報告書にて報告する（静岡埋文研2010c）。

なお、新規に確認された古墳と遺跡は静岡県教育委員会と富士市教育委員会の協議の結果、「間門松^{まかどまつ}沢第1号墳」、「不動棚遺跡」^{ふどうだな}と命名された。

(16) №53 地点

位置・立地と現況 №53地点は、富士市神戸字松坂^{こうどあざまつか}に位置し、富士山南麓の扇状地の緩斜面に位置する。この扇状地は富士山の新期溶岩流の一つである曾比奈溶岩流Iによって形成されている。調査地点の東側は赤淵川が南流しており、急峻な崖である。

当地点は神戸古墳群に当たり、調査個所は住宅地、畠地などとして利用されていた。

調査の方法 当地点では神戸古墳群の古墳が所在することが想定されるため、調査対象地点に10m間隔で試掘溝を設定し、重機にて掘削した後、人力で遺構・遺物の精査を行った。一部、遺構・遺物が確認された地点については、その地点を拡張する形で調査を行い、それを本発掘調査とした。



写真23 №52地点



写真24 No53地点

遺構・遺物の確認状況 調査地点は広範囲にわたるが、遺構は土坑3基が確認されたのみである。遺物は縄文土器、石器が多数出土した。

結果 No.53地点では調査区内で部分的に縄文時代の遺構と遺物が確認されたため、その部分を拡張して本発掘調査することとした。確認調査に継続して本発掘調査を実施したが、その報告については別報告書で記載する（静岡埋文研2010c）。

なお、確認された遺構は古墳ではないことから、静岡県教育委員会と富士市教育委員会の協議により、「^{まつさか}松坂遺跡」と命名された。

(17) No54地点

No.54地点は、富士市教育委員会と当研究所が確認調査を分担して実施した。富士市教育委員会による確認調査結果については、富士市教育委員会の報告書を参照願いたい（富士市教委2005）。

ここでは、当研究所が実施した確認調査の結果について報告する。

位置・立地と現況 No.54地点は富士市神戸字東原に位置し、富士山南麓の扇状地の緩斜面、標高158～161m付近に立地する。この扇状地は富士山の新期溶岩流の一つである曾比奈溶岩流Ⅰによって形成されている。調査地点の北側から西側には急峻な尾根があり、西から東にかけて落ち込む谷がある。

^{てらした}寺下遺跡に該当し、隣接箇所には神戸7号墳が所在したことから古墳が所在する可能性があった。

調査地点は、住宅地・畠地として利用されている。

調査の方法 調査対象地点内に神戸第7号墳が位置する場所の近接箇所では約10m間隔で試掘溝を設定し、それ以外の場所では20mごとに試掘坑を設定し、重機にて掘削した後人力にて精査した。遺物が出土した試掘溝・試掘坑は周囲に遺構の存在が想定されるため、それらを拡張し調査を実施した。



写真25 No54地点

遺構・遺物の確認状況 調査の結果、調査点は削平や造成が行われており、土坑や溝が確認できるが遺物が出土しておらず、時期不明である。遺物は縄文土器（第10図24～27）、縄文時代の石器（第11図28～34・41）が出土したが、すべて遺構に伴わないことから、出土遺物は周辺からの流れ込みと判断した。

結果 当地点では遺物は出土したが、それに伴う遺構は確認できないことから、遺物は周辺からの流れ込み、溝や土坑については人為的なものではないと判断し、本発掘調査対象外とした。

(18) No55地点

No.55地点は、富士市教育委員会と当研究所が確認調査を分担して実施した。富士市教育委員会による確認調査結果については、富士市教育委員会の報告書を参照願いたい（富士市教委2005）。

ここでは、当研究所が実施した確認調査の結果について報告する。

位置・立地と現況 No.55地点は富士市神戸字亀坂に位置し、富士山南麓の扇状地の緩斜面、標高190

m前後に立地する。この扇状地は富士山の新期溶岩流の一つである曾比奈溶岩流Ⅰによって形成されている。調査対象地点は畑地として利用されていた。対象地の東側には澤添遺跡^{さわぞえ}が所在するため、同様の遺跡が存在する可能性が想定できることから確認調査を実施した。

調査の方法 調査対象範囲内に約20mごとに試掘坑を設定し、重機にて掘削した後人力にて精査し、遺構・遺物の有無を確認した。

遺構・遺物の確認状況 確認調査の結果、当地点は大きく削平を受けており、埋没谷^{まいぼつだに}などが確認できるのみであった。試掘坑で確認された幅3mの溝状遺構は遺物が一切出土していないため自然流路の可能性が高い。出土遺物には縄文土器片やホルンフェルス剥片があるが、近接する遺跡からの流れ込みと判断した。

結果 調査の結果、堅穴建物などの遺構は確認できること、出土した遺物は周辺からの流れ込みと判断し、当地点は本発掘調査対象外とした。

(19) №56地点

位置・立地と現況 当地点は富士市大淵字糀窪^{おおぶちあざかすくぼ}に所在し、富士山南麓の扇状地の緩斜面、標高172m前後に立地する。この丘陵は富士山の新期溶岩流の一つである曾比奈溶岩流Ⅰによって形成されている。当地点の東側には松原川^{まつばらがわ}へと続く谷が形成されている。

当地点には20年ほど前までは墳丘が盛り上がった糀窪古墳^{かずくぼ}が存在していた地点である。糀窪古墳は昭和63(1988)年に富士市教育委員会が刊行した『富士市の埋蔵文化財(古墳編)』では低平な墳丘が確認でき、その内部で溶岩礫による石組(横穴式石室か)が南を向いて存在しており、その規模は全長5.3m、幅2mであることが確認されている(富士市教委1988)。現在は削平を受けて古墳の存在が確認できないが、古墳が所在する可能性が高いため確認調査対象とされた。

調査前は茶畑として利用されていた。

調査の方法 調査は糀窪古墳の所在が想定される位置に十文字の試掘溝とそれに付随する一条の試掘溝を設定し、重機と人力による掘削と精査を行った。

遺構・遺物の確認状況 茶畑の造成により現在の地表面下2mまで掘削が及んでおり、糀窪古墳は確認できなかった。したがって、糀窪古墳は完全に消滅した可能性が高い。

結果 古墳は消滅した可能性が高いことから、本発掘調査対象外とした。

(20) №57地点

当地点は富士市教育委員会と当研究所が確認調査を分担して実施した。富士市教育委員会による確認



写真26 №55地点



写真27 №56地点

調査結果については、富士市教育委員会の報告書を参照願いたい（富士市教委2005）。

ここでは、当研究所が実施した確認調査について報告する。

位置・立地と現況 当地点は富士市中野字東片倉に位置する。伝法沢川の東岸、富士山南麓に広がる扇状地の緩斜面に立地する。標高は188～192mである。対象範囲は樹林地や畠地として利用されており、調査対象範囲の東側は浅い埋没谷である。

調査の方法 調査方法は、対象地内に試掘坑（テストピット）を設定し、順次重機と人力で掘削と精査を実施した。



写真28 No.57地点

遺構・遺物の確認状況 確認調査では黒曜石剥片1点、ホルンフェルス剥片1点が出土した。自然流路と想定する溝一条を確認したが、遺物は一切出土していない。遺物については縄文時代に帰属するものであるが小片であり、図示していない。また、遺構に伴うものではないことから周囲に所在する遺跡からの流れ込みと判断した。

結果 堅穴建物など明確な遺構は確認できない。また、遺物は出土したが周囲からの流れ込みと判断した。したがって、当地点については本発掘調査対象外とした。

(21) No.58地点

当地点は富士市教育委員会と当研究所が確認調査を分担して実施した。富士市教育委員会による確認調査結果については、富士市教育委員会の報告書を参照願いたい（富士市教委2005）。

ここでは、当研究所が実施した確認調査について報告する。

位置・立地と現況 No.58地点は富士市中野字西片倉に位置する。伝法沢川の西岸、主要地方道富士・白糸滝公園線を挟む富士山南麓に広がる扇状地の緩斜面に位置する。標高は173～185mである。現状は樹林地や畠地であった。

周辺には古墳時代後期の井倉遺跡、片倉古墳や辻畠古墳が所在することから、古墳時代の遺跡や古墳が所在する可能性が想定できた。



写真29 No.58地点

調査の方法 調査区内に約20mごとに試掘坑を設定し、順次重機と人力による掘削と精査を行った。

遺構・遺物の確認状況 調査の結果、近代まで利用されていた築造時期不明の道状遺構が出土したが、遺物は出土しなかった（註）。道状遺構については、近世以降のものと判断した。

結果 確認調査の結果、本発掘調査対象外とした。

註

確認調査時に磨・敲石と想定したものは、整理作業時の精査の結果遺物ではないことが判明した。

(22) №59地点

№59地点の確認調査は、富士市教育委員会が実施した。詳細は、富士市教育委員会の報告書を参照願いたい（富士市教委2005）。

位置 №59地点は富士市厚原字込野^{あつはらあざこめ の}に位置する。

結果 確認調査の結果、遺構・遺物ともに確認できない。両地点ともに本発掘調査の対象外となつた。

(23) №60地点

位置・立地と現況 当地点は、富士市入山瀬字代山、天間道上に位置する。^{いりやま せ} 富士市内で最も西側に位置する対象地点である。当地点は潤井川とその支流である凡夫川に挟まれた富士山南麓の扇状地の緩斜面に立地し、標高120m前後に位置する。

周辺には天間代山遺跡、清水久保遺跡が所在し、その遺跡に挟まれる位置に当たることから、遺跡が所在する可能性が高いとされた地点である。

当地点は宅地化が進行しており、ある程度遺跡が所在するとしても破壊が進んでいると考えられた。

調査の方法 調査対象地内に約20mの間隔で試掘坑を設定し、順次重機と人力による掘削、精査を行った。調査が進むにつれて、調査対象箇所の多くが既に攪乱が及んでいることが判明する一方で、遺構が確認されたことから、遺構が確認された試掘坑については、その箇所を広げて遺構を完掘し、図面を作成し、写真撮影を行った。

遺構・遺物の確認状況 確認調査では、宅地造成等の開発による掘削で、遺跡が所在する可能性が高い層位まで掘削が行われていたことが確認できた。かろうじて、掘削が及ばない範囲で近世以降の土坑2基を確認した。遺物は、石鎚（第9図21）、スクレイパー（石匙、第9図40）、ホルンフェルス破片、縄文土器（第8図8）、常滑産甕小片、かわらけが出土した。

結果 確認調査では本調査の対象となる中世以前の遺構は確認できず、遺物も北側の天間代山遺跡などからの流れ込み、あるいは本来この位置にあった遺跡がすでに破壊されたものと判断し、№60地点は本調査の対象外とした。



写真30 №60地点

2. 確認調査出土遺物

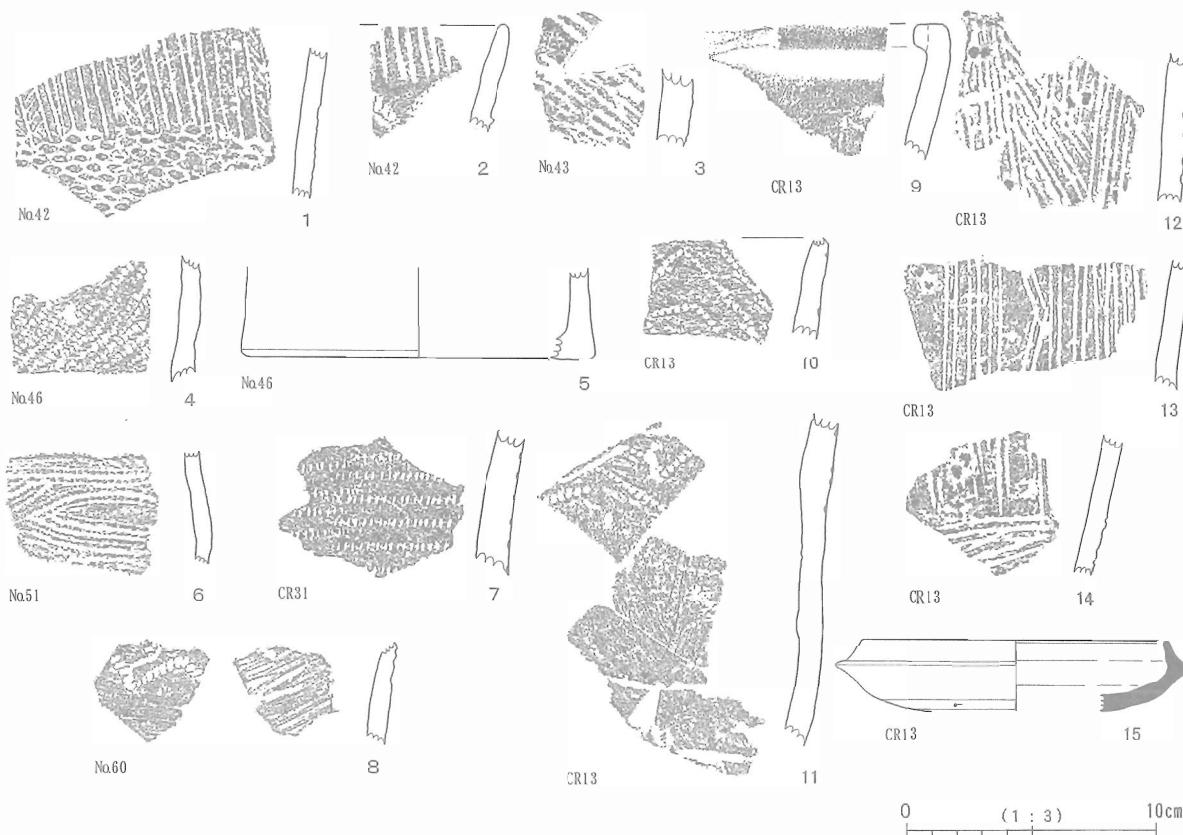
(1) 確認調査出土遺物の掲載について

ここでは、確認調査で出土した遺物について報告するが、確認調査で出土した遺物は小片であり文様がないもの、部位が不明なものが多く、それらについては掲載していない。また、縄文時代の石器の剥片についても掲載していない。したがって、ここで報告するものは、文様がある、部位が特定できる実測可能な土器・陶磁器と石器、金属製品である。

なお、本発掘調査を実施した遺跡の出土品については、本報告に一括して記載する。 (大谷)

(2) No.40地点出土遺物 (第9図、第9表、図版3)

No.40地点では磨製石鏃や黒曜石剥片、須恵器片、陶磁器が出土した。このうち表面採集した磨製石鏃1点 (第9図16) を図示した。なお、小片のため図示していないが、陶磁器は中世か近世か不明確であ



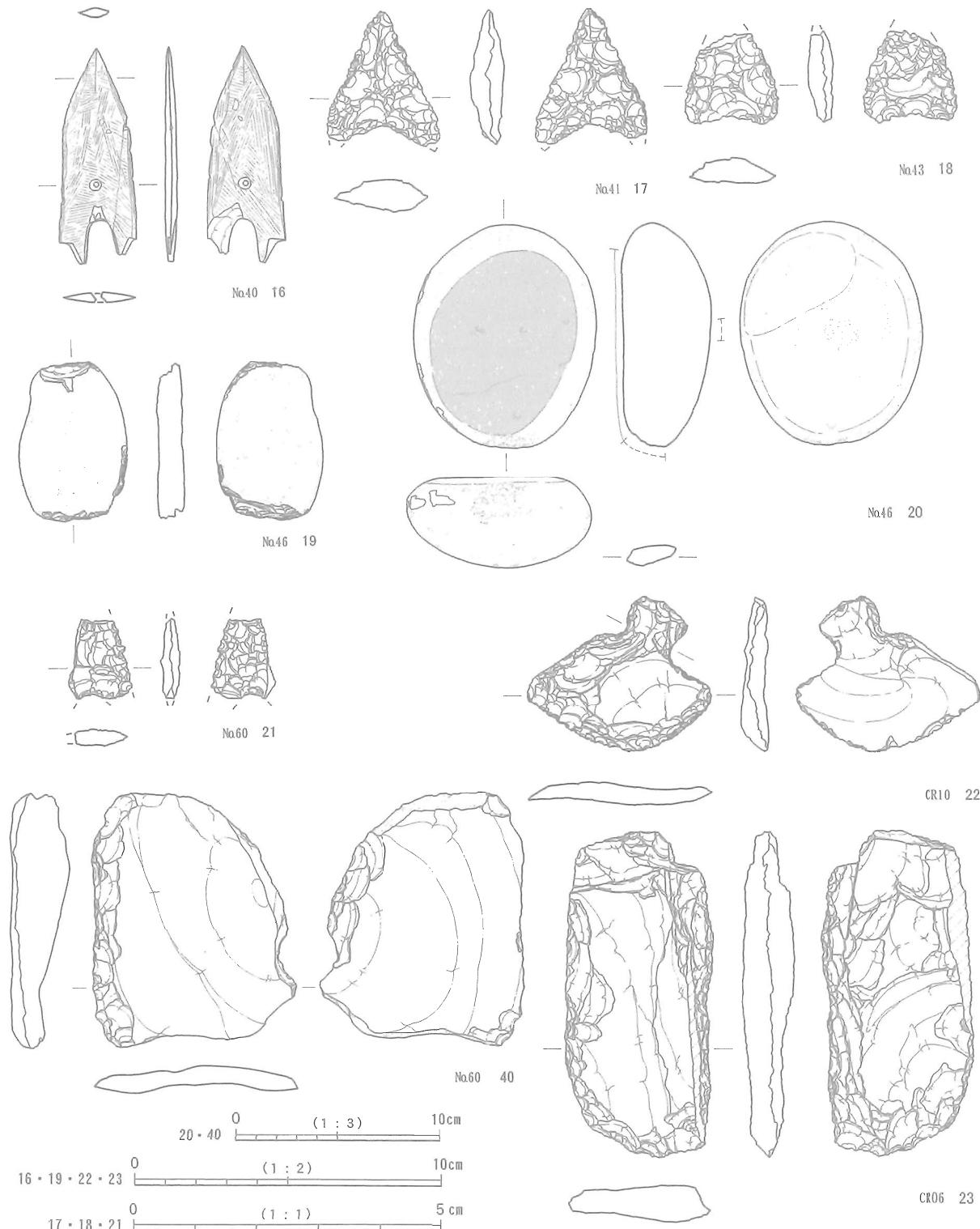
第8図 各地点確認調査の出土土器実測図①

第8表 確認調査出土土器観察表①

(第8図に対応)

番号	攝図 番号	図版 番号	出土位置		種別	器種	部位	残存率 (%)	器高 (cm)	器径 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	色調		備考	
													(外側)	(内側)		
1	8	42地点	Tr北側	縄文土器	深鉢	口縁部	—	—	—	—	—	—	—	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	押型文
2			表採			口縁部	—	—	—	—	—	—	—	にぶい橙 (7.5YR6/4)	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	打越式
3			TP.7			胸部	—	—	—	—	—	—	—	灰黒褐色 (10YR5/2)	黒褐色 (10YR3/1)	擦系文
4			Tr.6			胸部	—	—	—	—	—	—	—	灰黒褐色 (10YR4/2)	明赤褐色 (5YR5/6)	諸職式
5		46地点	—			底部	10	—	—	—	(14.0)	—	—	にぶい褐色 (7.5YR5/4)	黒褐色 (10YR3/1)	
6			—			胸部	—	—	—	—	—	—	—	褐色 (10YR4/6)	褐色 (10YR4/4)	諸職式
7		51地点	—			胸部	—	—	—	—	—	—	—	にぶい褐色 (7.5YR5/4)	暗褐色 (10YR3/3)	清水柳E類
8			CR31			胸部	—	—	—	—	—	—	—	にぶい赤褐色 (5YR4/4)	にぶい赤褐色 (5YR4/4)	打越式
9		60地点	—			口縁部	—	—	—	—	—	—	—	にぶい黄褐色 (10YR6/4)	明褐色 (7.5YR5/6)	勝坂式
10			—			口縁部	—	—	—	—	—	—	—	明褐色 (7.5YR5/6)	明褐色 (7.5YR5/6)	打越式
11		CRI3	—			胸部	—	—	—	—	—	—	—	にぶい褐色 (7.5YR5/4)	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	
12			—			胸部	—	—	—	—	—	—	—	にぶい赤褐色 (5YR4/4)	赤褐色 (5YR4/6)	諸職式
13			—			胸部	—	—	—	—	—	—	—	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	にぶい赤褐色 (5YR4/4)	諸職式
14			—			胸部	—	—	—	—	—	—	—	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	にぶい赤褐色 (5YR4/4)	諸職式
15			須恵器	環身	口縁～体部	15	—	(14.2)	(12.2)	—	—	—	—	灰褐色 (7.5YR5/1)	灰褐色 (N5/)	

() は復原値



第9図 各地点確認調査の出土石器実測図①

るが、瀬戸美濃の擂鉢の破片である。

磨製石鎌 磨製石鎌 (16) は、黒色粘板岩製である。基部は凹基式で、平面形態は縦長の五角形に近い形である。断面は杏仁（凸レンズ）形で、先端部分は菱形であり、両面に鏽が形成されている。鎌身の中央やや下位に矢柄に固定するための円孔が1孔穿孔されている。両面ともに丁寧に磨きが行われている。

（大谷）

第9表 確認調査出土石器観察表①

(第9図に対応)

番号	捕図番号	図版番号	出土位置	種類	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	欠損	備考
16	3	40地点	TP.44表採	有孔磨製石鏸	粘板岩	7.05	2.05	0.35	(5.99)	あり	
17				石鏸	黒曜石	2.15	1.8	0.55	(1.29)	あり	
18			TP3	石鏸	黒曜石	1.4	1.5	0.4	(0.75)	あり	
19		Tr.11-排土		石鏸	頁岩	3.5	5.2	1.0	27.0	なし	
20			Tr.11-栗色土直上	磨敲石	角閃石安山岩	10.8	8.95	4.4	636	なし	
21		-	TP.32-3層	石鏸	黒曜石	1.3	1.1	0.3	(0.34)	あり	
22		3	TP4-表土	石匙	硬質細粒凝灰岩	5.1	5.5	0.9	18.24	なし	
23		-	CR06	TP.1-表土下黄色層	打製石斧	頁岩	11.6	4.9	1.7	100.0	なし
40		2	60地点	TP.26	スクレイバー	ホルンフェルス	10.0	12.3	2.8	310.0	なし

（ ）は残存値

(3) №41地点出土遺物 (第9図, 第9表, 図版3)

№41地点では石鏸、黒曜石片、土師器片、青磁片などが出土し、石鏸1点 (第9図17) を図示した。

石鏸 脚を持った石鏸 (17) である。やや厚みを持っており、平面形状は正三角形に近い。裏面には未加工な面が残っている。脚部の先端が両側とも折損している。石材は黒曜石である。 (柴田)

(4) №42地点出土遺物 (第8図, 第8表, 図版3)

№42地点からは、縄文土器片、弥生土器片、土師器片が出土し、縄文土器片2点を図示した (第8図1・2)。

縄文土器 縄文土器 (1・2) は深鉢の破片で、1は胴部、2は口縁部の破片である。

1は外面上部に沈線と、その一部の間に矢羽文、下部に横位の楕円形の押型文が施される。押型文→沈線→矢羽文の順に施文されている。2は口縁部外面に縦方向の沈線が施され、その下位に貝殻腹縁による山形文が確認できる。1は文様の特徴から縄文時代早期の押型文、2は同じく早期の打越式である。

(大谷)

(5) №43地点出土遺物 (第8・9図, 第8・9表, 図版3)

№43地点では、縄文土器片、石鏸、灰釉陶器、陶磁器片が出土した。このうち縄文土器片1点 (第8図3)、石鏸1点 (第9図18) を図示した。

縄文土器 縄文土器 (3) は深鉢の胴部片で、外面に撲糸文 (「駿豆撲糸文」と想定できる、池谷2003) を施す。縄文時代早期前半に位置づけられる可能性が高い。 (大谷)

石鏸 脚部を持っているが、平基に近い石鏸 (18) である。器体中央は厚みを持っているが、脚部は薄くなっている。裏面には未加工な面が残っている。先端が折損している。石材は黒曜石である。

(柴田)

(6) №46地点出土遺物, CR13出土遺物 (第8・9図, 第8・9表, 図版3)

№46地点では縄文土器、石器、近世以降の陶磁器が出土し、縄文土器 (第8図4・5)、縄文時代の石錘 (第9図19)、磨敲石 (第9図20) を図示した。CR13地点では縄文土器、須恵器、山茶壇、陶磁器が出土し、そのうち縄文土器片 (第8図9~14)、須恵器片 (第8図15) を図示した。山茶壇について産地は不明確であるが鉢である。陶磁器は、時期不明の常滑甌、江戸時代 (17世紀) の瀬戸美濃の志野碗・皿の底部片である。 (大谷)

縄文土器 №46地点出土の縄文土器 (4) は深鉢の胴部片で、外面には撲糸文が残る。縄文時代前期の諸磯式であると想定する。5は深鉢の底部片で、時期を特定することは難しい。

CR13地点の縄文土器 (9~14) は深鉢の破片である。9は口縁部の破片で、内面に突帯が貼り付けられている。土器型式は縄文時代中期の勝坂式の可能性が高い。10は口縁部の破片で、貝殻腹縁文による連続山形文が施される。11は10と同一個体の可能性がある。胴部には10と同じく貝殻腹縁文による連続山形文が施される。10・11は縄文時代早期の打越式である。

12～13は縦方向、斜め方向に集合沈線が施される土器群である。13・14は同一個体の可能性が高い。13には集合沈線の上に円形の浮文が貼り付けられる。後述するNo.54地点出土の土器と同型式で、縄文時代前期の諸磯c式に位置づけられる。
(大谷)

石器 No.46地点出土の石錐（19）は扁平な円礫の両端を打ち欠いた打欠石錐である。打ち欠かれた縁辺には、わずかに漬れが確認できる。石材は頁岩である。20は平坦な円礫を素材とした磨敲石である。正面の広く平坦な面を磨面として用いており、礫の端部には敲打痕が確認できる。また裏面中央には、わずかな凹みが確認できる。石材は角閃石安山岩である。
(柴田)

須恵器 CR13地点出土の須恵器は壊身（15）である。たちあがりは内傾して立ち上がり、口縁端部は丸く仕上げられている。口径は12.2cmであり、鈴木敏則氏による遠江須恵器編年（鈴木敏2001・2004）の遠江Ⅲ期後葉（6世紀末葉～7世紀初頭）に位置づけられる。CR13地点は中里古墳群に該当しているため、古墳の副葬品あるいはそれに伴う祭祀遺物である可能性が高い。
(大谷)

(7) CR10地点出土遺物（第9図、第9表、図版3）

CR10地点では縄文時代の石匙が出土した。

石匙 横長の石匙（22）である。上部につまみ部を作出し、下縁部には厚みを持った加工を施している。裏面はつまみ部以外には、加工がほとんど確認できない。石材は、やや赤みを帯びた硬質細粒凝灰岩である。
(柴田)

(8) No.51地点出土遺物（第8・12図、第8・12表、図版3）

No.51地点からは石鏃1点、黒曜石剥片1点、縄文土器片、灰釉陶器片、煙管1点、鉄製品2点が出土した。このうち縄文土器片（第8図6）、煙管1点（第12図37）、用途不明鉄製品2点（第12図35・36）を図示した。

縄文土器 縄文土器（6）は深鉢の胴部片で、外面上部に半裁竹管の押し引きによる沈線文、その下位に半裁竹管の押し引き沈線による、いわゆる「木の葉文」が施されている。この特徴から縄文時代前期の諸磯c式である可能性が高い。

煙管 煙管（37）は銅あるいは真鍮製で、吸口である。吸口内部には有機質の羅字が残存する。帰属時期については江戸時代の可能性が高い。

鉄製品 鉄製品2点（35・36）は棒状の鉄製品であり、2点ともに形態から「釣針」と考えられたが、逆刺は確認できない。形状からみれば釣針の可能性が高いが断定できない。断面は正方形で、一辺が2mmである。また、用途不明であることから帰属時期も不明である。
(大谷)

(9) CR06・31地点出土遺物（第8・9図、第8・9表、図版3）

CR06地点では、打製石斧（第9図23）が出土している。CR31地点では縄文土器片、石器片が出土した。このうち文様の残る縄文土器片（第8図7）を掲載した。

縄文土器 縄文土器（7）は、深鉢の胴部片である。外面には、絡条帶圧痕文^{らじょうたいあつこんもん}が6段以上施されている。この特徴から縄文時代早期中葉～後葉の清水柳E類である。
(大谷)

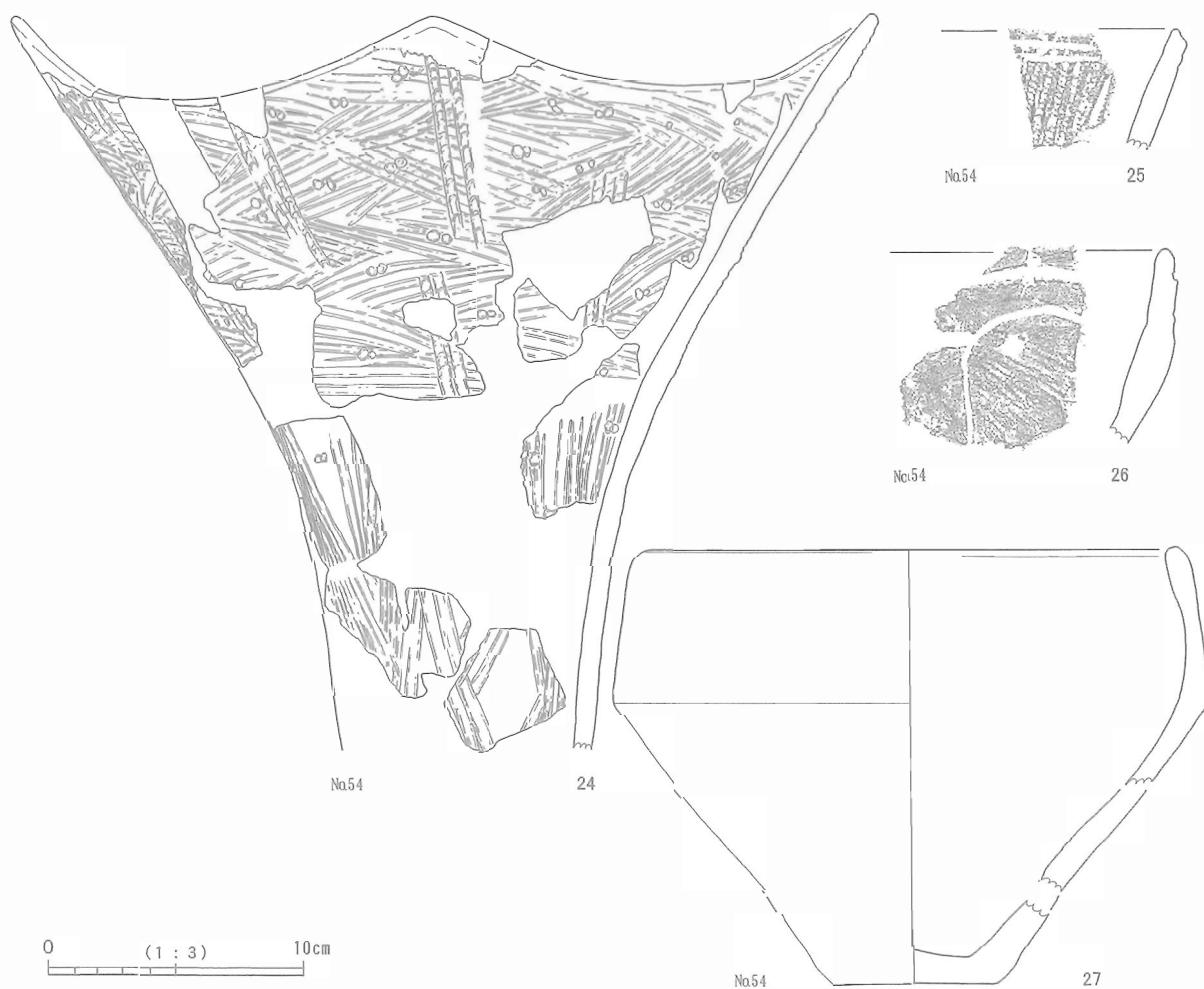
石器 CR06地点で出土した打製石斧（23）は、短冊形の打製石斧である。側縁と下縁辺に加工が施され、整形されている。全体的に粗雑な作りの印象を受ける。右側縁にわずかに摩耗が確認できるが、着柄痕であるかは不明である。石材は頁岩である。
(柴田)

(10) №54地点出土遺物 (第10~12図, 第10・11, 13表, 図版1・2)

№54地点では、縄文土器、石器、銅錢が出土し、縄文土器 (第10図24~27)、石器 (第11図28~34・41)、銅錢1点 (第12図38) を図示した。

縄文土器 24は波状口縁の深鉢である。胴部から口縁部にかけて外反しながら立ち上がるもので、口縁端部は丸く収められている。外面には櫛状工具の集合沈線による文様が描かれている。胴部下半は縦位方向の集合沈線、胴部上半には羽状に集合沈線を刻んだ後、2段の縦区画の押し引きによる沈線を施している。縦区画の押し引き沈線は4条が基本であるが、上段の1区画のみ6条である。胴部上半にはボタン状の貼り付けが行われている。これらの特徴から縄文時代前期の諸磯c式である。

25は口縁端部に外傾する段をもつ。この段は刺突により形成された可能性が高い。口縁部外面は、地文に縄文を施し、口縁部に竹管状工具による横方向の二条の沈線文が刻まれている。前期末～中期初頭の土器であり特定はできないが、五領ヶ台式の可能性が高い。26は口縁端部が丸く仕上げられ、口縁部直下に竹管状工具による沈線 (四線) 文が刻まれる。その下位には沈線による円形の文様を施し、その内部には地文としてRL縄文が充填されている。この特徴から加曾利E4式の範疇に位置づけられる。



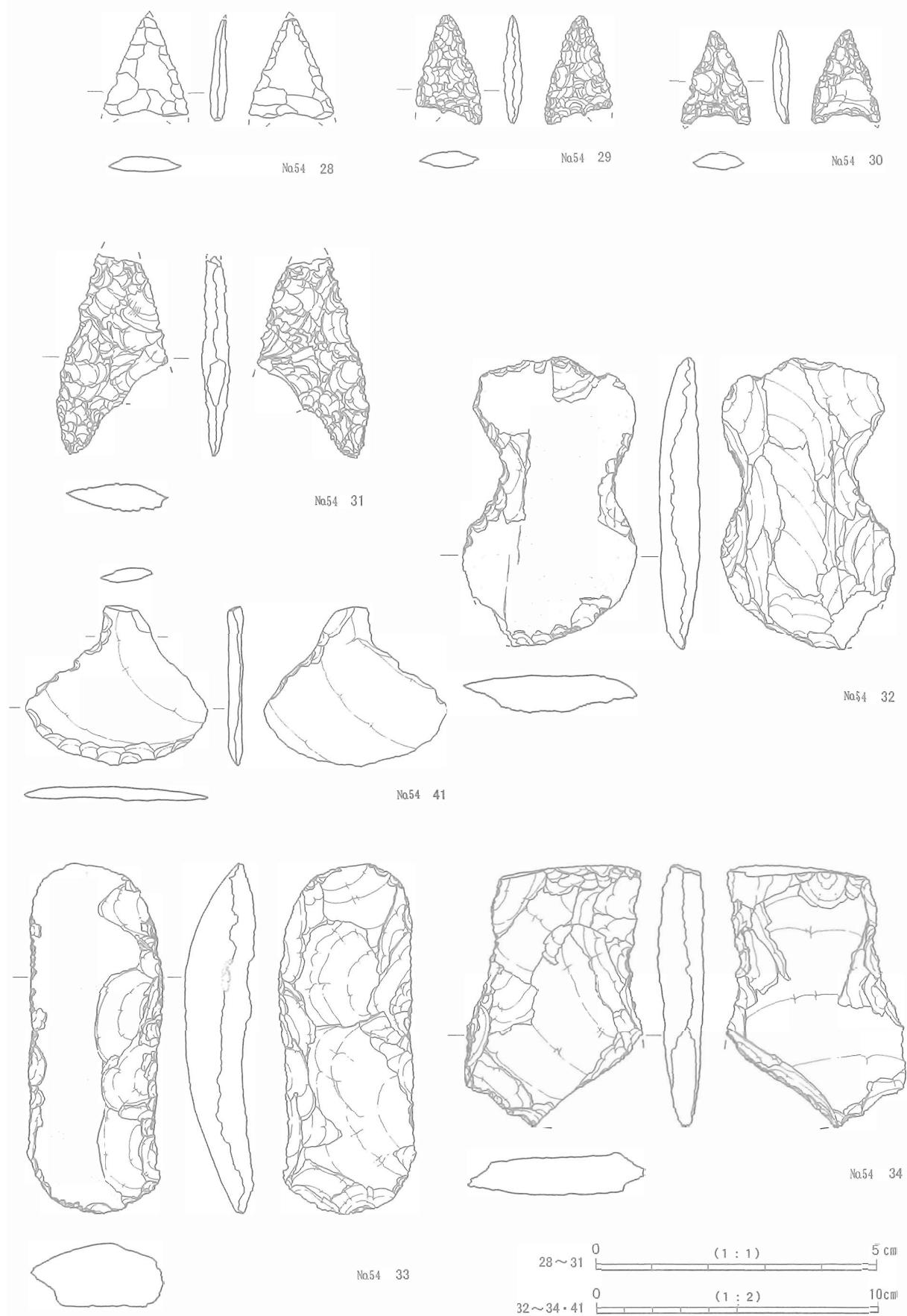
第10図 各地点確認調査の出土土器実測図②

第10表 確認調査出土土器観察表②

(第10図対応)

番号	鉢図 番号	図版 番号	出土位置	種別	器種	部位	残存率 (%)	器高 (cm)	器径 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	色調 (外面)	色調 (内面)	備考
24			54地点	縄文土器	深鉢	口縁～胴部	70	—	—	(34.2)	—	明褐色 (7.5YR5/6)	明褐色 (10YR7/6)	諸磯式
25	10	1・2				口縁部	—	—	—	—	—	橙 (5YR6/6)	橙 (7.5YR6/6)	五領ヶ台式
26						口縁部	—	—	—	—	—	灰 (5Y4/1)	にぶい黄橙 (10YR6/3)	加曾利E式
27						鉢	全体	11	(17.8)	(23.5)	(21.3)	(6.6)	橙 (7.5YR6/6)	明褐色 (10YR7/6)

() は復原値



第11図 各地点確認調査の出土石器実測図②

第11表 確認調査出土石器観察表②

(第11図対応)

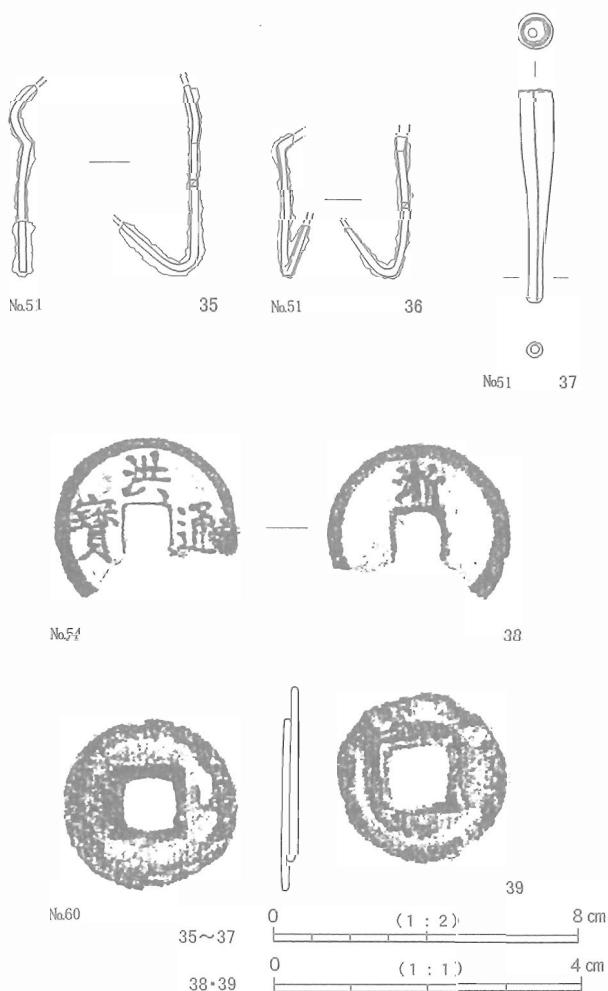
番号	押印番号	図版番号	出土位置	種類	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	欠損	備考
28				TP. I	石鏃	ホルンフェルス	1.75	1.5	0.27 (0.58)	あり	風化が著しい
29					石鏃	黒曜石	1.9	1.2	0.35 (0.41)	あり	
30				7層	石鏃	黒曜石	1.65	1.4	0.3 (0.37)	あり	
31	II	1・2	54地点	TP2底張-6層	石鏃	黒曜石	3.5	1.9	0.5 (2.04)	あり	
32				TP.4-6層	打製石斧	粗粒砂岩	10.2	6.2	1.9 (10.9, 10)	あり	
33				6層	打製石斧	細粒砂岩	12.3	4.8	2.5 (16.9, 39)	なし	
34				表採	打製石斧	細粒砂岩	9.2	6.4	1.5 (11.5, 10)	あり	
41				Tr. 4-5層	石匙	ホルンフェルス	5.5	6.5	0.5 (14.86)	なし	

() は残存値

27は鉢である。平底で、底から外上方に直線的に立ち上がった後、く字形に屈曲し、やや内湾しながら立ち上がり、口縁端部は丸く認められる。外面は無文であり、丁寧に撫でられている。時期は中期前半の可能性が高い。型式は不明である。
(大谷)

石器 石鏃は4点図示した(28~31)。全て脚を持った石鏃である。28~30は全体的に薄い資料である。28は風化が激しく、加工の様相を知ることは出来ない。平面形状は正三角形に近い。29~31は、平面形状は二等辺三角形に近い。30は裏面に未加工な面が残っている。31は脚部が長く大型である。片側の脚部と先端部を折損している。石材は、28はホルンフェルス、他3点は黒曜石である。

打製石斧は3点(32~34)図示した。32は分銅形の打製石斧である。礫面を持った剥片を素材として、両側縁の中央部に抉りの入った加工を施している。抉り部分には着柄痕と考えられる潰れが確認できる。石材は粗粒砂岩である。



第12図 各地点確認調査の出土金属製品・銅銭実測図

33は短冊形の打製石斧である。礫面を持つ剥片を素材として、加工を行っている。正面は右側縁に入念な加工を行っている。全体的に精緻に作られており、下部だけでなく、上部にも刃部が確認される。両側縁には着柄痕と考えられる潰れが確認できる。石材は細粒砂岩である。

34は下半部を折損した打製石斧である。そのため、全体の形状は不明である。側縁に未加工部分を残しており、側縁に着柄痕も確認できないことから、未製品である可能性も考えられる。石材は細粒砂岩である。

石匙は1点(41)図示した。横型の石匙である。上部につまみ部を作出しようとしているが、加工は顕著には確認できない。下縁部にはやや厚みを持った加工が施されている。全体的に加工は少なく、素材剥片をそのまま活かしている。石材はホルンフェルスである。

(柴田)

銅銭 「洪武通寶」(38)は「武」部分が欠損している。表に「洪武通寶」、裏側に「浙」が確認できる。「洪武通寶」は明錢で1368年鑄造開始であり、本錢(輸入錢)である可能性が高い。
(大谷)

第12表 確認調査出土金属製品観察表

(第12図対応)

番号	捕図番号	図版番号	出土位置	種別	部位・状態	保存処理後重量(g)	全長(cm)	直径(mm)	厚さ(mm)	備考
35	-			釣針?	-	2.72	(5.1)	-	2.0	鉄製
36	12		51地点	釣針?	-	1.61	(3.8)	-	2.0	鉄製
37	-			煙管	吸口	2.55	5.7	8.5	9.0	真鍮あるいは銅製 ()は残存値

第13表 確認調査出土銅錢観察表

(第12図対応)

番号	捕図番号	図版番号	出土位置	種別	銭名	国名	初鑄年	錢径(mm)	内径(mm)	孔径(mm)	重量(g)	備考
38	-		54地点	銅錢	洪武通寶	明	1368	24	20.0	6.5	1.55	背文字あり「漸」
39	12		60地点	銅錢	寛永通寶	江戸	1697	23.5	18.0	7.5	3.95	2枚重ね

(11) №60地点出土遺物 (第8・9・12図, 第8・9・13表, 図版2・3)

№60地点では、縄文土器、石鎌、陶磁器、銅錢が出土した。このうち、縄文土器(第8図8)、スクレイパー(第9図40)、石鎌(第9図21)、銅錢(第12図39)を図示した。なお、陶磁器は時期不明の常滑の甕片である。

(大谷)

縄文土器 縄文土器は胴部片(8)である。外面に貝殻腹縁文による連続山形文が施され、内面には条痕調整が行われている。この特徴から縄文時代早期の打越式である。

(大谷)

石器 板状の横長剥片を素材としたサイド・スクレイパー(40)である。素材剥片の末端部に、背面側から連続した加工を施している。また、上下端部付近は腹面側からも加工を施している。非常に大型の資料であり、長さ、幅共に10cmを超えており。石材はホルンフェルスである。

銅錢 銅錢(39)は2枚が重なった状態で出土しており、X線写真撮影によって「寛永通寶」であることが判明した。裏面には「文」が鋳出されていないことから、古寛永の可能性が高い。

(大谷)

参考文献（第1章）

- 池谷信之 2003 「縦位密接施文から異方向帶状施文へ -駿河地方押型文土器の変遷と立野式-」『利根川』24・25 合併号
- 井鍋誉之 2003 「東駿河の横穴式石室」『静岡県の横穴式石室』静岡県考古学会
- 大谷宏治 2010 「副葬遺物からみた無袖石室の位相」『東日本の無袖石室』 雄山閣
- 岡安光彦 1986 「馬具副葬古墳と東国舍人騎兵」『考古学雑誌』71巻4号 日本考古学会
- 木ノ内義昭 1998 「前壁状の封鎖施設を有する横穴式石室の意義」『静岡の考古学』 植松章八先生還暦記念論集刊行会
- 静岡県教育委員会 2001 『静岡県の前方後円墳』
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2009 『矢川上C遺跡』
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2010a 『秋葉林遺跡II』
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2010b 『天ヶ沢東遺跡・古木戸A遺跡・古木戸B遺跡』
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2010c 『富士山・愛鷹山麓の古墳群』
- 静岡大学人文学部考古学研究室 1998 「国指定史跡・浅間古墳測量調査の成果」『静岡県の重要遺跡』 静岡県教育委員会
- 志村 博 1981 「終末期の堅穴状石室について」『東富士臨港線埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 志村 博 1987 「後期古墳に於ける特異な石室構造について－富士市域を中心として」『静岡県博物館協会研究紀要』11 静岡県博物館協会
- 鈴木一有 2001 「東海地方における後期古墳の特質」『東海の後期古墳を考える』 三河古墳研究会
- 鈴木一有 2003 「東海東部の横穴式石室にみる地域圏の形成」『静岡県の横穴式石室』 静岡県考古学会
- 鈴木一有 2010 「駿河東部における無袖石室の史的意義」『東日本の無袖石室』 雄山閣
- 鈴木敏則 2001 「湖西窯古墳時代須恵器編年の再構築」『須恵器生産の出現から消滅 補遺・論考編』 東海土器研究会
- 鈴木敏則 2004 「静岡県下の須恵器編年」『有玉古窯』 浜松市教育委員会
- 沼津市教育委員会 2005 『神明塚古墳（第2次）発掘調査報告書』
- 藤澤良祐 2005 「瀬戸美濃と志戸呂・初山」『陶磁器から見る静岡県の中世社会』 2005菊川シンポジウム実行委員会
- 富士市教育委員会 1983 『三新田遺跡』
- 富士市教育委員会 1986 『富士市の埋蔵文化財（遺跡編）』
- 富士市教育委員会 1987a 『船津寺ノ上古墳』
- 富士市教育委員会 1987b 『富士市指定史跡実円寺西古墳保存修理工事報告書』
- 富士市教育委員会 1988 『富士市の埋蔵文化財（古墳編）』
- 富士市教育委員会 1991 『船津L-第62号墳発掘調査概要』
- 富士市教育委員会 1995 『沢東A遺跡』
- 富士市教育委員会 1991a 『宇東川遺跡A B C地区発掘調査概報』
- 富士市教育委員会 1991b 『舟久保遺跡高山地区－高山1号墳発掘調査報告書』
- 富士市教育委員会 1998a 『沢東B遺跡』
- 富士市教育委員会 1998b 『下前原遺跡・富士岡F-第22号墳』
- 富士市教育委員会 1999 『船津古墳群』
- 富士市教育委員会 2001a 『宇東川遺跡L地区』
- 富士市教育委員会 2001b 『東平遺跡』
- 富士市教育委員会 2002 『中吉原宿遺跡』
- 富士市教育委員会 2005 『上ノ山第1号墳』
- 富士市教育委員会 2008 『祢宜ノ前遺跡』
- 富士市教育委員会 2009 『宮添遺跡II』
- 富士市教育委員会 2010a 『宮添遺跡III』
- 富士市教育委員会 2010b 『東平遺跡 第15地区』
- 吉原市教育委員会 1958 『吉原市の古墳』

第2章

富士岡中尾遺跡

第1節 富士岡中尾遺跡の概要

1. 富士岡中尾遺跡の位置

富士岡中尾遺跡は、富士市富士岡字中尾に位置し、愛鷹山南麓の扇状地の緩斜面に立地する（第13図）。当地点は東側には沢が、西側は尾根に向かう急斜面であり、東西は周辺と隔てられているが、南北は緩やかな斜面であり、尾根を南下すれば、向山遺跡や中尾沢遺跡が所在する。遺跡は現代の海岸線からは5km以上の内陸部で、平野部からは2km程度扇状地（尾根）を上った位置にあり、かなり奥まった位置に所在する。

このNo.48地点では踏査時に土器片や黒曜石片が採集されており、遺跡の可能性が想定されたため、確認調査の対象とした（第14図）。調査地点は果樹園、畑地として利用されていた。

2. 富士岡中尾遺跡周辺の遺跡

富士岡中尾遺跡の周辺の縄文時代の遺跡（第13図）には、富士岡中尾遺跡と同一の丘陵の中腹に中尾沢遺跡（縄文時代、古墳時代）、西側の扇状地に向山遺跡（縄文時代早期～前期、弥生～古墳時代）や前の原遺跡（縄文時代中期）、花川戸遺跡（縄文時代早期～中期）、東側の尾根には椎木平遺跡（縄文時代中期）などがある。

このうち向山遺跡では竪穴建物状の落ち込みや炉跡とともに早期後半の条痕文土器や前期の諸磯C式土器などが出土している。花川戸遺跡では遺構は確認されていないが、早期後半の、いわゆる「子母口式」、木島式から中期後半の曾利式土器まで採集されている。さらに打製石斧、石鎌、石匙（スクリーパー）などが採集されており、早期～中期に亘る集落遺跡である可能性が極めて高い。椎木平遺跡では遺構は確認されていないが、早期末の茅山式、中期初頭の五領ヶ台式、中期後半の曾利式土器や石斧、石鎌などが採集されている（富士市教委1986・1998など）。

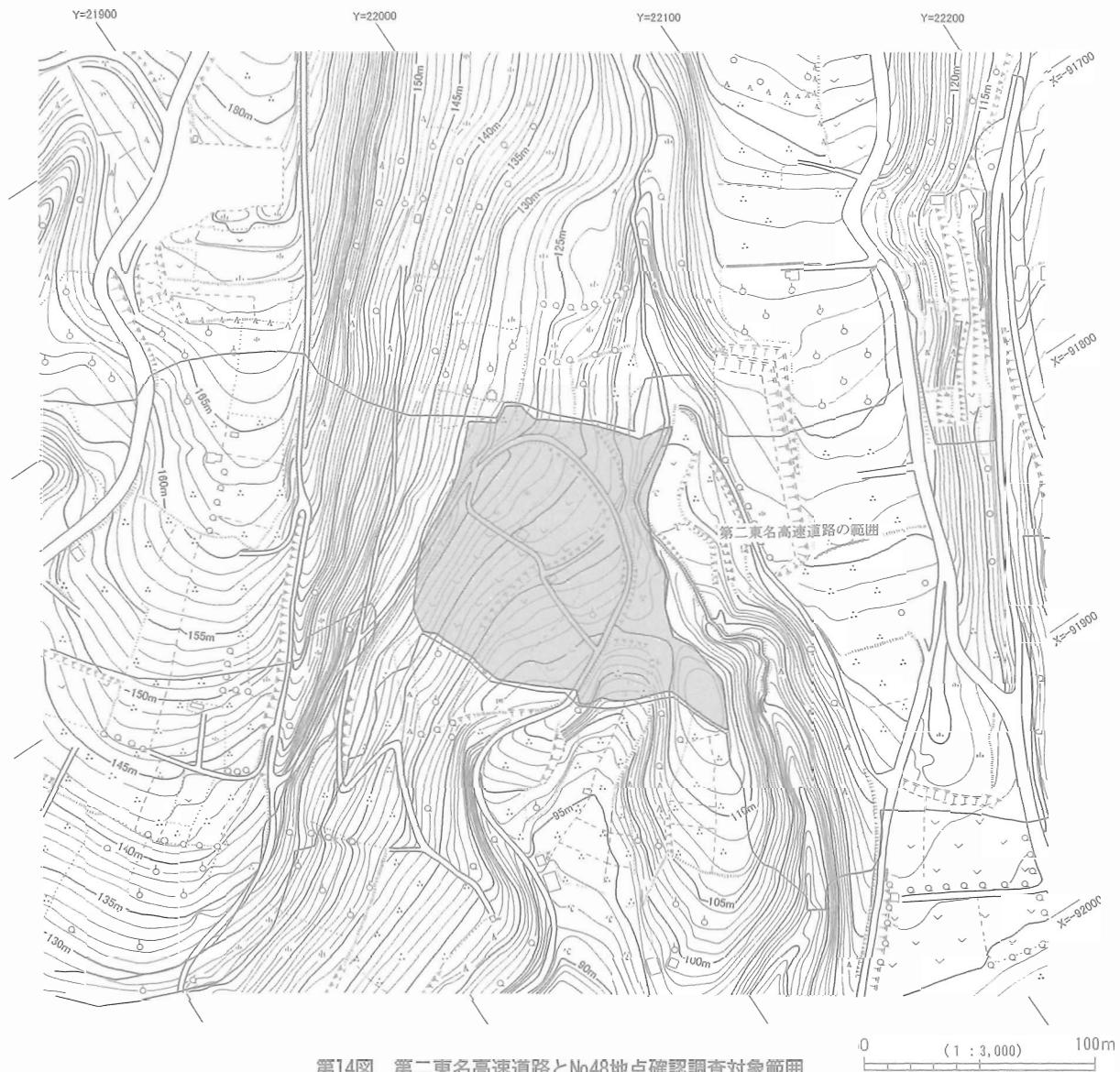
また、続く弥生時代の遺跡としては、向山遺跡が挙げられ、農道工事中に弥生土器や土師器が出土し、弥生時代後期～古墳時代初頭の遺跡である可能性が高い。

当遺跡周辺には古墳が多く、東側には中里古墳群、須津古墳群、西側には富士岡古墳群・花川戸古墳群など大規模古墳群（群集墳）が所在している。富士岡中尾遺跡と同一の丘陵の先端近くには（富士岡）丸山遺跡（散布地）が所在する（富士市教委1986・1988など）。

なお、富士岡中尾遺跡周辺では奈良時代以降近世までの周知された遺跡は希薄であり、様相が不明であるが、扇状地の先端にある下前原遺跡では、平安時代の竪穴建物が確認され、この近くの医王寺では平安時代末の製作とされる木造薬師如来坐像



第13図 富士岡中尾遺跡の位置と周辺の遺跡



が安置されており、当寺裏山からは承安4（1174）年銘のある経塚が発見されている。したがって、今後、奈良時代から近世に帰属する遺跡が確認される可能性が高い。

3. 富士岡中尾遺跡の調査歴

上述したとおり、No.48地点では踏査時に土器片や黒曜石片が採集されており、この場所に遺跡が所在する可能性が高いことが想定された。このため確認調査を実施し、縄文時代の遺物が多量に出土したことから遺跡であることが確認された。その後、静岡県教育委員会文化課（当時）と富士市教育委員会の協議により、「富士岡中尾遺跡」と命名された。

したがって、富士岡中尾遺跡は、第二東名建設工事に先立つ確認調査（No.48地点）で新たに確認された遺跡であり、今回が第一次調査となる。

第15図 豊土町中尾遺跡の調査区の位置



第2節 調査の体制・経過

1. 確認調査および本発掘調査の体制

富士岡中尾遺跡の発掘調査は、確認調査に継続して実施した。当研究所では、第二東名富士工区として調査体制を組み実施したが、実際に現地を担当したのは下記のとおりである。

主任調査研究員 鈴木良孝　　調査研究員 石田勉・中川律子・濱田由美子・田村隆太郎・武田寛生

2. 確認調査および本発掘調査の経過

確認調査は、平成10年9月11日から現地での発掘作業用のテントを設営し、14日から試掘坑の設定を行い、順次確認調査に入った。まず、重機により表土を除去し、遺構の存在が想定される深度から人力による掘削を行い、遺構や遺物の有無の精査を行った。調査が進むにつれて、調査対象範囲の北部から縄文土器や石器が出土することが判明し、遺構の存在が想定できた。一方で、南部について遺物は出土するものの、大きく旧地形が改変されており、遺構の存在は確認できず、遺物は丘陵斜面上の北部からの流れ込みと判断した。このため、遺物が密に出土し、遺構の存在が想定される箇所を今回の本発掘調査の対象としたが、本発掘調査対象面積が狭小であるため、確認調査に継続して平成11年1月12日から本発掘調査を実施した。まず、重機で調査区の表土除去を行い、縄文時代の層位まで掘り下げ、人力にて遺構の精査を行った。検出した遺構は順次掘削を行い、実測図の作成、写真撮影を行った。遺物の多くは遺構に伴わずに出土したため、トータルステーションにて出土位置、標高を記録しながら取り上げた。調査区全体の調査が終了した1月29日に調査区の写真撮影を行い、現地の調査を終了した。



写真31 確認調査 堀削作業



写真32 本発掘調査 表土除去作業



写真33 本発掘調査 遺構精査作業



写真34 本発掘調査 遺構堀削作業

第3節 調査の成果

1. 調査区の概要

位置 本発掘調査対象箇所は、No.48地点の確認調査対象範囲のうち、試掘坑（TP）18・19・21・22・25の範囲であり（第15・17図）、面積は約470m²である。

調査区のおおよその緯度・経度は北緯35° 00' 35"、東経138° 44' 16"である（世界測地系）。

調査対象範囲は、標高約119～125mの南に向かって傾斜する緩い斜面に位置しており、この範囲は東西の斜面より緩やかで、尾根から張り出した小尾根上に立地する。

基本土層 調査区の基本土層は第16図のとおりであり、現地表面下0.9～1.3mの5層とその下位の6層が休場ローム（YL）層に相当する層位である。2～4層で遺物が出土するが、3層に集中しており、4層上面が遺構面であると考えられる。遺構面上の堆積土は斜面上位が厚く、斜面下位に向かうにしたがい、薄くなる傾向にある。

2. 遺構

（1）遺構（第18図）

遺構は調査区北西端で確認した、自然流路と思われる溝1条（SD01）のみである。

SD01 SD01は調査区北西端で確認した溝で、自然流路の可能性が高い。検出長約5.0m、最大幅0.9m、である。

上層から打製石斧（第26図26）が出土した。

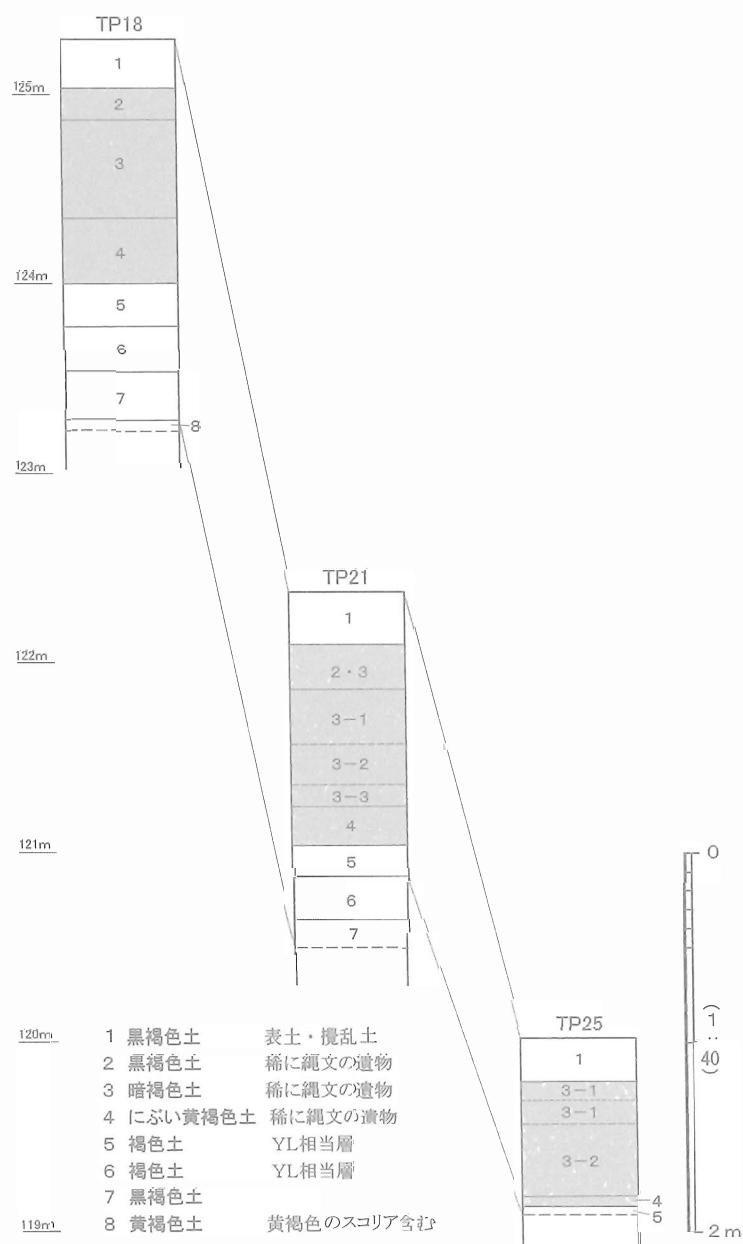
（2）遺物の出土状況

（第19～22図、図版4）

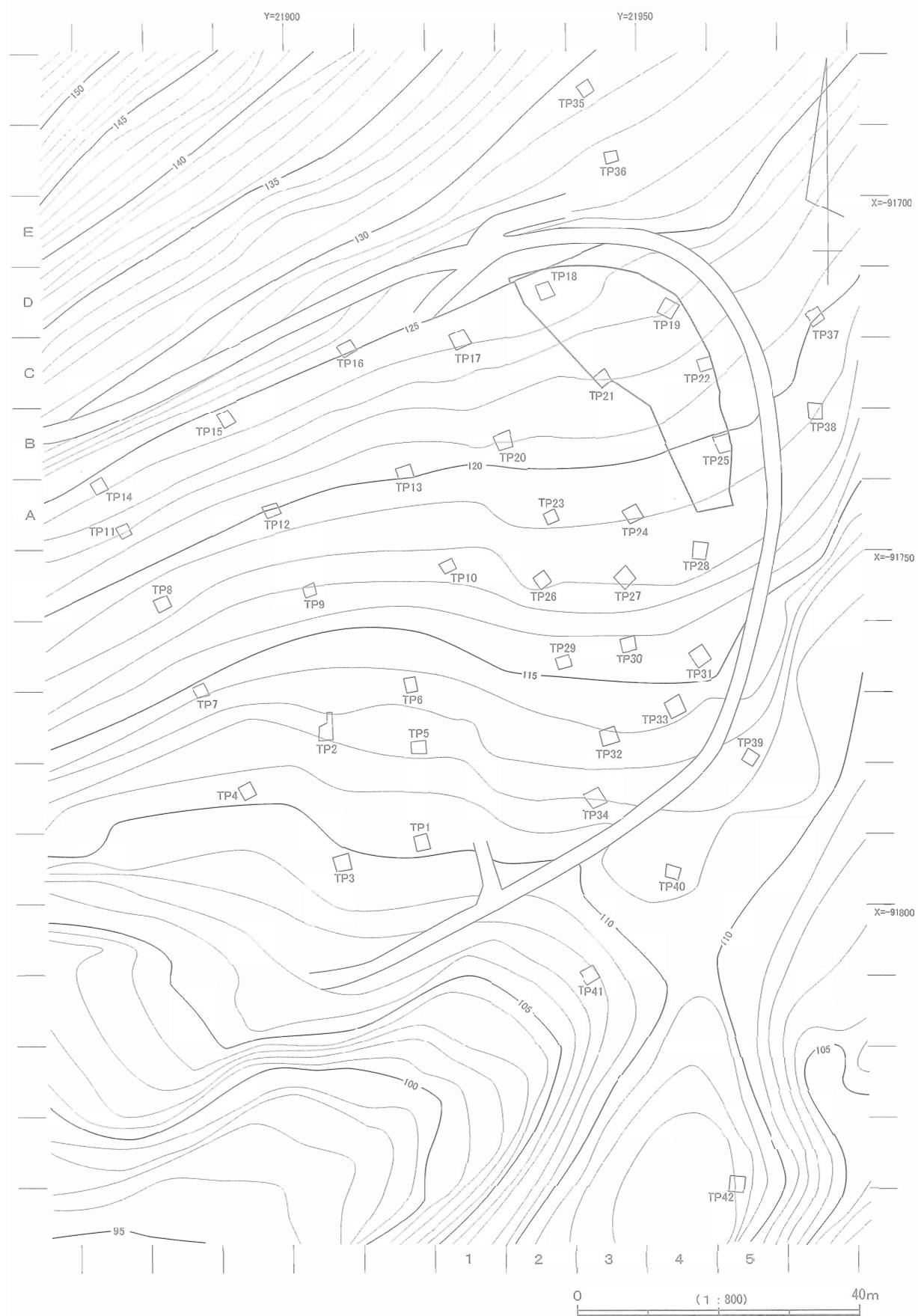
当遺跡からは後述するように多数の遺物が出土しているが、遺構に伴って出土した遺物が少ないとから、ここではその出土状況について報告する。

縄文土器 第19図に縄文土器片の調査区全体の出土位置、第20図に土器の型式別の出土位置を示した。

第20図左上に示した縄文時代後期

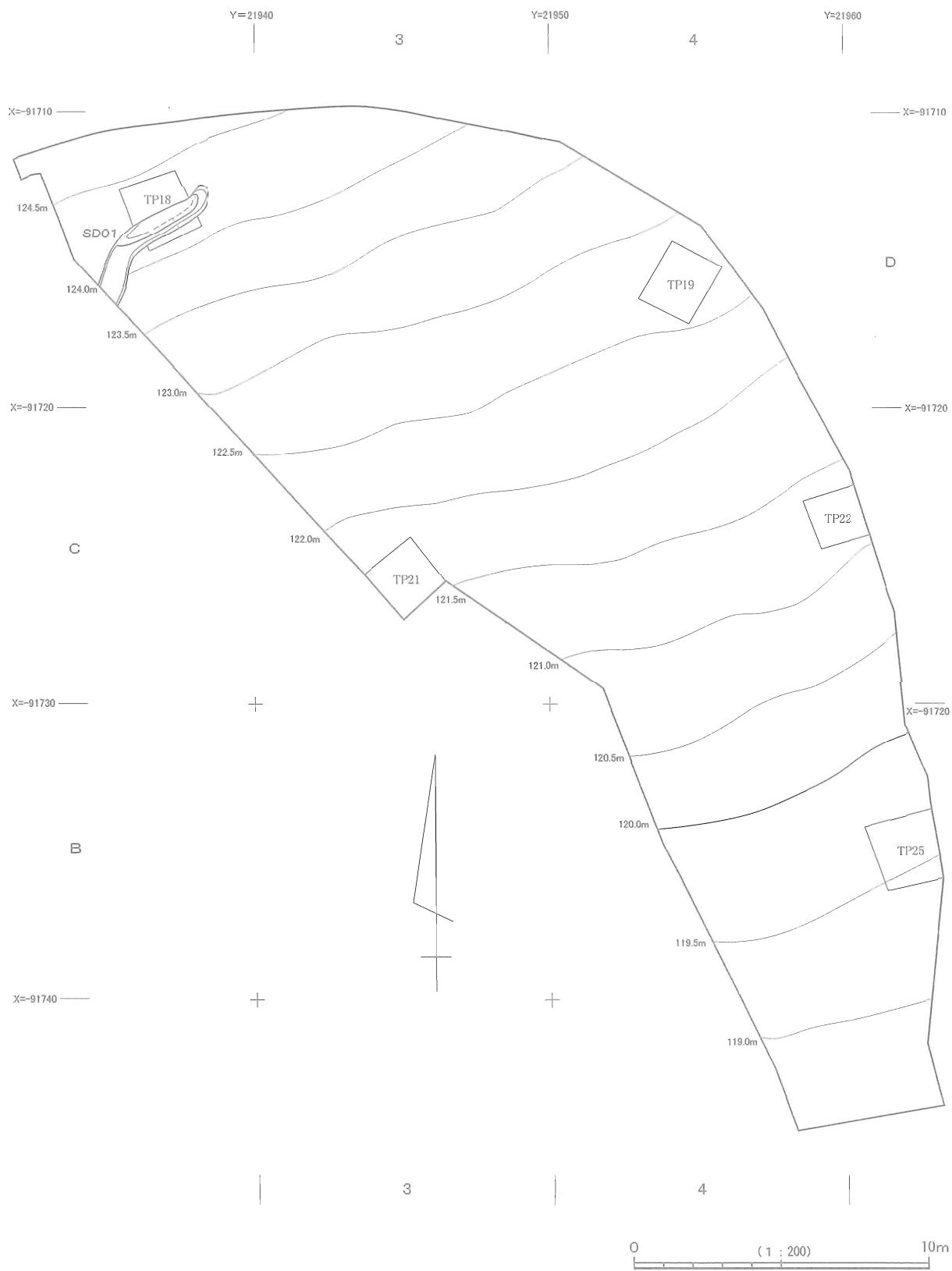


第16図 富士岡中尾遺跡基本土層図

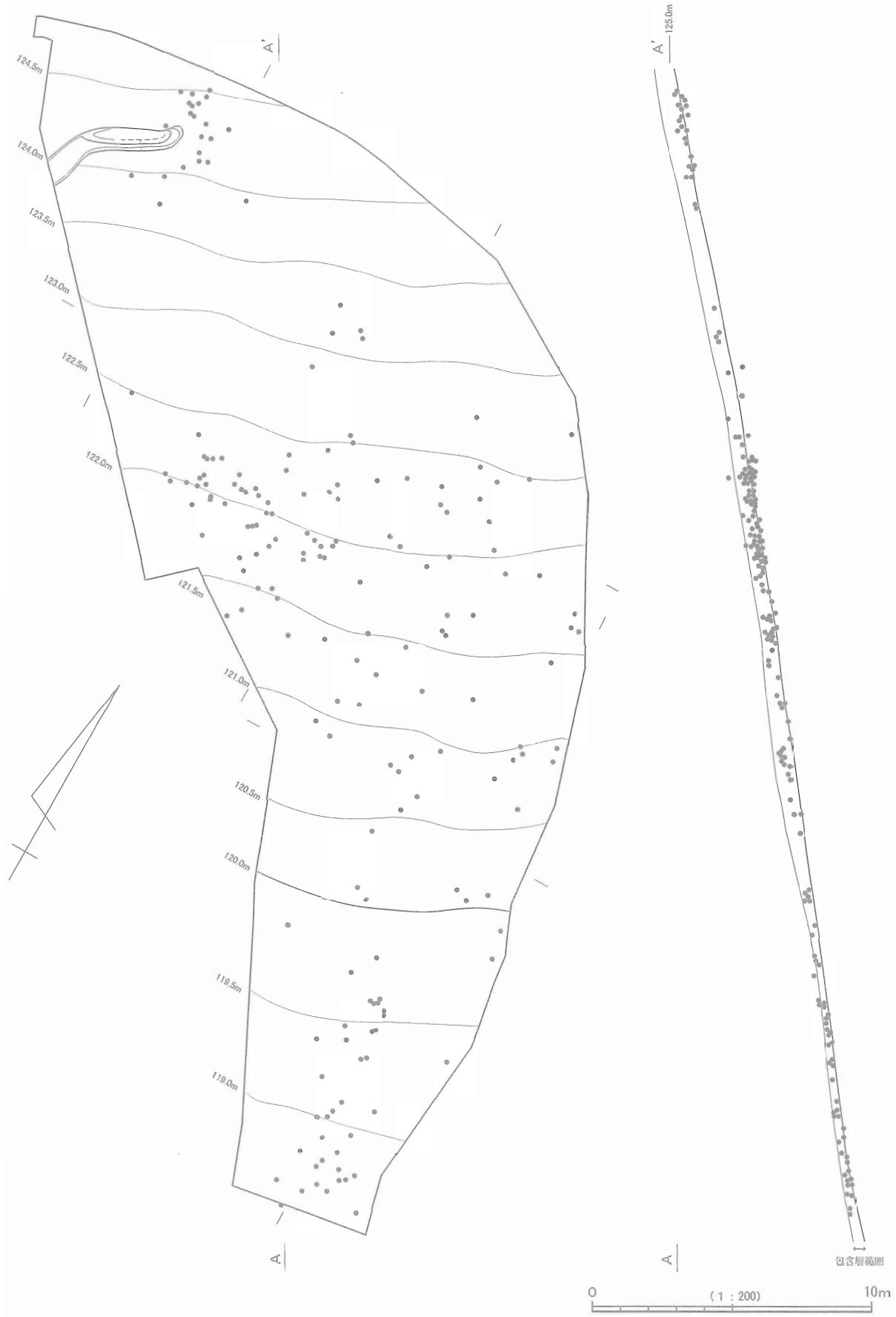


第17図 富士岡中尾遺跡調査区の配置図

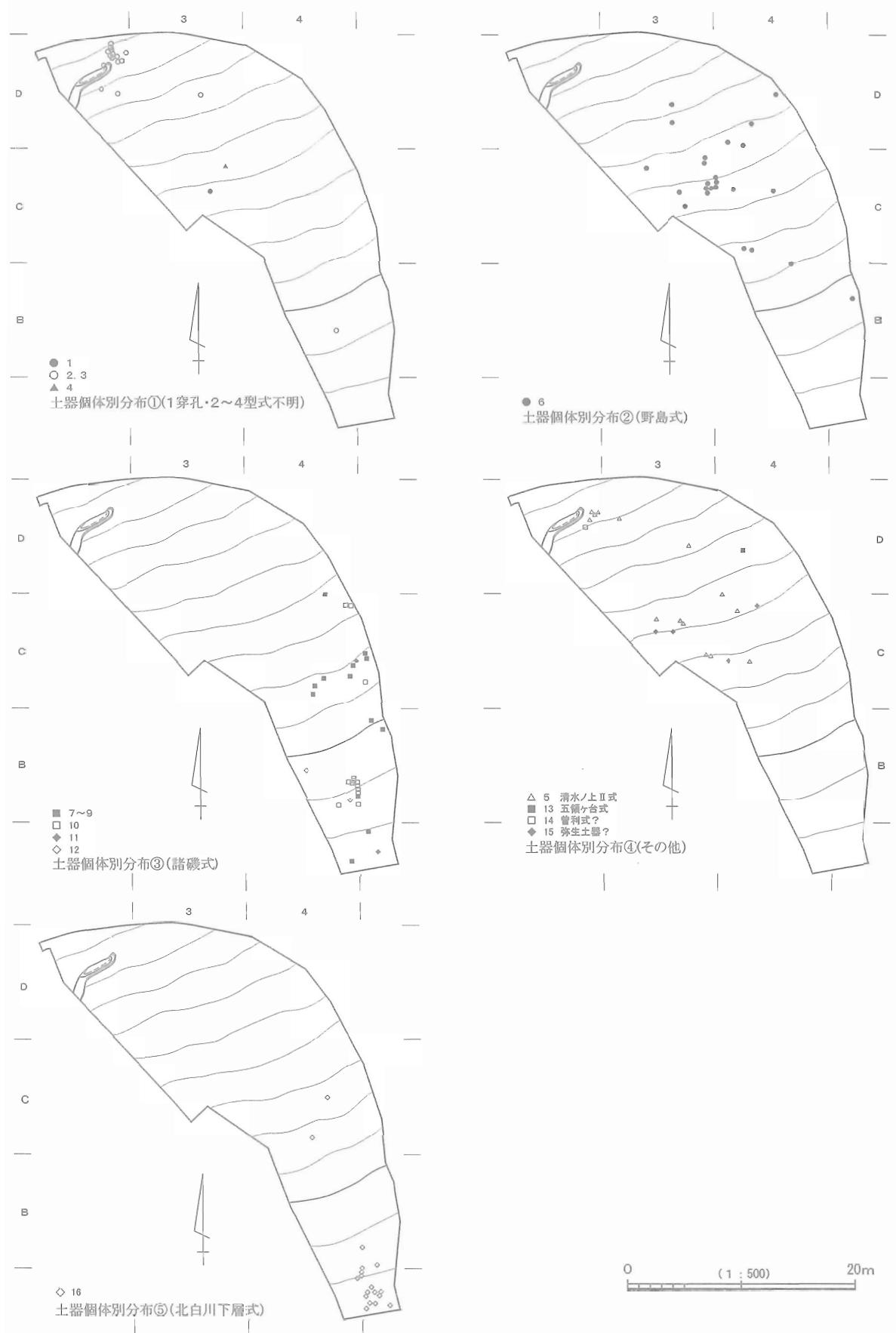
第3節 調査の成果



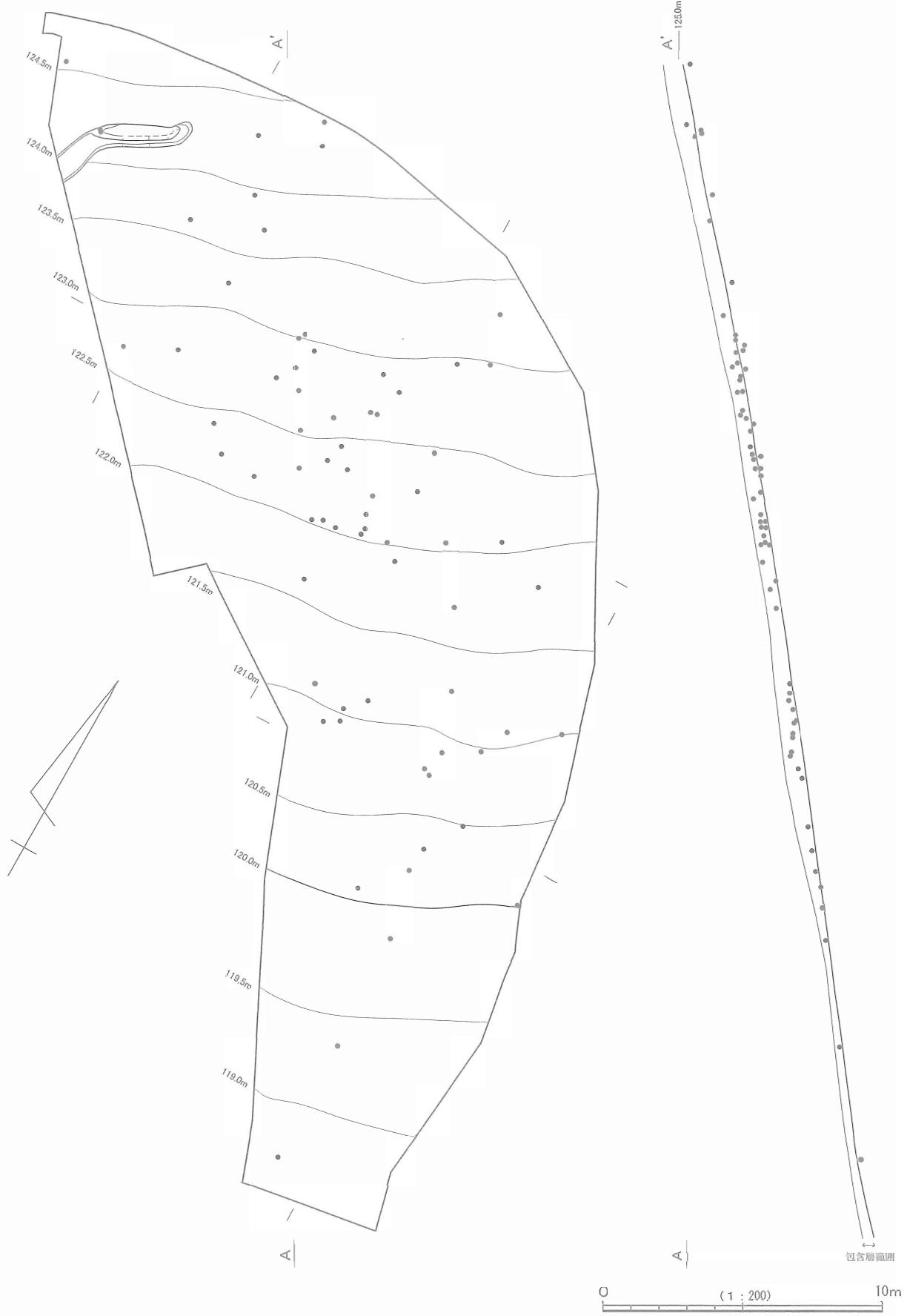
第18図 富士岡中尾遺跡調査区全体図



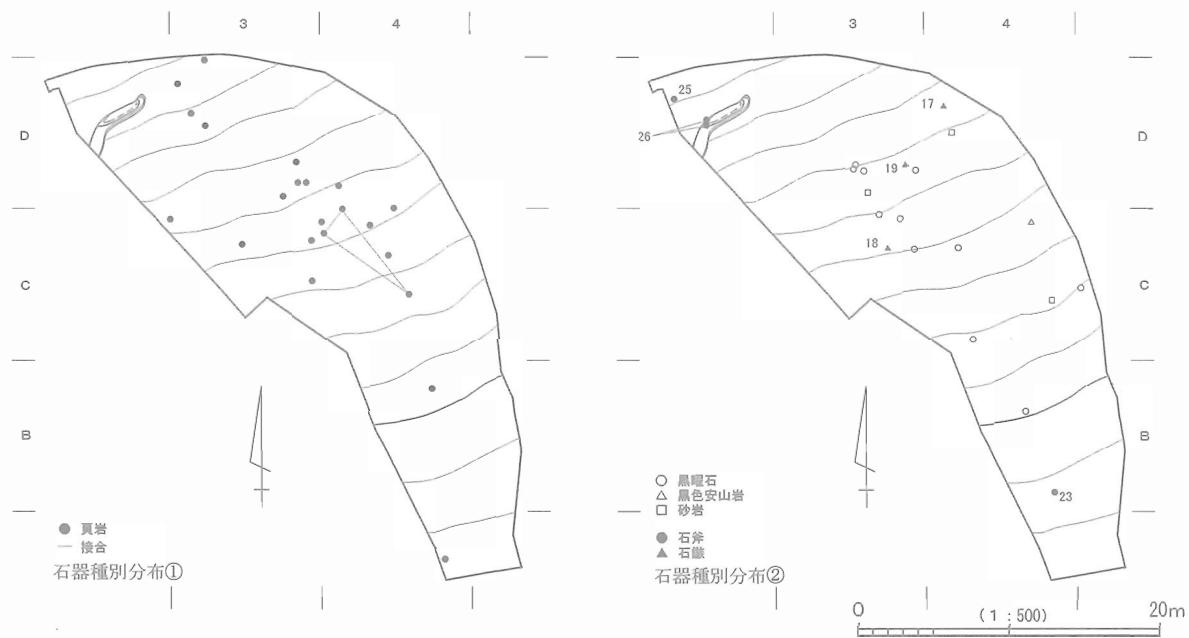
第19図 富士岡中尾遺跡土器の出土位置



第20図 富士岡中尾遺跡土器の型式別出土位置



第21図 富士岡中尾遺跡石器および石材の出土位置



第22図 富士岡中尾遺跡石器の種別出土位置

の可能性のある土器群（2・3）の出土位置をみると、同一個体の可能性のある2・3は調査区北西端部で集中している。

前期前半の5は北西端から中央にかけて散在して出土している。1・4は中央で出土しているが、5と同様斜面上位からの流れ込みであろうか。

野島式土器（6）は調査区中央部に散在するような状態で出土しており、これも斜面上位から落ち込んだ可能性が高い。

一方、縄文時代前期の諸磯式（7～12）は調査区中央から斜面下位、同じく北白川下層式（16）も調査区中央から斜面下位で出土しており、上述した1～6とは出土位置が異なっている。

この1～6と諸磯式・北白川下層式土器の出土位置の相違については遺構に伴うものではなく、また斜面であることからその意味するものについて断定は難しい。

弥生土器 縄文土器の可能性は排除できないが、弥生土器と想定する土器片（15）が調査区中央で出土している。

石器 第21図に石器および剥片・石材の出土位置を、第22図に石器および剥片・石材の種別ごとの出土位置を示した。

打製石斧25・26は調査区北西端で出土し、縄文土器2・3・5の出土位置と重複しており、その関係性が窺える。石鎌17～19および頁岩は調査区の北側～中央で出土しており野島式土器や1・4・5などと同様の位置から出土している。

一方で、諸磯式、北白川下層式土器が出土した調査区中央から南部にかけては散在する程度である。

石器・石材の出土状況からみると、ある程度縄文土器の分布との関係性があると推測する。

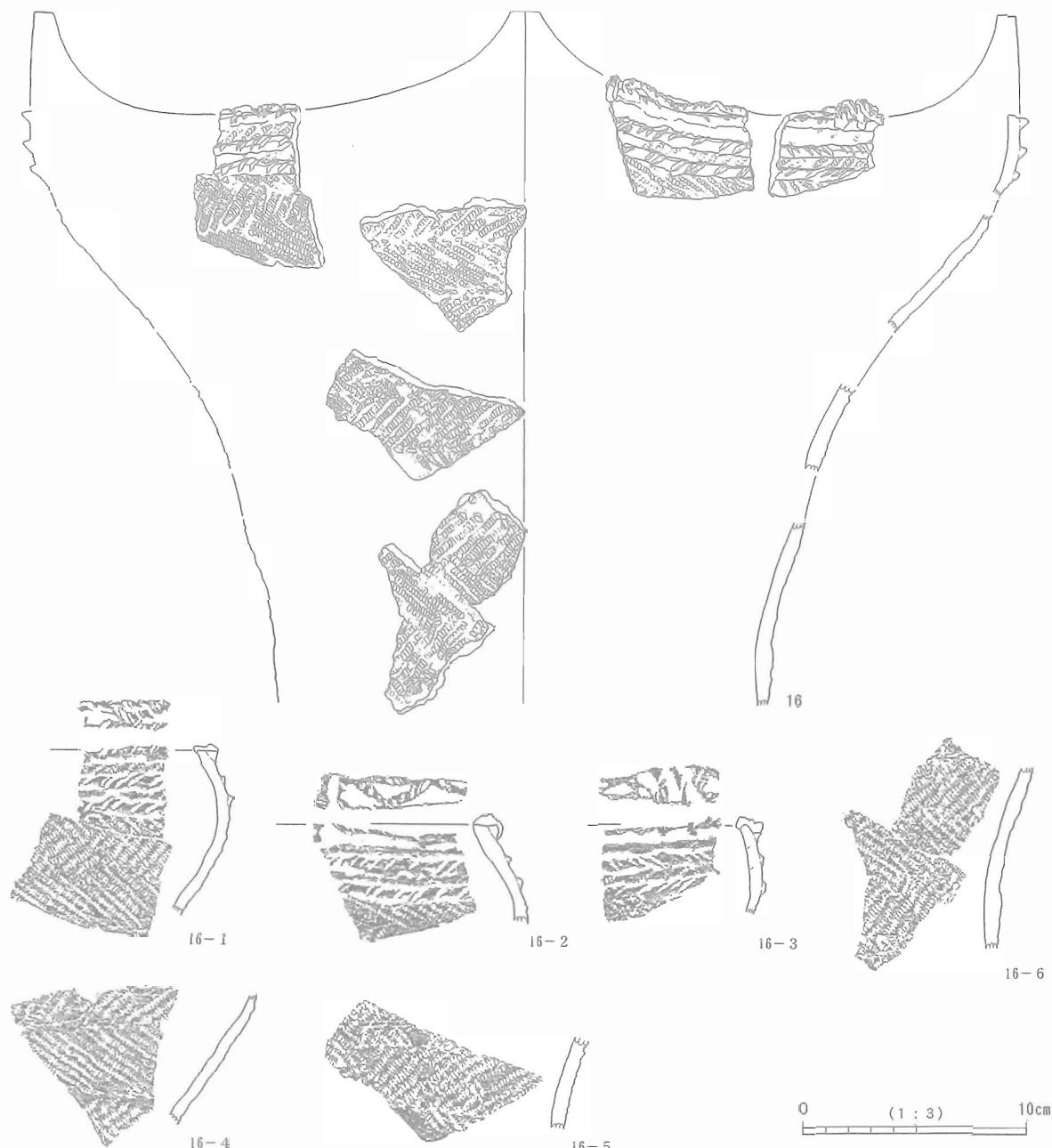
3. 出土遺物

(1) 縄文土器（第23・24図、第14表、図版5・6）

I群 縄文時代早期の野島式土器（6）

6は底部から逆ハ字形に開きながら立ち上がる深鉢であり、胴部中位に野島式に特徴的な屈曲が確認できる。文様は胴上部のみ確認できる。口唇部上面および外面に工具による刻み、外面は刻みの下位に





第24図 富士岡中尾遺跡出土土器実測図②

半截竹管状工具の腹を用いた沈線（凹線）文で、その下位には縦位、斜位置の半截竹管状工具の腹を用いた沈線文を施す。この沈線文は、矢羽文を意識した文様構成である。

II群 繩文時代前期の土器

II a 繩文時代前期前半の清水ノ上II式土器（5）

口縁部はやや外傾気味に立ち上がり、口唇部には刻みが行われている。口縁部外面には矢羽状の沈線文が二段施される。

II b 繩文時代前期の諸磯式土器（7～12）

10は底部からほぼ垂直にたちあがった後、逆ハ字形に開き、口縁部は内湾する波状口縁である。胴部は地文にR L縄文を施した後、胴部下半は半截竹管状工具による横位の沈線文、上位には半截竹管状工具による渦巻文とその間に斜位の集合沈線文を施す。12は10の下半の文様に類似する。11は地文に縄文

が施され、破片の中ほどに二条の押し引きによる沈線が確認できる。

9は地文に縄文が確認できないもので、縦位の集合沈線文を施している。9～12は諸磯b式の可能性が高い。

7・8はNo.54地点出土の深鉢（第10図24）と同様の文様構成をもつ。7は胴部中央から下部の破片で、縦位の集合沈線文を施した後、円形浮文を貼り付ける。8は矢羽状に集合沈線を施した後、円形浮文を貼り付ける。これらの特徴から諸磯c式である。

II c 縄文時代前期の北白川下層式土器（16）

16は、胴下部が底部から直立して立ち上がり、胴上部が急激に逆ハ字形に開く形状、口縁部はほぼ直立する。口縁部は波状口縁で、口唇部に半截竹管状工具を用いて爪形文を施す。口縁部外面には横位の突帯を波状口縁に並行させて3条貼り付け、それに口唇部と同様の爪形文を施し、その下位には、羽状の縄文を4段以上施している。

III群 縄文時代前期末～中期初頭の五領ヶ台式土器（13）

13は深鉢の胴部片で、半截竹管状工具による平行沈線文を施し、その下位には縄文が残る。

IV群 縄文時代中期後半の曾利式土器の可能性が高い土器（14）

14は深鉢の胴部破片で、粘土紐貼り付けにより唐草文を表現したものと想定する。貼り付け文の上下には集合沈線文が施されている。

V群 縄文時代後期の可能性のある土器（2・3）

2・3の縄文の特徴から縄文時代後期の可能性を想定した。2は口縁部片で、ほぼ直立し、口唇部は平坦面をもつ。3は2の胴部片と想定する。外面には縄文が施される。

VI群 型式不明の土器

VIa 穿孔された土器（1）

1は縄文土器の胴部片であるが、破片のほぼ中央に穿孔が行われている。補修痕の可能性が高い。

VIb 外面に刺突文を巡らせる土器（4）

4は、やや外傾して立ち上がる口縁部で、外面に刺突文を施す。縄文時代前期であろうか。（大谷）

（2）石器（第25～27図、第15表、図版6）

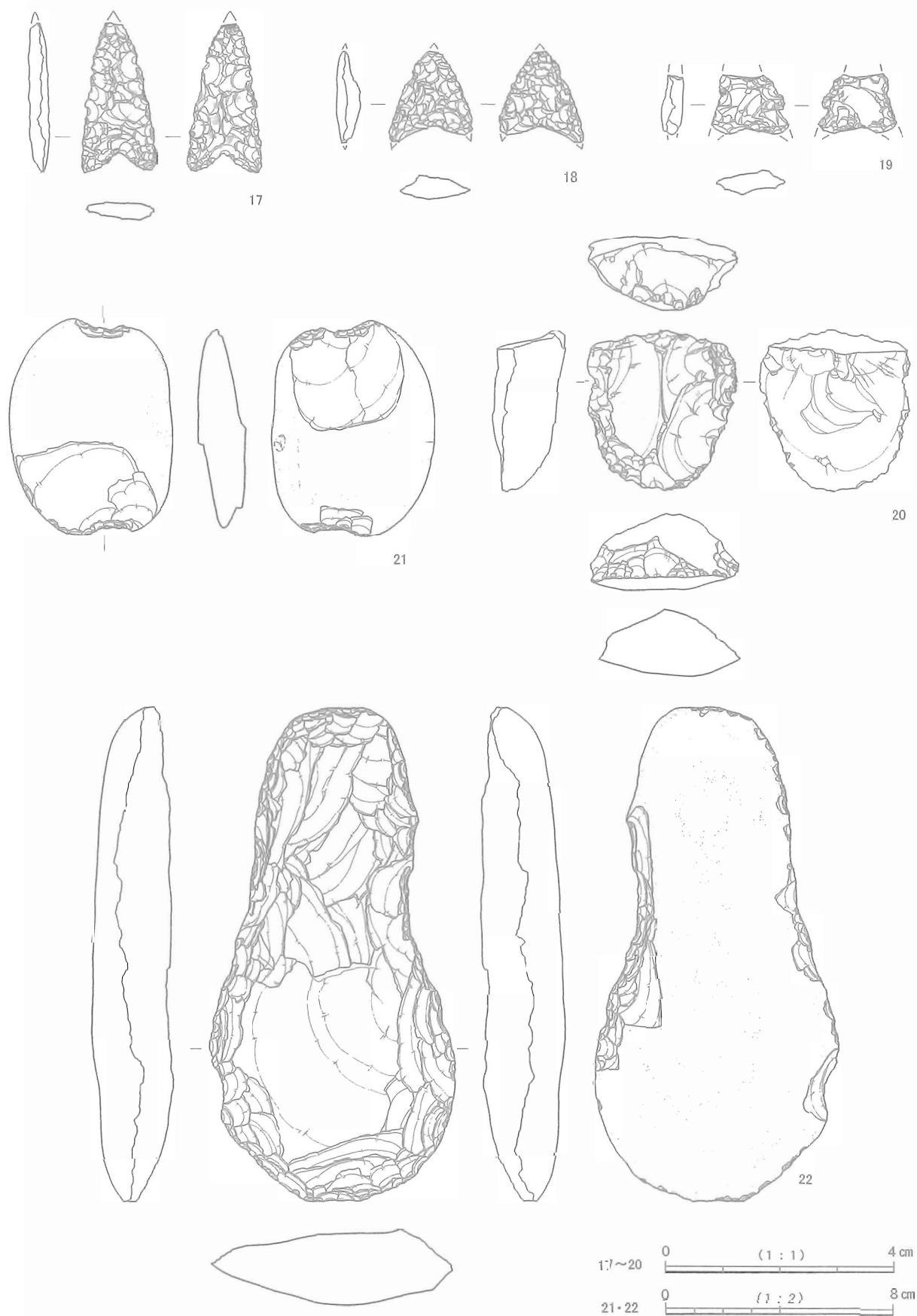
石鎌 3点（17～19）図示した。全て脚部を有している。17は長さ2.5cmを超えており、形状は長細い二等辺三角形をしている。縁辺がやや鋸歯状を呈しており、精緻な印象を受ける。先端部を折損している。18は正三角形に近い形状をしている。19は縁辺のみにしか加工が施されず、表裏両面とも素材剥片の元の面が残存している。そのため、未製品の可能性も考えられるが、脚部を明確に加工していることから完成品と判断した。脚部と先端部を折損している。石材は全て黒曜石である。

スクレイパー 縦長剥片を素材とした拇指状のエンド・スクレイパーである（20）。左側縁から右側縁にかけて途切れずに加工を施し、そこを刃部としている。石材は黒曜石である。

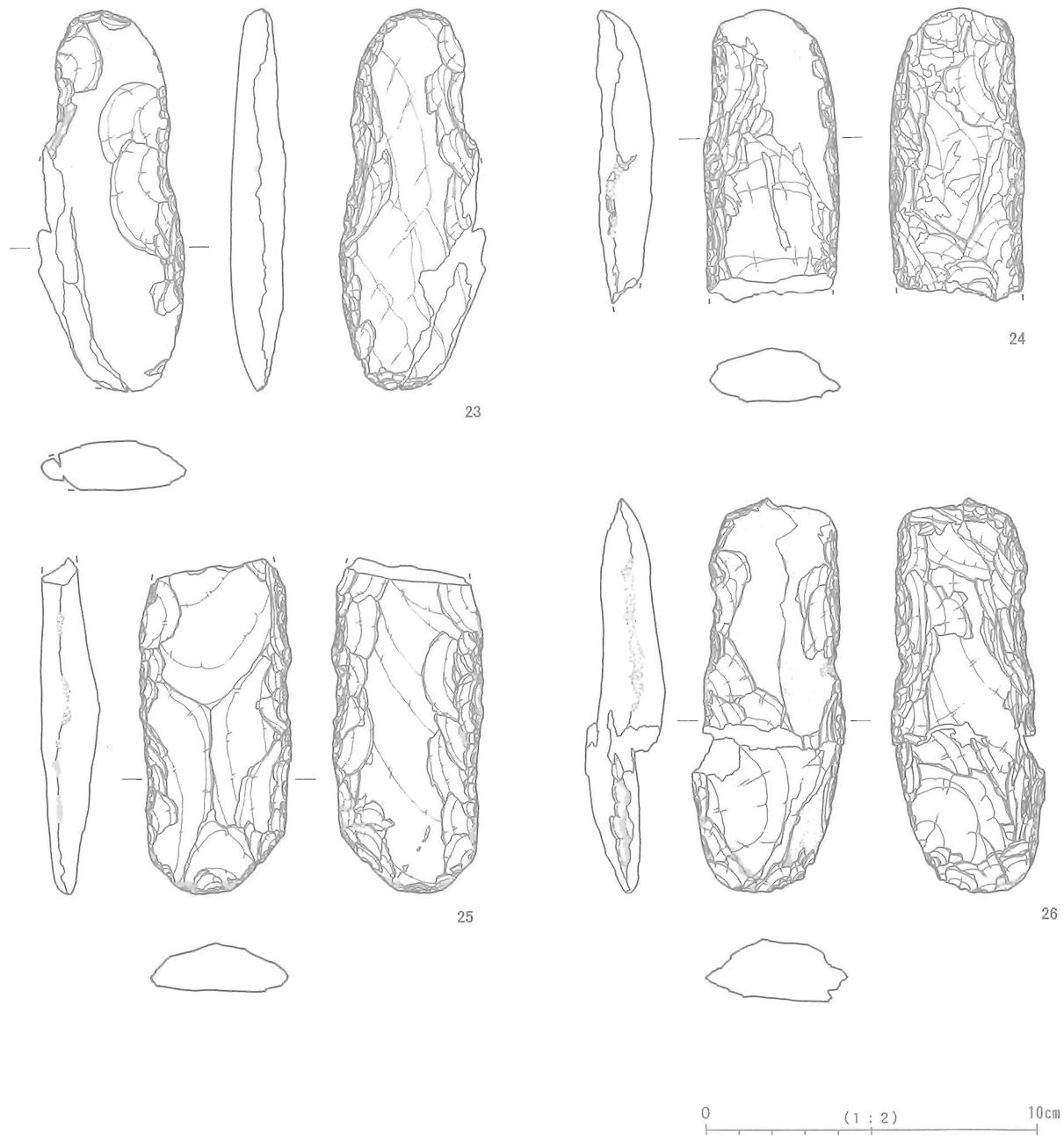
石錘 平坦な円礫の両端を打ち欠いた打欠石錘（21）である。打ち欠かれた縁辺には潰れが確認できる。石材は中粒砂岩である。

打製石斧 5点（22～26）図示した。22は分銅形の打製石斧である。大型で、長さは15cmを超える。礫面を有した剥片を素材としており、礫面には中央の抉れ部分を除いて加工がほとんど施されていない。表面には加工が全周に施され、中央部は念入りに整形されている。両側縁には中央部を中心として、着柄痕と考えられる潰れが確認出来る。石材は細粒砂岩である。

23～26は短冊形の打製石斧である。加工は縁辺のみであり、器体の内側までは及んでいない。4点とも側縁部に着柄痕と考えられる潰れが確認できる。長さは全て12cm程度と推定され、齊一性が認められ



第25図 富士岡中尾遺跡出土石器実測図①



第26図 富士岡中尾遺跡出土石器実測図②

る。24、26は刃部が、25は基部が、それぞれ折損している。石材は26のみが頁岩であり、その他は細粒砂岩である。

敲石 棒状の円礫を素材とした敲石（27）である。礫の両端に敲打痕が確認できる。風化が激しく、礫の一部が剥落して失われている。石材は多孔質玄武岩である。

磨敲石 棒状の亜角礫を素材とした磨敲石（28）である。正面と左面に平坦な磨り面を、上端部に敲打痕を持っている。礫の下半部は折損している。石材は輝石安山岩である。

磨石 2点（29・30）図示した。29は棒状の円礫を素材としている。正面に平坦な磨り面をもつていて。礫の下半部は折損している。石材は玄武岩である。

30はやや平坦な卵状の円礫を素材としている。礫の表と裏に平坦な磨り面が確認される。表面はその中央に凹みが確認される。また、側縁にも磨り面が確認される。石材は輝石安山岩である。



第27図 富士岡中尾遺跡出土石器実測図③

台石 1点図示した(31)。亜角礫を素材とした台石である。礫の一面に広く平坦な面を有している。石材は輝石安山岩である。(柴田)

(3) 弥生土器 (第23図、第14表)

弥生土器の可能性が高い土器片が1点(15)出土している。沈線で波状に文様、その上位に横位の沈線文を施すものである。縄文土器にはみられない特徴をもつこと、沈線文を有する個体であることから弥生時代中期の土器片の可能性がある。

なお、15は縄文土器の可能性を排除できない。(大谷)

(4) 出土遺物観察表

①富士岡中尾遺跡出土土器観察表

第14表 富士岡中尾遺跡出土土器観察表

No	挿図番号	図版番号	出土層位	種別	器種	部位	残存 (%)	器高 (cm)	器径 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	色調		備考
												(外面)	(内面)	
1	23	5	3層	鉢類	胴部	-	-	-	-	-	-	にぶい黄褐 (10YR5/3)	橙 (7.5YR6/6)	穿孔あり。 型式不明 (前期?)
2					口縁部	-	-	-	-	-	-	灰褐 (7.5YR4/2)	にぶい褐 (7.5YR5/4)	型式不明 (後期?)
3					胴部	-	-	-	-	-	-	にぶい橙 (7.5YR6/4)	灰黄褐 (10YR4/2)	型式不明 (後期?)
4					口縁部	-	-	-	-	-	-	にぶい褐 (7.5YR5/4)	にぶい黄褐 (10YR5/4)	型式不明 (前期?)
5					口縁部	-	-	-	-	-	-	暗褐 (10YR3/3)	明褐 (7.5YR5/6)	清水ノ上式
6			3層・耕土中	縄文土器	深鉢	口縁～胴部	15	-	(26.0)	(26.0)	-	褐 (7.5YR4/6)	褐 (7.5YR4/6)	野鳥式
7					鉢類	胴部	-	-	-	-	-	明褐 (7.5YR5/6)	にぶい赤褐 (5YR5/4)	諸磯式
8					鉢類	胴部	-	-	-	-	-	にぶい赤褐 (5YR4/3)	にぶい赤褐 (5YR5/4)	諸磯式
9					鉢類	胴部	-	-	-	-	-	灰褐 (5YR4/2)	赤褐 (5YR4/6)	諸磯式
10			3層 (TP. 25他)	縄文土器	深鉢	口縁～胴部	15	-	(36.0)	(30.0)	-	黒褐 (7.5YR3/1)	にぶい赤褐 (5YR4/4)	諸磯式
11					鉢類	胴部	-	-	-	-	-	褐 (7.5YR4/3)	黒褐 (10YR3/2)	諸磯式
12					鉢類	胴部	-	-	-	-	-	褐 (7.5YR4/3)	黒褐 (10YR3/1)	諸磯式
13					鉢類	胴部	-	-	-	-	-	にぶい赤褐 (5YR5/4)	にぶい黄褐 (10YR5/4)	五領ヶ台式
14					鉢類	胴部	-	-	-	-	-	褐灰 (10YR4/1)	灰黄褐 (10YR4/2)	曾利式?
15			3層	弥生土器	鉢類	口縁～胴部	-	-	-	-	-	にぶい橙 (7.5YR6/4)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	弥生中期?
16	24	6			縄文土器	深鉢	口縁～胴部	10	-	(44.0)	(42.6)	-	にぶい黄褐 (10YR7/2)	浅黄橙 (10YR8/4)

() は復原値

②富士岡中尾遺跡出土石器観察表

第15表 富士岡中尾遺跡出土石器観察表

番号	挿図番号	図版番号	出土位置		種類	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	欠損	備考
17	25	3層	拡張区	3層	石鎚	黒曜石	(2.6)	1.3	0.3	(0.9)	あり	
18			拡張区	3層	石鎚	黒曜石	(1.6)	1.5	0.4	(0.6)	あり	
19			拡張区	3層	石鎚	黒曜石	(1.0)	(1.4)	0.3	(0.5)	あり	
20			TP. 24	スクレイバー	黒曜石		2.8	2.6	1.3	8.0	なし	
21	26	6	TP. 3	1層	石鎚	中粒砂岩	5.7	7.5	1.9	102.0	なし	
22			TP. 18南側	耕土	打製石斧	細粒砂岩	17.2	8.6	2.9	457.0	なし	
23			拡張区	5層	打製石斧	細粒砂岩	11.4	4.4	1.7	101.0	なし	
24			D2grid	表土	打製石斧	細粒砂岩	(8.7)	4.1	1.6	(75.0)	あり	
25			拡張区	3層	打製石斧	細粒砂岩	(10.1)	4.5	1.8	(100.0)	あり	
26	27	3層	拡張区	3層	打製石斧	頁岩	(11.8)	4.5	1.9	108.0	あり	
27			拡張区	3層	敲石	多孔質玄武岩	15.1	6.0	6.4	(760.0)	あり	
28			Dブロック一括	3層	磨礫石	輝石安山岩	(12.2)	5.7	5.6	(660.0)	あり	
29			Dブロック一括	3層	磨石	玄武岩	(7.5)	5.4	5.9	(410.0)	あり	
30			TP. 9	3層	磨石	輝石安山岩	9.8	7.8	4.9	620.0	なし	
31			Aブロック一括	3層	台石	輝石安山岩	25.5	21.5	12.0	10000.0	なし	

※拡張区とは、本調査対象範囲を意味する。

() は残存値

第4節 富士岡中尾遺跡調査のまとめ

富士岡中尾遺跡では、遺構は自然流路の可能性が高い溝状遺構1条が出土したのみであった。

遺物は遺構に伴わず調査区全体に散在することから、斜面上部である北部からの流れ込みの可能性が高い。ただし、第28図に示したように調査区北半部では、後期の可能性がある個体と、清水ノ上II式土器、野島式土器、五領ヶ台式土器、曾利式土器、南半部で諸磯式土器、北白川下層式土器が出土している。斜面であること、遺物出土数量が少ないとからこの差異を解釈することは困難であるが、出土位置で縄文土器に型式差があり、その周辺から出土した石器もあることから、土器と石器の組合関係がある程度推測できる。ここでは、出土位置と遺物のまとめを提示するに留め、今後の調査の進展によりこの出土状況の差異の評価が可能となろう。

富士岡中尾遺跡の出土遺物では、早期の野島式土器、前期前半の清水ノ上II式、前期末～中期初頭の五領ヶ台式、前期後半の諸磯b・c式土器、中期後半の曾利式、後期の可能性のある土器のほか、駿河東部では出土数が少ない西日本の前期前半の北白川下層式が出土した点が興味深い。特に北白川下層式土器は白色の胎土であり、それ以外の土器とは全く胎土が異なることから搬入品である可能性が極めて高い点は注目できる。

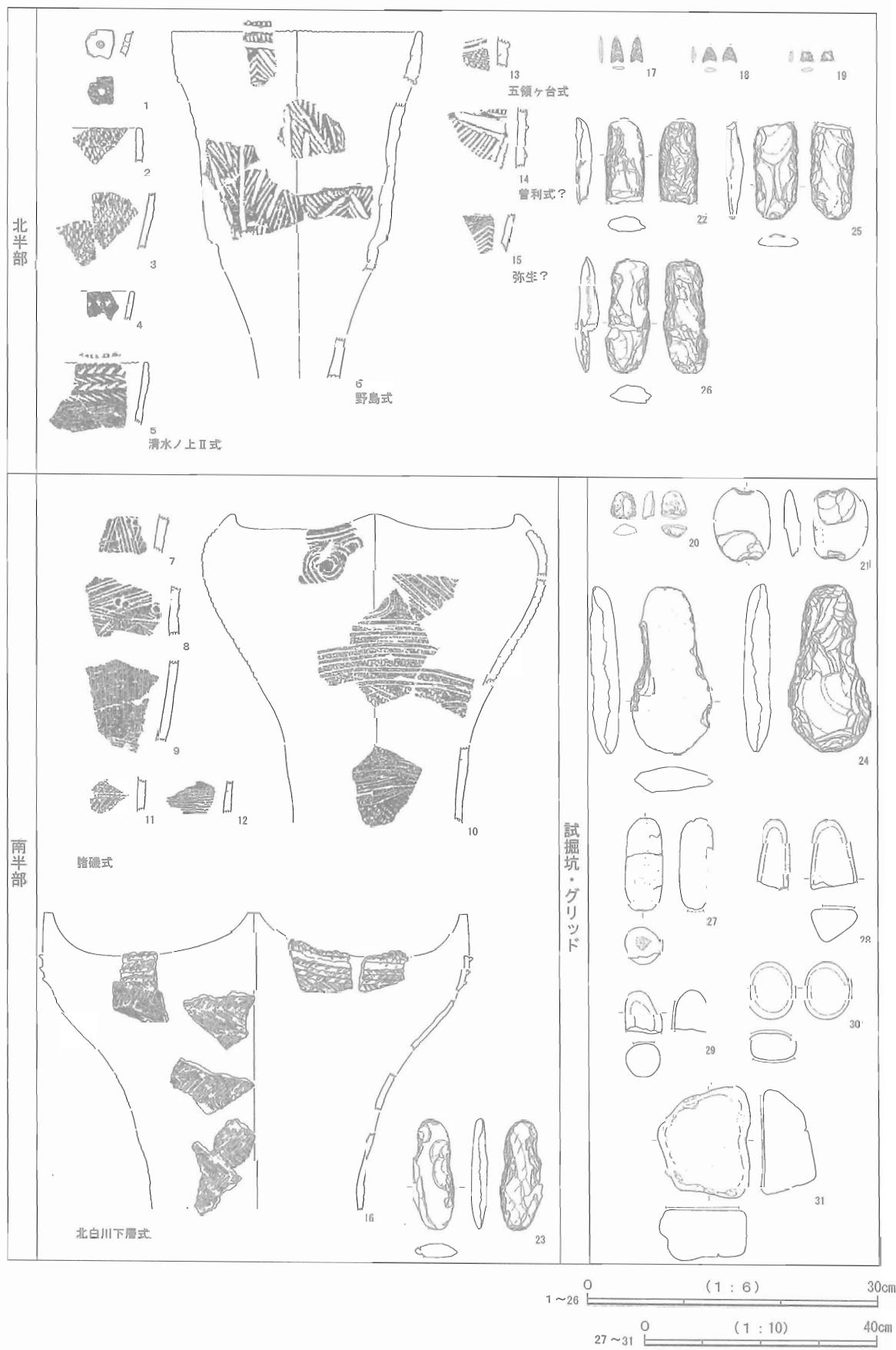
富士岡中尾遺跡は、今回の調査により新たに発見された遺跡で、縄文時代早期～後期まで断続的に人為が及んでいることが明らかとなった。また、弥生時代中期の遺構が確認される可能性が高いことも判明した。

註

- 1 縄文土器については、沼津市教育委員会 池谷信之氏、小崎 晋氏、原田雄紀氏、当研究所 高橋 岳氏の御教授を得た。
銘記して深謝します。

参考文献（第2章）

- 麻生 優・白石浩之 1986 『縄文土器の知識Ⅰ』 東京美術
小林達雄編 1988a 『縄文土器大観2』 小学館
小林達雄編 1988b 『縄文土器大観3』 小学館
小林達雄編 1989a 『縄文土器大観1』 小学館
小林達雄編 1989b 『縄文土器大観4』 小学館
小林達雄編 2008 『総覧縄文土器』『総覧縄文土器』刊行委員会
富士市教育委員会 1986 『富士市の埋蔵文化財（遺跡編）』
富士市教育委員会 1988 『富士市の埋蔵文化財（古墳編）』
富士市教育委員会 1998 『下前原遺跡・富士岡F-第22号墳』
藤村東男 1984 『縄文土器の知識Ⅱ』 東京美術
向坂鋼二 1992 「縄文土器の編年」『静岡県史』3 考古3 静岡県



第28図 富士岡中尾遺跡箇所別出土遺物

第3章

平椎遺跡・平椎古墳群

第1節 平椎遺跡・平椎古墳群の概要

1. 平椎遺跡・平椎古墳群の位置

平椎遺跡・平椎古墳群は、富士市増川924番地ほかに位置する（第29～31図）。おおよその緯度・経度は北緯 $35^{\circ} 9' 55''$ 、東経 $138^{\circ} 45' 6 \sim 7''$ （世界測地系）である。

遺跡は愛鷹山西南麓の扇状地の緩斜面に立地し、遺跡の東西には谷があり、南側には急激に一段下がる地形があり、平椎遺跡はある程度周囲を区画された場所に形成されている。

遺跡からの眺望もよく、愛鷹山南麓の扇状地や浮島沼、田子浦砂丘、駿河湾も望むことができる（巻頭図版1・2、図版7）。

2. 平椎遺跡周辺の遺跡

平椎遺跡・平椎古墳群の周辺（第29図）には、扇状地を登ったところに古木戸B遺跡、その西側の扇状地に古木戸A遺跡、さらにその西側に天ヶ沢東遺跡が所在する。

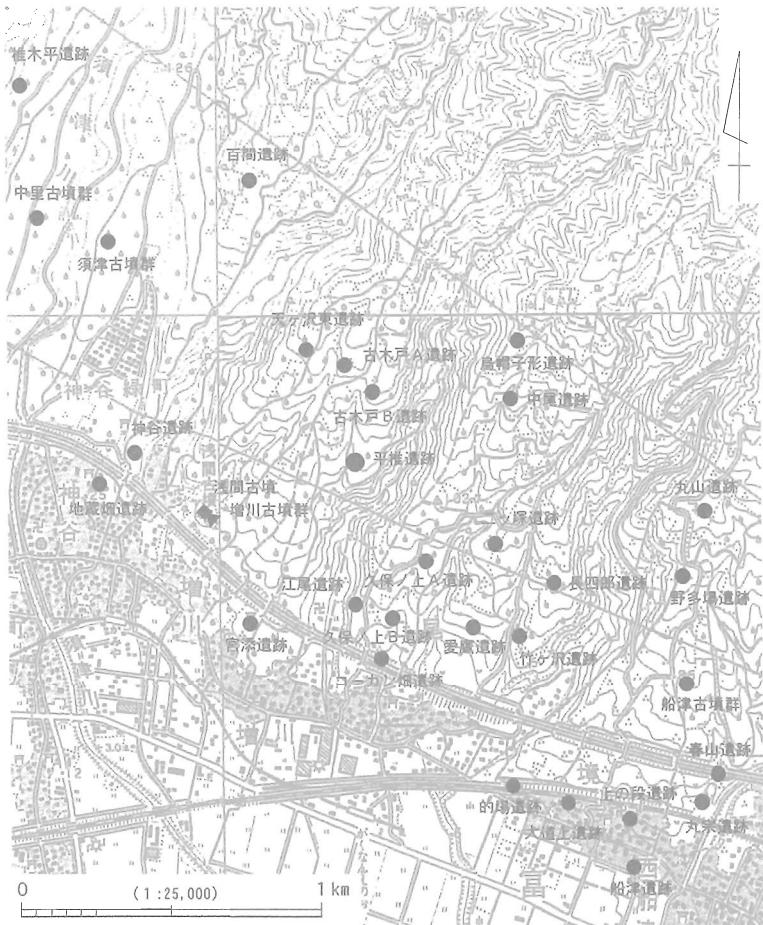
弥生時代の遺跡では、平椎遺跡と同一の扇状地を南側に下った先端部分に宮添遺跡が所在する。宮添遺跡では、弥生時代後期～古墳時代前期の集落が確認されており、平椎遺跡との関係が注目される。

平椎遺跡が位置する扇状地の先端には東駿河地域最大規模の浅間古墳（前方後方墳、93m）が位置する（静岡県教委2001、静岡大学1998）。この古墳は前期末の築造と考えられており、平椎遺跡の盛期とは時期的な隔たりがある。平椎遺跡や宮添遺跡を営んだ集団が浅間古墳を造営母体となる集団であった可能性がある。浅間古墳の存在は平椎遺跡が営まれた地域が東駿河の中で有力な地域であったことの証明にもなり、富士市域の政治的な状況を明らかにするためにも、平椎遺跡や宮添遺跡と浅間古墳との関係を明らかにしていくことは重要である。

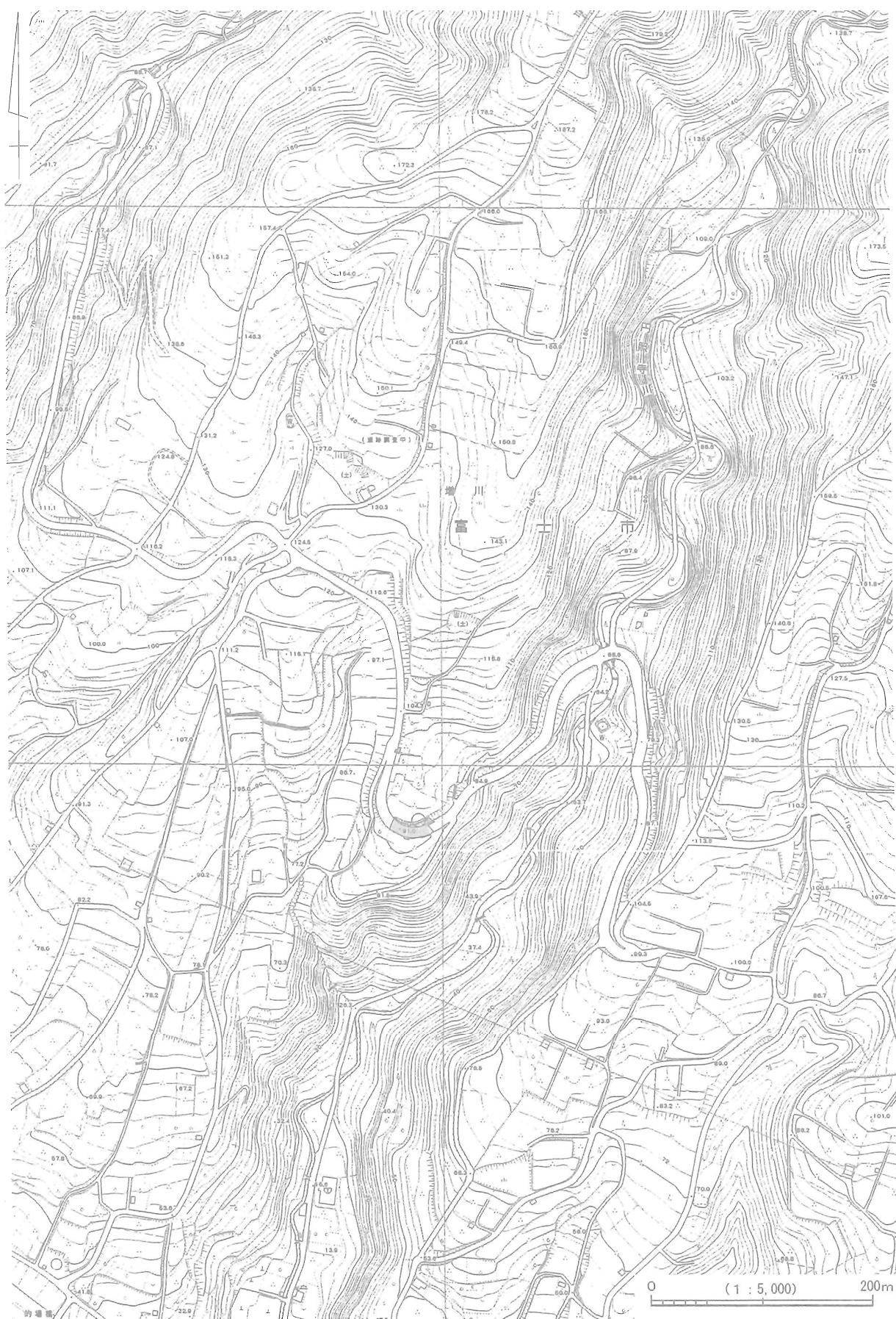
また、古墳の築造が活発な愛鷹山南麓にあって平椎遺跡周辺は古墳時代後期の古墳が比較的少ない地域であり、その中で平椎古墳群2基が確認されたことは意義深いといえよう。

3. 調査歴

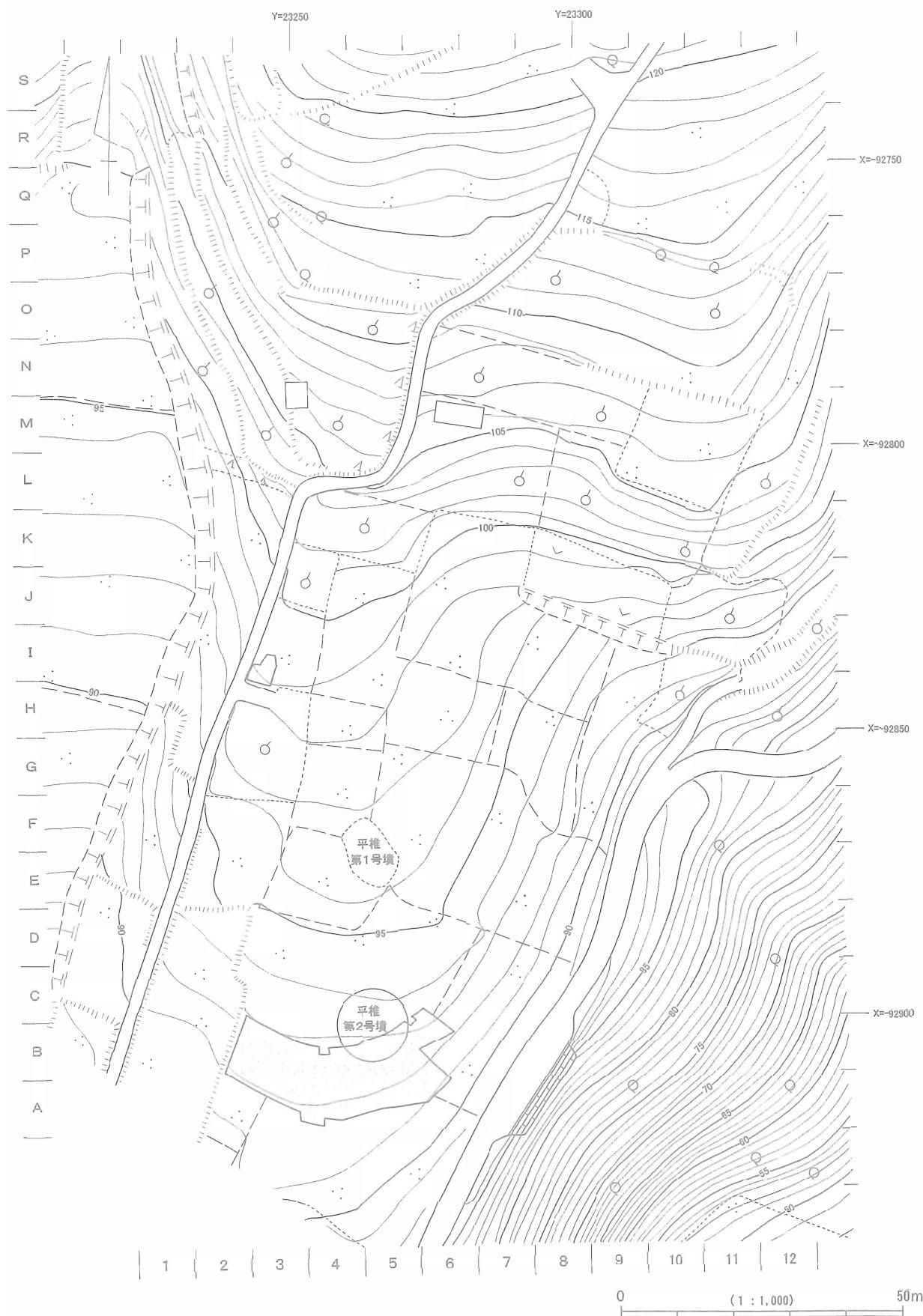
平椎第1号墳の存在はすでに確認されていたが、この地域で発掘調査が行われたことはなく、今回の第二東名高速道路建設に伴う発掘調査が第一次調査となる。



第29図 平椎遺跡の位置と周辺の遺跡



第30図 平椎遺跡調査区の位置



第31図 平椎遺跡調査区の配置

4. 遺構番号について

平椎遺跡では、本発掘調査時に遺構に付加した番号（旧遺構番号）と本報告書（新遺構番号）で用いる番号を変更しているため、ここに遺構番号新旧対応表を記す。 (大谷)

第16表 平椎遺跡遺構番号新旧対応表

新	旧	新	旧	新	旧
SH01	SB01	SD02	SD01	SP09	SP14
SH02	SBI2	SD01	SD02	SP10	SP18
SH03	SB16	SK01	SF01	SP11	SP20
SH04	SB11	SK02	SF24	SP12	SP32
SH05	SB02	SK03	SF02	SP13	SP26
SH06	SB05	SK04	SF08	SP14	SP27
SH07	SB08	SK05	SF12	SP15	SP30
SH08	SB06	SK06	SF11	SP16	SP29
SH09	SB04	SP01	SP23	SP17	SP25
SH10	SB03	SP02	SP21	SP18	SP31
SH11	SB10	SP03	SP22	SP19	SP33
SH12	SB09	SP04	SP19	SP20	SP03
SHI3 A	SBI3	SP05	SP16	SP21	SP05
SHI3 B	SB07	SP06	SP28	SP22	SP10
SHI3 C	SB15	SP07	SP17	SP23	SP09
SHI4	SB14	SP08	SP15	SP24	SP07
				SH02の柱穴	SP39

第2節 調査の方法・体制・経過

1. 確認調査および本発掘調査の体制

平椎遺跡・平椎古墳群の発掘調査は、確認調査に継続して実施した。当研究所では、第二東名富士工区として調査体制を組み実施したが、実際に現地を担当したのは下記のとおりである。 (大谷)

主任調査研究員 鈴木良孝 調査研究員 田村隆太郎・稻垣聖二

2. 確認調査および本発掘調査の方法

確認調査の対象範囲は、工事用道路となる尾根の東縁・南縁・西縁を結ぶ平面U字の範囲である。12箇所に試掘溝（トレンチ）を設定して確認調査を実施した。後述する基本土層のI層とII層を把握し、各層・各面の遺構・遺物の有無を精査した。その結果、II層上面で古墳（平椎第2号墳）や竪穴遺構の存在が認められ、その広がりが把握された。

把握された遺跡残存範囲に調査区を設定し、平椎第2号墳の部分は人力、その他は重機で表土除去を行なった。調査区の外には排土置場を設定し、土留めなどを設置した。

平椎第2号墳は、墳丘・周溝および埋葬施設（横穴式石室）を検出し、その残存状況の記録作業（写真撮影、測量・実測）を行なった。さらに、土層帶を残しながら旧地表面までの解体作業を行なった。他の遺構は、平面的に検出した後、検出した順に遺構番号を付けて精査・解体作業および記録作業を行なった。

遺構図の作成（測量・実測）は、平椎第2号墳の埋葬施設や竪穴建物・溝状遺構は1/10、平椎第2号墳の墳丘やその他の遺構は1/20、全体地形測量図などは1/100を基本とした。平椎第2号墳については、検出した埋葬施設から主軸を設定し、それに沿って実測作業を行なった。その他は、国土座標（本書凡例を参照）にあわせて実測作業を行なった。

遺構および景観写真的撮影には、6×7判モノクロと35mm判モノクロ・カラーリバーサルを用いた。その他に、作業工程記録の撮影を兼ねて35mm判カラーネガを使用した。また、全景写真や遠景写真的撮影として、ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を株式会社フジヤマに委託して実施した。（田村）

3. 確認調査および本発掘調査の経過

平成10（1998）年11月25日から確認調査を開始した。器材置場などを設置した後、伐採された茶木を除去して試掘溝（トレンチ）12箇所を設定し、第1トレンチから第12トレンチまでの掘削・精査を順に実施した。基準坑の打設およびトレンチの測量を行った後、12月2日にトレンチによる確認調査を終了した。対象範囲の南部に竪穴遺構と古墳の存在が確認できた。

この結果を受けて、静岡県教育委員会、道路公団静岡建設局および当研究所の三者の合意により、平成10年度内に記録保存の発掘調査を行なうことになった。遺跡の残存範囲に調査区を設定し、12月3日から人力および重機による表土除去、試掘坑の埋め戻し、土留めによる排土置場の設置などを行なった。12月14日からは別地点の確認調査のために作業を中断した。

平成11（1999）年1月5日、器材の搬入やテント・トイレ設置などの準備をして、調査を再開した。平椎第2号墳は、1月6日までに墳丘・周溝および埋葬施設の検出作業を行い、検出状況の記録作業を1月7日に実施した。その後、解体および記録作業を1月20日まで行った。竪穴建物などは、1月5日から検出作業を行い、平面形などが把握できた遺構から順次、覆土の掘削・精査および記録作業を実施

した。平椎第2号墳の墳丘の下に存在した遺構は、平椎第2号墳の解体と同時に平面形を把握し、引き続き他の遺構と合わせて掘削・精査した。

2月18日に遺構覆土の掘削を終了し、2月23日にラジコンヘリコプターによる全景・遠景などの空中写真撮影を行った。その後、竪穴建物の解体作業（床構築土除去など）を開始し、3月4日に解体および記録作業を終了した。3月5日に器材搬出などの撤収作業を実施し、4月上旬に重機による埋め戻しを行い、全ての現地の作業を終えた。
(田村・大谷)



写真35 確認調査 試掘溝掘削作業



写真36 本発掘調査 重機による表土除去作業



写真37 本発掘調査 遺構掘削作業①



写真38 本発掘調査 遺構掘削作業②



写真39 本発掘調査 遺構実測作業



写真40 本発掘調査 ラジコンヘリによる空中写真撮影

第3節 平椎遺跡の基本土層と概要

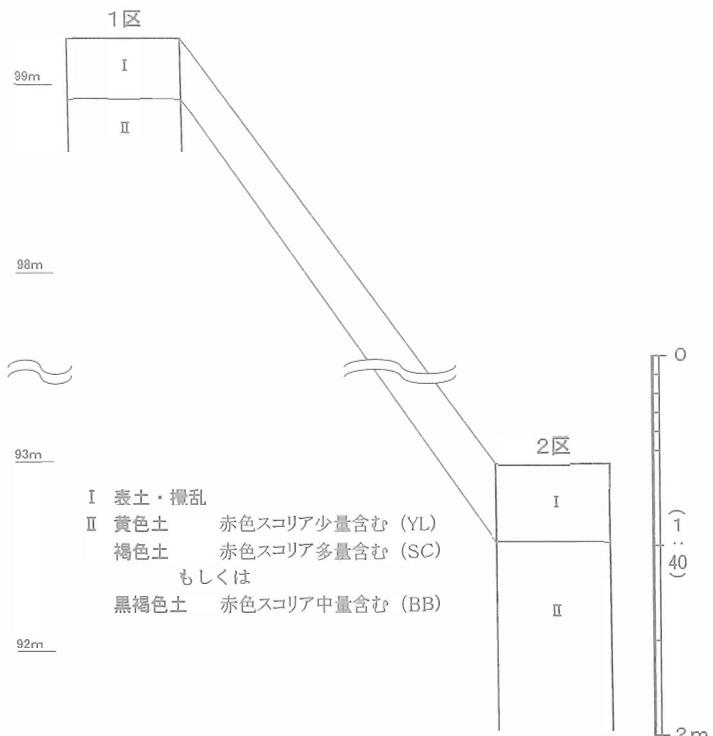
1. 基本土層 (第32図)

本遺跡の基本土層は以下のように分層して把握することができる。

Ⅰ層 表土・攪乱層である。調査区全体の表層として存在し、大半は黒褐色を呈する。土器片と共に近現代の磁器片やガラス片が出土している。この層の広がりと遺構の残存状況から、全域が近現代の削平を受けていることがわかる。攪乱状況の詳細は後述する。

Ⅱ層 休場層といわれるローム層とその下層に該当する。本来は調査区全体に休場ロームが広がっていたと予測されるが、近現代の削平により休場ロームが失われ、Ⅰ層下面に黒色帯やスコリア層が現れる部分もあった。Ⅱ層の上面が遺構検出面となる。Ⅱ層からの遺物の出土はない。

なお、遺構の覆土などから、Ⅰ層とⅡ層との間に堆積層などがあったと推測される。しかし、その層は確認できなかった。Ⅰ層による削平のために失われたものと判断される。
(田村)



第32図 平椎遺跡基本土層図

2. 攪乱・残存状況

遺跡が立地する丘陵は大半が茶畠になっているが、尾根の東縁部は大きく削平されて道路が設けられ、西縁部でも車置場などに比較的大きな削平が認められた。確認調査では、これらの攪乱からも土器片が出土しており、本来は尾根全体に遺跡が存在していたと推測される。

遺跡が残存する範囲（調査区内）においても攪乱が存在する。防霜ファンの設置に伴うもの、古墳の石室石材を埋めたもの、重機の爪痕状のもの、意図不明のトレンチ状のもの、小穴状のもの、深さ1.5mで内部に火を燃した跡が認められるものがある。

先述のとおり、調査区全体に近現代の削平が及んでいた。その影響は平椎第2号墳の南西側が顕著である。また、多くの竪穴建物において、南寄りに床面までの削平が認められた。
(田村)

3. 遺構と遺物

今回検出した遺構は、古墳1基（平椎第2号墳）、竪穴建物16軒（SH01～14）、溝状遺構2条、土坑6基（SK01～06）、小穴など32基（SP01～32）である。古墳は古墳時代後期、その他の多くは弥生時代後期～古墳時代前期の遺構と判断できる。ただし、出土遺物の少ない小穴・土坑などは、時期の特定が困難である。

弥生時代後期～古墳時代前期の遺物としては、弥生土器や土師器のほか、SH05出土の礫がある。古墳の遺物には須恵器と馬具がある。縄文土器片、中世陶器片、銅錢の出土もあった。
(田村)



第33図 平椎遺跡調査区全体図①（竪穴建物・土坑・溝・古墳の番号）



第34図 平椎遺跡調査区全体図②（小穴の番号）

第4節 繩文時代の調査成果

1. 繩文時代の遺構

今回の調査で検出された、時期が特定できる遺構では、古墳時代後期の平椎第2号墳を除く全てが、弥生時代後期～古墳時代前期に含まれるため、時期の特定できない遺構についても次節にて報告する。

現状では、確実に縄文時代に位置づけられる遺構はない。

(大谷)

2. 繩文時代の遺物

(1) 繩文土器 (第35図、第20表、図版23)

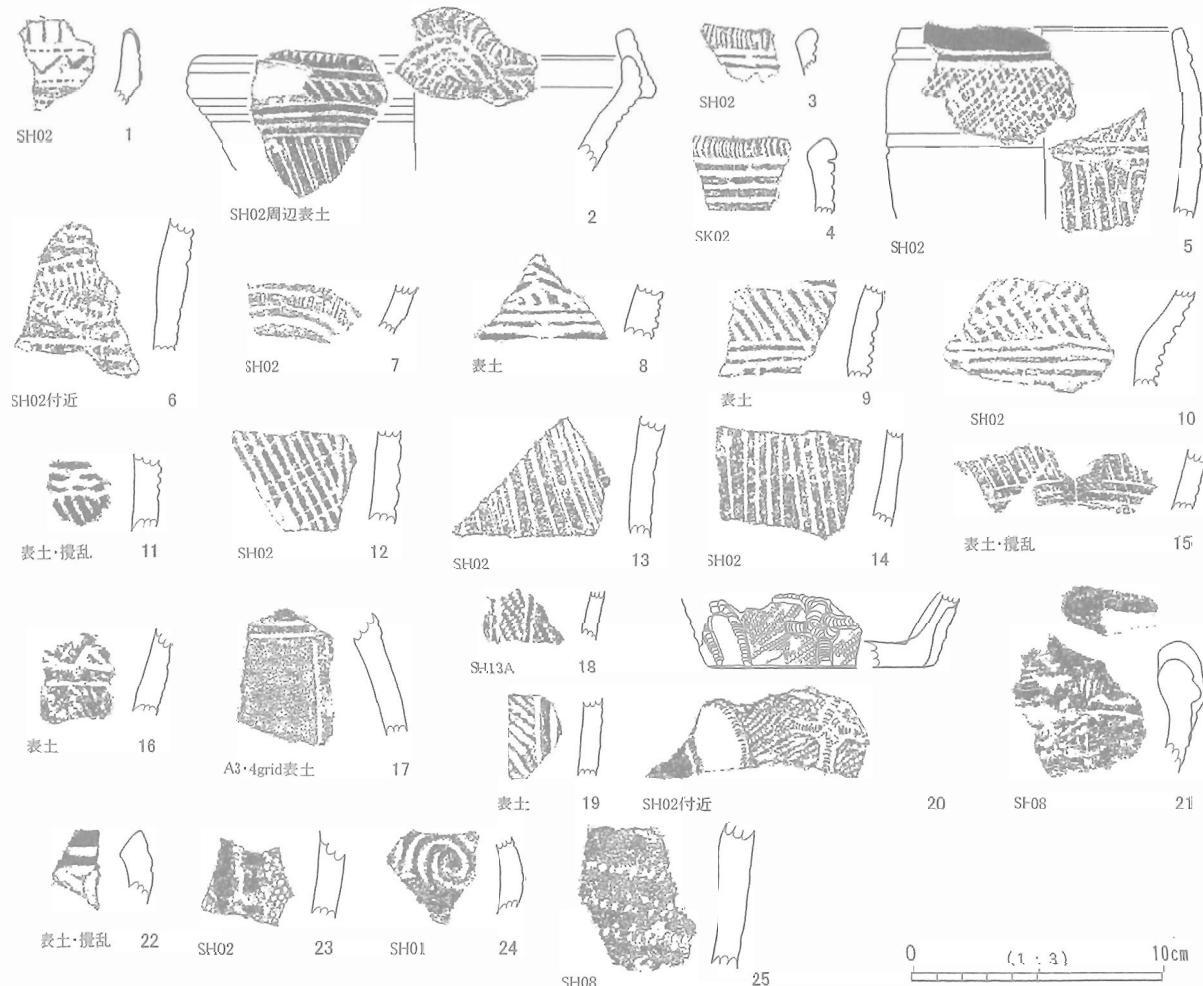
平椎遺跡から出土した縄文土器は同時期の遺構に伴うものではなく、弥生時代後期～古墳時代初頭の堅穴建物の覆土や遺跡の表土から出土したものである。したがって、縄文時代の遺跡が近接箇所に所在する可能性が高いが、どのような性格の遺跡かについては特定できない。

以下では、縄文土器の特徴により区分して記述を進める (註1)。

I群 絡条帯圧痕文の土器 (25) で、縄文時代早期中葉～後葉の清水柳E類

25はSH08覆土出土土器である。深鉢の破片と想定でき、外面に絡条帶圧痕文が5段確認できる。

II群 縄文時代前期末～中期初頭の土器群で、五領ヶ台式あるいはそれと関連する土器群



第35図 平椎遺跡出土土器実測図① (縄文)

まず、縄文時代前期末に位置づけられる可能性が高い土器（1, 6, 16, 20）を記載する。

1はSH02出土である。口縁端部は丸く仕上げられ、竹管状工具の押し引きによる沈線が3条施される。口縁部には幅3mm程度の素麺状の粘土を縦位に貼り付けて浮文としている。その下位には同じく幅3mm程度の素麺状の粘土を連続山形文のように貼り付けている。6はSH02付近出土である。押し引きによる沈線で横方向の沈線文が施され、その下位に菱形（四角形）文が、さらにその下位に横方向の沈線が施される。菱形文の内部には短い沈線がそれに沿うように施されている。18はSH13Aの覆土出土で、縄文地文に二条の縦位の二条の平行沈線文を2箇所以上施す。前期末に位置づけられる。20はSH02付近出土で、底部外面を指頭による押圧で窪みをつけるものである。底部は平底で、胴部外面には半截竹管状工具による交差文が施される。また、指頭圧痕による窪みの周囲には半截竹管状工具による爪形文が巡らされる。これらの特徴から大歳山式の可能性が高い。

つづいて、縄文時代中期初頭に位置づけられる土器をみていきたい。

2はSH02付近の表土出土である。口縁部は外上方に向かい立ち上がった後、口縁部でく字形に屈曲しやや内湾しながら立ち上がる。口唇部は丸く仕上げられ、爪形文が施される。口唇部の下位には竹管状工具による二条の沈線文、斜め方向の沈線、4条の横方向の沈線、図最下部には縦位の条痕が施されている。口縁部には山形の突起が付加される。突起には口唇部に爪形文、その下位に押し引きによる沈線で半円形が刻まれている。3はSH02出土である。口唇部に爪形文、その下位に竹管状工具による沈線文を施す。2と同様の文様構成であるが、横方向の条線が2よりも多い。口縁端部は内傾する面をもつ。4はSK02出土である。3と同様の文様構成であり、同一型式である。5は内湾しながら立ち上がるもので、口唇部には面をもつ。下位は半截竹管状工具による縦方向の集合沈線文、その上位に横方向の半截竹管状工具による二条の沈線、その上位に集合沈線文による斜格子文を刻む。その上位に二条の半截竹管状工具による二条の横方向の沈線が口唇部直下に施されている。7はSH02の覆土出土で、胴部片である。外面に半截竹管状工具による沈線で弧状の文様を描き、その間を細かい沈線文を充填したものである。五領ヶ台式併行期の東海系土器である。8は表土出土で、深鉢の胴部である。半截竹管状工具による沈線を横方向、山形に施している。

9は表土出土で、胴部片である。半截竹管状工具による横位の沈線文、縦位の沈線文、横位の沈線文を施す。10はSH02の覆土出土で、口縁部～胴部片である。胴部と口縁部との屈曲部分に半截竹管状工具による沈線文、その上位に、集合沈線による斜格子文を施している。21はSH08の覆土出土で、深鉢の口縁部片である。口縁部は肥厚され、端部は丸く収められている。山形の突起が貼り付けられ、三角陰刻文、三叉状の刺突文を施す。9・10・21は五領ヶ台式土器である。

11は表土・攪乱出土で、胴部片である。下位に縦位の沈線、その上位に横位の沈線文を巡らせる。12はSH02の覆土出土で、胴部片である。まず、右斜め上方向に半截竹管状工具による二条の沈線文を何回か施した後、それと交差させるように左斜め上方向に向かって半截竹管状工具による沈線文を施している。13・14はSH02の覆土出土で、胴部片である。縦位の集合沈線文が施されている。15は表土・攪乱出土である。胴部片で、下位に横位の沈線文、その上位に縦位の沈線文を施す。16は表土出土で、深鉢の胴部片である。縄文地文に、二条の縦位の沈線文、その下位に二条の沈線文を施している。17は表土出土で、深鉢の胴部片である。縦位の二条の平行沈線文の上位に横位の二条以上の沈線文を巡らせる。中期初頭に位置づけられる。19は表土出土で、深鉢の胴部片である。半截竹管状工具による二条の縦位の平行沈線文を施し、その横に斜位の沈線文を施すものである。22は表土・攪乱出土で、深鉢の口縁部片である。口縁部は内傾する面をもつ、口縁部外面には半截竹管状工具による横位の沈線（凹線）文、弧文を巡らせる。23は、SH02の覆土出土で、結節縄文を施す。24はSH01覆土出土で、深鉢の胴部片である。半截竹管状工具による二条の平行の螺旋文を施す。

これらの縄文土器の出土により、平椎遺跡は縄文時代早期および前期末～中期初頭の遺跡であることが想定でき、特に前期末～中期初頭は集落であった可能性が高い。
(大谷)

(2) 石器 (第66図、第21表、図版29)

石器では、石錐、尖頭器、スクレイパー（石匙）、打製石斧、磨製石斧などが出土した。

石錐 240は縁辺に鋸歯状の加工を施し、尖端部を作り出している。尖端部は上部と左部の二箇所に作られている。左部の先端は折損している。全体的にやや粗雑な印象を受ける。石材は黒曜石である。

尖頭器 241は尖頭器の基部である。全体的に風化が激しいため、加工の様相は判然としない。上半部と基部左側を折損している。基部の一部を折損しているため詳細は不明だが、舌を持っている様にも捉えられ、有舌尖頭器に分類される可能性も考えられる。石材はホルンフェルスである。

スクレイパー 242は横長剥片を素材としたサイド・スクレイパーである。素材剥片を横位に用いて、長軸の右側縁に打点部を除去するように刃部を作出している。刃部を作出する加工は表裏両面から施されている。また、下縁部にも表裏両面から加工が施されている。加工の施され方は打製石斧に近く、小型だが打製石斧のように用いられていた可能性も考えられる。石材はホルンフェルスである。

打製石斧 2点（243・244）図示した。243は短冊形の打製石斧である。表裏両面の中央には摩耗が確認される。また、右側縁には着柄痕と考えられる潰れが確認できる。刃部を折損している。石材は細粒砂岩である。244は打製石斧の基部である。器体の縁辺に加工を施している。器体の大半を折損しているため、全体の形状は不明である。石材は頁岩である。

磨製石斧 245は定角式磨製石斧の刃部である。器体の全面が摩耗しており、線状痕から複数方向から磨かれていることが推定される。器体の左側面が明確に面を持って磨かれているのに対して、右側面はやや崩れている。基部は折損している。石材は輝石安山岩である。
(柴田)

註

1 縄文土器については、沼津市教育委員会 池谷信之氏、小崎 晋氏、原田雄紀氏、当研究所 高橋 岳氏の御教授を得た。

第5節 弥生時代～古墳時代の調査成果

I. 壇穴建物

(1) SH01 (第36図、第17表、図版9)

B6グリッド北西部、調査区東部の斜面地に立地する。北部がSK01と重複しており、SH01がSK01に切られている。南東寄りの大半が削平・攪乱のために消失しており、遺存状態は悪い。

平面形は、短辺がやや直線的な楕円形に復原できる。主軸方向はN-約52° -Wであり、規模は長軸1.6m以上、短軸2.5m以上である。確認面から床面までの深さは、北壁中央で約0.08mである。覆土は褐色を基調とし、焼土粒・炭化粒を含む。

床面は、平均標高92.6mで概ね平坦である。黄褐色の床構築土が認められたが、その厚さは約0.02mと薄く、全体的に軟弱である。掘方の底面もほぼ平坦である。壁溝はない。

主柱穴は壁に接するように2基検出され、4本柱が東西約2.0mの方形に配置されていたと推測される。P1は不整円形で径0.4m前後、底径0.15m前後、床面からの深さは約0.2mである。P2は不整円形で径約0.35m、底径0.15m前後、床面からの深さは約0.25mである。炉などの諸施設は検出できなかつたが、削平・攪乱により破壊された可能性が高い。

遺物は、中央北寄りの床面直上で壺・甕（第55・56図33・34・39）が出土、その他に建物内から数片の壺・甕（第55図26など）が出土している。散在する土器片については、SK01に伴うものが混在している可能性がある。しかし、出土遺物と切り合い関係などから、SH01は弥生時代後期前半頃の建物である可能性が高いと判断できる。

(2) SH02・03 (第37図、第17表、図版10)

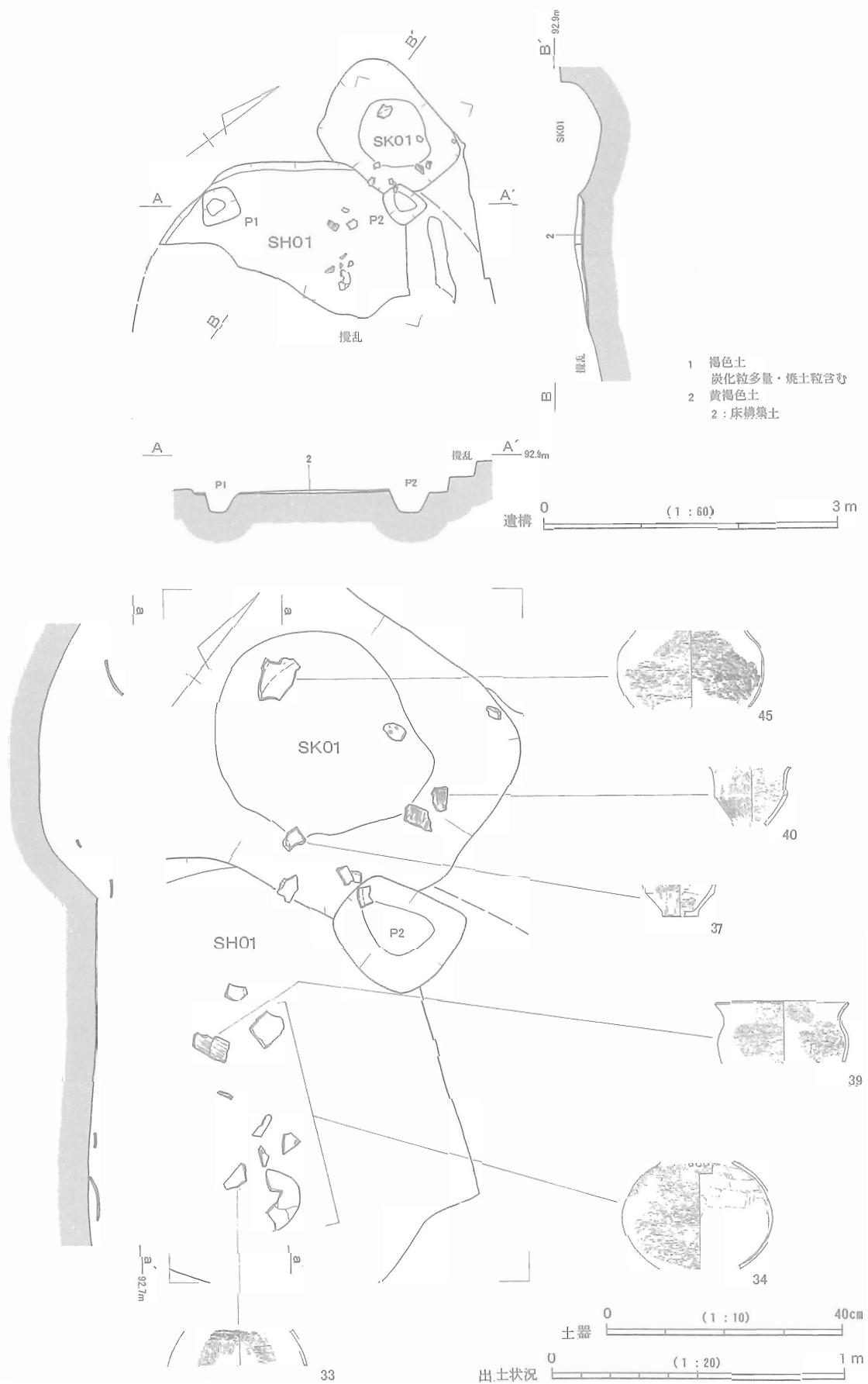
B5グリッド北西部、調査区東部の北縁に位置しており、調査区内では南半を検出した。古墳の墳丘下で検出したが、SH02南部やSH03の深さは浅い。古墳築造に伴う整地の影響が予測される。SH02には削平・攪乱の影響も認められたが、床面は大半が残存していた。SH02とSH03は一部が重複しており、SH02がSH03を切っている。また、SP01がSH02を切っている。

SH02 平面形は、長辺がやや直線的な楕円形である。主軸方向はN-約8° -Wであり、規模は長軸4.3m以上、短軸約5.3m以上である。確認面から床面までの深さは、調査区北縁で約0.2~0.3mである。覆土は褐色を基調とし、炭化粒・黄色土ブロックを含む。

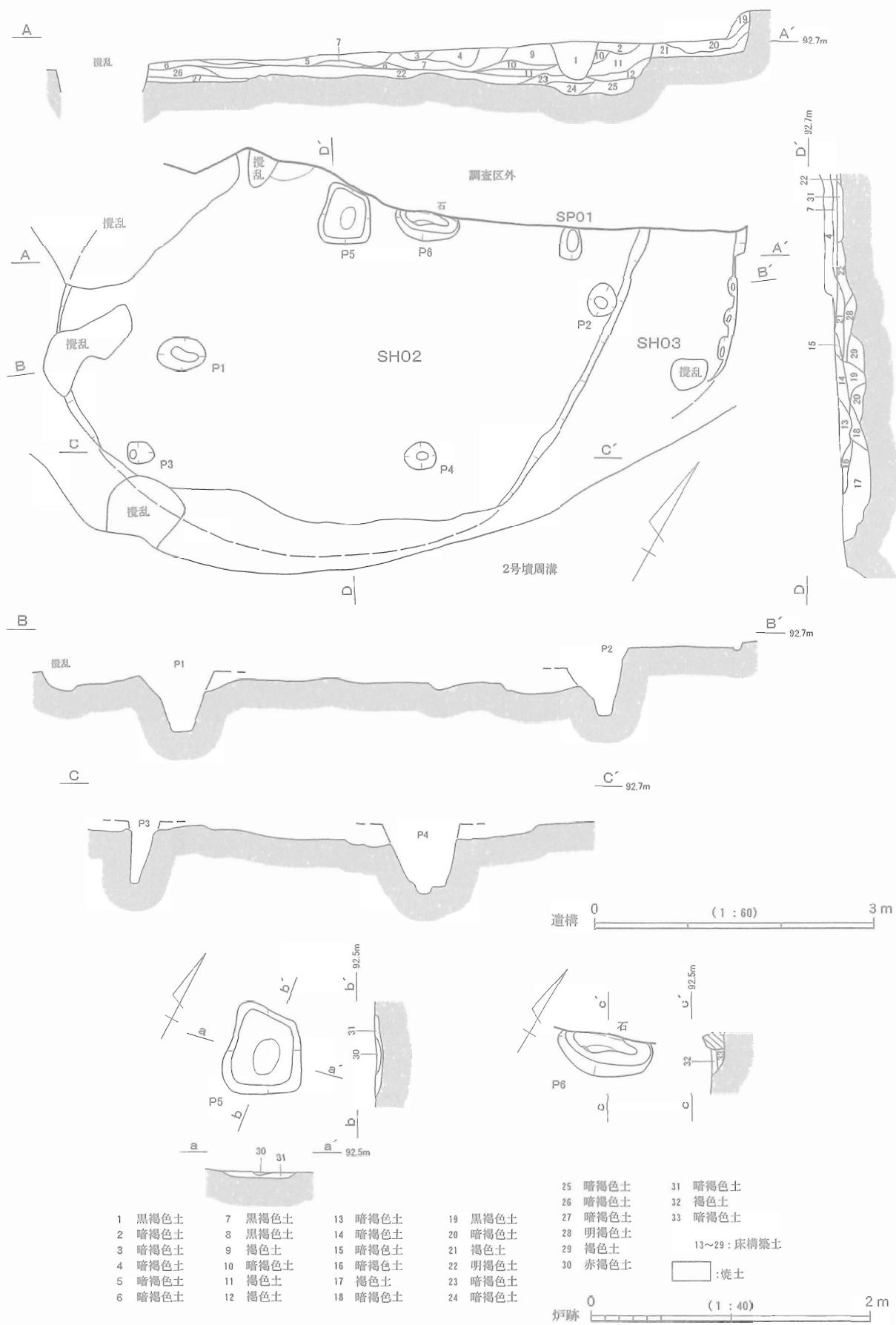
床面は、平均標高約92.4mで概ね平坦である。床構築土は軟弱であるが、中央で約0.1m、周縁で約0.2mの厚さが認められた。掘方の底面は、周縁部が溝状に深くなる。壁溝はない。

主柱穴は、東西壁から約0.8m内側で2基（P1・P4）を検出した。4本柱が東西約2.5mの不整形に配置されたと復原できる。P1は不整円形で径0.4~0.5m、底径0.15~0.3m、床面からの深さ約0.8mである。P4は不整円形で径約0.3m、底径約0.12m、深さ約0.85mである。

炉は、2基（P5・P6）を検出した。P5（炉1）は、調査区北端に位置し、建物の中央北寄りに配置されたと復原できる。平面長方形の掘り込みを伴う地床炉であり、規模は南北約0.6m、東西約0.53m、床面からの深さ約0.04mである。底面には厚さ数cmの盛土が施されており、その上の中央部に厚さ約0.03mの焼土層が形成されていた。P6（炉2）は、P5の東隣に位置する。不整円形の掘り込みを伴う置石炉であり、規模は東西約0.68m、床面からの深さ約0.1mである。置石は角柱状の石1個であり、掘り込みの南端部に長側面を内部に向けて配置されていた。焼土層は認められなかつたが、覆土に焼土粒が多量に含まれていた。



第36図 平惟遺跡SH01実測図



第37図 平椎遺跡SH02・03実測図

遺物は、覆土中から散在した状態で出土している。縄文土器片や石鏃未成品、打製石斧の出土もあるが、大半は壺・甕などの弥生土器片である（第57・58図）。出土遺物から、弥生時代後期前半頃の建物である可能性が高いと判断できる。

SH03 平面形は、長辺が直線的な楕円形に復原できるが、残存部が少ないために特定はできない。主軸方向はN-約58°-E、規模は長軸7m程、短軸1.8m以上である。確認面から床面までの深さは約0.15~0.3mである。覆土は褐色を基調とし、黄色土ブロックを含む。

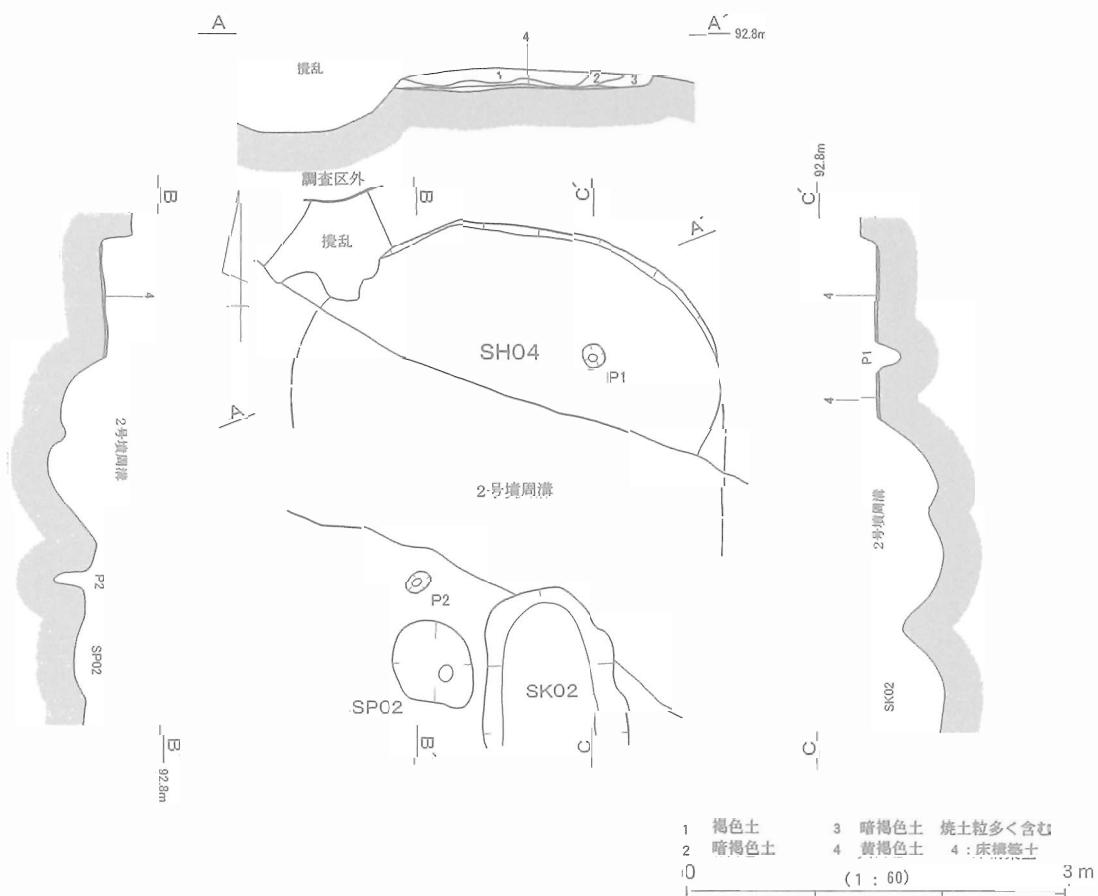
床面は、平均標高92.5mで平坦である。床構築土は確認できない。壁溝は、幅約0.1mで深さ約0.05mの穴が断続する。主柱穴は、南壁から約1.5m内側で1基（P2）を検出した。不整楕円形で径約0.4m、底径約0.15m、床面からの深さ約0.73mである。炉は検出できなかった。

遺物は、壺・甕などの破片が少量出土している（第57・58図）。SH03は、切り合い関係からSH02よりも古い建物であると判断できるが、出土遺物による時期の特定は難しい。

（3）SH04（第38図、第17表、図版10）

B4グリッド南東部、調査区中央の北寄りに位置する。SP02とSK02が重複する位置にあるが、先後関係は不明である。削平の影響が著しく、また、中央部は平椎第2号墳の周溝によって破壊されていた。床面が残存するのは北部のみである。

平面形は、楕円形に復原できる。主軸方向はN-約1°-W、規模は長軸3.9m以上、短軸3.2m以上、確認面から床面までの深さは北縁部で約0.1mである。覆土は褐色を基調とし、焼土粒・炭化粒を含む。



第38図 平椎遺跡SH04実測図

床面は、平均標高92.4mで平坦である。黄褐色の床構築土が認められたが、厚さは約0.02mと薄い。中央部の床面は堅緻で、周縁部は軟弱である。壁溝はない。

主柱穴は、東西壁より約1m内側で2基（P1・P2）を検出した。4本柱が南北約1.8m、東西約1.4mの方形に配置されたと復原できる。P1は不整円形で径約0.18m、底径約0.08m、床面からの深さ約0.2mである。P2は平面形が不整円形で径約0.2m、底径約0.1m、推定床面からの深さ約0.42mである。炉は検出できなかったが、古墳の周溝で破壊されたと推測できる。

遺物は、壺・甕などの破片が少量出土しているが、図示できるものはない。SH04は、遺構の形状から弥生時代後期の建物である可能性が高いと判断できるが、出土遺物による時期の特定は難しい。

（4）SH05（第39～41図、第17表、図版11～13）

A4グリッド北東部、調査区中央の南寄りに位置する。南西隅と南東部は削平によって床面まで破壊されているが、全体に対する残存状態は比較的良好である。

平面形は、隅丸方形である。主軸方向はN-約4°-E、規模は南北約4.4m、東西約4.55mである。確認面から床面までの深さは、北西隅で約0.3mである。覆土は褐色を基調とするが、最下層には炭化粒・焼土粒を多く含む黒褐色土が広がり、焼土がその上面に集中する。このことから、SH05は焼失した建物であると判断できる。

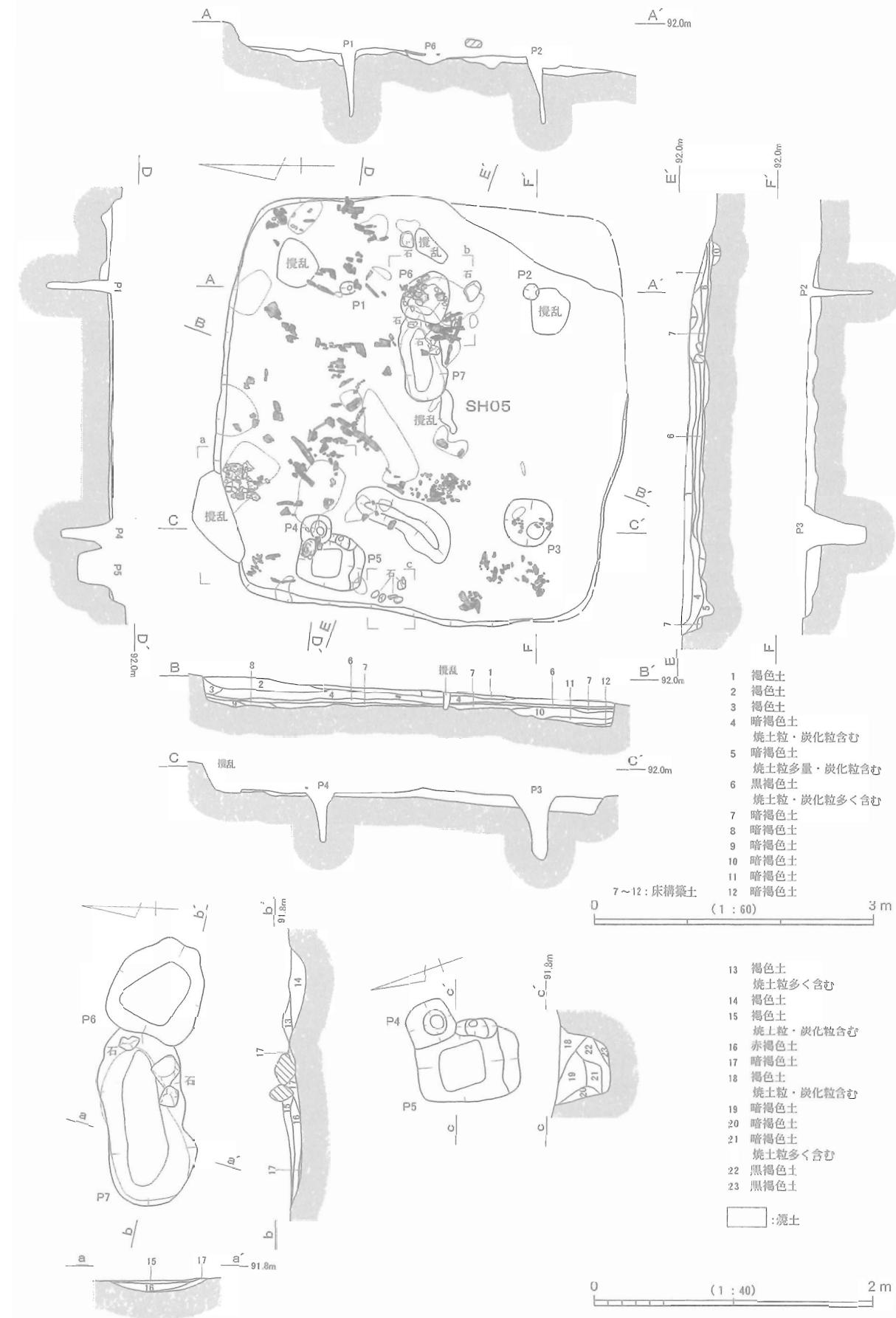
床面は、暗褐色土の床構築土によってつくられており、概ね平坦である（平均標高91.7m）。中央部の床面が堅緻であるのに対して、周縁部の床面は軟弱である。床構築土の厚さについて、中央部では約0.02mと薄いが、周縁部では最大0.18mまで厚くなる。したがって、掘方の底面は周縁部が溝状に深くなる。壁溝はない。

主柱穴は、壁から0.7～1m内側で4基（P1～P4）を検出した。東西約2.6m、南北約2.2mの方形に配置されている。P1は円形で径約0.15m、底径約0.1m、床面からの深さ約0.7mである。P2は円形で径約0.2m、底径約0.05m、床面からの深さ約0.7mである。P3は不整円形で径0.5m、底径約0.2m、床面からの深さ約0.7mであり、中腹で傾斜が変わる。P4は不整円形で径約0.3m、底径約0.1m、床面からの深さ約0.5mであり、中腹で傾斜が変わる。

炉は、建物の中央東寄りで1基（P7）を検出した。掘り込みを伴い、その周縁の一部に置石を配置した置石炉である。平面形は長楕円形であり、東西約0.96m、南北約0.45m、床面からの深さ約0.08mである。ほぼ一面に厚さ約0.04mの焼土層が形成されていた。置石は、掘り込みの東縁部から南東縁部にかけて3個を確認した。いずれも、側面や小口を炉内に向けて置かれた角礫である。なお、炉の周辺にも角礫が散っていたため、より多くの置石が配置されていた可能性が考慮される。炉の東側には、径約0.5m、床面からの深さ約0.1mの不整円形の掘り込み（P6）が隣接する。ここからは、甕（第59図109）がつぶれた状態で出土した。

貯蔵穴は、西縁部の北寄りで1基（P5）を検出した。平面形は方形であり、南北約0.71m、東西約0.52m、床面からの深さ約0.37mである。覆土には焼土粒を多く含み、細かい土器片が出土した。その上部では、壺（第59図105）が出土している。東縁北寄りでは柱穴（P4）と接し、東辺南寄りでは径約0.16mの小穴が接している。貯蔵穴（P5）の南東側（建物の西部中央）では、周堤帯が検出された。最大幅約0.45m、床面からの高さ約0.03mの周堤帯が、北北東から南南西の方向に長さ約1.18mにわたって、緩い弧を描きながらのびている。

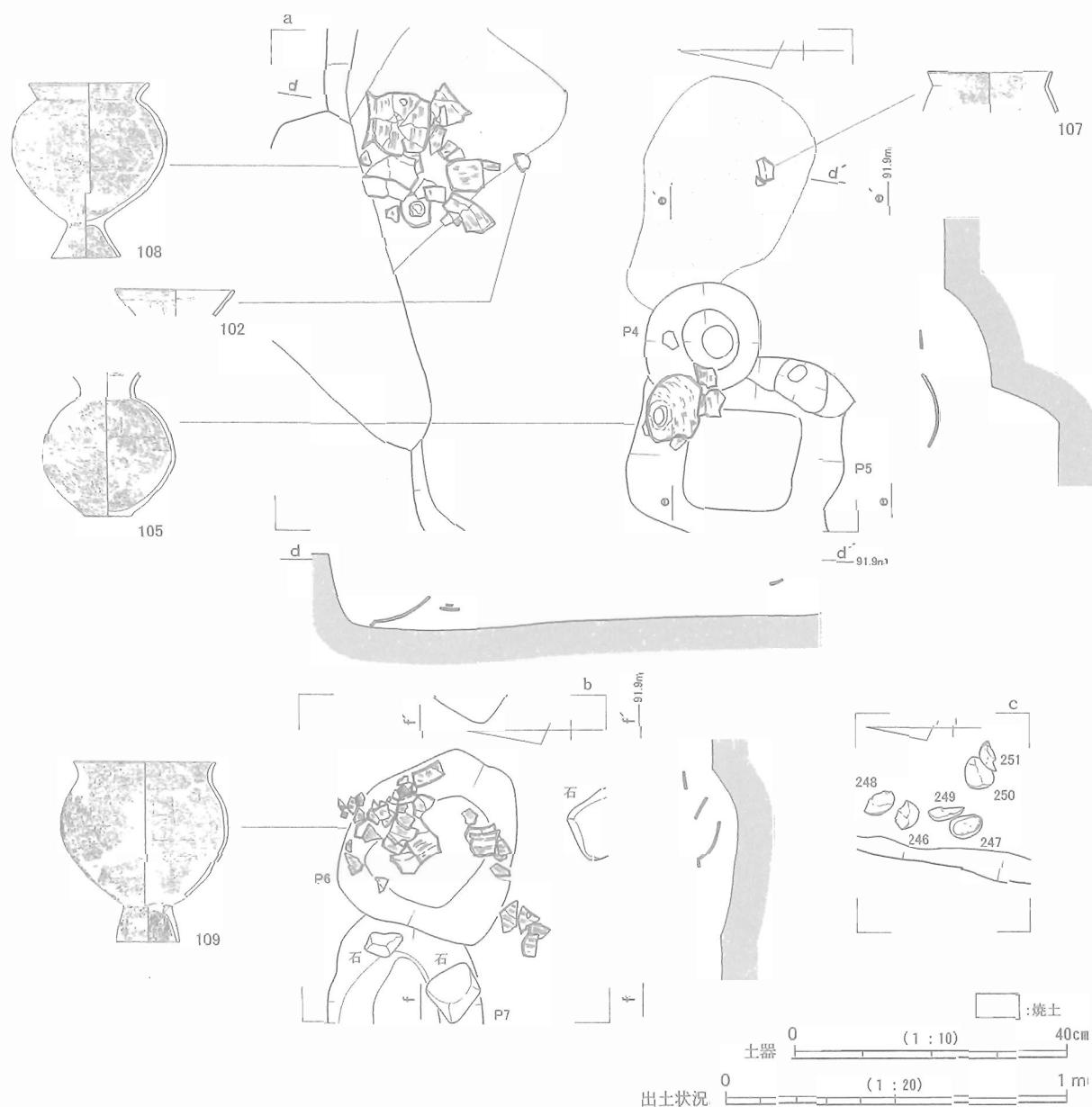
遺物は、先述した炉の周囲の甕、貯蔵穴上の壺のほか、北縁部西寄りに甕（第59図108）が出土している。覆土中からは多くの土器片が出土している。これら出土遺物から、SH05は弥生時代末～古墳時代初頭の建物である可能性が高いと判断できる。なお、西縁部の中央では、火を受けた円礫1個を6つ



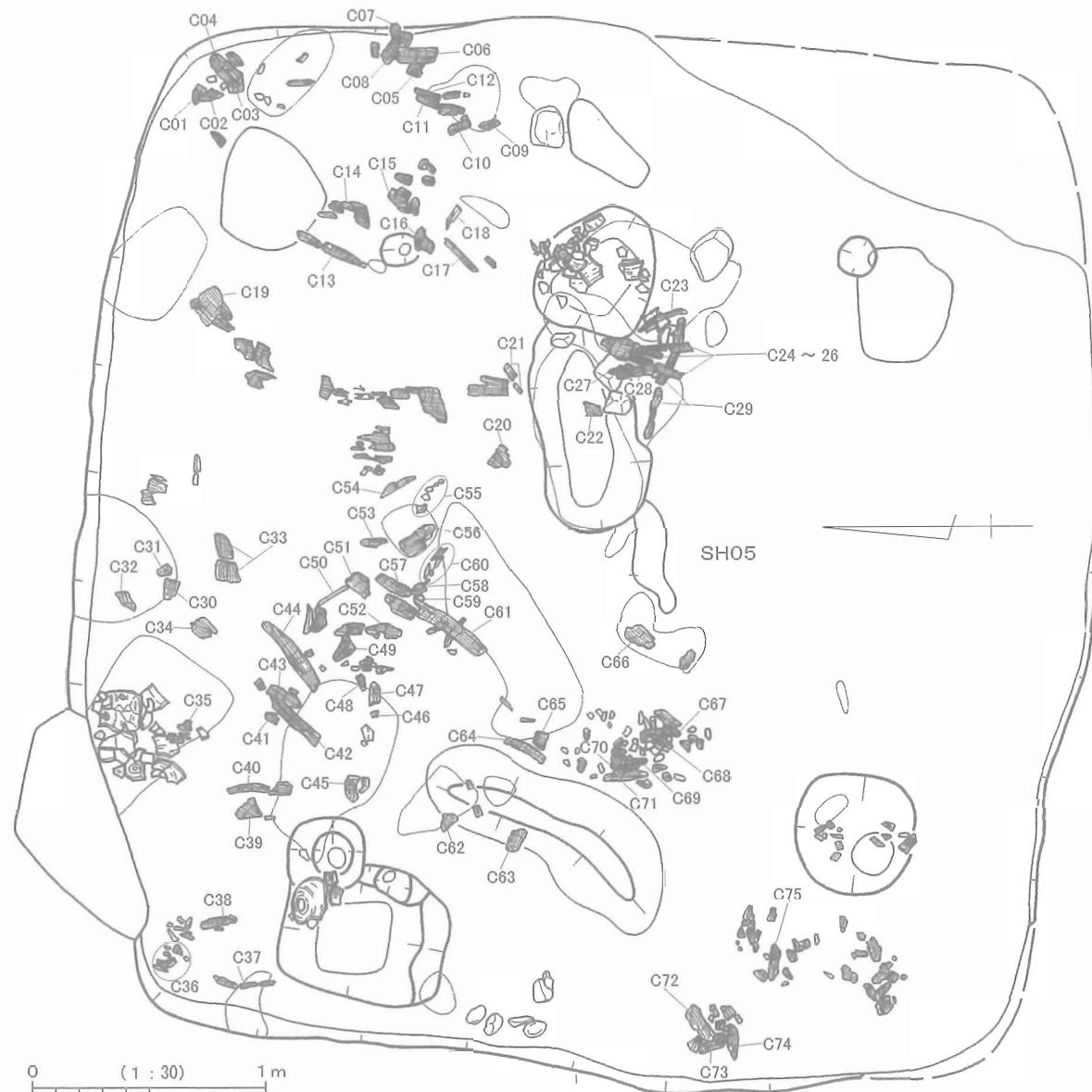
第39図 平椎遺跡SH05実測図(1)

に割れた礫片（第67図246～251）が床面上に置かれていた。石器として使用した痕跡はなく、円礫の破碎と破片の配置を意図した可能性が考慮されるが、その目的は推測の域を出ない。

焼失したこの建物には、柱等の建築材が床面に炭化した状態で遺存していた。この炭化材について、自然科学分析（樹種同定と年代測定）を行った（本章第9節）。その結果、多様な広葉樹が用いられていることが判明し、さらに、結束に利用された可能性が指摘できるツル性大木、萱材の一部であった可能性が指摘できるタケ亜属なども確認することができた。一方、放射性炭素年代測定では、 $2,050 \pm 30$ BP～ $3,900 \pm 30$ BP (BP=1950年) という値が得られた。いずれも弥生時代末～古墳時代初頭という時期を大きく越る年代となり、また、得られた年代の幅が非常に大きい。茶畠に関する薬品等の影響があるのか、建物に係る年代の根拠とすることには躊躇せざるを得ない。



第40図 平椎遺跡SH05実測図②



C01 サカキ	C16 広葉樹	C31 トチノキ	C46 スダジイ	C61 キハダ
C02 サカキ	C17 サカキ	C32 サカキ	C47 スダジイ	C62 サカキ
C03 不明	C18 コナラ属アカガシ亜属	C33 コナラ属アカガシ亜属	C48 スダジイ	C63 コナラ属アカガシ亜属
C04 サカキ	C19 広葉樹	C34 不明	C49 スダジイ	C64 キヅタ
C05 シラキ	C20 イネ科タケ亜科	C35 コナラ属アカガシ亜属	C50 イネ科タケ亜科	C65 コナラ属アカガシ亜属
C06 シラキ	C21 サカキ	C36 サカキ	C51 キハダ	C66 スダジイ
C07 シラキ	C22 イネ科タケ亜科	C37 サカキ	C52 ムクロジ	C67 コナラ属アカガシ亜属
C08 シラキ	C23 コナラ属アカガシ亜属	C38 広葉樹	C53 トチノキ	C68 サカキ
C09 コナラ属アカガシ亜属	C24 ムクロジ	C39 コナラ属アカガシ亜属	C54 コナラ属アカガシ亜属	C69 サカキ
C10 サカキ	C25 コナラ属アカガシ亜属	C40 コナラ属アカガシ亜属	C55 スダジイ	C70 サカキ
C11 サカキ	C26 コナラ属アカガシ亜属	C41 サカキ	C56 スダジイ	C71 不明
C12 コナラ属アカガシ亜属	C27 コナラ属アカガシ亜属	C42 キヅタ	C57 スダジイ	C72 コナラ属アカガシ亜属
C13 シラキ	C28 コナラ属アカガシ亜属	C43 コナラ属アカガシ亜属	C58 不明	C73 キハダ
C14 サクラ属	C29 サカキ	C44 コナラ属アカガシ亜属	C59 ムクロジ	C74 コナラ属アカガシ亜属
C15 広葉樹(散孔材)	C30 トチノキ	C45 キヅタ	C60 スダジイ	C75 コナラ属アカガシ亜属

第41図 平椎遺跡SH05の炭化材出土状況と樹種

(5) SH06 (第42図、第17表、図版14)

A3～4グリッド、調査区中央の南端に位置する。北側のSH07と一部重複していた可能性が高いが、切り合い関係は不明である。削平の影響が強く、南半は床面まで破壊されていた。

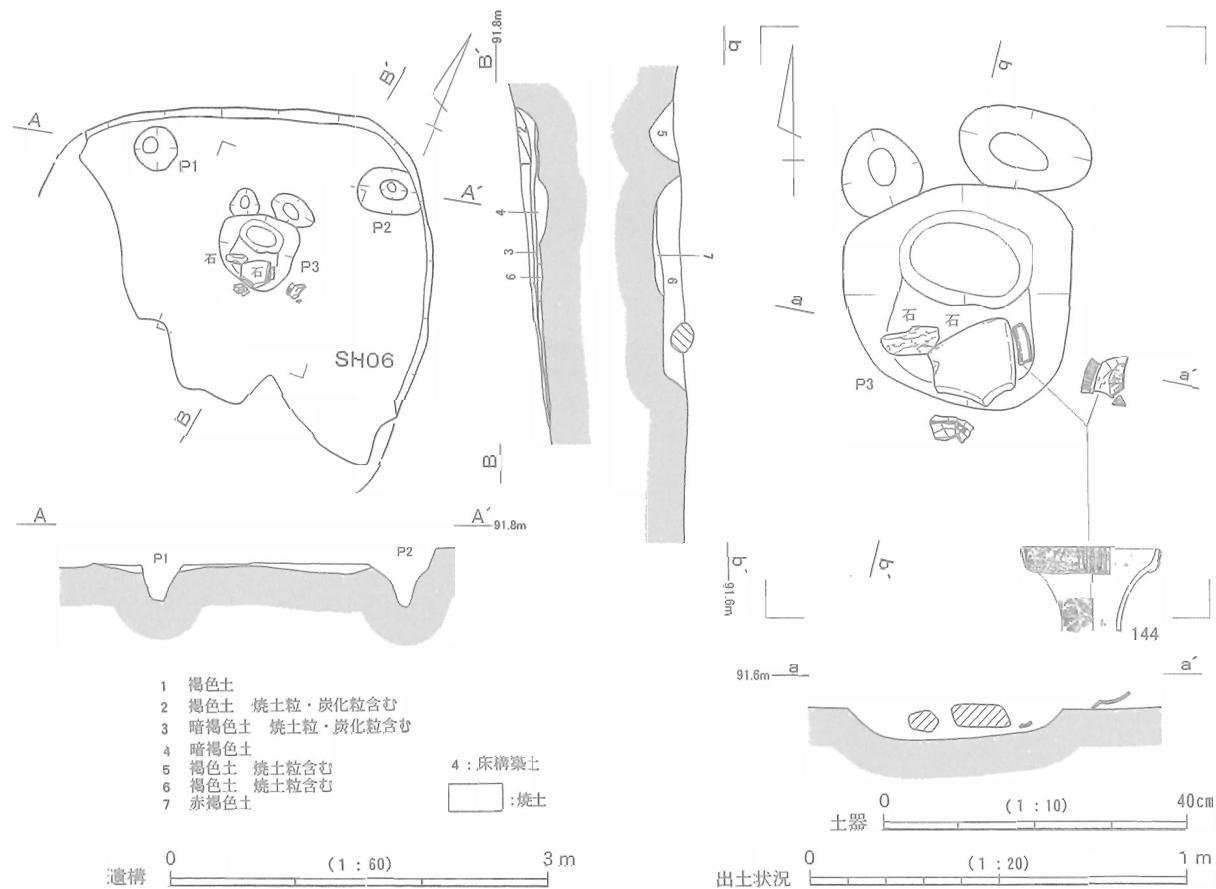
平面形は、隅丸方形に近い橢円形に復原できる。主軸方向はN-約8°-W、規模は長軸2.8m以上、短軸2.8m以上（復原約3m）、確認面から床面までの深さは北縁部で約0.2mである。覆土は褐色を基調とし、焼土粒・炭化粒を含む。

床面は、平均標高91.5mで概ね平坦ではあるが、南が若干下がる。暗褐色土による厚さ0.07m以下の床構築土が認められた。中央部の床面は堅緻であるが、壁際は軟弱である。壁溝はない。

主柱穴は、壁際で2基（P1・P2）を検出した。4本柱が一辺2m程の方形に配置されたと復原できる。P1は不整円形で径約0.35cm、底径約0.1m、床面からの深さ約0.3mである。P2は径約0.4m、底径約0.1m、床面からの深さ約0.34mであり、中腹で傾斜が変換する。

炉は、建物の中央北寄りで1基（P3）を検出した。掘り込みの南斜面に2石を置いた置石炉である。方形に近い不整円形であり、南北約0.57m、東西約0.6m、床面からの深さ約0.08mである。置石のない北半の底には、厚さ0.02m程の焼土層が形成されていた。置石は、東西2石が並ぶ。東には、板石状の石材が長側面を炉内、滑らかな平坦面を上に向けて置かれていた。西には、角柱状の石材が長側面を炉内に向けて置かれていた。炉の北には、小穴2基が検出された。炉の南には、地山が床面に露出する部分が認められた。

遺物は、炉の近辺から壺（第62図144）、覆土中から土器片が少量出土している（第62図）。出土遺物から、弥生時代後期前半頃の建物である可能性が高いと判断できる。

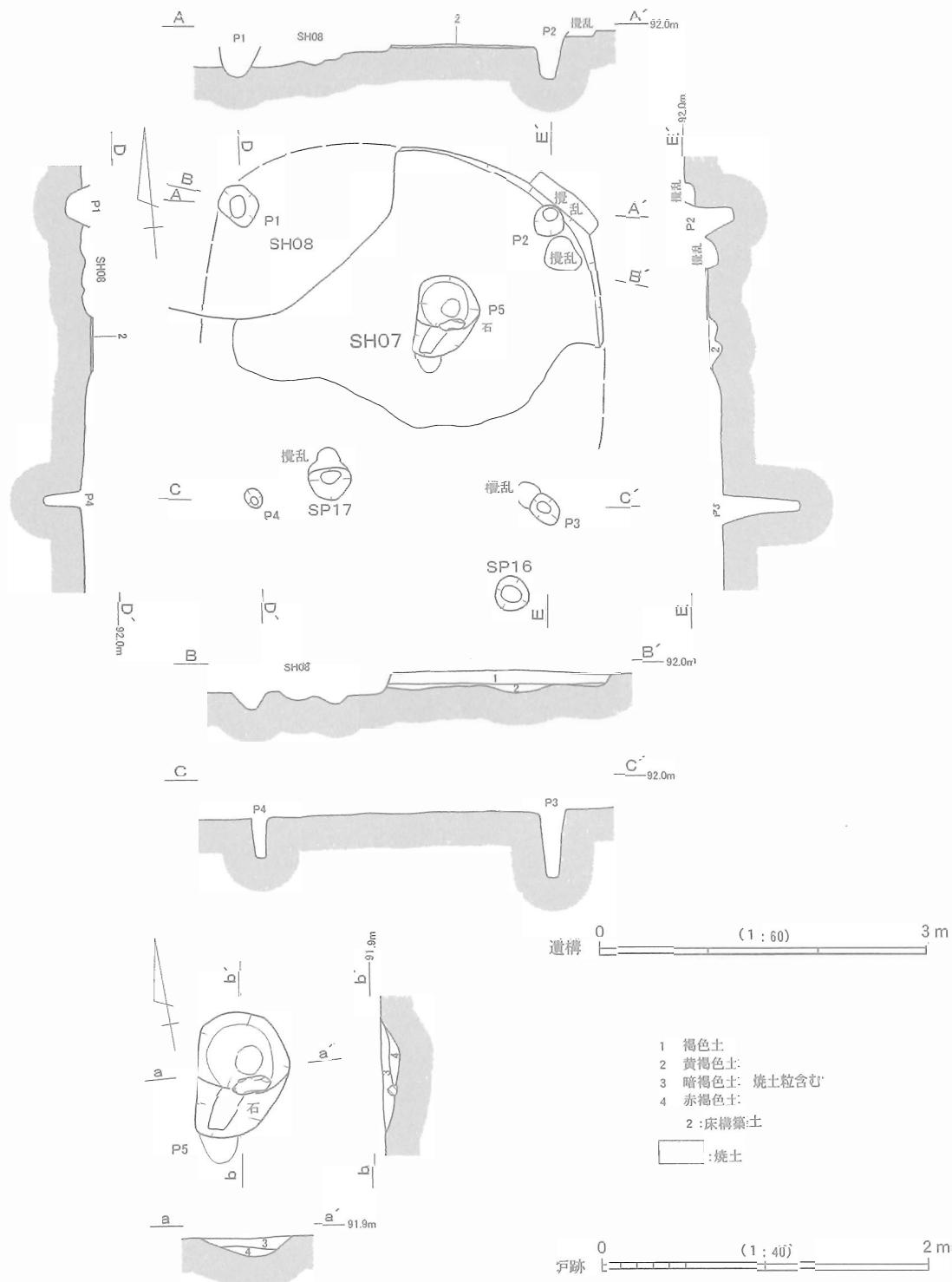


第42図 平椎遺跡SH06実測図

(6) SH07 (第43図、第17表、図版14・15)

A4グリッド北西部、調査区中央の南寄りに位置する。北西部はSH08と重複し、南部ではSP16・17が重複する位置にある。しかし、いずれも土層による切り合い関係は把握できなかった。削平の影響が強く、南半は床面まで破壊されていた。

平面橢円形に復原でき、主軸方向はN-約4°-E、長軸4.2m以上、短軸3.5m以上、確認面から床面までの深さは北縁部で約0.1mである。覆土は褐色で焼土粒・黄色土ブロックを含む。



第43図 平椎遺跡SH07実測図

床面は、平均標高91.8mで概ね平坦であり、中央部は堅緻、周縁部は軟弱である。黄褐色の床構築土によって床がつくられているが、その厚さは周縁部が約0.02mであるのに対して、中央部では最大0.1mまで厚くなる。したがって、掘方の底面は中央部が深く、その周縁にテラスがめぐる。中央部の掘方底面には、鍬痕のような凹凸が多く認められた。壁溝はない。

主柱穴は、壁際で4基（P1～P4）を検出した。南北約2.7m、東西約2.6mの方形に配置されている。P1は不整円形で径約0.37m、底径約0.17m、床面からの深さ約0.2mである。P2は不整円形で径約0.28m、底径約0.14m、床面からの深さ約0.28mである。P3は不整円形で径約0.2m、底径約0.13m、床面からの深さ約0.68mである。P4は不整円形で径約0.15m、底径約0.08m、床面からの深さ約0.5mである。

炉は、建物の中央北東寄りの位置に1基（P5）を検出した。掘り込み内に石を置いた置石炉である。平面形は不整長楕円形であり、南北約0.76m、東西約0.56m、床面からの深さは約0.15mである。北半の円形部分が深くなっている、その底面に厚さ0.13m程の焼土層が形成されていた。置石は、北半円形部分の南縁東寄りに1石を検出した。角柱状の石が長側面を炉内に向けて置かれていた。炉の周辺は床面直上まで削平されていたことから、西隣に1石配置されていた可能性も考慮される。なお、炉の南側では、一部の床面に強い被熱が認められた。

遺物は、壺・甕の破片が少量出土している（第62図146・147）。出土遺物や遺構の特徴から、弥生時代後期前半頃の建物である可能性が高いと判断できる。

（7）SH08（第44・45図、第17表、図版16・17）

A・Bの3～4グリッド、調査区中央に位置する。削平・攪乱の影響はあるが、残存状態は比較的良好く、床面は概ね全体を検出することができた。南東部はSH07と重複し、北部はSH09・SP19と重複する。SP19がSH08を切っていることは確認できたが、その他の切り合い関係は土層から判断することができなかつた。

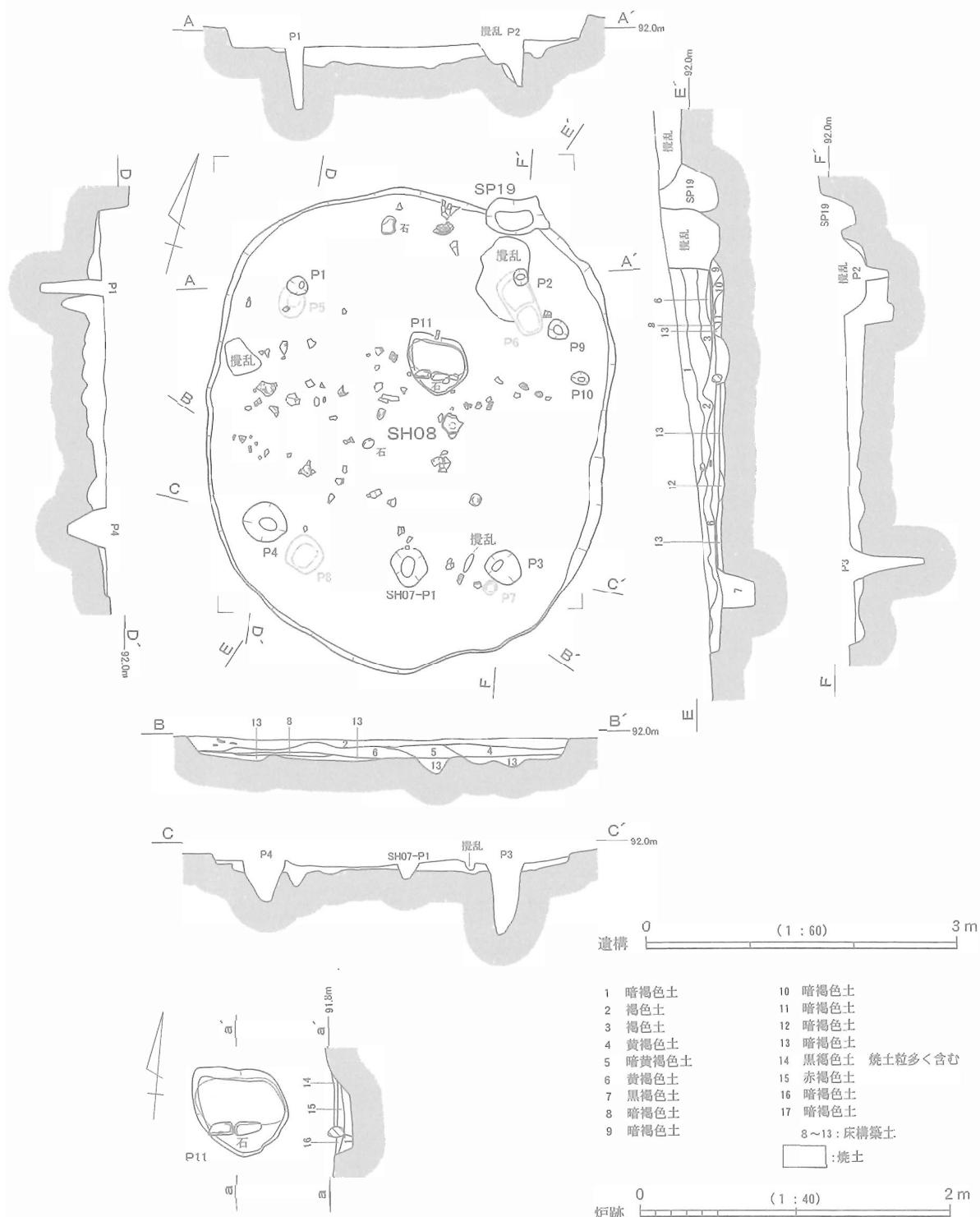
平面形は、楕円形である。主軸方向はN-約10°-W、規模は長軸約4.55m、短軸約3.85m、確認面から床面までの深さは北側で約0.4mである。覆土は褐色を基調とし、焼土粒・炭化粒・黄色土粒を含む。

床面は、平均標高91.8mで概ね平坦である。南壁際および北西壁際の床面は軟弱で、一部に地山が露出する部分もあるが、その他の床面は堅緻である。床は暗褐色の床構築土によってつくられており、周縁部では厚さ0.05m以下であるのに対して、中央部では最大0.16mまで厚くなる。したがって、掘方の底面は中央部が深く、その周縁にテラスがめぐる。中央部の掘方底面には、鍬痕のような凹凸が多く認められた。壁溝はない。

主柱穴は、東西壁から0.3～0.5m内側で4基（P1～P4）を検出した。南北約2.8m、東西約2.1mの不整方形に配置されている。P1は不整円形で径約0.2m、底径約0.1m、床面からの深さ約0.6mである。P2は不整円形で径約0.2m、底径約0.1m、床面からの深さ約0.45mである。P3は不整円形で径0.3m前後、底径約0.15m、床面からの深さ約0.75mである。P4は不整円形で径0.4m前後、底径約0.15m、床面からの深さ約0.4mである。

なお、掘方底面において別的小穴4基（P5～8）を検出した。P5は不整円形で径約0.3m、底径0.1m強、床面からの深さ約0.4mである。P6は長方形で長軸約0.6m、短軸約0.3mであり、床面からの深さ約0.4mの北半と深さ約0.5mの南半に分かれる。P7は不整円形で径約0.2m弱、底径約0.1m、床面からの深さ約0.25mである。P8は方形で一辺約0.3m、底径約0.2m、床面からの深さ約0.35mである。これらは床構築土の下に埋もれていたが、方形配置の主柱穴であった可能性が把握でき、P5～8からP1～4への建替えを指摘することができる。

炉は、建物の中央北寄りに1基(P11)を検出した。掘り込み内の南部に2つの石を置いた置石炉である。平面形は方形に近い不整円形であり、南北約0.54m、東西約0.58m、床面からの深さ約0.14mである。底面には厚さ約0.06mの盛土が施されており、その上に置石の配置と焼土層の形成が認められた。置石は、長側面を炉内に向かた角柱状の石が2個、東西に並べ置かれていた。置石より北には、厚さ0.05m程の焼土層が形成されていた。



第44図 平椎遺跡SH08実測図①

遺物は、比較的多くの土器片が出土している。北縁～西縁部の壺（第60・61図117・129）や中央部の壺（第61図128）などが目立つが、完形に復原できるものではなく、いずれも破片が散らばった状態で出土している。出土遺物の特徴から、弥生時代後期前半の建物である可能性が高いと判断でき、さらに、今回検出した建物の中では最も古い時期に位置づけできる。



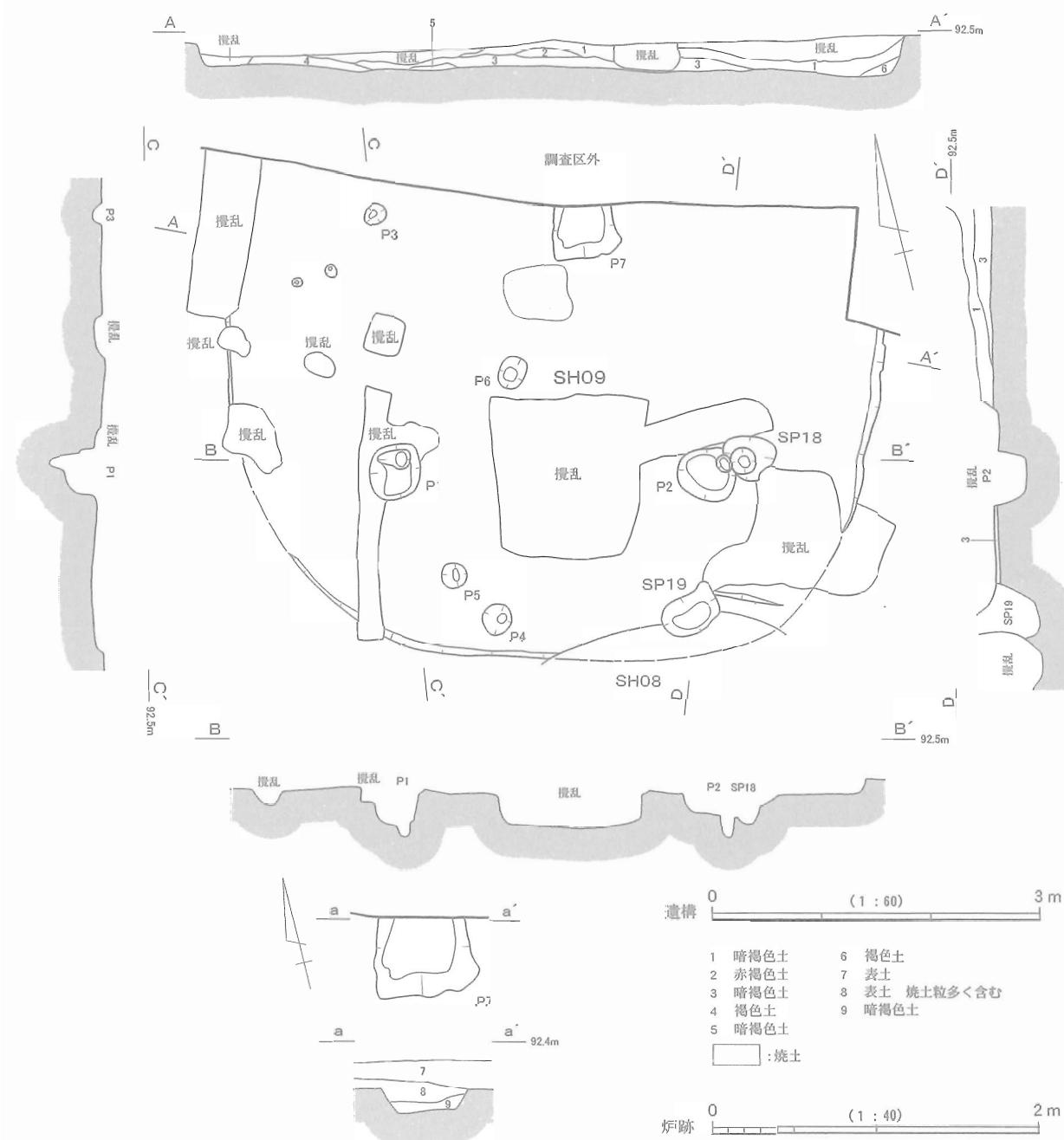
第45図 平椎遺跡SH08実測図②

(8) SH09 (第46図、第17表、図版17)

B3～4グリッド、調査区中央部の北縁に位置する。北半は調査区外となる。床面の大半は残存していたが、南寄りの残存状態は良好とはいえない。南東縁部がSH08と重複するが、土層から切り合い関係を判断することはできなかった。SP19には切られている。

平面形は、各辺がやや直線的な橢円形に復原できる。主軸方向はN-約12°-E、規模は長軸4.5m以上(復原6.5m程)、短軸約6.0m、確認面から床面までの深さは北寄りで約0.4mである。覆土は褐色を基調とし、焼土粒・黄色土粒を含む。

床面は、平均標高92.1mで概ね平坦である。また、床面は軟弱で、床構築土は認められなかった。壁溝もない。主柱穴は、東西壁から1.4m前後内側で2基(P1・2)を検出した。4本柱が南北2.5m以上、東西約2.9mの方形に配置されたと復原できる。P1は方形に近い不整円形で、径約0.45mである。



第46図 平椎遺跡SH09実測図

北寄りに深くなる部分があり、その底径は約0.1m、床面からの深さは約0.45mである。P2は不整円形で、径約0.5mである。北東寄りに深くなる部分があり、その底径は約0.1m、床面からの深さは約0.4mである。SP18も柱穴の可能性が指摘できるが、別の建物に伴うものである可能性を評価した。P3～6については、形状・位置などから柱穴であるとは判断し難い。

炉は、調査区北端に1基（P7）を検出した。建物の中央北寄りに配置されたと復原できる。東西約0.55mの隅丸方形、床面からの深さ約0.08mの掘り込みをもつ。底面には厚さ約0.06mの盛土が施されていた。焼土は層を成さず、覆土上層においてブロック状に混在していた。なお、炉の南西側の床面上において、焼土の分布が認められた。

遺物は、土器片（第62図151～166）が出土している。しかし、中・上層からの散在的な出土が多く、床面上に置かれていたものはない。弥生時代末～古墳時代初頭の土器片が多く含まれているが、SH09の平面形や土器の出土状況、遺構の特徴から弥生時代後期の建物である可能性を評価したい。SP18の存在などから、SH09とは別の弥生時代末～古墳時代初頭の遺構が重複していた可能性も考慮される。

（9）SH10（第47図、第17表、図版18）

B3グリッド、調査区西部の中央に位置する。大半が攪乱・削平されており、柱穴と北縁部・南東部の一部だけが残存する。SP25～27と重複する位置にあるが、先後関係は不明である。

平面形は、各辺がやや直線的な楕円形に復原できる。主軸方向はN-約4°-W、規模は長軸4.3m程、短軸3.1m（復原3.5m程）、確認面から床面までの深さは北縁で約0.2mである。覆土は褐色を基調とし、焼土粒を含む。

床面は、平均標高93.1mである。床面は軟弱であったが、暗褐色の床構築土によってつくられていた。床構築土の厚さについて、北縁部が約0.05mであるのに対して、南東縁部では約0.25mとなる。したがって、掘方底面は南に低くなる。壁溝はない。

主柱穴は、東西壁から約0.7m内側で4基（P1～P4）を検出した。4本柱の柱穴が南北約2.6m、東西約2.1mの長方形に配置されている。P1は不整円形で径約0.4m、底径約0.1m、床面からの深さ約0.6mである。P2は不整円形で径約0.3m、底径約0.18m、床面からの深さ約0.7mである。P3は不整円形で径約0.35m、底径約0.15m、床面からの深さ約0.6mである。P4は不整円形で、径約0.4mである。北東半が深くなり、底径は約0.13m、床面からの深さは約0.77mである。

炉などの施設は検出されなかった。削平・攪乱により破壊されたと推測される。

遺物は、土器片が少量出土している（第62図168・169）。遺構の特徴などから、SH10は弥生時代後期の建物である可能性が高いと評価することができる。しかし、出土遺物による時期の特定は難しい。

（10）SH11（第48図、第17表、図版18・19）

A・Bの2～3グリッド、調査区西部の南寄りに位置する。削平の影響を強く受けており、中央部より南は全く残存していなかった。西部においてSH12と重複しており、SH12がSH11に切られている。

平面形は、隅丸方形に復原できる。主軸方向はN-約60°-W、規模は長軸3.3m以上、短軸約4.8m、確認面から床面までの深さは北東部で約0.2mである。覆土は褐色を基調とし、焼土粒・黄色土ブロックを含む。

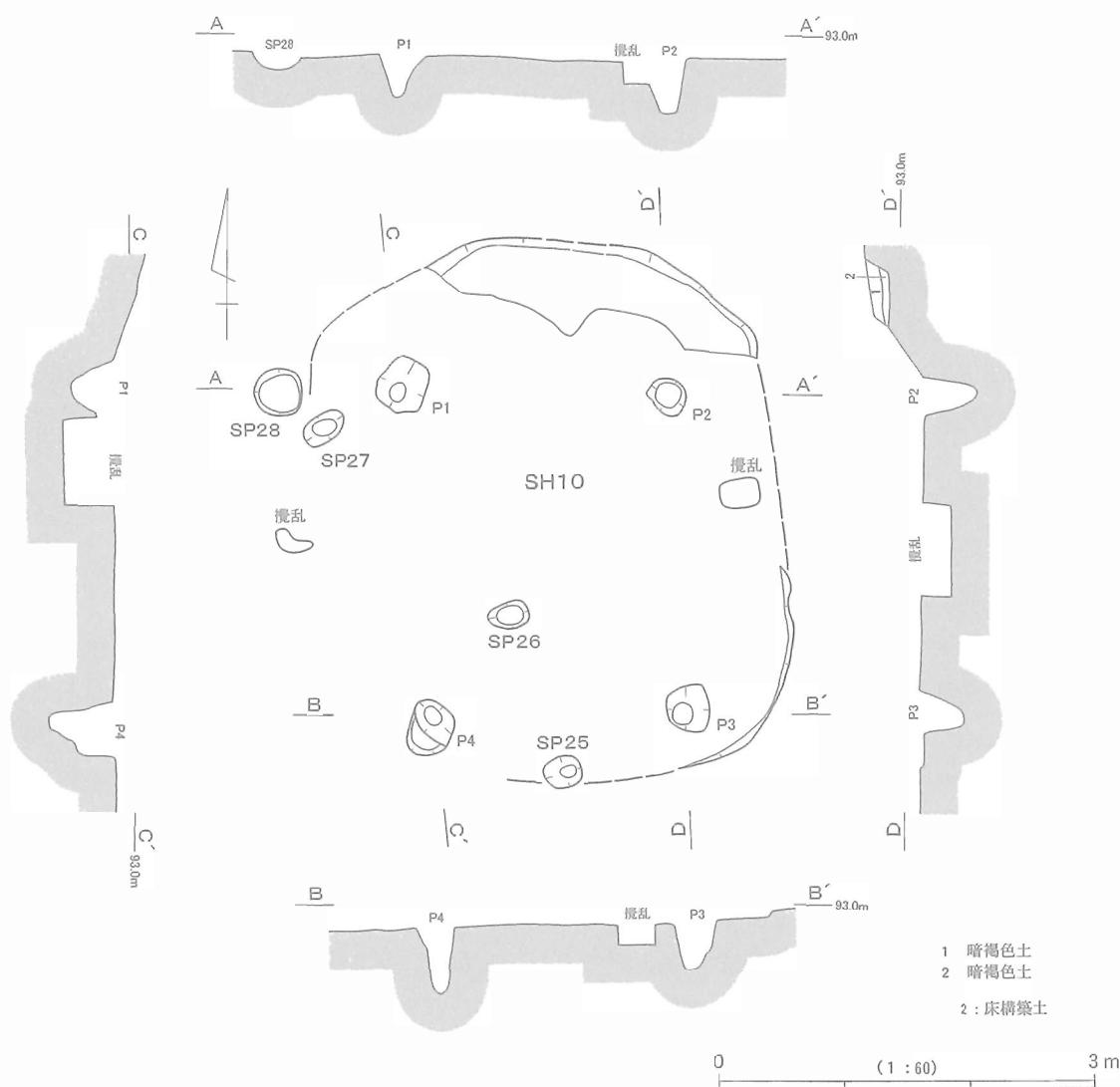
床面は、平均標高91.55mで概ね平坦である。床面は軟弱であったが、褐色・黒褐色の床構築土によってつくられていた。床構築土の厚さについて、中央部では約0.04mであるが、周縁では最大0.2mまで厚くなる。したがって、掘方底面は周縁が溝状に深くなる。壁溝はない。

主柱穴は、北壁から約1.4m内側で2基（P1・P2）を検出した。4本柱が東西約3mの方形に配置さ

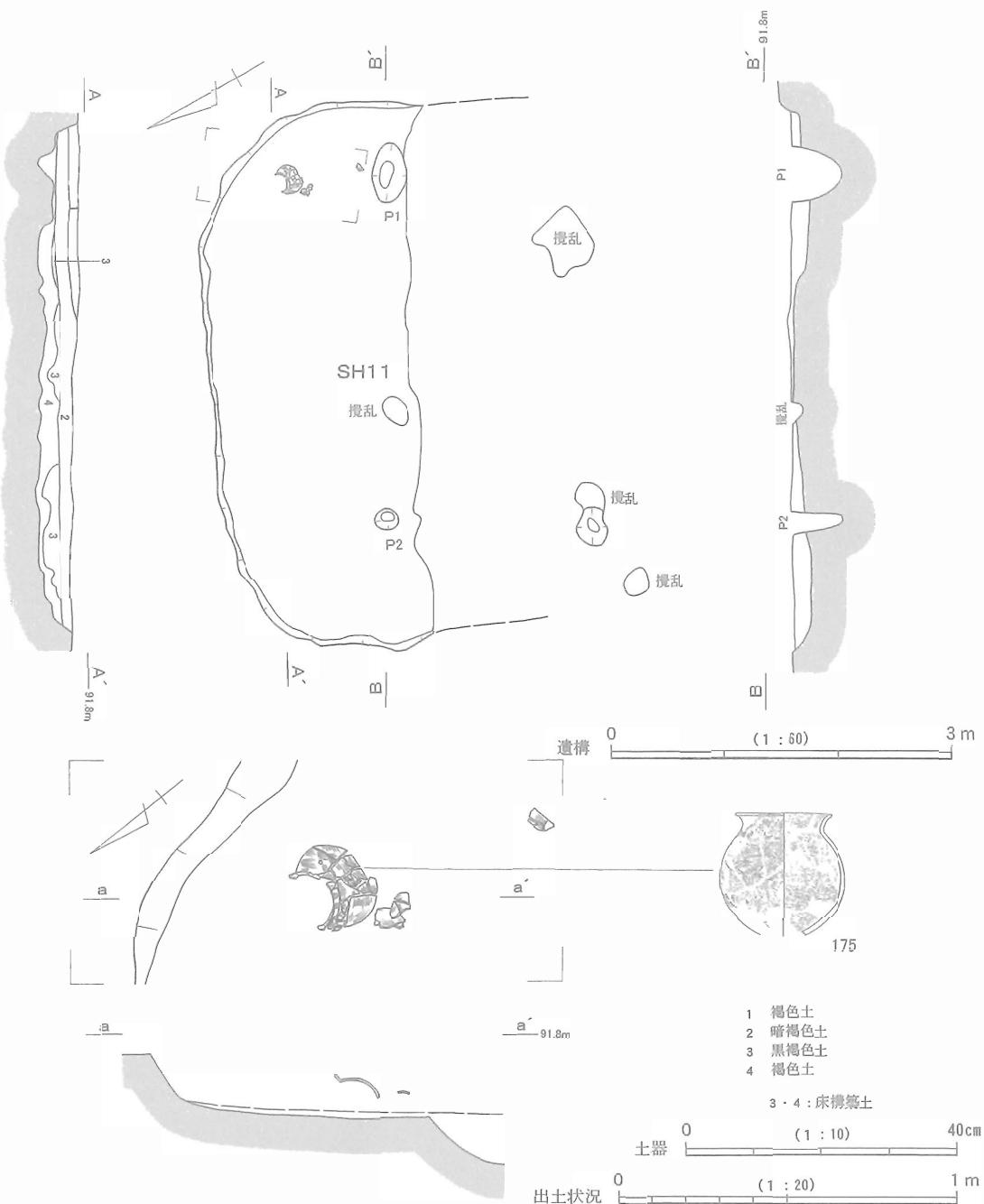
れたと復原できる。P1は不整橢円形で、径0.3~0.5m、底径0.1~0.2m、床面からの深さ約0.45mである。P2は不整円形で径約0.2m、底径約0.1m、床面からの深さ約0.45mである。

炉などの施設は検出されなかった。削平・攪乱により破壊されたと推測される。

遺物は、北東隅付近の床面で甕（第63図175）が出土したほか、少量の土器片が出土している（第63図170~174）。弥生時代後期の土器片も混在するが、北東隅の甕などは弥生時代末～古墳時代初頭のものと位置づけることができる。SH10は平面形が隅丸方形であり、出土遺物の特徴からみても、弥生時代末～古墳時代初頭の建物である可能性が高いと判断できる。



第47図 平椎遺跡SH10実測図



第48図 平椎遺跡SH11実測図

(11) SH12 (第49図、第17表、図版19)

B2グリッド、調査区南西隅に位置する。削平の影響を強く受けており、中央部より南は全く残存していないかった。東部がSH11と重複しており、SH12がSH11に切られている。SP31・32とも重複しており、これらにもSH12が切られている。

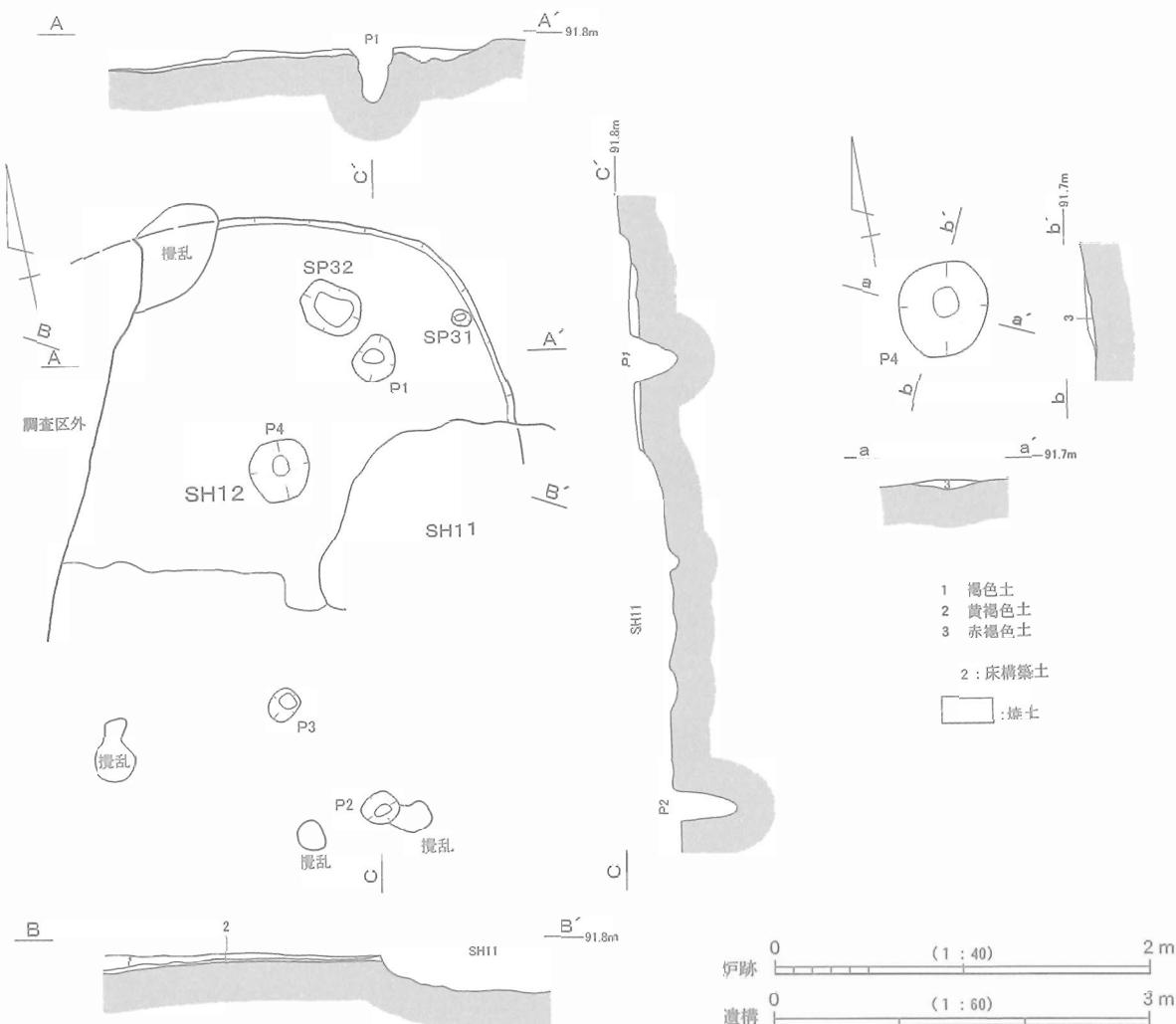
平面形は、各辺がやや直線的な楕円形に復原できる。主軸方向はN-約12°-E、規模は長軸4.8m以上、短軸3.1m以上、確認面から床面までの深さは北縁で約0.1mである。覆土は褐色を基調とし、焼土粒・黄色土ブロックを含む。

床面は、平均標高91.7mで概ね平坦である。全体に黄褐色の床構築土が認められた。厚さは約0.02mと薄い。周縁部の床面は軟弱であるが、中央部の床面に堅緻な部分が認められた。壁溝はない。

主柱穴は、東西壁から約0.7m内側で2基（P1・P2）を検出した。4本柱が南北約3.5mの方形に配置されたと復原できる。P1は不整円形で径約0.34m、底径約0.15m、床面からの深さ約0.37mである。P2は不整円形で径約0.25m、底径約0.12m、床面からの深さ約0.8mである。P3は浅く、柱穴であるとは評価し難い。

炉の可能性がある遺構を1基（P4）検出した。径約0.5mの円形で、深さ0.05mの全体に焼土層が形成されていた。しかし、この掘り込みは非常に浅い。また、その位置について、他の建物のように中央北寄りに配置されたとは復原し難い。炉跡とは別の施設などであった可能性も考慮される。

遺物は、壺・甕などの土器片が出土しているが、非常に少ない。また、図示できる遺物はなかった。遺構の形状や切り合い関係などから、SH12は弥生時代後期の建物である可能性が指摘できる。しかし、出土遺物による時期の特定は難しい。



第49図 平椎遺跡SH12実測図

(12) SH13A・B・C (第50図, 第17表, 図版18)

B2～3グリッド、調査区北西隅に位置する。南縁部は削平・攪乱によって床面まで破壊され、西部も床面上まで削平が及んでいた。3つの建物が重複している。土層の観察などにより、SH13C→SH13B→SH13Aの順で建替えられたことがわかつている。

遺物は、多くの土器片が出土した(第63図176～191)。しかし、散在的な出土であり、床面上に置かれていたものはない。また、多くはSH13Aに伴うものと推測できるが、厳密にA・B・Cを区分することは難しかった。出土土器には弥生時代後期前半頃に位置づけできるものがあるが、最も新しいSH13Aなどは古墳時代初頭に降る可能性が考慮される。

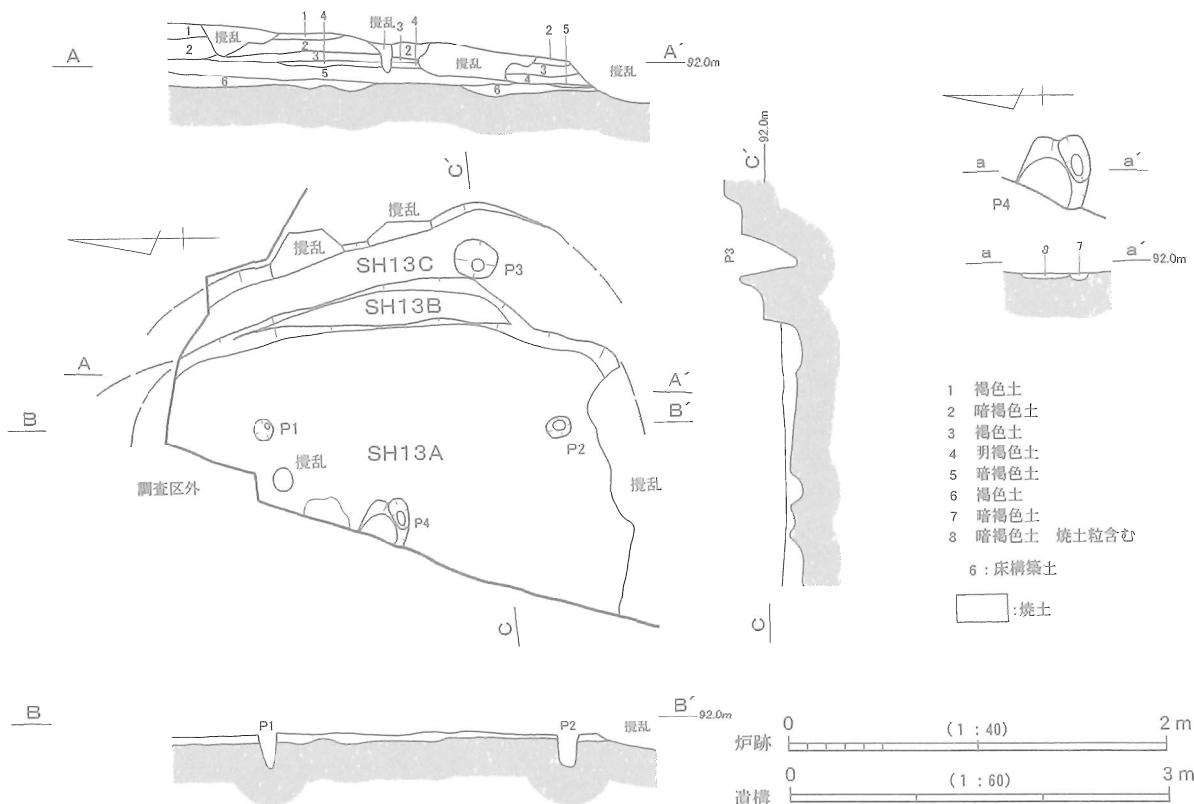
SH13A 平面形は、各辺が直線的な楕円形もしくは隅丸方形に復原できる。主軸方向はN-約1°-W、規模は南北約3.6m以上、確認面から床面までの深さは北部で約0.4mである。覆土は褐色を基調とし、焼土粒・黄色土ブロックを含む。

床面は、平均標高91.9mで平坦である。褐色の床構築土が厚さ0.12m以下で施されている。中央部の床面は堅緻であるが、周縁は軟弱である。掘方底面は凹凸が著しい。壁溝はない。

主柱穴は、東壁から約0.7m内側で2基(P1・P2)を検出した。4本柱が南北約2.3mの方形に配置されたと復原できる。P1は不整円形で径約0.14m、底径約0.06m、床面からの深さ約0.3mである。P2は不整円形で径約0.2m、底径約0.1m、床面からの深さ約0.24mである。

炉は、建物の中央やや東寄りにあたる位置に1基(P4)を検出した。方形に近い不整円形の掘り込みであり、規模は南北約0.36m、床面からの深さは約0.03mである。覆土に焼土粒が多量に含まれていた。南東隅に深さ0.04mの小穴を伴う。

SH13B 平面形は不明であり、規模は南北2.0m以上、確認面から床面までの深さ約0.3mである。覆土は褐色を基調とする。床面は平均標高92.0mで平坦である。床構築土は認められない。壁溝はない。



第50図 平椎遺跡SH13A～C実測図

主柱穴、炉は検出されなかった。

SH13C 平面形は各辺が直線的な楕円形もしくは隅丸方形に復原できる。規模は南北3.2m以上、確認面から床面までの深さは北部で約0.1mである。覆土は褐色を基調とする。床面は平均標高92.2mで平坦である。床構築土は認められず、床面は軟弱である。壁溝はない。主柱穴は、東壁から約0.4m西側で1基(P3)を検出した。P3は不整円形で径約0.3m、底径約0.1m、床面からの深さ約0.44mである。炉は検出されなかった。

(13) SH14 (第51図、第17表、図版20)

唯一、1区で検出された竪穴建物である。H・I3グリッドに位置する。削平・攪乱の影響が強く、南部は残存していなかった。SD02がSH14の北部を東西に横断している。土層の観察などにより、SH14がSD02に切られていると判断することができた。

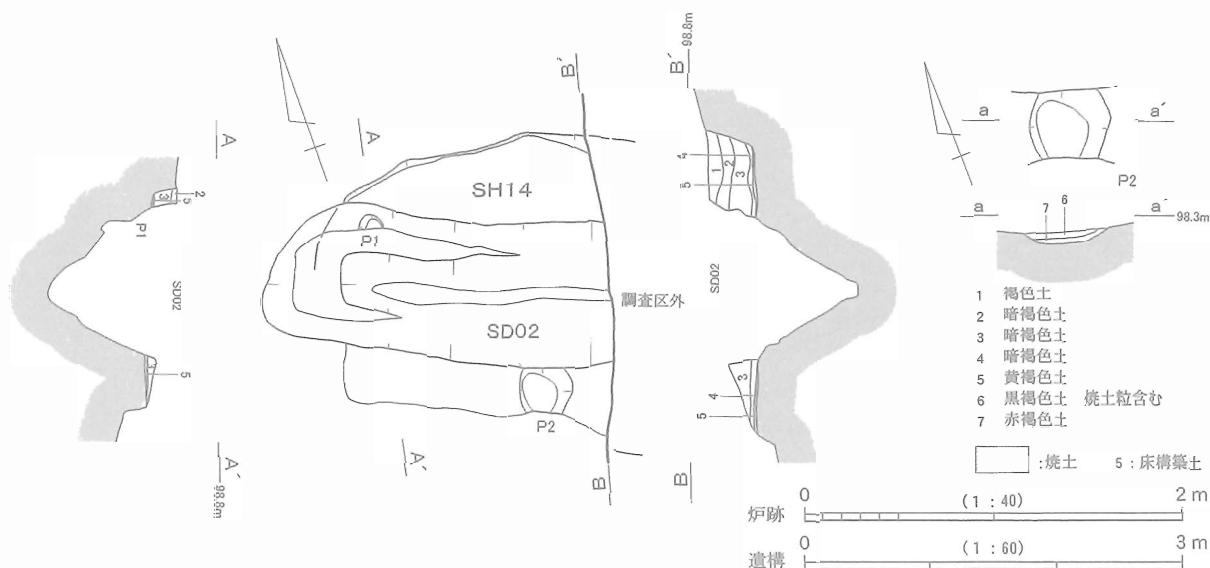
平面形は、楕円形に復原できる。主軸方向はN-約13°-E、規模は長軸2.45m以上、短軸2.2m以上、確認面から床面までの深さは北部で約0.35mである。覆土は褐色を基調とし、焼土粒・炭化粒・黄色土ブロックを含む。

床面は、平均標高98.3mで概ね平坦である。全体に黄褐色の床構築土が施されていたが、その厚さは0.02mと薄い。炉の周辺の床面は堅緻、周縁の床面は軟弱であった。壁溝はない。

主柱穴は、北西隅より約0.2m内側で1基(P1)を検出した。4本柱が配置されたと推測できる。P1は円形に復原でき、径約0.2m、底径約0.15m、床面からの深さ約0.4mである。炉は、建物の中央やや北寄りにあたる位置に1基(P2)を検出した。不整円形の掘り込みであり、規模は東西約0.5m、床面からの深さ約0.07mである。底面全体に厚さ約0.03mの焼土層が形成されていた。南北端部が破壊されており、置石の有無は不明である。

遺物は、土器片(第64図203~207)が出土している。しかし、少數が散在した状態で出土しており、取り上げ時にSD02に伴う土器が混在している可能性が高い。遺構の特徴や切り合い関係からは、弥生時代後期の建物である可能性が高いと判断できる。しかし、出土遺物による時期の特定は難しい。

(田村)



第51図 平椎遺跡SH14実測図

第17表 平椎遺跡竪穴建物の概要

遺構名	挿図	図版	調査区	グリッド	主軸方位	規模（長軸×短軸）	深さ	床面	出土遺物	遺物の主要時期
SH01	36	9	2 区	B5・B6	N-52° -W	1.6以上×2.5以上	0.08	貼床式	第55・56図	雌鹿塚II
SH02	37	10		B5	N-8° -W	4.3以上×5.3以上	0.3	貼床式	第57・58図	雌鹿塚II
SH03	37	10		B5	N-58° -E	7.0×1.8以上	0.3	直床式	—	—
SH04	38	10		B4	N-1° -W	3.9以上×3.2以上	0.1	貼床式	第62図	—
SH05	39～41	11～13		A4	N-4° -E	4.4×4.55	0.3	貼床式	第59・67図	大廓I～II
SH06	42	14		A3～A4	N-8° -W	2.8以上×2.8以上	0.2	貼床式	第62図	雌鹿塚II
SH07	43	14・15		A4	N-4° -E	4.2以上×3.5以上	0.1	貼床式	第62図	雌鹿塚II
SH08	44・45	16・17		A3～A4・ B3～B4	N-10° -W	4.55×3.85	0.4	貼床式	第60・61図	雌鹿塚I
SH09	46	17		B3～B4	N-12° -E	4.5以上×6.0	0.4	直床式	第62図	大廓I～II
SH10	47	18		B3	N-4° -W	4.3×3.1以上	0.2	貼床式	第62図	雌鹿塚II
SH11	48	18・19		A2～A3・ B2～B3	N-60° -W	3.3以上×4.8	0.2	貼床式	第63図	大廓I～II
SH12	49	19		B2	N-12° -E	4.8以上×3.1以上	0.1	貼床式	—	—
SH13A	50	18		B2	N-1° -W	3.6以上×2.5以上	0.4	貼床式	第63図	大廓I
SH13B	50	18		B3	N-17° -W	2.0以上×0.4以上	0.3	直床式	—	—
SH13C	50	18		B3	N-17° -W	3.2以上×0.6以上	0.1	直床式	—	—
SH14	51	20	1 区	H3・I3	N-13° -E	2.45以上×2.2以上	0.35	貼床式	第64図	雌鹿塚I～II?

※床面について、床構築土が確認できたものを「貼床式」、できないものを「直床式」と表記した。

単位 (m)

※規模については、南北方向が長い住居が多いため、基本的に南北方向を長軸としている。

※SH09は、弥生時代後期前半に建築され、弥生時代末～古墳時代初頭に建て替えられた可能性がある。

第18表 平椎遺跡溝の概要

遺構名	挿図	図版	調査区	グリッド	規模（長さ×幅）	深さ	出土遺物	遺物の主要時期
SD01	52	—	1 区	B4	1.5以上×0.35	0.04	—	—
SD02	51・53	20	2 区	I3	2.8以上×1.1	1.18	第64図	雌鹿塚II・大廓I～II

単位 (m)

2. 溝

(1) SD01 (第52図、第18表)

B4グリッドの中央部に位置する。幅約0.35m、検出長約1.5mである。北は調査区外、南は削平により消失している。深さは0.04m、横断面は皿状である。出土遺物はない。

(2) SD02 (第51・53図、第18表、図版20)

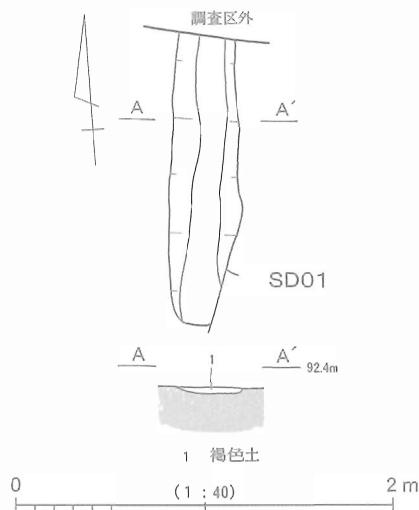
I3グリッド南部、1区に位置する。SHI4と重複しており、土層断面などによって、SD02がSHI4を切っていると判断できる。

検出した長さは約2.8mであるが、調査区の東側へのびる。幅は約1.1m、深さは検出面から1m以上、底面は標高97.5mでほぼ水平である。横断面形はV字形で、底面の幅は約0.1mである。溝の西端部では、中段（標高97.8m）にテラス部分が存在する。覆土は上層が褐色、中層が暗褐色、下層が黒褐色を基調とする。

遺物は、土器片が散在的に出土したほか、中層上位（第3図第18層）と中層下位（同第23層）にまとまった出土があつた（中層上位：第64図208・209、中層下位：同212・213）。ただし、完形品の出土はなかった（第64図）。中層上位の土器は弥生時代末～古墳時代前期、中層下位の土器は弥生時代後期前半に位置づけできることから、SD02は弥生時代後期前半から弥生時代末前後までの長い期間に存続していた可能性が指摘できる。

SD02の南側や北側に同様の遺構の発見がないことから、溝が方形や円形にめぐる可能性は低い。尾根を横断するように、東へ長くのびている可能性が考慮される。

（田村）



第52図 平椎遺跡SD01実測図

3. 土坑および小穴

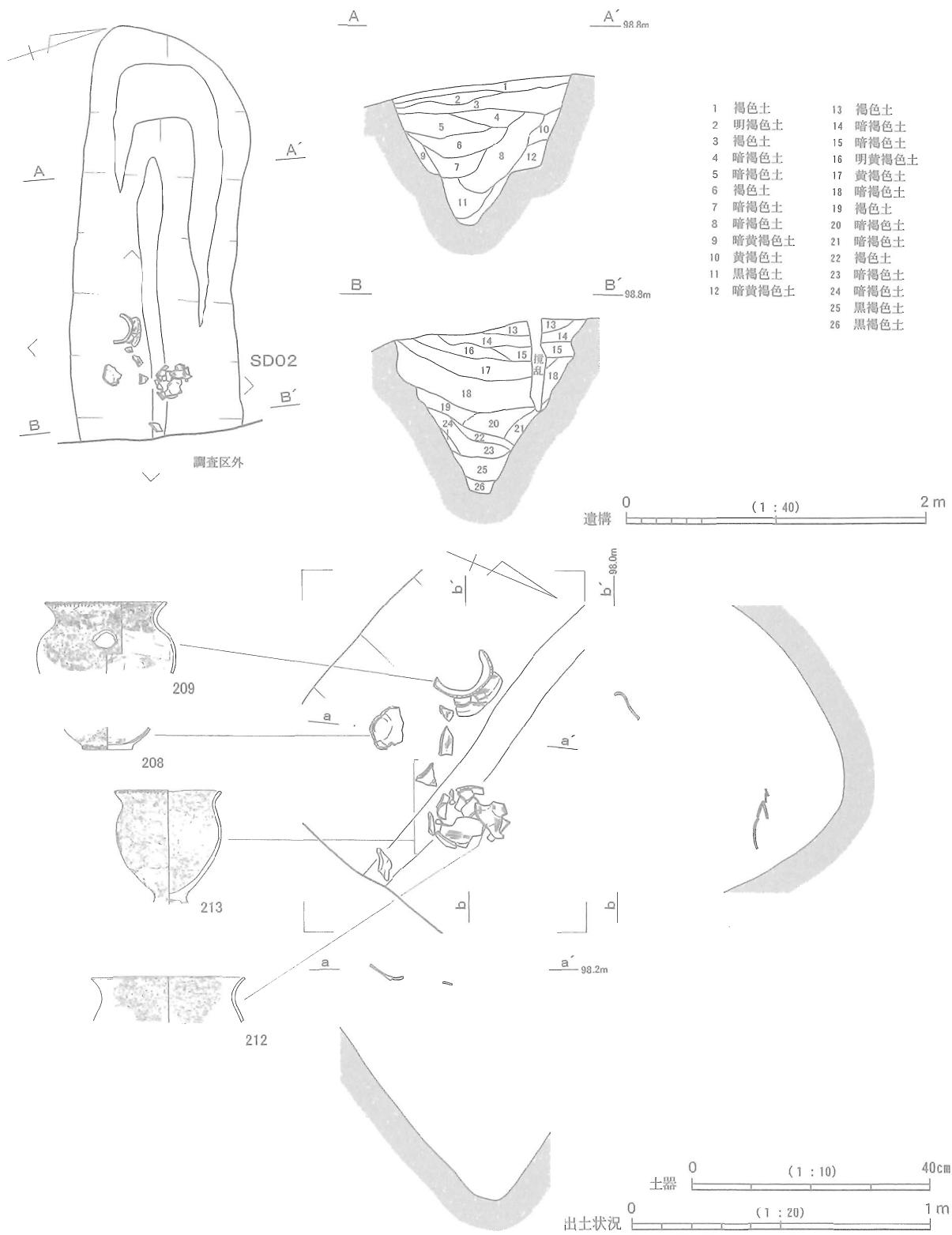
土坑・小穴については、茶畠や造成などによる攪乱を除いて38基を検出している。しかし、この中には、陥穴、柱穴などの可能性が指摘できるものほか、そうした性格が不明なものが多い。規模等の特徴は第19表に掲載する。

(1) 土坑 (第54図、第19表)

土坑とした遺構は6基（SK01～06）ある。SK01は、SH01を切る土坑であり、土器片（第55・56図）が出土している。出土遺物と切り合い関係から、弥生時代末～古墳時代初頭の遺構である可能性が高いと判断できる。SK02は、SH04と重複するが、先後関係は不明である。土器片（第58図99）の出土はあるが、遺構の時期の特定は難しい。また、遺構の形状から土坑墓の可能性も考慮されるが、明確な根拠はない。

SK03は、遺構の形状から柱穴などの可能性も指摘できる。出土遺物は土器の小破片（第62図148～150）だけである。SK04・SK05は遺物の出土がなかった。

SK06は、深さのある円形土坑である。遺構の形状から陥穴である可能性が高い。弥生時代後期前半の土器片がやや多く出土している（第63図192～202）。



第53図 平椎遺跡SD02実測図

(2) 小穴 (第34図、第19表)

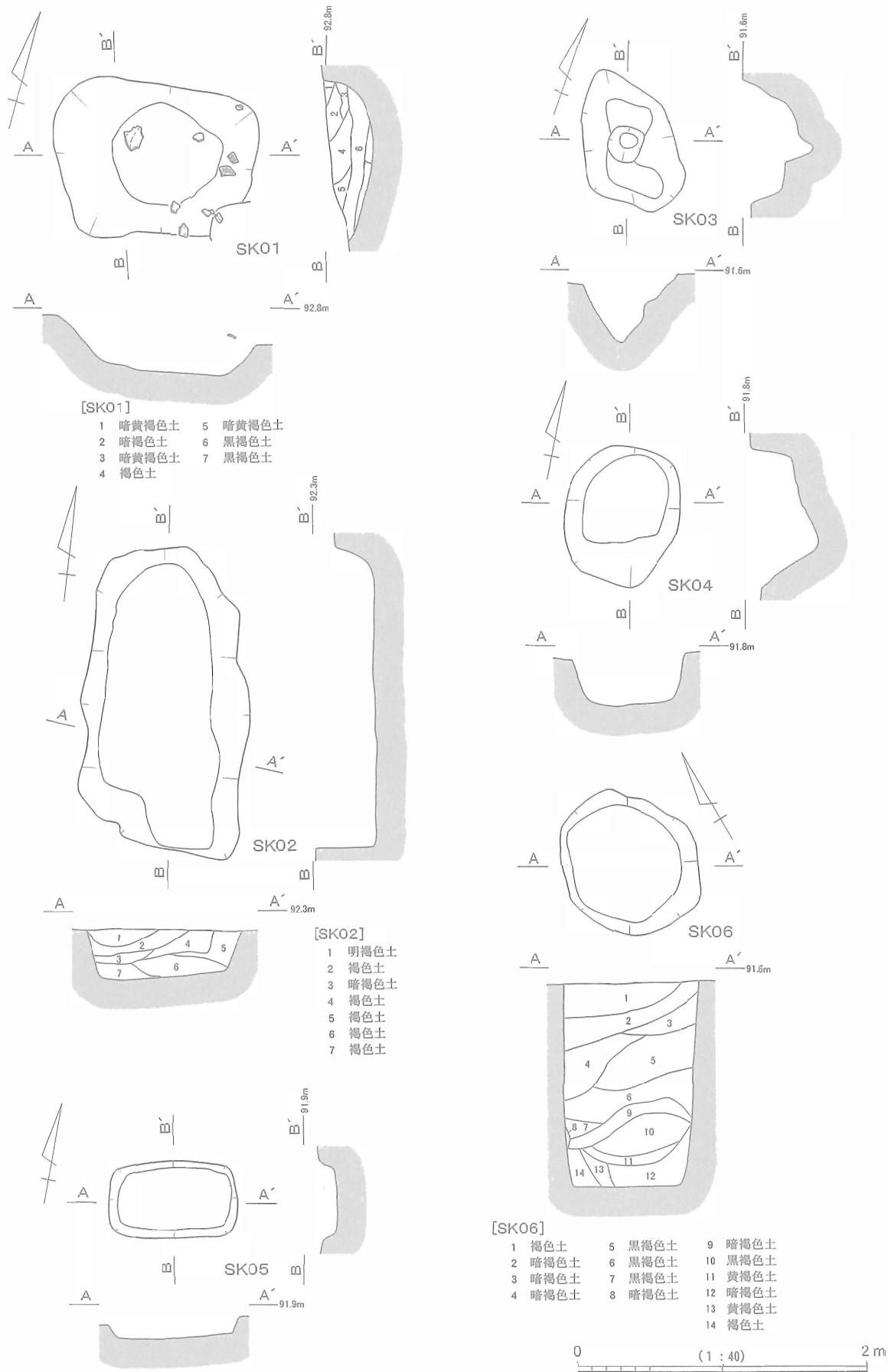
小穴とした遺構は32基 (SP01~32) ある (第34図)。この中には、平面形や深さの違いがあるほか、断面形において、壁体が垂直に立ち上がるもの (SP06・26・28など) と擂鉢状 (SP04・05・07・23など) といった違いが認められる。

遺物の出土は、SP04・05・06・07・08・19・23・26・28で認められた。SP28からは縄文土器片、その他からは弥生時代～古墳時代に位置づけできる土器片が出土している。SP04出土土器 (第58図101)、SP05出土土器 (第58図100)、SP23出土土器 (第62図159) については図化できている。なお、SP23出土の壺 (159) は、SH09や平椎第2号墳の周辺から出土した土器片と接合している。(田村)

第19表 平椎遺跡土坑および小穴の概要

種類	遺構名	挿図	図版	調査区	グリッド	規模 (長さ×幅)	深さ	出土遺物	備考
土坑	SK01	54	2区	C6	1.36×1.07	0.32	第55・56図		
	SK02			B4	2.07×1.15	0.34	第58図		
	SK03			A3	1.02×0.65	0.46	第62図		
	SK04			A3	0.94×0.80	0.4	-		
	SK05			B3	0.89×0.54	0.12	-		
	SK06			A3	1.08×0.89	1.8	第63図		
小穴	SP01	-	-	2区	B5	0.34×0.31	0.2	-	SH02内
	SP02	-	-		B4	0.78×0.64	0.28	-	SH04内
	SP03	-	-		B4	0.69×0.45	0.12	-	
	SP04	-	-		B4	0.84×0.59	0.48	第58図	
	SP05	-	-		B4	0.88×0.58	0.72	第58図	
	SP06	-	-		A4	0.31×0.27	0.5	-	
	SP07	-	-		B4	0.55×0.48	0.38	-	
	SP08	-	-		B4	0.50×0.49	0.62	-	
	SP09	-	-		B4	0.29×0.25	0.24	-	
	SP10	-	-		B4	0.25×0.24	0.22	-	
	SP11	-	-		B4	0.43×0.29	0.56	-	
	SP12	-	-		A4	0.11×0.11	0.14	-	
	SP13	-	-		A4	0.47×0.42	0.22	-	
	SP14	-	-		A4	0.31×0.27	0.68	-	
	SP15	-	-		A4	0.56×0.39	0.28	-	
	SP16	-	-		A4	0.31×0.29	-	SH07内	
	SP17	-	-		A4	0.36×0.28	0.4	-	SH07内
	SP18	-	-		B4	0.42×0.42	0.28	-	SH09内
	SP19	-	-		B4	0.56×0.35	0.58	-	SH08・09内
	SP20	-	-		B3	0.26×0.24	-		
	SP21	-	-		A3	0.39×0.38	0.46	-	
	SP22	-	-		A3	0.25×0.24	0.39	-	
	SP23	-	-		A3	0.58×0.35	0.44	第62図	
	SP24	-	-		B3	0.23×0.19	0.45	-	
	SP25	-	-		B3	0.29×0.26	0.11	-	SH10内
	SP26	-	-		B3	0.29×0.21	0.26	-	SH10内
	SP27	-	-		B3	0.35×0.20	0.4	-	SH10内
	SP28	-	-		B3	0.39×0.37	0.6	-	
	SP29	-	-		B3	0.40×0.44	0.26	-	
	SP30	-	-		B3	0.60×0.37	0.12	-	
	SP31	-	-		B2	0.14×0.12	0.52	-	SH12内
	SP32	-	-		B2	0.49×0.37	0.08	-	SH12内

単位 (m)



第54図 平椎遺跡土坑 (SK01~06) 実測図

4. 出土遺物

弥生時代後期～弥生時代末（古墳時代初頭）の土器・石器（焼碟）が出土している。

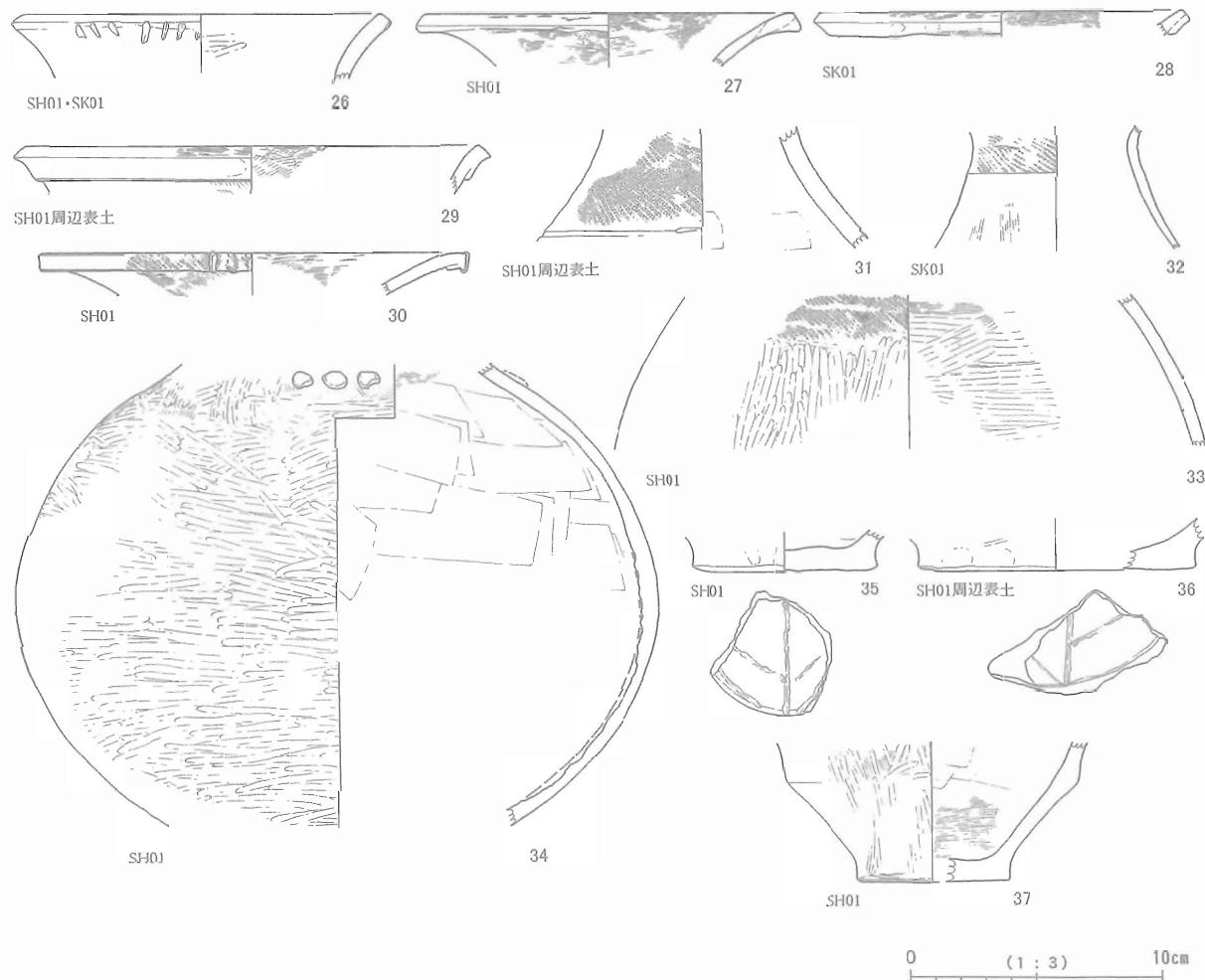
（1）土器

①SH01・SK01（第55・56図、第20表、図版24）

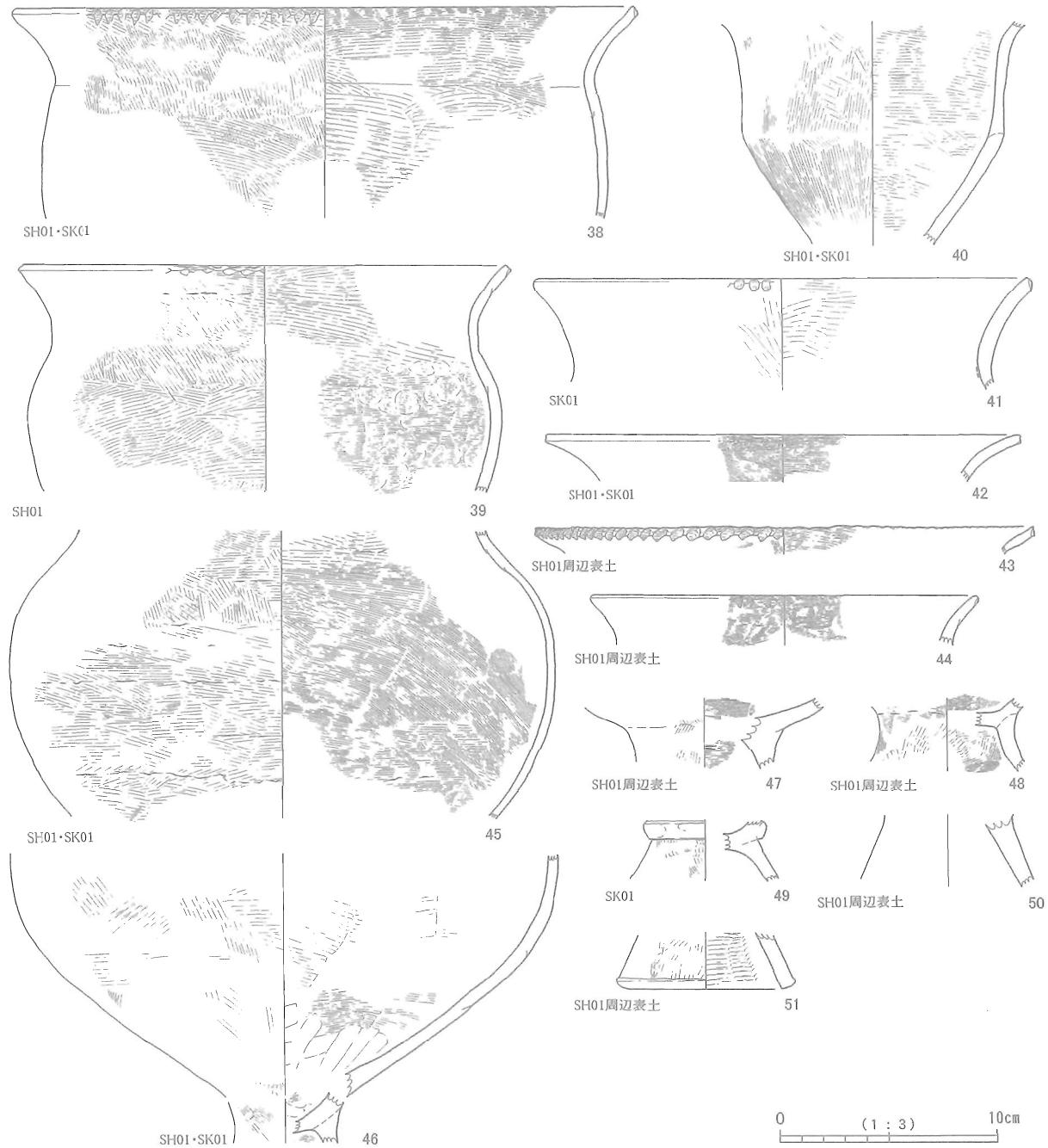
SK01がSH01を破壊していること、SH01・SK01出土遺物に接合関係があるものが存在することから、SK01出土遺物には本来SH01に伴う遺物が存在する可能性が高いため、ここでは一括して掲載し、報告する（註2）。SH01・SK01では、壺・台付甕が出土した。

特徴 壺は単純口縁壺（27）、折り返し口縁壺（28～30）、頸部～肩部片（31・32）、胴部片（33）、底部片（35～37）が出土した。26は形態的には壺であるが、口縁部に刻みが行われており、甕の可能性もある。

27は単純口縁壺である。27の口縁部は強く直線的に外反し、口縁端部を肥厚させ、外傾する面を形成する。口縁部外面には斜め方向のハケ調整、口縁部内面は横方向のハケ調整を行っている。28～30は折り返し口縁壺である。28は口縁部を折り返すが、薄い。口唇部は面取りされている。口縁部外面には斜め方向のハケ調整、内面は横方向のハケ調整を行っている。口唇部にもハケ調整が行われている。29は折り返しが非常に薄いもので、口唇部外面を外側に向かって強くつまみだし、口唇部に面を形成する。口縁部外面はハケ調整が行われている。30は折り返しが薄く短く、粘土が口唇部下端にはみ出している。



第55図 平椎遺跡出土土器実測図②（SH01・SK01）



第56図 平椎遺跡出土土器実測図③ (SH01・SK01)

口唇部には細かい縄文が施され、その上に一条の棒状の浮文が貼り付けられている。

31・32は頸部～肩部にかけての破片である。31は肩部に沈線を一周巡らせ区画とし、その上位の頸部に羽状縄文を巡らせている。縄文の単位は1.5cm前後と短い。32は頸部に縄文が1単位確認できるが本来は羽状縄文を巡らせていたと想定できる。肩部との境には区画ではなく、肩部は丁寧な横方向のミガキが施されている。33・34は壺胴部片で、33は球胴に近いあるいはやや下膨れの胴部であったと想定できる。33は胴部下半に丁寧な縦方向のミガキが行われ、肩部には縄文が巡らされる。縄文の単位は2cm以上である。34は球胴で、内面はケズリ調整、外面は横方向の丁寧なミガキ調整が行われ、肩部には縦方向のハケ調整が行われ、その上に円形浮文が3つ貼り付けられている。この浮文は2箇所残存するが本来は十字方向に3箇所貼り付けられていたと想定できる。

35～37は壺の底部である。いずれも突出する底部で平底である。35・36には木葉痕が確認できる。37

は底部から外上方へ直線的に立ち上がった後、屈曲させ直立気味に立ち上がる胴部である。屈曲外面には明瞭な稜線が形成されている。外面には縦方向のミガキ調整、内面底部は横方向のハケ調整、その上位には板ナデ調整が行われている。

26は単純口縁壺の可能性と口縁部に刻みが施されるため甕の可能性がある。口縁部は緩やかに開いた後、口唇部を面取りし、その口唇部下位に刻みを施すが、押し引きによるものと想定できる。口縁部内面には横方向のミガキ調整が行われている。

甕（38～51）はすべて台付甕である。38は肩の張らない胴部で、長胴の深鉢形の胴部であった可能性が高い。頸部は緩く外反し、比較的長く延びる口縁である。口縁端部は面取りされ、その下端に刻みが巡らされている。胴部外面には肩までは斜め方向のハケ調整、頸部は縦方向のハケ調整、口縁部は斜め方向のハケ調整が行われ、口縁部内面には横方向のハケ調整が行われている。最大径が口縁部にあることから、比較的古い様相を留める。39は肩の張らない胴部で、長胴の深鉢形の甕であった可能性が高い。頸部は肩から垂直にたちあがり、そこから緩やかに開き、比較的長い口縁部をもつ。口縁端部は面取りされ、その下端に刻みが施される。最大径は口縁部と胴上部である。胴部外面には異方向の斜めハケ調整が行われ、頸部は斜めハケ調整が、内面は横方向のハケ調整が行われている。40は底部から逆ハ字形に開きながら立ち上がった後内側に屈曲させほぼ垂直に立ち上げ、頸部で急激に外反させる甕である。形態的な特徴からは西駿河、特に登呂式土器の影響があったと考えられる。41は緩やかに開く口縁部で、口縁端部は面取りされ、その下位に刻みが行われる。42はやや強く開く口縁部で、口唇部は面取りされ、その下端に刻みが行われている。43は強く開く口縁部で、口唇部は面取りされ、刻みが行われている。44は緩く開く口縁部で、口唇部に刻みを施す。口縁部内外面ともに横方向のハケ調整が行われている。45は肩の張る球胴に近い胴部である。胴下半は斜め方向のハケ調整を羽状に施すような意図は感じられるが、横方向に近いハケ調整となり、上半は縦方向、横方向のハケ調整が行われている。46は下膨れの胴部あるいは球胴に近い胴部で、台部は細く、直立に近い台であった可能性が高い。雌鹿塚式にはみられない形態であり、他地域の影響を強く受けた土器である。47は台基部の破片で、胴底部と台部を接合した後、接合部分に粘土を充填する。後述する49ほどではないが、西遠江の影響を受けた土器の可能性がある。49は台基部の破片で、胴部と台部の境に粘土を帯状に充填している。西遠江の強い影響を受けた土器と想定できる。48・50・51は台部の破片である。

編年の位置 27～32・35～37は弥生時代後期前半の「雌鹿塚式」（「雌鹿塚II式」、渡井1997aほか）、あるいは「東駿河IV-2様式」（萩野谷2002）、甕（38・39）は「雌鹿塚I式」（東駿河IV-1様式）の要素を有するが、45など最大径を胴中位や下位にもつものがあることから、「雌鹿塚II式」に位置づけられる。33・34は新しい要素を多くもつことから、弥生時代末～古墳時代初頭の「大廓式」（渡井1996・1997bほか）に下る可能性がある（註3）。新しい時期の遺物はSH01を破壊するSK01のものであろう。

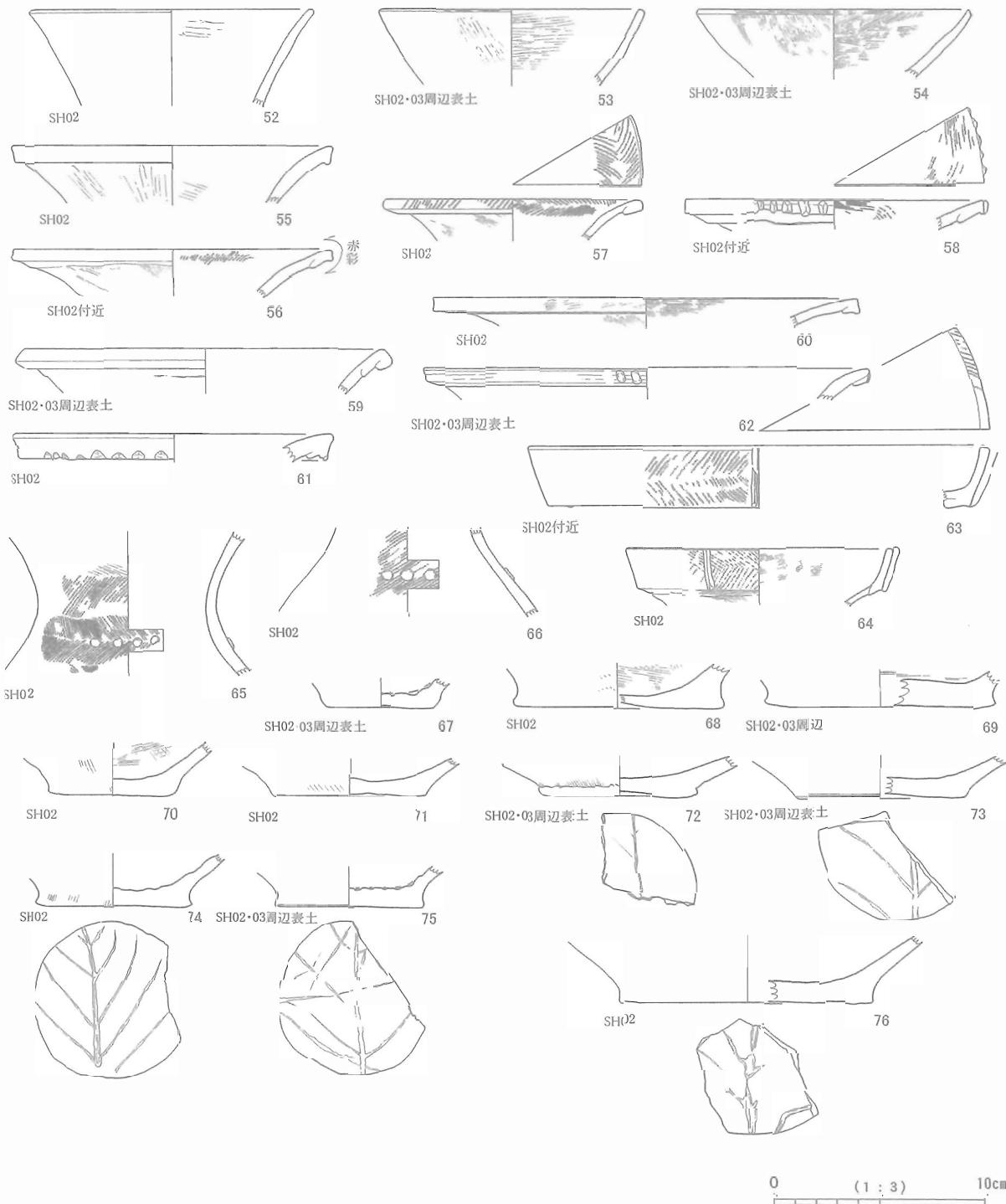
②SH02・SH03（第57・58図、第20表、図版24・25）

SH02がSH03を破壊しており、SH02・03は大部分が重複している。平椎第2号墳築造に伴う整地なども行われているためSH02・03周辺で出土した遺物も含めてSH02に伴うものとしてここで掲載・報告する（第57・58図）。

SH02では、壺・台付甕が出土した。

特徴 壺は単純口縁壺（52～55）、折り返し口縁壺（56～62）、複合口縁壺（63・64）、壺頸部～肩部片（65・66）、壺底部片（67～76）が出土している。

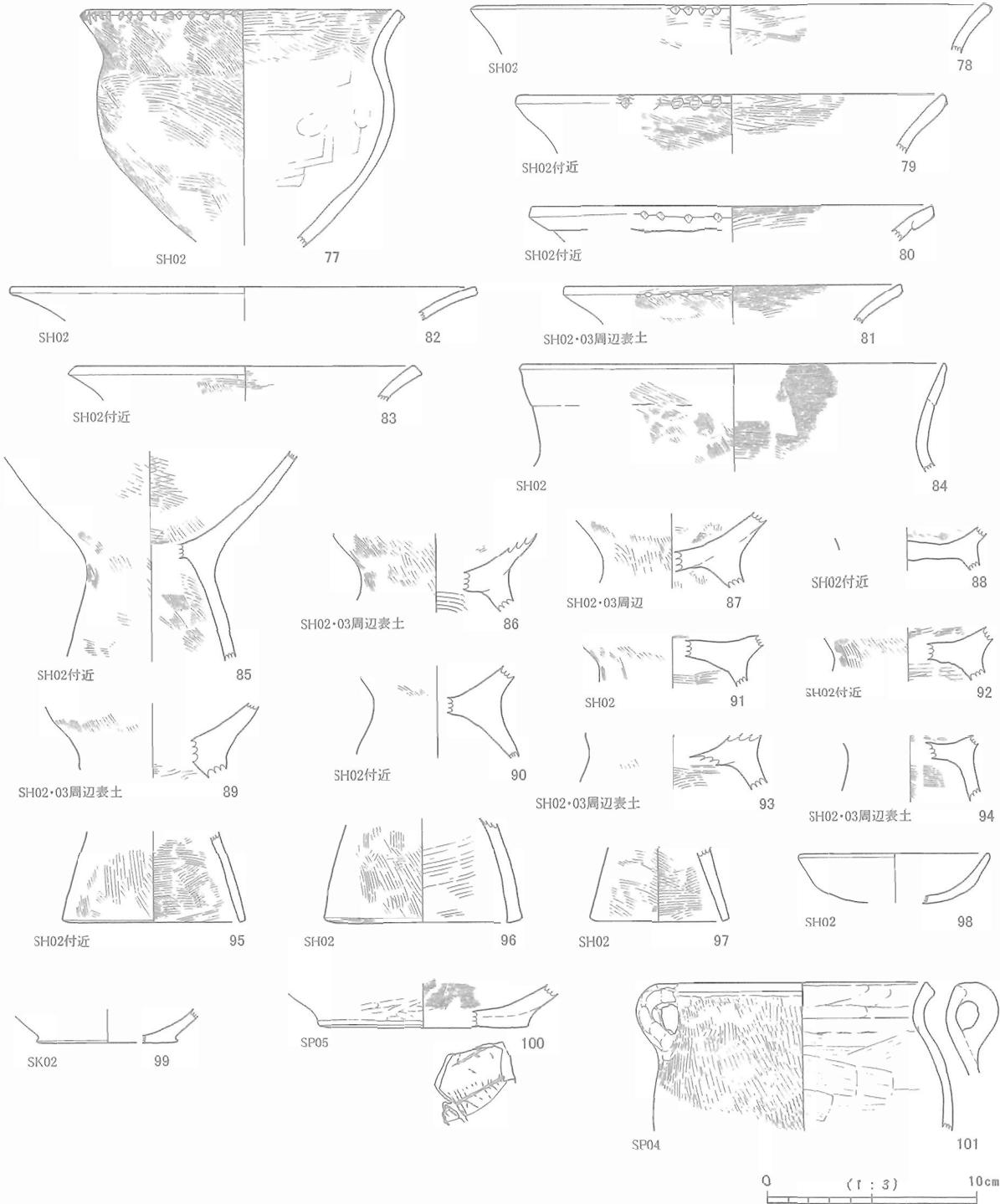
52は単純口縁の壺で頸部から外上方にやや外反しながら立ち上がり、口縁端部は丸く仕上げられる。



第57図 平椎遺跡出土土器実測図④ (SH02・03)

内外面ともに磨滅が著しいが、口縁部内面に横方向のミガキ調整が行われている。53・54は単純口縁壺で、頸部から内湾しながら立ち上がる。53の口唇部は面をもち、内面はハケ調整のちミガキ調整を行うが、ハケが残る。外面には斜め方向の丁寧なミガキ調整が施される。54の口唇部は面取りされ外傾する面をもち、その端面にはハケ調整が施される。外面は斜め方向のハケ調整、内面には横方向のハケ調整が行われる。口縁部が面取りされることから口縁部としたが、胎土は台付壺に近いため、台付壺の台部の可能性も残る。

55は単純口縁壺であるが、口縁端部を肥厚させて明瞭な端面を形成するものである。通常口唇部に施される繩文や浮文は施されていない。



第58図 平椎遺跡出土土器実測図⑤ (SH02・03, SK02, SP04・05)

56～62は折り返し口縁壺である。56は非常に薄く折り返したものである。57は、逆ハ字形に開いた口縁端部を折り返すもので、折り返しは薄い。口唇部には櫛刺突による刻みを施し、口縁部内面には羽状繩文を施す。58は口縁部を薄く折り返したもので、口縁端部には棒状浮文を貼り付ける。59は口縁部を短く折り返すもので、頸部には輪積み痕を残すため、壺の口縁部の可能性がある。輪積み痕を残す特徴は南関東に多く認められるもので、南関東との関係が考えられる。60は水平に近く外反した後わずかに口縁部を折り返すもので、口唇部にはハケ調整が行われている。61はやや厚く折り返した口縁部で、口縁端部を上方へ引き出し、口縁部外面の下端には押圧による刻みを施す。口縁端部をやや引き出す点や、

口縁部外面下端に刻みを施す点は菊川式土器の影響であろう。62は口縁部を薄く折り返した後、口唇部に刻みを施している。

63・64は複合口縁壺である。63・64ともに硬質な焼き上がりであり、63は他の土器との胎土も相違する。口縁部の形状や胎土の特徴から、中部高地の栗林式土器、箱清水式土器の影響を受けた土器あるいは搬入品の可能性がある（註4）。63は、頸部から急激に水平に近く外反させた後、その疑似口縁部を折り返すあるいは粘土を貼り付け、その疑似口縁部の上に、やや外傾して立ちあがる口縁部を取り付け複合口縁としている。口縁部外面には羽状縄文を施した後、棒状浮文を縦位に貼り付けている。64は頸部から急激に外反させ、疑似口縁部を造り出し乾燥させた後、外傾して立ち上がる口縁部を貼り付け複合口縁としている。口縁部外面には羽状縄文を施した後、縦位に棒状浮文を貼り付ける。

65・66は壺の肩部～頸部片である。65は肩部から頸部にかけて羽状縄文が施されている。縄文の単位は1.5cm前後と短い。縄文は非常に細かい単節縄文を4段に亘って施している。胴部と頸部の境には円形の浮文を4つ貼り付けている。羽状縄文の上位にはハケ調整後ミガキ調整が行われているが、ミガキ調整と羽状縄文との間に区画線はない。66は胴部から頸部にかけて羽状縄文を施すが、65と比較して4cm以上と1単位が長い。羽状縄文の下位にはミガキ調整が行われ、肩部には円形浮文が3つ残る。

67～76は壺底部片である。68・69・72・74～76が「雌鹿塚様式土器」に特徴的な底部の外縁が突出する形態である。67・68・71～73が上げ底状に床面中央部が窪む。72～76は、底部に木葉痕が確認でき、75・76は、葉脈の痕跡が消えかかっていることから、底部を簡単に撫でた可能性と、木葉を置き替えたために不明瞭となった可能性が想定できる。胴部下部の内・外面ともにハケ調整を行っている。

77～97は台付甕である。77は口縁部から胴部下半まで残存するもので、胴部には明瞭な肩部は形成されておらず、頸部から緩やかに胴部に至り、胴部は扁平な球胴で、胴部下半は急激に幅を狭めている。外面のハケ調整は、胴部下半は斜め上方あるいは横方向に、肩部は横方向に近い状態のハケ調整が施される。頸部は胴部の調整とは区分して行われ、頸部には斜め上方に向けて口縁部まで行われている。口縁部内面は横方向のハケ調整が行われている。口縁部は外傾する面をもち、口縁端部下端には刻みが施される。最大径は口縁部にあり、胴部最大径も胴上部にあることから比較的古い様相を留める。78・79は緩やかに開く口縁部で口唇部に刻みが施される。80は輪積み痕を残す口縁部で、口唇部は面取りされ、刻みが行われている。南関東の影響が窺える。81は頸部からやや強く開く口縁部で、口唇部には刻みが行われる。84は頸部から直立に近く比較的長く立ち上がる台付甕で、口縁端部は強くなれ細くなっている。外面は斜め方向のハケ調整、内面は横方向のハケ調整が行われている。82はやや強く開く口縁部で口唇部は面取りされるが、刻みは行われていない。83は緩やかに開く口縁部で口縁端部はやや肥厚し、端面をもつ。口唇部には刻みは行われていない。85～94は甕台基部である。内外面ともにハケ調整が行われている。

SH02・03出土土器は、地元の雌鹿塚式土器のほか、菊川式土器の影響を受けた61、駿河から南関東に広がる口縁部に輪積み痕を残す59・80、中部高地系の63・64など多系統の土器が確認できる点が興味深い。

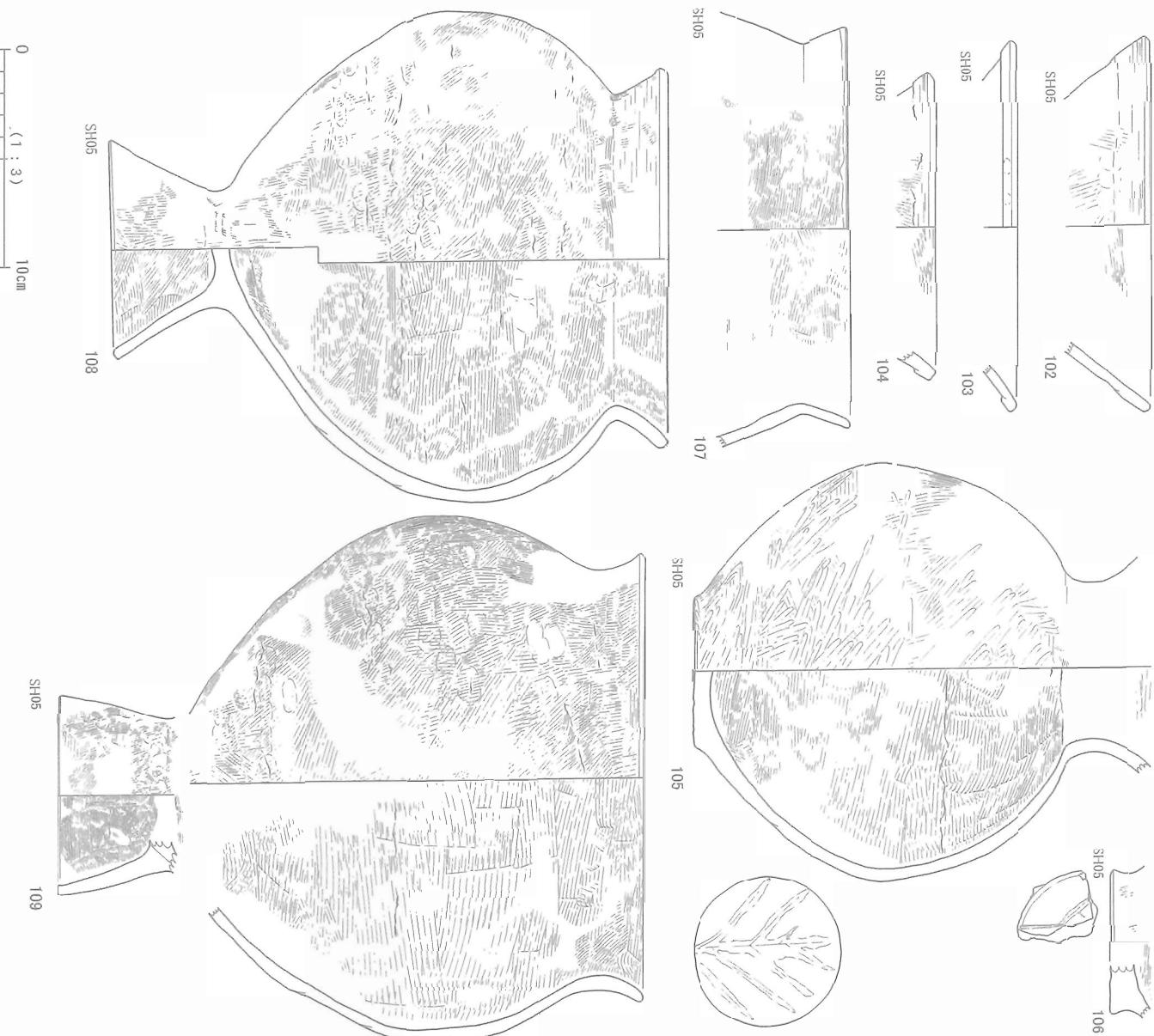
98は土師器坏である。SH02の覆土中から出土しているが、SH02に直接伴うものではなく、平椎第2号墳に伴う遺物である可能性が高い。

編年の位置 「雌鹿塚式」前半（「雌鹿塚II式」）に位置づけられる。

③SH05（第59図、第20表、図版25）

SH05では壺、台付甕が出土した。

壺は単純口縁壺（102）、折り返し口縁壺（103・104）、頸部～胴部片（105）、底部片（106）がある。



第59図 平椎遺跡出土土器実測図⑥ (SH05)

特徴 単純口縁壺 (102) は外上方に向かい逆ハ字形に開く形状で、口縁端部は丸く收められる。口縁部には横ナデ調整が行われ、一部輪積み痕を残す。折り返し口縁壺 (103) は頸部から急激に外側に開いた後、口縁部を短く薄く折り返すもので、口唇部は面をもつ。104は逆ハ字形に開いた後、薄く折り返すもので、口唇部には面がある。

頸部～胴部を残す壺 (105) は、平底で、ほぼ球胴である。頸部は胴部との接合部から直立した後、外反するものである。胴部外面には斜め上方へのミガキ調整、胴部内面には頸部の接合部までハケ調整が施されているが、外面には文様は施されていない。底部には木葉痕が残存する。底部片 (106) は平底で、底面には木葉痕が残る。

壺は台付壺 (107～109) が出土している。107は「く」の字口縁の台付壺の胴上部～口縁部片で、肩

の張りは弱く、口縁部は胴部との接合部からハ字形に直線的に開く。口唇部には刻みは施されない。108は全容が判明する台付壺で、台部はハ字形に直線的に開くもので、外面には縦方向のハケ調整、内面にもハケ調整を施す。胴部は胴中央に最大径をもつ球胴でハケ調整を施す。口縁部は接合部から逆ハ字形に開くもので、「雌鹿塚式」には確認されない、口縁部は横ナデ調整が行われている。口唇部には刻みは施されていない。109はほぼ全容が判明する台付壺であるが、胴部と台部との接合面はない。台部はほぼ直立するものであり、ハケ調整が行われている。胴部は胴中央に最大径をもつもので、頸部と胴部との境は明瞭ではない。口縁部は短くやや外反し、口唇部は丸く収められる。胴部外面には上方、斜め上方へのハケ調整、頸部～口縁部にかけては縦方向のハケ調整が行われている。

編年の位置 SH05出土土器は球胴を志向した無文の壺、口縁部の横ナデ調整や、ハ字形に開く台部など、また外来系土器の特徴を有する壺（108）の出土から大廓式前半（「大廓Ⅰ～Ⅱ式」）に位置づけることができる。

④SH08（第60・61図、第20表、図版26・27）

SH08からは複合口縁壺（117）、折り返し口縁壺（112～116）、単純口縁壺（110・111）、壺片（120～133）、直口壺（134）、折り返し口縁壺あるいは単純口縁壺（119）、高坏（135-1・135-2）、台付壺（136～143）が出土した。

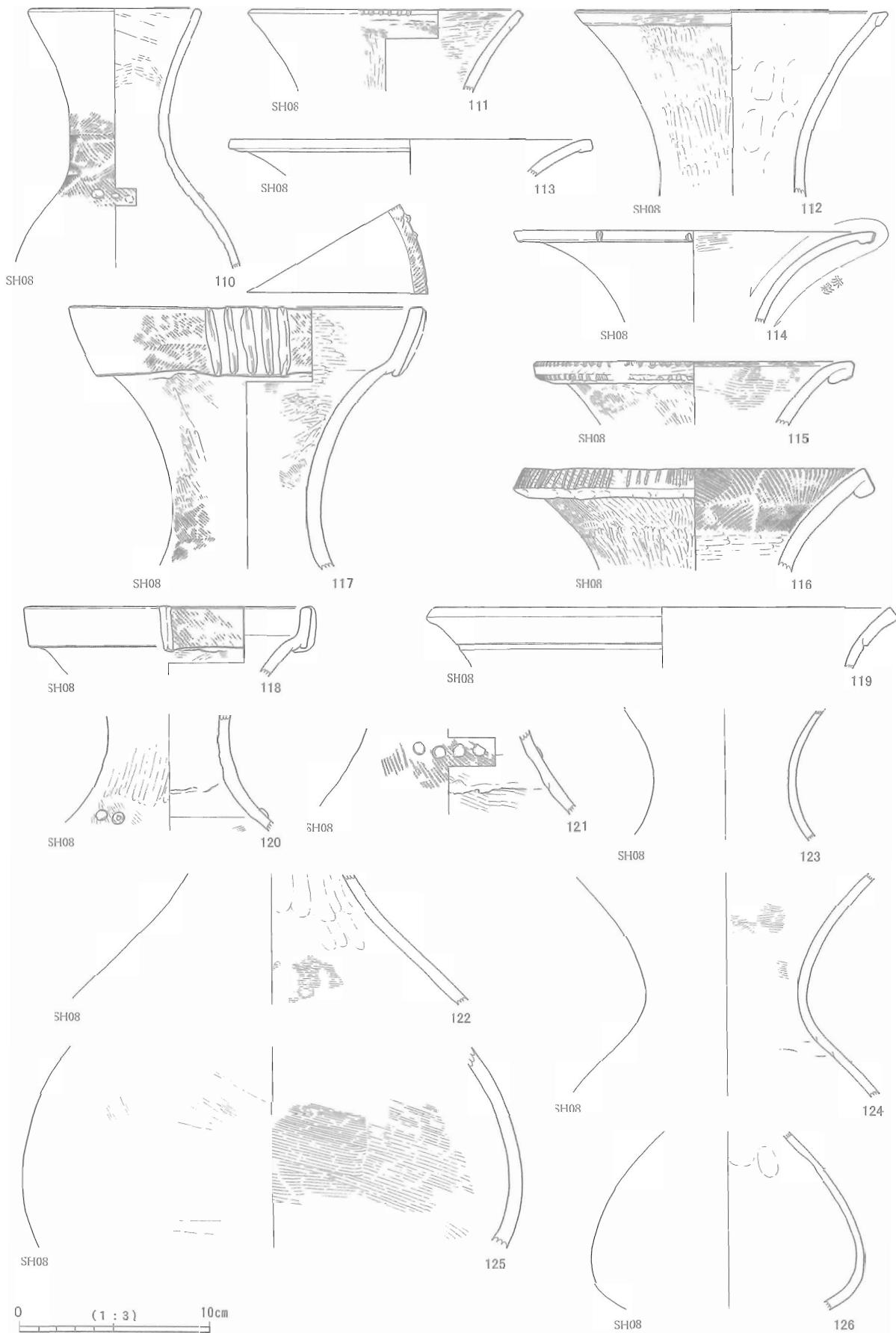
特徴 単純口縁壺（110）は長い細頸壺で、肩部～頸部に単位の短い羽状縄文を施す。肩部には羽状縄文を施した後、円形浮文を貼り付ける。口縁端部が頸部から緩やかに外反しながら立ち上がり、口唇部は丸く収められている。胴部は肩が張らない。胴部下半が欠損しているが、無花果形の胴部であった可能性が高い。111は逆ハ字形に外反するもので口唇部は外傾する面をもち、その面に刻み調整が施されている。口縁部外面には縦位のミガキ調整、内面には横位のミガキ調整が施されている。

折り返し口縁壺（112）は逆ハ字形に外反するもので、口縁端部は断面三角形に薄く折り返され、口縁部内面には内傾する面をもつ。頸部から口縁部外面は丁寧なミガキ調整、内面には指頭圧痕が残る。113は口縁部が急激に外反するもので、口縁端部は短く薄く折り返されている。口唇部は外傾する面をもつ。114は113と同様口縁部が急激に外反するもので、口縁部は薄く折り返される。口唇部は外傾する面をもち、そこに短い棒状浮文が貼り付けられる。頸部は細い。内外面ともに赤彩が施される。

115は、逆ハ字形に外反し、さらに口縁端部で稜線を設けてさらに外反し、平椎遺跡の中では珍しく口縁部を厚く折り返すものである。口唇部には面をもち、口唇部上端、下端に刻み調整を施す。口縁部外面は縦位のハケ調整、内面は横位のハケ調整を施す。菊川式土器の影響を受けているが、口縁部外面のハケ調整などその特徴とは異なる調整方法を採用しており、その影響を受けて地元で生産された可能性が高い。116は同じく口縁部を厚く折り返す折り返し口縁壺である。外面は口縁部にハケを残し、頸部に縦位のミガキ調整を行い、頸部内面には横位のミガキ調整、口縁部内面には羽状縄文を施す。内面は羽状縄文を施した後、ミガキ調整を行っている。口唇部は外傾する面が形成され、斜めハケ調整を行った後、刻みを施している。これらの特徴は菊川式土器の特徴と一致することから菊川式土器様式圏からの搬入品の可能性が高い（註5）。

折り返し口縁壺か輪積み痕を残す単純口縁壺（119）は口径が24cmに反転復原できる大型の壺で逆ハ字形に外反する。口縁端部を幅広く薄く折り返すか、沈線状に輪積み痕を残すものである。口唇部は外傾する面をもつ、

複合口縁壺（117）で、細い頸部から外反して立ちあがった後、疑似口縁部を造り、それにやや外傾して立ち上がる口縁部を接合するもので、口縁部外面には羽状縄文を施した後、5条1組の棒状浮文が縦位に貼り付けられている。頸部外面には単位幅の短い羽状縄文が施され、頸部には複合口縁部（疑似



第60図 平椎遺跡出土土器実測図⑦ (SH08)

口縁部) 直下にハケ調整の痕跡が残るが、縦位、斜位のミガキ調整が行われている。内面は丁寧な縦位、斜位のミガキ調整、口縁部は横方向のミガキ調整が行われている。口唇部は水平な面が形成され、縄文が施されている。SH06出土の複合口縁壺と比較すると、頸部がやや長いため、SH06出土のものよりも時期的に遡及する可能性がある(渡井1997a)。118は頸部から逆ハ字形に外反し疑似口縁部を形成した後、ほぼ直立する口縁部を貼り付けたものである。口縁部外面には縄文を施し、一条以上の縦位の棒状浮文を貼り付けている。表面の磨滅が著しく調整方法は不明確であるが、頸部上部(疑似口縁部直下)にはハケ調整の痕跡が残る。

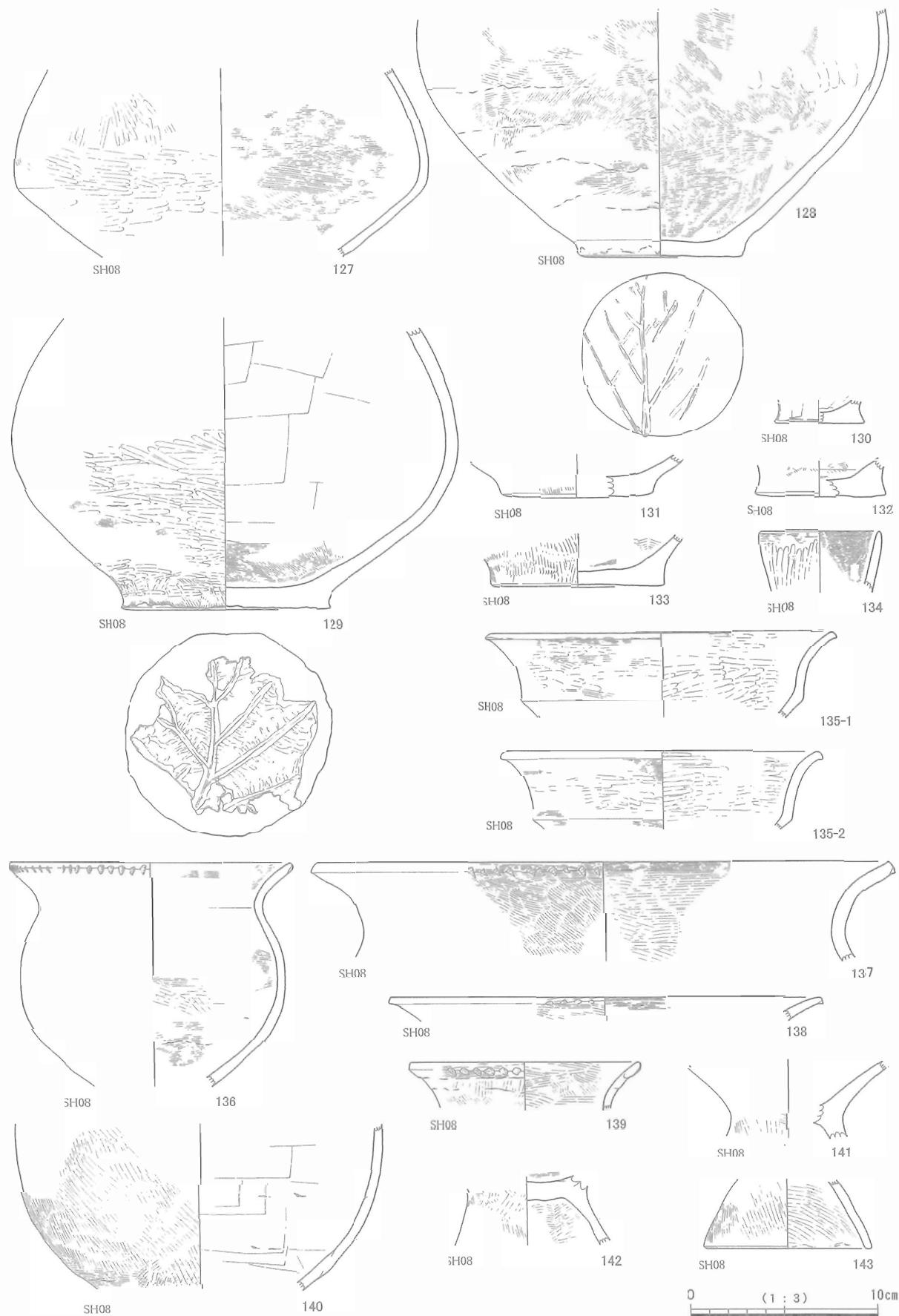
壺の頸部～胴部片(120)は肩部にハケ調整、頸部に縦位のミガキ調整を施す。肩部には円形浮文が二つ以上貼り付けられている。この円形浮文の一つから、円形浮文は細い紐状の粘土を円形に貼り付け輪を作った後その内部に別の粘土を充填する方法を採用していた可能性が高いことが分かる。頸部内面には輪積痕を残す。121は肩部から頸部に縄文(図では縄文としたが、文様の残存状況が不良であることからハケ調整の可能性もある)を施した上で4点1組の円形浮文を貼り付けている。肩部内面には輪積痕を残す。123は頸部から外反する壺頸部片である。内外面ともに表面の磨滅が著しく、調整については不明である。122は壺肩部片で頸部からハ字形に開いた後無花果形の胴部となると想定できる。外面の磨滅が著しく調整不明であるが、内面には下位にハケ調整、その上位に粘土紐接合のための指頭圧痕が残る。124は頸部から急激に外反する壺である。内外面ともに磨滅が著しいが、肩部内面に輪積痕を残す。125は、胴部最大径を胴部下半に有するもので、無花果形の胴部であったと想定できる。外面は磨滅が著しいが、ハケ調整の痕跡が残り、内面には斜位のハケ調整が施されている。126・127は胴部下半に最大径をもち、底部に向けて急激に窄まる無花果形の胴部である。127は胴部外面下位に横位のミガキ調整、その上位に縦位のミガキ調整を施す。このような胴部下半に明瞭な屈曲を有するのは菊川式土器の特徴であり、その影響を受けた土器である可能性が高いが、菊川式は胴部最大径付近の横位のミガキ調整の上はハケ調整を残すものが多く、若干の変容が生じていると考えられる。

128は無花果形の胴部であったと想定できる。胴部最大径は胴中位にあった可能性が高い。底部は平坦で、木葉痕を残す。胴部外面はハケ調整を行うが輪積み痕が残る。内面にもハケ調整が施されている。129は無花果形胴部で、胴部最大径を胴部下半に有する。底部は平坦であるが、「雌鹿塚様式」(篠原2006, 註6)に特徴的な端部を外側に突出させる特徴をもつ。底部には木葉痕が残る。底部外面はハケ調整、胴部は横位のミガキ調整、内面底部はハケ調整、その上位は板ナデ調整が行われている。

130～133は壺底部片で、132・133は「雌鹿塚様式」の特徴である、底部外面が突出する。130は底部外面が突出する特徴を有するが、外面に色調が黒色であること、底部が狭いことなど、「雌鹿塚様式」の特徴から逸脱しており「雌鹿塚様式」以外の土器様式の影響を受けた土器である可能性がある。132・133はやや上底である。130～133の底部に木葉痕は確認できない。

直口壺(134)はやや外上方に立ち上がる口縁部をもつもので、口唇部は丸く収められている。口縁部外面には縦位のミガキ調整、口縁端部は横ナデを行っている。平底でやや扁平な球形の胴部からほぼ直立して口縁部に至るものであった可能性が高い。この特徴を有する土器は、西遠江(天竜川以西)に分布する伊勢湾岸系の山中大様式に特徴的な土器であることから、その土器様式圏(特に西遠江)から搬入された土器である可能性が高い(註7)。

高坏は1点あるいは2点の有稜高坏(135-1・135-2)出土している。135-1・135-2の接合部はないが非常に胎土・形態が類似しているため同一個体とするか、形態が細部でやや異なるため別個体とするか断定できないため、破片2点を図示した。135-1は坏底部が内湾して広がり口縁部が外反して開くもので、稜は突出気味に強く屈曲する。口縁部内外面ともに横位の丁寧なミガキ調整が行われている。口縁部外面には波状文は確認できない。135-2は、135-1と同様の特徴を有するが、口縁部の開き方が緩やか



第61図 平椎遺跡出土土器実測図⑧ (SH08)

で、やや口径も小さく復原できる。胎土は非常に同質性が高いことから同一個体の反対側の口縁部付近の破片の可能性があり、同一個体か別個体か判断が難しい。この高壺の特徴は、直口壺（134）と同じく伊勢湾岸系の山中大様式に特徴的な高壺である、その土器様式圏から搬入された可能性が高い（註5）。別個体であるとすれば、2個体が搬入されたことになるだろう。また、直口壺の胎土とも同質性が高く、同一地域から搬入された可能性が高い。

甕（136～143）はすべて台付甕である可能性が高い。136は口縁部が胴部よりも大きい個体である。胴部は球胴に近く、くの字形の頸部で、口縁部は頸部から急激に外反する。口唇部下端に刻みが行われている。外面調整は煤が付着する部分が残存するにもかかわらず、ハケ調整の痕跡が確認できないことから、外面ナデ調整が行われた、いわゆる「ナデ甕」の可能性がある。内面には胴部と口縁部の接合部分に稜線が確認できる。「ナデ甕」であるとすれば、関東地方の影響を受けた甕といえる。

137は大型の台付甕の可能性が高い。口縁部は頸部から外反して立ちあがった後、口縁部でさらに強く外反する。口唇部は外傾する面をもち、口唇部下端に刻みが施されている。内外面ともにハケ調整が行われている。なお、137は土器胎土に発泡が確認でき、海成粘土を利用した可能性がある。

138は逆ハ字形に強く開く口縁部で、口唇部外面を外側に強く摘み出し、その部分に刻みを行っている。139は口縁部に輪積痕を残す甕であり、関東系の甕であるといえる。口縁部は頸部から外反して開くもので、口縁端部は丸く収められ、口唇部外面に刻みを施す。口縁部外面はハケ調整、内面もハケ調整を施す。口縁部が丸く収められるのは他の137・138には看取できない特徴である。

140はやや扁平な球形の胴部の破片で胴部中央付近に最大径のある甕の可能性が高い。外面ハケ調整、内面板ナデ調整、またはケズリ調整が行われている。

141・142は台基部片で、台部はハ字形に垂下する。接合部よりやや下から台部はハ字形に開くという「雌鹿塚様式」の特徴をもっている。143は台部片であり、やや内湾気味にハ字形に垂下する。

編年の位置 SH08出土土器のうち、台付甕は最大径が口縁部にあること、複合口縁壺は頸部が細く長いこと、単純口縁壺（110）の特徴から、「雌鹿塚式」の最古段階（「雌鹿塚I式」）に位置づけることができる（篠原2006、渡井1997a）。これは、遠江からの搬入品である可能性が高い折り返し口縁壺（116）が菊川式古～中段階に位置づけられることからも傍証となる。したがって、今回調査した平椎遺跡の中では最も古い時期に位置づけられる堅穴建物およびその土器群とすることができます。後期前半に位置づけることができるだろう。

また、SH08出土土器には菊川様式、山中大様式など遠江以西の地域からの搬入品と想定される土器が出でている一方で、輪積痕を残す関東の影響を受けた甕も出土しており、遺跡の成立にあたって、この集落を営んだ集団が遠江以西や関東との交流をもつた集団である可能性が高いことが想定できる。

⑤SH06（第62図、第20表、図版27）

SH06からは複合口縁壺（144）と甕の台基部片（145）が出土した。

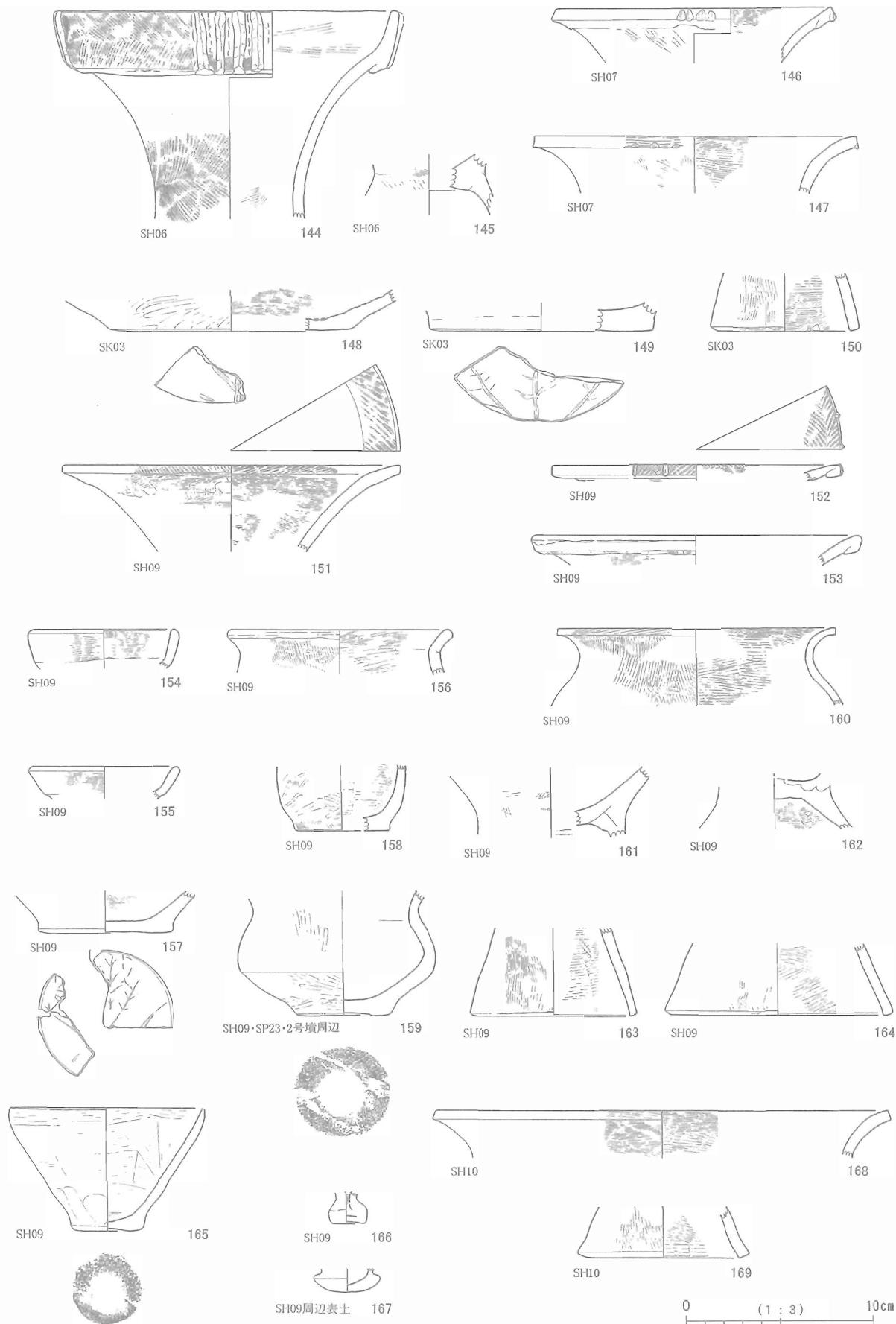
特徴 複合口縁壺（144）は頸部～口縁部片で、胴部から直立した後、外反し、口縁部はほぼ直立する。口唇部は面をもつ。頸部には羽状縄文が施される。口縁部外面には羽状縄文を施した後4条一組の棒状浮文が貼り付けられている。棒状浮文は4条一組が十字に4箇所施されている。

甕（145）は台基部片であり、外面にはハケ調整を施す。

編年の位置 SH06は複合口縁壺（144）から、「雌鹿塚式」前半（「雌鹿塚II式」）に位置づけられる。

⑥SH07（第62図、第20表、図版27）

SH07からは壺（146）・甕（147）が出土した。壺は単純口縁壺である。



第62図 平椎遺跡出土土器実測図⑨ (SH06・07・09・10, SK03ほか)

特徴 単純口縁壺（146）は、逆ハ字形に外反する口縁部で、口縁部を薄く折り返す。口唇部は外傾する面をもつ。口唇部下端に刻みが施されている。

甕（147）は台付甕の口縁部破片で、頸部から急激に外反し、口縁部下端に刻みが施されている。

編年的位置 「雌鹿塚式」前半（「雌鹿塚II式」）に位置づけられる。

⑦SH09 (SP23・平椎第2号墳周辺を含む、第62図、第20表、図版27)

SH09からは、その周辺から出土したもの（167）を含めて、壺、甕、鉢、小型壺、ミニチュア土器が出土した。

特徴 壺は単純口縁壺（151）と折り返し口縁壺（152・153）、小型壺（154・155・159）、広口短頸壺（156）が出土した。

単純口縁壺（151）は頸部から外反しながら開いた後、口縁部直下でさらに強く外反する。この傾斜変換部分に稜をもつ。口唇部は面をもち、その部分に縄文が施され、口縁部内面にも縄文が施されている。

折り返し口縁壺（152）は、逆ハ字形に開いた後口縁端部を薄く折り返すもので、口唇部外面には面をもつ。口唇部には縄文が施され、そこに棒状浮文が貼り付けられる。口縁部内面には羽状縄文が施される。153は逆ハ字形に開いた後、口縁部を薄く折り返すものである。口唇部は傾斜する面をもつ。器面に発泡が確認できることから、海成粘土を利用して生産された可能性が高い。

小型壺（154・155）は、口縁部と頸部の境に稜をもち、口縁部はほぼ直立するか、やや開きながら立ち上がり、口縁端部は丸く収められる。口縁部は内外面ともに横方向のハケ調整が行われている。形態的には類似するが胎土・色調が異なるため、154・155は別個体であることは明らかである。158は小型壺の底部である。底部は平底で、木葉痕は確認できない。胴底部はハケ調整、その上位にはミガキ調整が行われている。内面には横ハケ調整が行われている。

小型壺（159）は、やや上底の底部で、扁平な無花果形、下膨れの胴部で、胴部下半に稜をもち、その部分が胴部最大径となる。器高は低い。底部は粘土紐の環を形成した後、その内部を充填することで底部を形成するものである。底部外面には横位あるいは斜位のミガキ調整、胴部上半から縦位のミガキ調整が施されている。胴部と頸部の接合部の内面には、稜が確認できる。遠江の菊川式や伊場式土器に見られる器形であり、その影響を受けた新来形式の土器といえよう。

広口短頸壺（156、広口鉢、あるいは小型の甕の可能性も残る）は口縁が広く、頸部が口縁部よりやや狭い形状のものである。頸部は「く」の字で、口縁部はそこから外反し短く立ち上がる。口唇部は丸く収められている。胴部の肩部～口縁部外面は縦位のハケ調整が施される。

157は底部片で、「雌鹿塚様式」に特徴的な底部外面を突出させている。

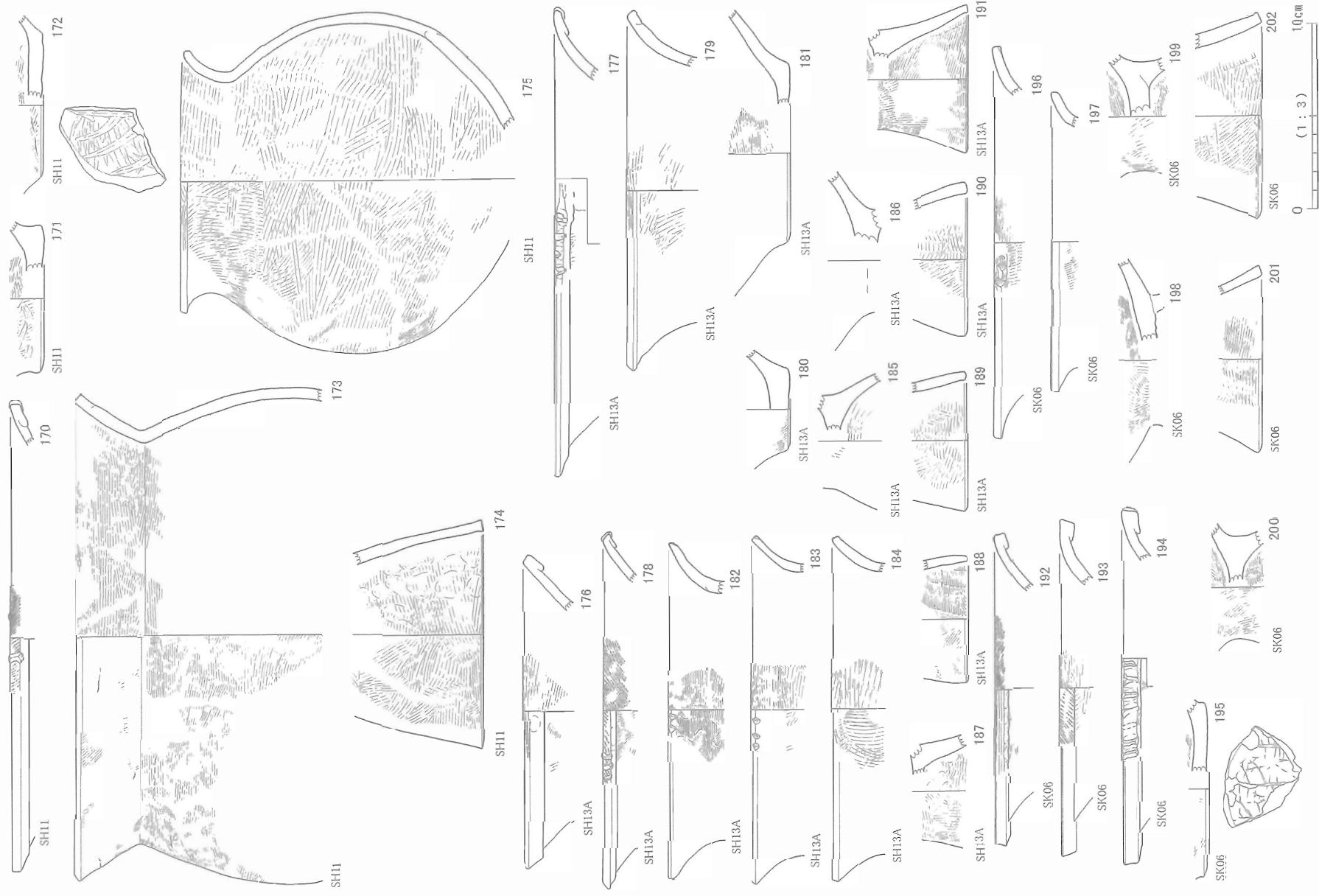
鉢（165）は、「雌鹿塚様式」には確認されない器形であり、大廓I式段階の外来系土器の影響を受けて生産された新しい器種である。底部はやや上げ底である。粘土紐の輪を造りその間を埋める技法で底部を形成し、胴部から口縁部は逆ハ字形に外上方に向かって開き、口唇部は細くつまみあげられる。底部付近の外面には指頭圧痕が残り、口縁部には横ナデ調整が施される。内面は板ヶズリ（ナデ）調整が行なわれている。

甕（160～164）はすべて台付甕である可能性が高い。

160は緩やかな肩部であり、口縁部は頸部から急激に外反する。肩部から口縁部にかけて連続する縦位のハケ調整が行われる。口唇部は面があるが、刻みは省略されている。161・162は台基部片である。163・164は台部の破片で、ハ字形に垂下する形態である。

166・167はミニチュア土器であり、166は上底の壺、167は壺を意識したものであろうか。

編年的位置 165など底部を粘土による輪を形成してから作る庄内式土器の影響を受けた技法の土器。



第63図 平椎遺跡出土土器実測図⑩ (SH11・13A, SK06)

や器形から、「大廓式」前半（「大廓Ⅰ式」）に位置づけられるだろう。

⑧SH10（第62図、第20表、図版27）

SH10からは、甕片（168・169）が出土した。

特徴 甕口縁部片（168）は外反しながら開く形状で、口唇部は外形する面をもつ、口唇部に刻みは施されない。口縁部外面には横ハケ調整が行われている。脚部片（169）はハ字形に垂下する脚部で、外面は縦ハケ調整、内面は横ハケ調整、斜めハケ調整が行われている。

編年の位置 甕口縁部に横ハケ調整を行っていることから、「雌鹿塚式」前半（「雌鹿塚Ⅱ式」）に位置づけることができる可能性が高い。

⑨SH11（第63図、第20表、図版28）

SH11からは壺（170～172）、台付甕（173～175）が出土した。

特徴 壺（170）は折り返し口縁壺で大型である。逆ハ字形に開いた後口縁部を薄く折り返すもので、口唇部は外傾する面を有する。この部分に繩文が施され、一条の棒状浮文が貼り付けられている。171・172は底部片で、171は「雌鹿塚様式」に特徴的な端部の突出が確認できる。171・172ともにやや上底で、172には複数の木葉痕が確認できる。

甕（173・175）は単純口縁の台付甕である。

173は、くの字口縁の甕で、肩の張りはなく、頸部から緩やかに胴中位に至る。球胴である可能性が高い。口縁部は屈曲から直線的に逆ハ字形に開き、口唇部は外傾する面をもつ。口唇部には刻みは行わっていない。胴部外面には横ハケ調整、口縁部には縦ハケ調整が施されている。内面は胴部と口縁部の接合部には明瞭な屈曲が確認でき、突出する稜となっている。内面は横ハケ調整が行われている。175はく字形口縁の台付甕である。胴部は球形で、胴中位に最大径をもつ。口縁部は胴部から外反しながら立ち上がり、口唇部は丸く収められる。口唇部に刻みは施されていない。口縁部外面には肩部から連続する縦ハケ調整、内面は横ハケ調整である。胴部はハケ調整を行っているが羽状の意識はない。台部片（174）はハ字形に垂下するもので、内外面ともにハケ調整が行われている。

編年の位置 口縁部外面に縦ハケ調整を行い、口縁部を形成する手法や、球胴の台付甕の存在などから「大廓式」前半（「大廓Ⅰ式期」）に位置づけられる。

⑩SH13A（第63図、第20表、図版28）

SH13Aからは、壺（176～181）、甕（182～191）が出土した。図示したものはすべてSH13A出土土器であるが、SH13B・SH13Cと重複しているため、それらの遺物が一部含まれている可能性もある。

特徴 壺は折り返し口縁壺（176～178）、単純口縁壺（179）である。折り返し口縁壺（176）は頸部から逆ハ字形に開いた後、口縁端部をやや厚く折り返すもので、口唇部は外傾する面をもつ。口縁部内面はハケ調整、外面も同じくハケ調整を施す。177は頸部から逆ハ字形に開いた後、口縁部を薄く折り返すもので口唇部は丸く収められる。口唇部には縦位の棒状浮文4条以上を一組として貼り付けている。なお、177は小片での復原のため、口径は図示復原した口径よりもやや小さくなる可能性もある。178は逆ハ字形に開いた後、口縁端部を薄く折り返すもので、口唇部は外傾する面をもつ。この口唇部には繩文を施した後、3条以上を一組とした棒状浮文が貼り付けられている。口縁部内面には繩文が施され、外面には縦ハケ調整が行われている。

単純口縁壺（179）は逆ハ字形に開き、口唇部は外傾する面をもつ。口縁部外面には縦方向のミガキ調整、頸部内面は斜め方向のミガキ調整、口縁部は横方向のミガキ調整を行っている。

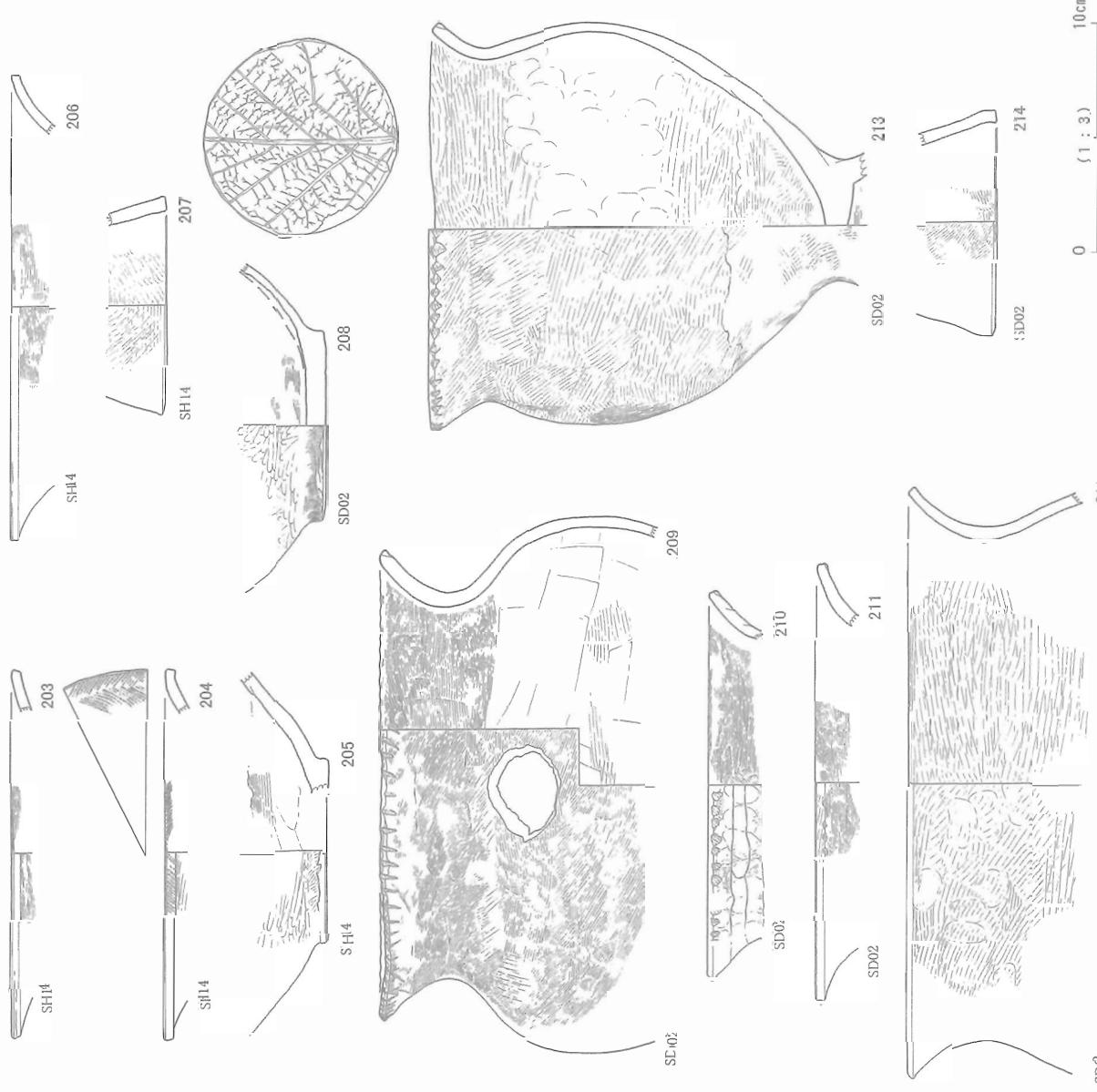
180・181は壺底部片で、180はやや上底、181は平底であるが、両者ともに木葉痕は残されていない。181は底部の幅がやや広く、新しい傾向を示している可能性がある。

壺（182～191）はすべて合付壺と想定する。182は頸部から逆ハ字形に開いた後、口縁端部を摘みあげるように調整したもので、口唇部に刻みが行わっている。口縁部内外面ともに横ハケ調整が行われている。183・184は逆ハ字形に開いた後、口唇部は外傾する面をもち、口唇部下端に刻みが行われている。口縁部内面は横ハケ調整、外面は胴部との接合部から連続する綫ハケ調整が行わっている。185～187は台基部片、188～191は台部片である。この中で191は、外反気味にハ字形に垂下する。

編年的位置 壺（191）の台部形状などから、「大廓式」前半期（「大廓I式」か）に位置づけられる。

⑪ SH14（第64図、第20表）

SH14からは壺（203～205）、甕（206・207）が出土した。ただし、重複するSD02に伴う可能性もある。



第64図 平椎遺跡出土土器実測図⑪（SH14、SD02）

特徴 壺（203・204）は単純口縁壺である。203は逆ハ字形に急激に開いた後、口唇部に面をもつ。204は逆ハ字形に開いた後、口唇部に面をもつ。口唇部には縄文が施され、口縁部内面には羽状縄文が施されている。205は壺の底部片で、外面はミガキ調整、内面はハケ調整を行っている。

壺（206）は台付壺であると推測する。逆ハ字形に開いた後、口縁端部に面を形成するもので、口唇部に刻みは行われていない。口縁部内外面ともに横ハケ調整が行われている。207はハ字形に垂下する台部片である。

編年の位置 「大廓式」前半（「大廓I～II式期」）に位置づけられる。

⑫SK02（第58図、第20表）

SK02からは壺底部片（99）が出土した。

特徴 壺底部片（99）は平底で、底部は「雌鹿塚様式」に特徴的な底部が突出するものである。

編年の位置 弥生後期前半の「雌鹿塚式」前半（「雌鹿塚II式期」か）であろうか。

⑬SK03（第62図、第20表）

SK03からは壺底部片（148・149）と、台付甕台部片（150）が出土した。

特徴 壺（148・149）は底部片で、両者ともに平底で、木葉痕が残る。148は底部から急激に外に向かって開き、無花果形の胴部となる可能性が高い。外面は丁寧なミガキ調整、内面はハケ調整が行われている。

台付甕（150）は台部片でやや内湾気味にハ字形に垂下する。外面ハケ調整、内面ハケ調整を行う。

編年の位置 弥生時代後期の「雌鹿塚式」前半（「雌鹿塚II式」）に位置づけられよう。

⑭SK06（第63図、第20表、図版28）

SK06からは、壺（192～195）、甕（196～202）が出土した。

特徴 壺（192～194）は折り返し口縁壺で、頸部から急激に外反した後、口縁部を薄く折り返すもので、口唇部上側を摘み出すようにやや突起させている。192は口縁部内面に縄文を施し、193は口唇部に縄文を施すとともに、口縁部内面と口縁部外面はミガキ調整を行っている。194は口唇部に棒状浮文を連続的に貼り付けている。192～194のように口唇部を摘み出す（上げる）技法は菊川式土器で確認される特徴であり、その影響であろうか。195は底部片でやや上底である。底部には木葉痕が残る。

甕（196～202）はすべて台付甕の可能性が高い。196は外反した後、口唇部に面をもち、その下端に刻みが行われている。196・197ともに口縁部外面は縦ハケ調整を行う。197は逆ハ字形に開いた後、口縁端部を丸く収めるもので、刻みは行われていない。198～200は甕台基部片で、201・202はハ字形に垂下する。

編年の位置 甕の口縁部外面の縦ハケ調整を行っていることから、弥生時代後期前半の「雌鹿塚式」前半（「雌鹿塚II式期」）に位置づけられる。

⑮SD02（第64図、第20表、図版28）

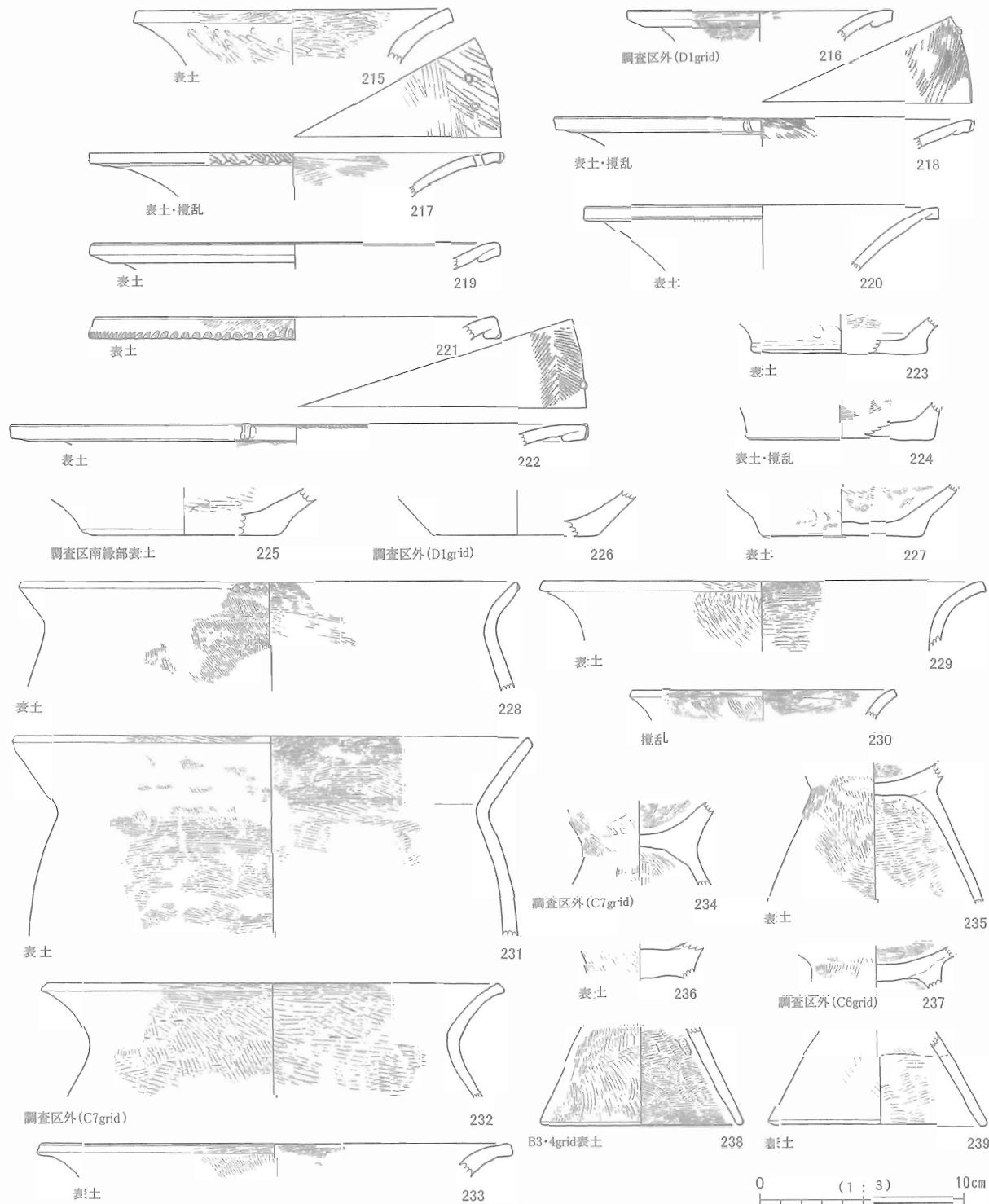
SD02からは、壺と台付甕が出土した。出土位置について溝内の中位下層で212・213、中位上層で208・209が出土しており、堆積状況による時期差を見いだせる可能性が高い。

特徴 208は壺底部片で、底部は平底で木葉痕が確認できる。底部外面はミガキ調整が行われている胴部はやや内湾しながら開いてたちあがるものである。

甕（209）は肩の張る球胴の台付甕片であり、口縁部は逆ハ字形に外反する。口唇部は丸く収められ、

口唇部外面に刻みが行われている。肩部に焼成後の穿孔が行われている。外面はハケ調整を行うがその方向は一定していない。胴部内面はハケ調整およびケズリ調整、肩部以上は横ハケ調整を行っている。

210は頸部から口縁部にかけて輪積痕を残す。屈曲部から逆ハ字形に外反しながら立ち上がった後、口唇部を丸く收め、その部分に刻みを行う。外面には指押さえの痕跡が明瞭に残存する。211は逆ハ字形に強く外反して開くもので、口唇部は面をもち、その下端に刻みが行われている。212は肩の張らない胴部をもつ甕で、口縁部はく字形口縁で、外傾する面をもつが、刻みは行われていない。内外面とも



第65図 平椎遺跡出土土器実測図⑫（遺構外）

に肩部は横ハケ調整、頸部から口縁部は横ハケ調整を行っている。

213は肩の張らない胴部で、胴中位よりやや上位に胴部最大径がある、口縁部はく字形で、口唇部は外傾する面をもち、その下端に刻みが行われている。外面には胴部は斜めハケ調整を行い、口縁部はそれと連続しない口縁部だけの斜めハケ調整を行う。内面は胴下半がハケ調整を施し、胴上半には指頭圧痕が明瞭に残存し、肩部以上では横ハケ調整が行われている。台基部の接合部分に胴部と台部の接合後に粘土を貼り付けており、西遠江の影響が窺える。214は台付甕の台部で、やや内湾気味にハ字形に垂下するものである。

編年の位置 210～213は弥生時代後期の「雌鹿塚II式期」、208・209は、弥生時代後期末（～古墳時代初頭）の「大廓I～II式期」に位置づけられる。

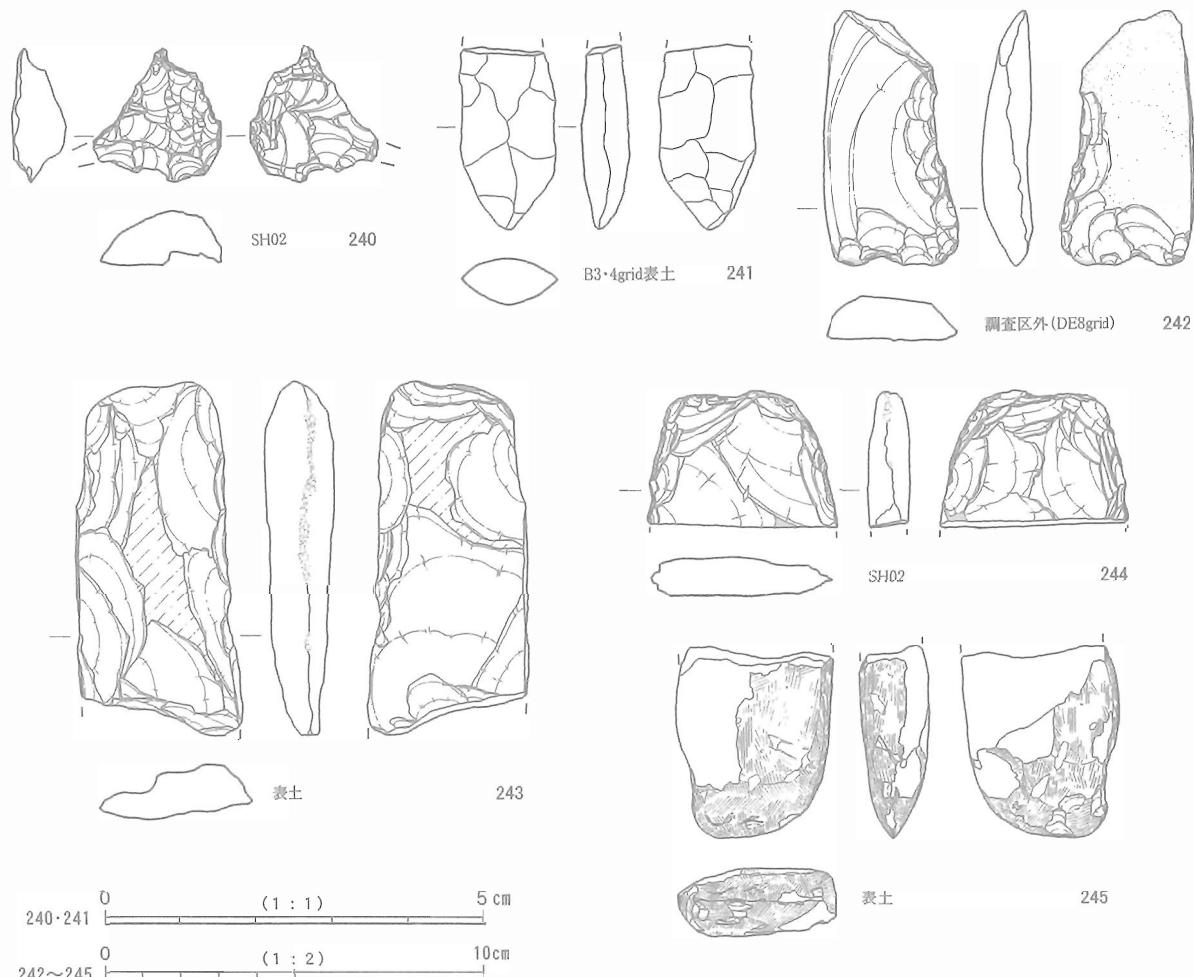
⑯SP04（第58図、第20表、図版25）

SP04からは、把手付鉢（101、渡井1997a）が出土した。

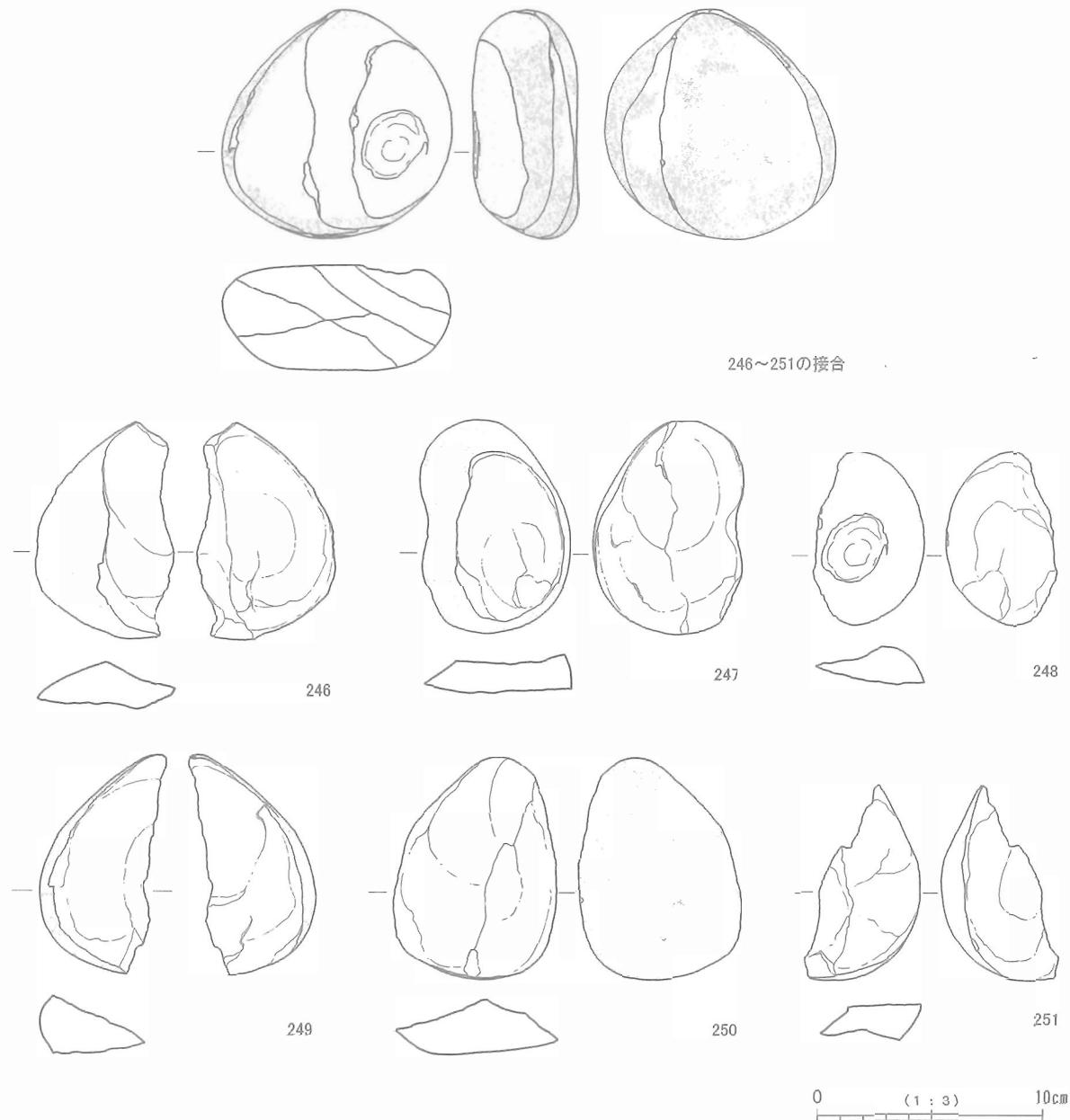
特徴 把手付鉢（101）は胴部には明瞭な肩部は形成されず、頸部から緩やかに膨らむ程度である。外面には縦方向のハケ調整が口縁部まで行われ、頸部はその痕跡をナデ消している。胴部内面にはハケ調整、口縁部内面にはナデ調整が行われている。把手は口縁部から肩部に接合され環状を呈する。

なお、同形態の把手付鉢は、富士市向山遺跡や沼津市雌鹿塚遺跡などで出土している。

編年の位置 弥生時代後期の「雌鹿塚式」前半（「雌鹿塚I～II式」）に位置づけることができる。



第66図 平椎遺跡出土石器実測図①



第67図 平椎遺跡出土石器実測図②

(17) SP05 (第58図、第20表)

SP05からは壺底部片(100)が出土している。

特徴 壺底部片(100)は、やや上底で、外面にはミガキ調整、内面はハケ調整が行われている。底部には木葉痕が残る。

編年的位置 弥生時代後期の「雌鹿塚式」前半(「雌鹿塚II式期」)であろうか。

(18) その他 (第65図、第20表、図版29)

この他、表土や攪乱あるいは遺跡内での表面採集品がある。壺(215~227)と甕(228~239)がある。特徴的なもののみ記述する。

特徴 単純口縁壺(217)は頸部から急激に外反して開くもので、口唇部に面をもつ。口唇部には結

節縄文を施し、棒状浮文を貼り付けている。口縁部内面には縄文を施し、2箇所に穿孔を行う。

折り返し口縁壺（218）は薄く折り返すもので、口唇部には棒状浮文が貼り付けられる。口縁部内面には縄文が施されている。

折り返し口縁壺（221）は、やや厚く折り返すもので、口唇部には外傾する面をもち、その面にはハケメ調整が施され、その下端に刻みが行われている。

（2）焼碟（第67図、第21表、図版29）

SH05の床面上において被熱・赤片し、6つに割れた状態で出土した碟がある（246～251の接合碟）。人為的に打ち割られたかどうか不明確であるが、竪穴建物内で出土したことから意図的に並べられた可能性が高い。このため接合状態と個別の状態を図示した。

大きさは10cm程で、厚さは4.6cm、重量は678gであり、各破片に刃部は形成されていない。碟石器として意図した可能性は排除できず、その割った石材を意図的に配置した可能性がある。（大谷）

註

- 2 弥生土器については、富士宮市教育委員会 渡井英誉氏、富士市教育委員会 佐藤祐樹氏、静岡大学 篠原和大氏、浜松市文化財課 鈴木敏則氏、鈴木一有氏、当研究所 岩本 貴氏に御教授を賜った。
- 3 各土器の時期的位置づけについては、渡井英誉氏に御教授を賜った。
- 4 静岡大学 篠原和大氏の御教授による。
- 5 静岡大学 篠原和大氏、当研究所 岩本 貴氏の御教授による。
- 6 以下、「雌鹿塚式」とした場合は、渡井英誉氏の意見（渡井1996・1997aほか）、「雌鹿塚様式」とした場合は篠原和大氏（篠原2006）の意見であることを表す。
- 7 浜松市文化財課 鈴木一有氏の御教授による。

第6節 平椎第2号墳の調査成果

1. 立地と残存状況

平椎古墳群は、調査前に確認されていた平椎第1号墳と今回発見した平椎第2号墳が把握されている。両古墳は南北に約30mの間隔で並ぶ。ともに丘陵上平坦部に立地するが、やや東に寄る。第2号墳はB4・5グリッドに位置し、標高約93.0m、南東に緩く傾斜する地形に立地する。

第1号墳は、現況において墳丘の高まりが観察できる。しかし、第2号墳は茶畠となっており、発掘前に墳丘の高まりなどの把握はできなかった。茶畠の造成により削平されたと考えられる。

今回の発掘調査では、平椎第2号墳の南半が対象になった。北半部は現況のまま残している。

検出した墳丘について、全体に削平・攪乱の影響を認めることができた。東半部の盛土は残存していたが、西半部の盛土は完全に失われていた。その一方で、周溝は西半部が良好に残存していたが、東半部は大きく失われていた。墳丘上に検出した埋葬施設（横穴式石室）については、大半が破壊され、石材が西隣りの攪乱坑に投棄された状況にあった。(田村)

2. 墳丘

(1) 周溝（第68図、図版21）

墳丘の西側において周溝が良好に残存していた。幅は約1.6m、検出面からの深さは約0.45mである。底面は地形に合わせて南に低くなり、その標高は92.5～91.7mである。周溝の断面は逆台形を呈している。覆土は黒褐色を基調とし、スコリアを含む。遺物の出土はなかった。なお、墳丘南西部においては、後述する列石が構築されている。

東側の周溝については、明確な残存は認められなかった。北寄りに長さ2m弱の溝が検出されたが、周溝であるかは不明である。一方、墳丘の高まりは残存していることから、茶畠の造成は周溝を破壊してしまっているが、墳丘を避けるように削平が行われたと推測することもできる。

以上から、墳丘南側には周溝もしくは削り出しが巡っていたと復原でき、周溝によって区画される墳丘は、東西13～15mの円形を呈するものと把握できる。なお、南西側の周溝が直線的であるが、埋葬施設との位置関係などをみるかぎり、方墳に復原できるような状況ではない。

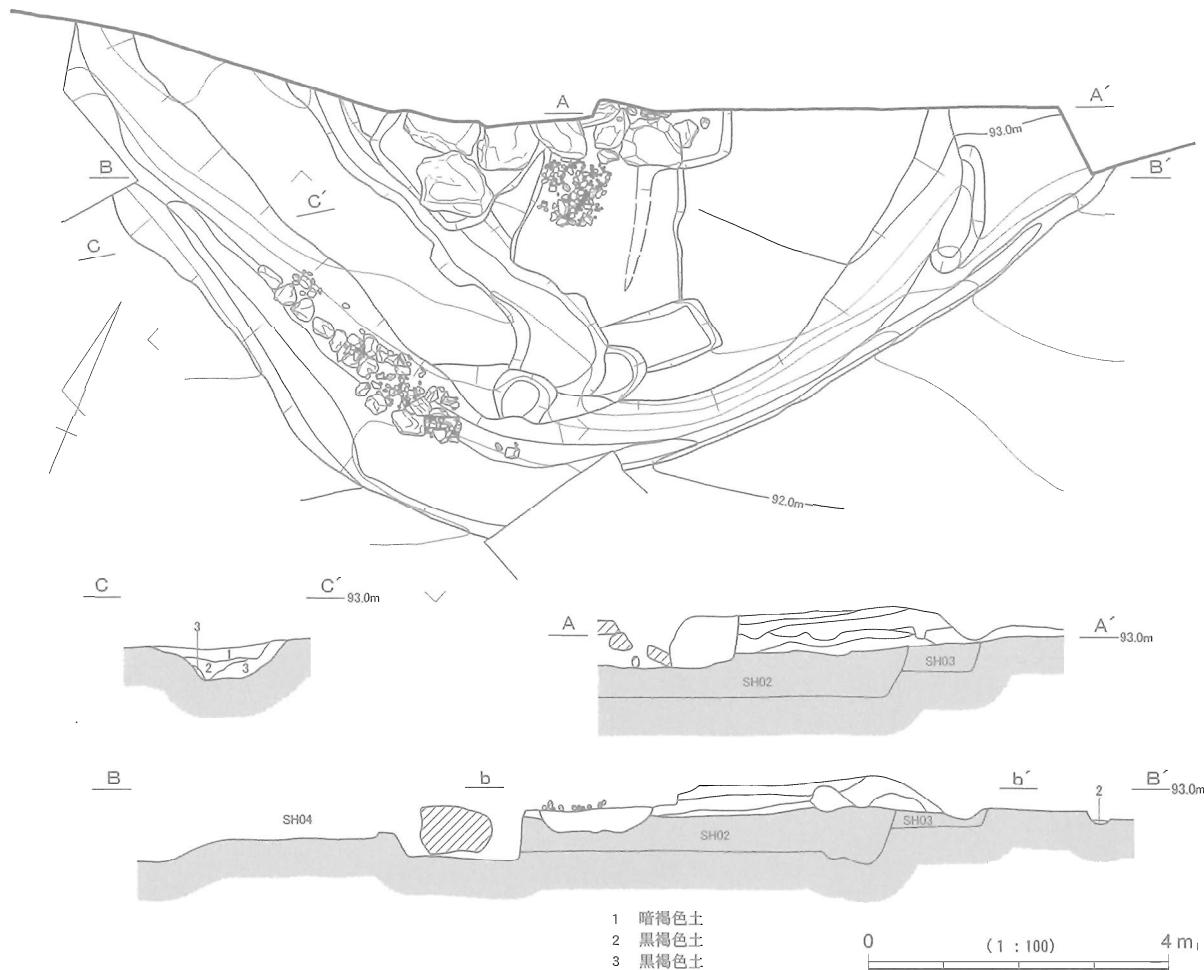
(2) 列石（第68・70図、図版21）

墳丘南西部の墳裾において列石を検出した。検出した長さは約3.4m、高さは最大で0.5m弱である。墳裾に0.4m大以上の角石が並び、その裏側（墳丘側）上方に0.3m大の角石が部分的に積まれていた。また、それらの間に拳大程度の石が多く用いられていた。

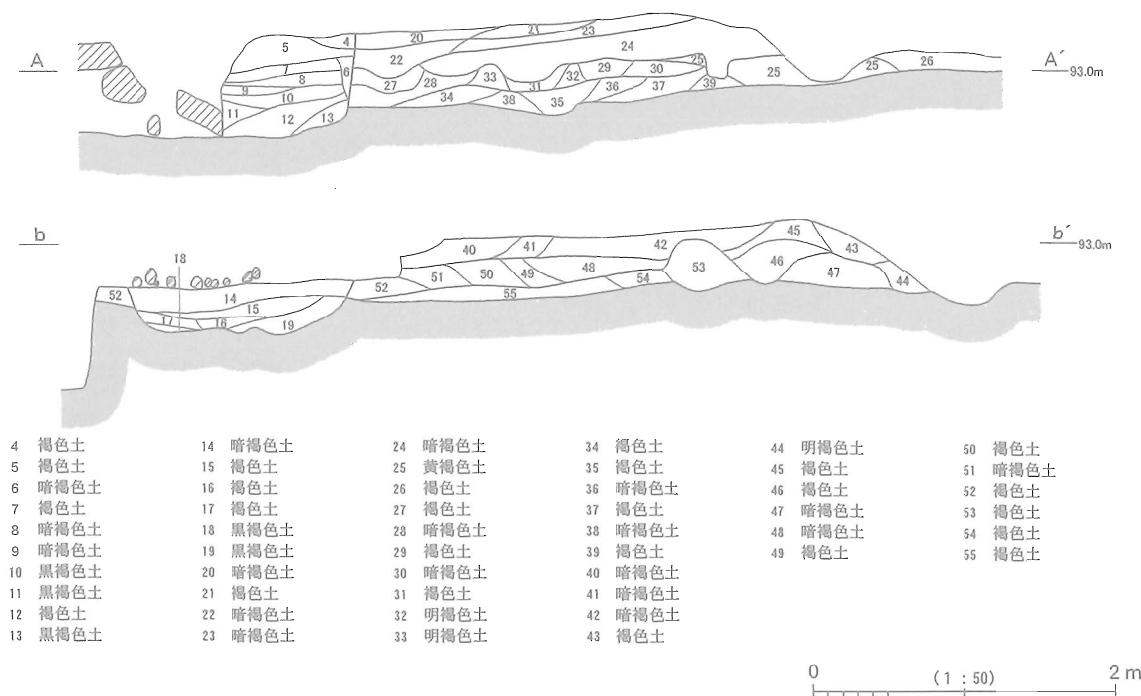
列石の検出状況は、その直上まで削平が及んでいることから、破壊や変形といった影響を受けたものと判断することができる。しかし、破壊された石が目立って散在していたわけではない。また、列石には掘方を伴うが、掘方の範囲は列石が検出された範囲に限定されていた。したがって、この列石は墳丘斜面の全体を覆う葺石や石積みであったわけではなく、墳丘南西部に限定された施設であり、また、墳裾部分に限定された施設であった可能性が評価できる。

墳裾に並ぶ石（裾石）は、比較的平坦な面を墳丘外方（南）に向けて設置されていた。列石の裾は南に低くなり、標高は92.1～91.8mである。なお、東半部が南に張り出しているが、掘方との位置からみて、後世の削平や土圧の影響によって変形したものと判断することができる。

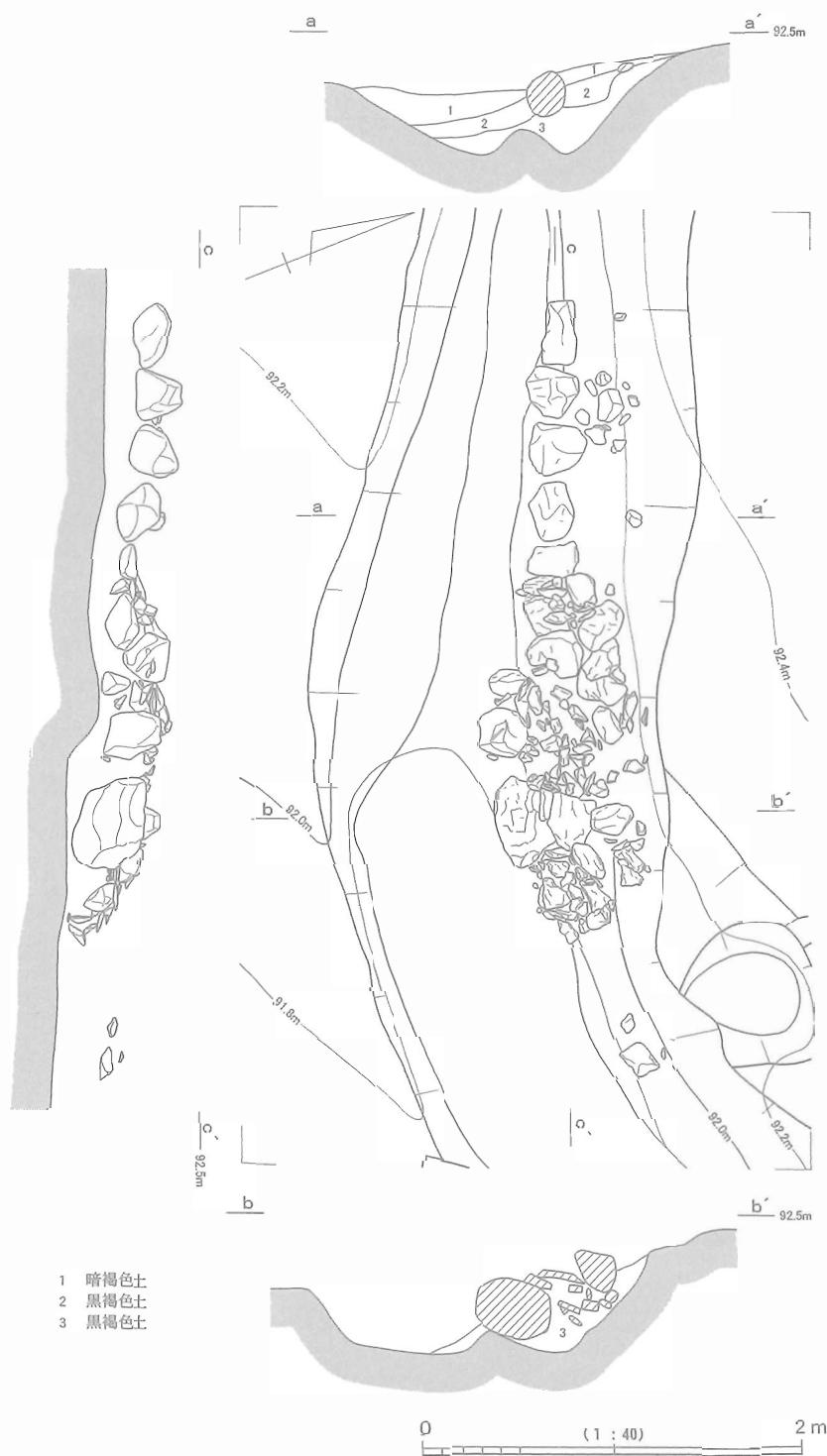
列石の東半部において、裾石の裏側（墳丘側）の上部に0.1m大以上の角礫や板石を多く検出した。



第68図 平塚第2号墳墳丘測量図



第69図 平塚第2号墳墳丘土層図



第70図 平椎第2号墳の列石実測図

土層断面によって、盛土は0.1~0.2mごとに高くするとともに、盛土範囲を大きくしていったことがわかる。さらに、各段階においては、上面を水平もしくは中央を若干低くするように施していること、盛土範囲の外縁に山状の盛土を施す部分があることが把握できる。

(田村)

大半は裏込めの中に用いられた石材であると判断できるが、裾石の上に平積みにした板石も確認できる。さらに、その上に0.3m大の角礫を積んだと把握できる部分もある。

列石の構築に際しては、溝状の掘方が周溝に付随するよう設けられていた。掘方の横断面は東寄りでU字形、西寄りでV字形を呈する。掘方の南縁に裾石が置かれ、その墳丘側に黄色土ブロックを含む黒褐色土の裏込めが施されていた。東半部では裏込めに前述の石が多く含まれていた。なお、裏込めの土と近似する土が周溝最下層にも存在していた。

列石上に須恵器坏片1点(第72図254)が出土した。

(3) 盛土(第68・69図)

検出した墳丘の東半部において、盛土の残存を確認することができた。盛土の残存高は約0.6mである。墳丘構築面は標高約92.6~92.8mに把握できるが、旧表土は確認できなかった。盛土は明褐色土、褐色土、暗褐色土で構成されており、スコリアや黄色土が様々に混入していた。また、弥生土器の破片が多く含まれていた。以上から、古墳周辺を整地・掘削して盛土を確保したことがわかる。

3. 埋葬施設（第71図、図版22）

埋葬施設については、南部のみが調査区内で検出された。また、検出した南部は削平・攪乱によって大きく破壊されていた。残存している状況からは、埋葬施設は南に開口する横穴式石室であると推測できる。埋葬施設の主軸は北西方向にあると把握できる。

墓壙は、東半部が残存していた。確認面（墳丘上）からの深さは約0.7m、底面は墳丘構築面より0.2m程低く、標高約92.5mでほぼ水平である。幅は墓道の位置から約3.4mに復原できる。しかし、長さは約0.8m分の検出であったため不明である。壁体は垂直に近く立ち上がる。墓壙内については、崩された石室の石材と攪乱土が混在していたほか、褐色土と黒褐色土の互層で黄色土ブロックを部分的に含む裏込めが残存していた。

石室の石材は、墓壙内と西隣の攪乱坑において検出されている。側壁に使用されたと考えられる0.8～1.0m大の角礫のほか、床石などに使用されたと考えられる0.2m大以下の角礫や板石が認められる。しかし、ほぼ全てが原位置から動かされた状態にあると判断できる。

墓道は、墓壙南縁から南へ約1.8mが残存していた。幅は約1.5～1.7m、断面皿形を呈する。覆土は周溝とは明らかに異なり、墳丘の盛土と類似している。また、その上面に礫敷が認められた。埋葬前もしくは追葬前に埋め戻し、石室内へ段状に下る入口構造を構築している可能性が指摘できる。

埋葬施設周辺の表土や攪乱から、須恵器（壺蓋2点、平瓶3点、フラスコ瓶1点など）と馬具（鐙金具2点）が出土した（第72・73図）。これらは石室内にあったものと推測でき、出土土器から7世紀前葉～後葉の間に初葬と追葬があったものと把握することができる。
（田村）



第71図 平椎第2号墳埋葬施設実測図

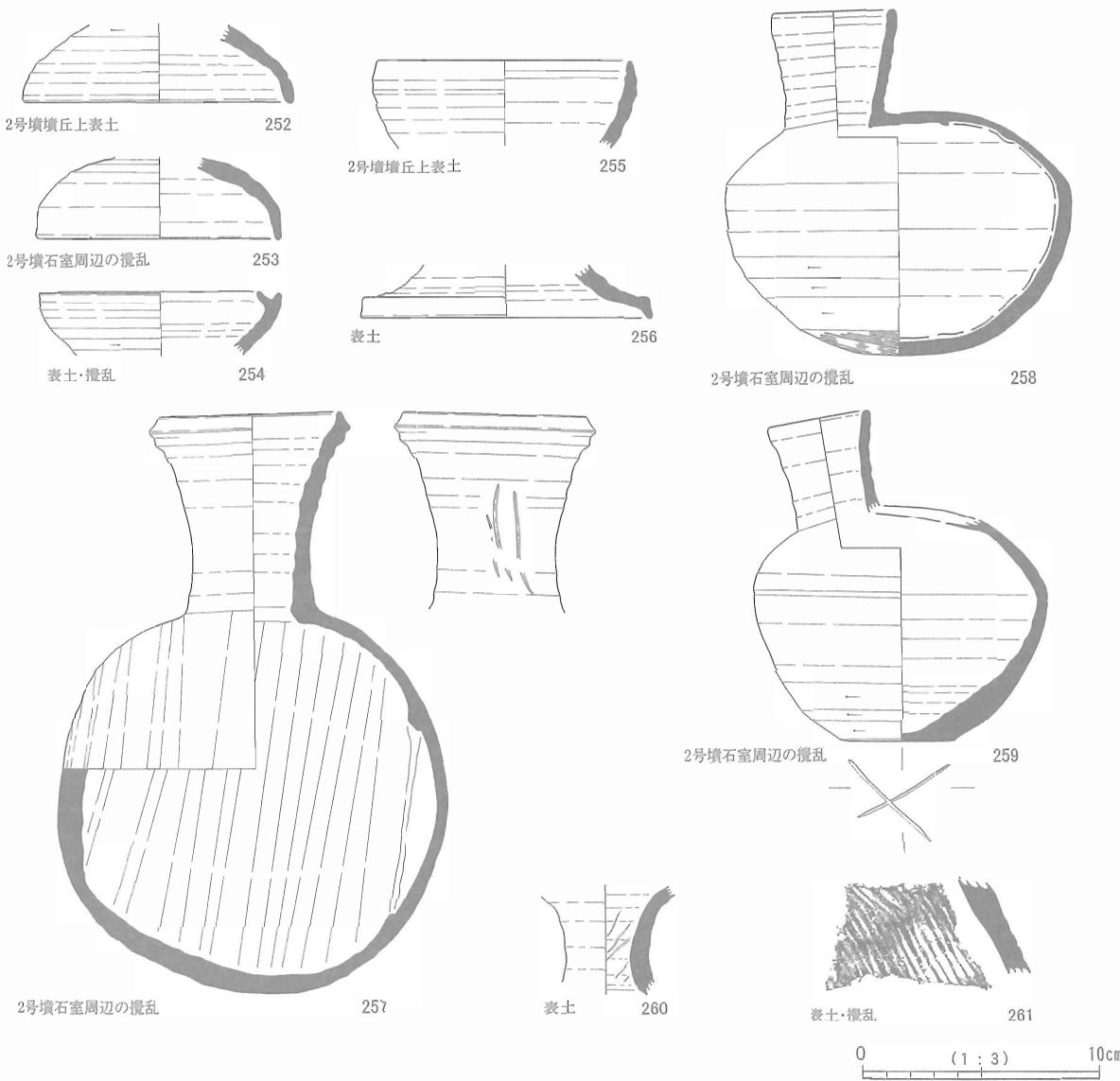
4. 平椎第2号墳関連出土遺物（第72・73図、第20表、図版30・31）

平椎第2号墳に関する遺物は、石室周辺の表土・攪乱土から出土した（第72・73図）。この他、豎穴建物の覆土から出土した土師器壺（第58図98）は本墳に伴う可能性が高い。

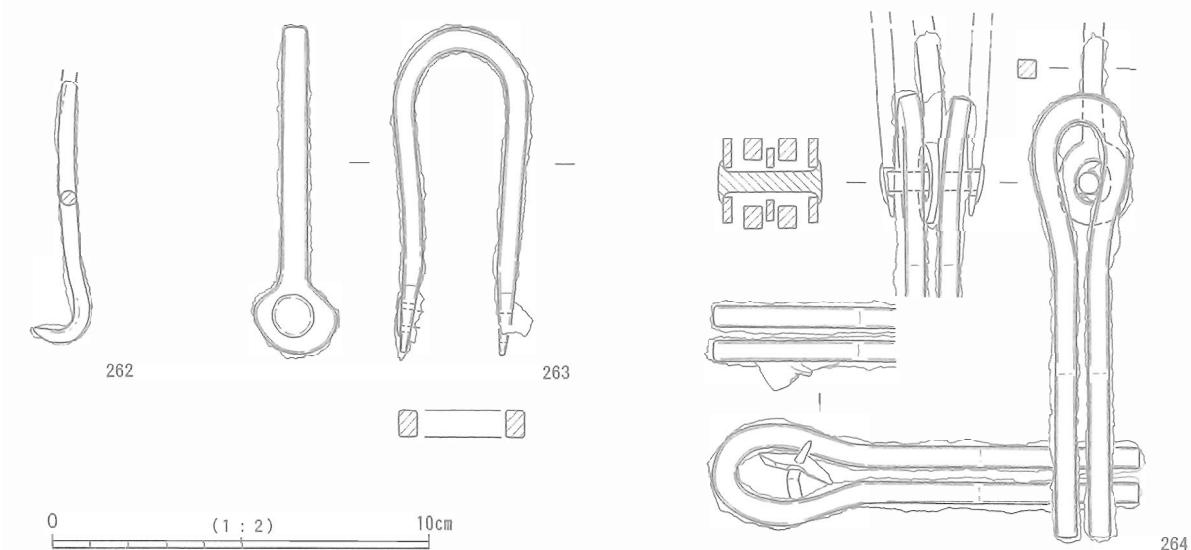
須恵器 壺身1点（254）、壺蓋2点（252・253）、無台壺？1点（255）、高壺脚部1点（256）、平瓶2点（258・259）、フラスコ瓶1点（257）、壺瓶類頸部1点（260）、須恵器甕1点（261）がある。

壺身（254）は、口縁部が短く低い立ちあがりで、受部とほぼ同じ高さである。口径10.0cmである。遠江編年（鈴木敏則氏編年、鈴木敏2001・2004）の遠江IV期後半（飛鳥III期）に位置づけることができる。壺蓋は2点あるがやや形状が異なる。252は外面に水挽痕が明瞭に残り、天井と口縁部の境に稜線状に突起する部分が確認できる。口縁端部は丸く収められている。口径11.2cmに復原できる。253は252より口径が小さい。半球形の天井で、口縁部との境でほぼ垂直に垂下し、口縁端部は丸く収められる。口径10.2cmである。壺蓋2点が第2号墳に伴うとすれば、口縁部の差は時期差と考えられることから、追葬が行われた可能性が高い。

255は無台壺（身）の可能性が高い。底部から内湾しながら立ち上がり、口縁端部は強くなされ器壁がやや薄くなっている。口縁部内面には凹線が確認できる。



第72図 平椎第2号墳出土土器実測図



第73図 平椎第2号墳出土鉄製品実測図

256は高壺の脚部の可能性が高い。ハ字形に垂下した後、脚端部で段をつけ、端部は丸く仕上げられる。

257はフラスコ瓶で、やや扁平な球胴で、逆ハ字形に開く頸部で、口縁部は外傾する面をもち、口唇部は摘みあげられている。頸部には「川」(縦3本)字形のヘラ記号が刻まれている。258は扁平な球胴に短く逆ハ字形に立ちあがる口縁部がつく平瓶で、肩部は胴部中央やや上部にある。259も扁平な球胴に短く逆ハ字形に開く平瓶である。底部は平底であり、肩部は胴部中央よりやや上位にある。底部に「×」字形のヘラ記号が刻まれている。257～259は湖西産の可能性が高い。

260は壺瓶類の頸部片で、頸部は逆ハ字形に立ちあがった後、口縁部直下で急激に外側へ開く形態の口縁部であると想定できる。頸部内面にはシボリの痕跡が確認できる。

261は甕の破片である。外面には平行タタキ、内面は当て具痕をナデ消している。

出土した須恵器は、遠江IV期前半～後半に位置づけられるものであり（鈴木敏2001・2004）、遠江IV期前半に築造され、IV期後半に追葬が行われた可能性が高い。

馬具 鎧吊金具の兵庫鎖と鉄具が出土している。左右どちらか一方のみの出土である。

264は2連の兵庫鎖に鉄具（図面上部）、鎧金具（図面下部）が残存している。鉄具の部分は263が接合していた可能性が高い。軸棒は鉄具外枠の穿孔部分を通過した後外側でかしめられている。兵庫鎖はこの軸棒に直接連結されている。同じく刺金も軸棒に直接連結される。刺金は基部が円形に成形されていることから兵庫鎖、鉄具外枠・刺金に一度に軸棒を通したと考える。兵庫鎖は鉄具側の長さ11.7cm、鎧側の長さ11.4cmであり、二連の使用時の長さは22.0cm程度である。鎧金具は木製鎧を固定するために打ち込まれた鉄製釘が残存している。

263は鉄具の外枠である。逆U字形で、兵庫鎖を装着するため軸棒を受ける部分は円形に大きく成形されている。その円の中心に軸棒を受けるための穿孔が施される。軸棒はこの穿孔部分を通過した後、外側で叩いてかしめられ、外れないように成形されている。

262は鉄具の刺金である可能性が高いが、264の刺金と比較すると、262は蕨手状に曲げているのに対し、264は円形を造り出していることから、やや成形方法が異なる。轡の引手の可能性も想定しておく必要がある。

(大谷)

第7節 古代以降の遺物

平椎遺跡では遺物量は少ないものの、駿東型甕、灰釉陶器、瀬戸美濃、銅錢などが出土しており（第74図、第20・22表、図版31）、縄文時代から近世までの複合遺跡である可能性が高い。

陶磁器 駿東型甕（268）、灰釉陶器（265・266）、瀬戸美濃（267）などが出土し、部位が特定可能な遺物を図示した。

265は灰釉陶器碗の口縁部片で、口縁部は強くなられ、外反する。内外面に釉薬が塗布される。漬け掛けの可能性が高い。266と同様、折戸53号窯式期に位置づけられよう。産地は特定できない。

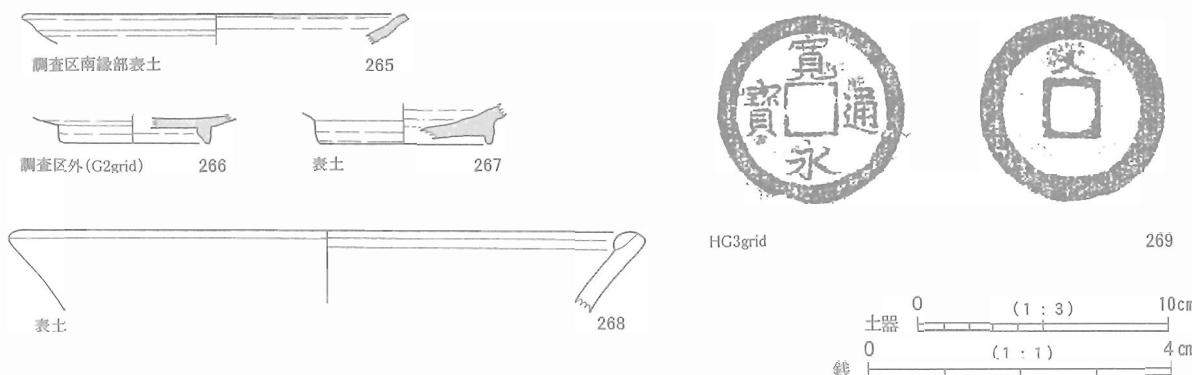
266は灰釉陶器碗皿類の底部片である。底部にはヘラ削りが行われている。高台は三角高台で、底部径は5.8cmである。この高台径から判断すると皿の可能性が高い。高台の形状からすれば、折戸53号窯式期ごろの灰釉陶器皿であろう。産地については特定できない。10世紀中葉～後半ごろに位置づけられる。

267は瀬戸美濃の輪禿皿である。高台は削り出し高台である。登窯（連房式）5段階1小期、18世紀初頭ごろに位置づけられる（藤澤1998）。

268は駿東型甕である。口縁部は肩部から逆ハ字形に立ちあがり、口縁内面には粘土紐貼り付けによる突起が作られている。奈良時代に位置づけられる可能性が高い。

金属製品 銅錢が1点（269）出土している。「寛永通寶」の「文」銭で、新寛永である。初鑄は1697年である。

(大谷)



第74図 平椎遺跡出土遺物実測図（古代以降）

第3章 平椎遺跡・平椎古墳群

番号	挿図番号	図版番号	出土位置	種別	器種	部位	残存率 (%)	器高 (cm)	器径 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	色調		備考		
												(外顔)	(内顔)			
233	65		表土	弥生土器	甌	口縁部	5	—	—	(23.0)	—	橙(7.5YR7/6)	橙(7.5YR7/6)			
234						台基部	90	—	—	—	—	にぶい褐(7.5YR5/3)	明赤褐(2.5YR5/8)			
235		29	表土			台部	40	—	—	—	—	にぶい黄橙(10YR6/4)	黄灰(2.5YR5/1)			
236						台基部	100	—	—	—	—	橙(7.5YR7/6)	黄橙(7.5YR7/8)			
237			調査区外 (C6grid)			台基部	20	—	—	—	—	にぶい橙(7.5YR6/4)	にぶい黄褐(10YR5/3)			
238						台部	20	—	—	(10.0)	—	にぶい黄橙(10YR6/4)	橙(7.5YR6/6)			
239			B3・4grid表土			台部	10	—	—	(7.6)	—	橙(7.5YR7/6)	橙(7.5YR7/6)			
240~251: 石器																
252	72	30	2号墳墳丘上表土	須恵器	甌	口縁～体部	10	—	(11.2)	(11.2)	—	青灰(5B6/1)	青灰(5B6/1)			
253			2号墳石室周辺の攪乱			口縁～体部	10	—	(10.2)	—	—	暗灰黄(2.5YR4/2)	暗灰黄(2.5YR4/2)			
254			表土・攪乱			口縁～体部	10	—	(10.0)	(8.6)	—	青灰(5B5/1)	青灰(5B5/1)			
255			2号墳墳丘上表土			口縁部	20	—	(11.0)	(10.5)	—	灰(7.5Y6/1)	灰(7.5Y6/1)			
256			表土			脚部	15	—	—	(12.1)	—	灰(7.5Y6/1)	灰(7.5Y6/1)			
257			2号墳石室周辺の攪乱			全体	90	24.0	16.2	7.6	—	灰(5Y6/1)	灰黄(2.5Y7/2)	線刻記号		
258			表土			全体	100	14.1	14.4	5.0	4.8	灰白(5Y7/1)	灰白(5Y7/1)			
259			2号墳石室周辺の攪乱			全体	75	13.8	12.4	4.2	4.7	灰白(5Y7/1)	灰白(5Y7/1)	線刻記号		
260			表土			頸部	40	—	—	—	—	灰(5Y7/1)	灰(5Y7/1)			
261			表土・攪乱			肩部	—	—	—	—	—	灰(10Y5/1)	灰(7.5Y6/1)			
262~264: 鉄器																
265	74	31	調査区南縁部表土	灰釉陶器	皿	口縁部	5	—	—	(15.0)	—	灰(5Y6/1)	灰(5Y6/1)			
266			調査区外 (G2grid)			底部	40	—	—	—	(5.8)	灰黄(2.5Y7/1)	灰黄(2.5Y7/1)			
267			瀬戸美濃輪禪皿			底部	30	—	—	—	(6.8)	灰黄(2.5Y7/2)	灰黄(2.5Y7/2)			
268			表土			土師器 磁盤	5	—	—	(25.0)	—	にぶい赤褐(5YR4/3)	褐(7.5YR4/3)			

() は復原値

第21表 平椎遺跡出土石器観察表

番号	挿図番号	図版番号	出土位置	層位	種類	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	欠損	備考
240	66	25	SH02 B3・4grid表土 調査区外 (DE8grid) 表土	石錐 尖頭器 スクレーパー	ホルンフェルス ホルンフェルス 潤滑砂岩	SH02 覆土	1.70	1.70	0.70 (1.3)	あり		
241						表土	2.40	(1.30)	(0.60) (2.2)	あり	基部片	
242						打製石斧	6.60	3.50	1.30 36.0	なし		
243						打製石斧	9.30	4.35	1.80 (88.0)	あり		
244						貢岩	(3.60)	4.90	1.10 (28.0)	あり		
245						鷲石空山岩	(5.00)	4.15	1.70 (47.0)	あり		
246~251			SH05 土	礫	潤滑砂岩	9.80	10.10	4.60	678.0	なし	被熱あり 6個に割れている	
						9.80	10.10	4.60	678.0	なし	被熱あり 6個に割れている	

() は残存値

第22表 平椎遺跡出土銅錢観察表

番号	挿図番号	図版番号	出土位置	種別	銭名	書体	国名	初鑄年	銭径 (mm)	内径 (mm)	孔径 (mm)	重量 (g)	備考
269	74	31	HG3grid	銅錢	寛永通寶	真書	日本	1697	24.9	20.0	6.2	2.92	背文字あり「文」

第9節 自然科学分析の成果

1. 平椎遺跡SH05出土炭化材の放射性炭素年代（AMS測定）

（株）加速器分析研究所

（1）測定対象試料

測定対象試料は、平椎遺跡SH05出土炭化材（C05：IAAA-90013、C28：IAAA-90014、C40：IAAA-90015、C44：IAAA-90016、C61：IAAA-90017）合計5点である（本節2-第24表参照）。

（2）化学処理工程

- ①メス・ピンセットを使い、根・土等の表面的な不純物を取り除く。
- ②酸処理、アルカリ処理、酸処理（AAA：Acid Alkali Acid）により内面的な不純物を取り除く。
最初の酸処理では1Nの塩酸（80°C）を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では1Nの水酸化ナトリウム水溶液（80°C）を用いて数時間処理する。なお、AAA処理において、アルカリ濃度が1N未満の場合、表中にAaAと記載する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では1Nの塩酸（80°C）を用いて数時間処理した後、超純水で中性になるまで希釈し、90°Cで乾燥する。希釈の際には、遠心分離機を使用する。
- ③試料を酸化銅と共に石英管に詰め、真空中で封じ切り、500°Cで30分、850°Cで2時間加熱する。
- ④液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用して、真空中で二酸化炭素（CO₂）を精製する。
- ⑤精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出（水素で還元）し、グラファイトを作製する。
- ⑥グラファイトを内径1mmのカソードに詰め、それをホイールにはめ込み、加速器に装着する。

（3）測定方法

測定機器は、加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置（NEC社製）を使用する。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HO_xII）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

（4）算出方法

- ①年代値の算出には、Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polash 1977）。
- ②¹⁴C年代（Libby Age : yrBP）は、過去の大気中¹⁴C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。この値は、δ¹³Cによって補正された値である。¹⁴C年代と誤差は1桁目を四捨五入して10年単位で表示される。また、¹⁴C年代の誤差（±1σ）は、試料の¹⁴C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。
- ③δ¹³Cは、試料炭素の¹³C濃度（¹³C/¹²C）を測定し、基準試料からのずれを示した値である。同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差（‰）で表される。測定には質量分析計あるいは加速器を用いる。加速器により¹³C/¹²Cを測定した場合には表中に（AMS）と注記する。
- ④pMC（percent Modern Carbon）は、標準現代炭素に対する試料炭素の¹⁴C濃度の割合である。
- ⑤暦年較正年代とは、年代が既知の試料の¹⁴C濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の

¹⁴C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、¹⁴C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差（1 σ=68.2%）あるいは2標準偏差（2 σ=95.4%）で表示される。暦年較正プログラムに入力される値は、下一桁を四捨五入しない¹⁴C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal04データベース（Reimer et al 2004）を用い、OxCalv4.1較正プログラム（Bronk Ramsey 1995 Bronk Ramsey 2001 Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger 2001）を使用した。

(5) 測定結果

¹⁴C年代は、C05が3070±30yrBP、C28が2050±30yrBP、C40が2620±30yrBP、C44が2410±30yrBP、C61が3900±30yrBPである。炭素含有率はすべて60%以上で、化学処理、測定上の問題は認められず、妥当な年代と判断される。

第23表 ¹⁴C年代測定結果

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age(yrBP)	pMC (%)
IAAA-90013	C05	SH05	炭化材	AAA	-33.66 ± 0.68	3,070 ± 30	68.23 ± 0.28
IAAA-90014	C28			AAA	-30.61 ± 0.59	2,050 ± 30	77.48 ± 0.3
IAAA-90015	C40			AaA	-32.84 ± 0.68	2,620 ± 30	72.19 ± 0.29
IAAA-90016	C44			AaA	-31.53 ± 0.94	2,410 ± 30	74.11 ± 0.31
IAAA-90017	C61			AaA	-26.39 ± 0.69	3,900 ± 30	61.54 ± 0.24

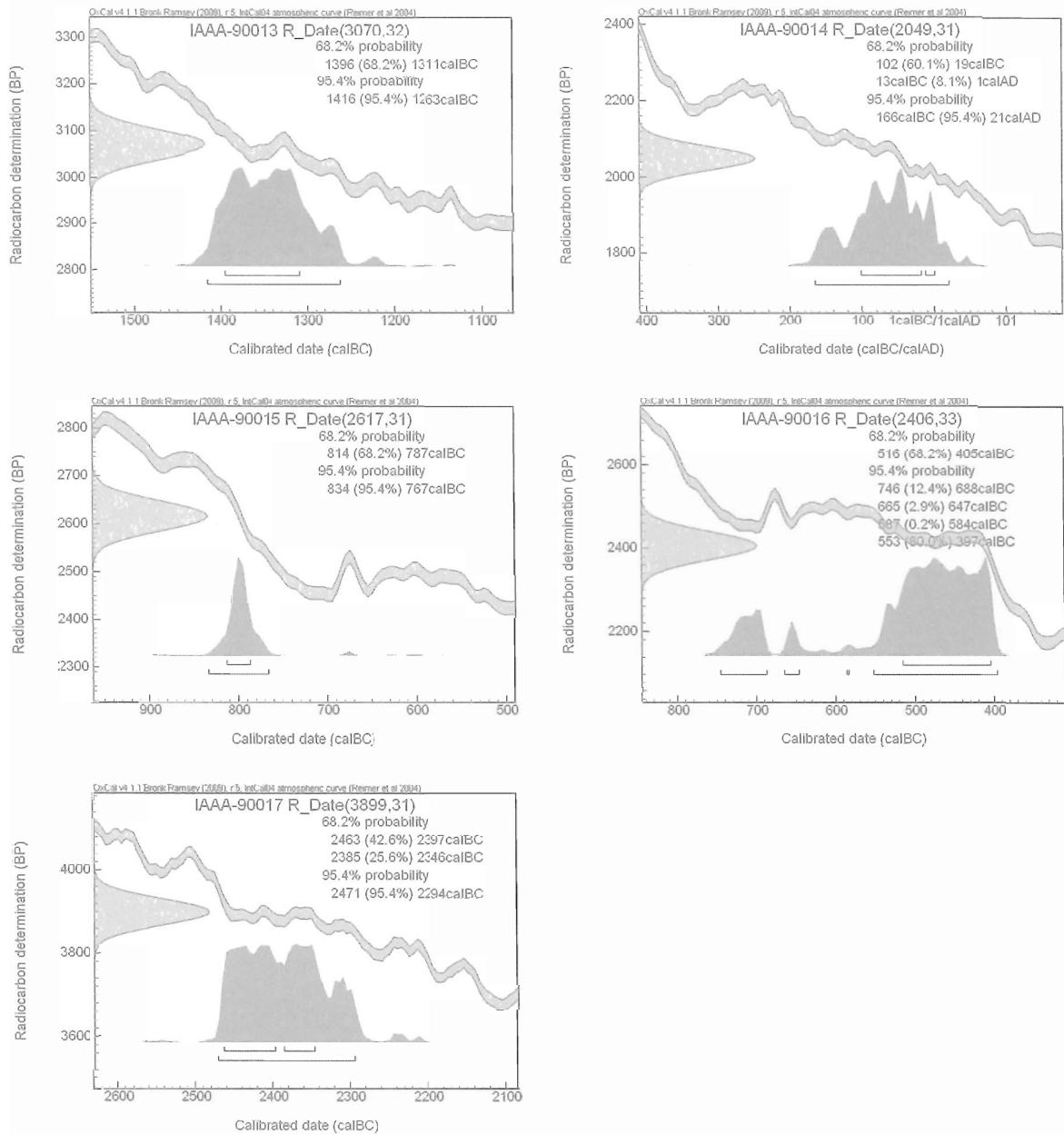
[#2892]

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 σ暦年代範囲	2 σ暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-90013	3,210 ± 30	67.02 ± 0.25	3,070 ± 32	1396BC - 1311BC (68.2%)	1416BC - 1263BC (95.4%)
IAAA-90014	2,140 ± 30	76.59 ± 0.29	2,049 ± 31	102BC - 19BC (60.1%)	166BC - 21AD (95.4%)
				13BC - 1AD (8.1%)	
IAAA-90015	2,750 ± 30	71.03 ± 0.26	2,617 ± 31	814BC - 787BC (68.2%)	834BC - 767BC (95.4%)
IAAA-90016	2,510 ± 30	73.12 ± 0.27	2,406 ± 33	516BC - 405BC (68.2%)	746BC - 688BC (12.4%)
					665BC - 647BC (2.9%)
					587BC - 584BC (0.2%)
					553BC - 397BC (80.0%)
IAAA-90017	3,920 ± 30	61.37 ± 0.22	3,899 ± 31	2463BC - 2397BC (42.6%)	2471BC - 2294BC (95.4%)
				2385BC - 2346BC (25.6%)	

[参考値]

参考文献

- Stuiver M. and Polash H.A. 1977 Discussion: Reporting of ¹⁴C data, Radiocarbon 19, 355-363頁
 Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program, Radiocarbon 37 (2), 425-430頁
 Bronk Ramsey C. 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon 43 (2A), 355-363頁
 Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B. 2001 'Wiggle Matching' radiocarbon dates, Radiocarbon 43 (2A), 381-389頁
 Reimer, P.J. et al. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP, Radiocarbon 46, 1029-1058頁



第75図 [参考] 暦年較正年代グラフ

2. 平椎遺跡SH05出土炭化材の樹種

(株) 加速器分析研究所

(1) はじめに

平椎遺跡は、愛鷹山南麓の舌状に伸びる尾根上に立地する。今回の発掘調査により、弥生時代後期～古墳時代初頭の16軒の竪穴建物が検出されている。このうち、SH05は焼失家屋であり、建物構築材と考えられる炭化材が良好な状態で出土している。

本報告では、SH05における建物構築材の木材利用を明らかにするため、出土した炭化材の樹種同定を実施する。

(2) 試料

試料は、SH05から出土した炭化材75点（第76図、第24表）である。



第76図 平椎遺跡SH05出土炭化材取り上げ位置図

(3) 分析方法

試料を自然乾燥させた後、木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴については、島地・伊東（1982）やWheeler他（1998）を参考にする。また、日本産木材の組織配列については、林（1991）や伊東（1995・1996・1997・1998・1999）を参考にする。

(4) 結果

樹種同定結果を第24表に示す。炭化材は、広葉樹9分類群（コナラ属アカガシ亜属・スダジイ・サカキ・サクラ属・キハダ・シラキ・トチノキ・ムクロジ・キヅタ）とイネ科タケ亜科に同定された。なお、番号C15・C16・C19・C38は道管が認められることから広葉樹であり、番号C15は道管配列の様子から散孔材と考えられるが、いずれも保存状態が悪く、種類は不明である。また、番号C03・C34・C58・C71は木材組織が全く観察できず、針葉樹・広葉樹の別も含めて種類不明である。同定された各分類群の解剖学的特徴等を記す。

- ・コナラ属アカガシ亜属 (*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*) ブナ科

放射孔材で、管壁厚は中庸～厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高のものと複合放射組織とがある。

- ・スダジイ (*Castanopsis cuspidata* var. *sieboldii* (Makino) Nakai) ブナ科シイ属

環孔性放射孔材で、道管は接線方向に1～3個幅で放射方向に配列する。孔圈部は3～4列、孔圈外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高。

- ・サカキ (*Cleyera japonica* Thunberg pro parte emend. Sieb. et Zucc.) ツバキ科サカキ属

散孔材で、小径の道管が単独または2～3個が複合して散在する。道管の分布密度は高い。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列～階段状に配列する。放射組織は異性、単列、1～20細胞高。

- ・サクラ属 (*Prunus*) パラ科

散孔材で、管壁厚は中庸、横断面では角張った楕円形、単独または2～6個が複合、年輪界に向かって管径を漸減させながら散在する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1～3細胞幅、1～30細胞高。

- ・キハダ (*Phellodendron amurense* Ruprecht) ミカン科キハダ属

環孔材で、孔圈部は1～3列、孔圈外でやや急激に管径を減じたのち塊状に複合して接線・斜方向に紋様状に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1～4細胞幅、1～40細胞高。

- ・シラキ (*Sapium japonicum* (Sieb. et Zucc.) Pax et Hoffm) トウダイグサ科シラキ属

散孔材で、道管は単独または2～5個が放射方向に複合して、年輪全体にほぼ一様に散在する。管壁は厚～中庸で、横断面では角張った楕円形となる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、ほぼ単列（希に部分的に2列）、1～40細胞高。

- ・トチノキ (*Aesculus turbinata* Blume) トチノキ科トチノキ属

散孔材で、管壁は厚く、横断面では角張った楕円形、単独または2～3個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、単列、1～15細胞高で階層状に配列する。

・ムクロジ (*Sapindus mukorossi* Gaertn.) ムクロジ科ムクロジ属

環孔材で、孔圈部は1列、孔圈外で急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合して配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1～3細胞幅、1～40細胞高。柔組織は周囲状～連合翼状、帶状およびターミナル状。

・キヅタ (*Hedera rhombea* Bean) ウコギ科キヅタ属

環孔性散孔材で、年輪のはじめにやや大型の道管が配列した後、単独または2～4個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列し、道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1～5細胞幅、1～60細胞高。

・イネ科タケ亜科 (Gramineae subfam. Bambusoideae)

原生木部の小径の道管の左右に1対の大型の道管があり、その外側に師部細胞がある。これらを厚壁の纖維細胞（維管束鞘）が囲んで維管束を形成する。維管束は柔組織中に散在し、不齊中心柱をなす。

第24表 平椎遺跡SH05出土炭化材の樹種同定結果一覧

番号	取上番号	樹種	備考
C01	1	サカキ	
C02	2	サカキ	
C03	3	不明	
C04	5	サカキ	
C05	7	シラキ	3,070±30BP
C06	8	シラキ	
C07	9	シラキ	
C08	10	シラキ	
C09	12	コナラ属アカガシ亜属	
C10	13	サカキ	
C11	14	サカキ	
C12	15	コナラ属アカガシ亜属	
C13	16	シラキ	
C14	17	サクランボ	
C15	18	広葉樹（散孔材）	
C16	21	広葉樹	
C17	22	サカキ	
C18	23	コナラ属アカガシ亜属	
C19	24	広葉樹	
C20	25	イネ科タケ亜科	
C21	26	サカキ	
C22	27	イネ科タケ亜科	
C23	28	コナラ属アカガシ亜属	
C24	29	ムクロジ	
C25	30	コナラ属アカガシ亜属	
C26	31	コナラ属アカガシ亜属	
C27	32	コナラ属アカガシ亜属	
C28	33	コナラ属アカガシ亜属	2,050±30BP
C29	34	サカキ	
C30	36	トチノキ	
C31	37	トチノキ	
C32	38	サカキ	
C33	39	コナラ属アカガシ亜属	
C34	40	不明	
C35	41	コナラ属アカガシ亜属	
C36	42	サカキ	
C37	43	サカキ	
C38	44	広葉樹	

番号	取上番号	樹種	備考
C39	45	コナラ属アカガシ亜属	
C40	46	コナラ属アカガシ亜属	2,620±30BP
C41	47	サカキ	
C42	48	キヅタ	
C43	49	コナラ属アカガシ亜属	
C44	50	コナラ属アカガシ亜属	2,410±30BP
C45	51	キヅタ	
C46	52	スダジイ	
C47	53	スダジイ	
C48	54	スダジイ	
C49	55	スダジイ	
C50	56	イネ科タケ亜科	
C51	57	キハダ	
C52	58	ムクロジ	
C53	59	トチノキ	
C54	60	コナラ属アカガシ亜属	
C55	61	スダジイ	
C56	62	スダジイ	
C57	63	スダジイ	
C58	64	不明	
C59	65	ムクロジ	
C60	66	スダジイ	
C61	67	キハダ	3,900±30BP
C62	68	サカキ	
C63	69	コナラ属アカガシ亜属	
C64	70	キヅタ	
C65	71	コナラ属アカガシ亜属	
C66	72	スダジイ	
C67	73	コナラ属アカガシ亜属	
C68	74	サカキ	
C69	75	サカキ	
C70	76	サカキ	
C71	77	不明	
C72	78	コナラ属アカガシ亜属	
C73	79	キハダ	
C74	80	コナラ属アカガシ亜属	
C75	81	コナラ属アカガシ亜属	

(5) 考察

SH05の詳細な時期は不明とされており、炭化材の年代測定でも $2,050 \pm 30\text{BP} \sim 3,900 \pm 30\text{BP}$ までの値が得られており、年代幅がある。出土した炭化材は竪穴建物構築材と考えられており、合計9分類群の木材とタケ亜科が認められた。このうち、アカガシ亜属、スダジイ、サカキは、暖温帯常緑広葉樹林を構成する常緑広葉樹である。シラキやムクロジは、落葉広葉樹であるが、暖温帯常緑広葉樹林の林縁部等に生育する。サクラ属は二次林等にみられる落葉広葉樹である。トチノキやキハダは、谷沿い等に生育する落葉広葉樹である。キヅタは、林縁部に生育するツル性木本である。竪穴建物構築材は遺跡周辺の植生を反映することから、これらの広葉樹が遺跡周辺に生育していたことが推定される。

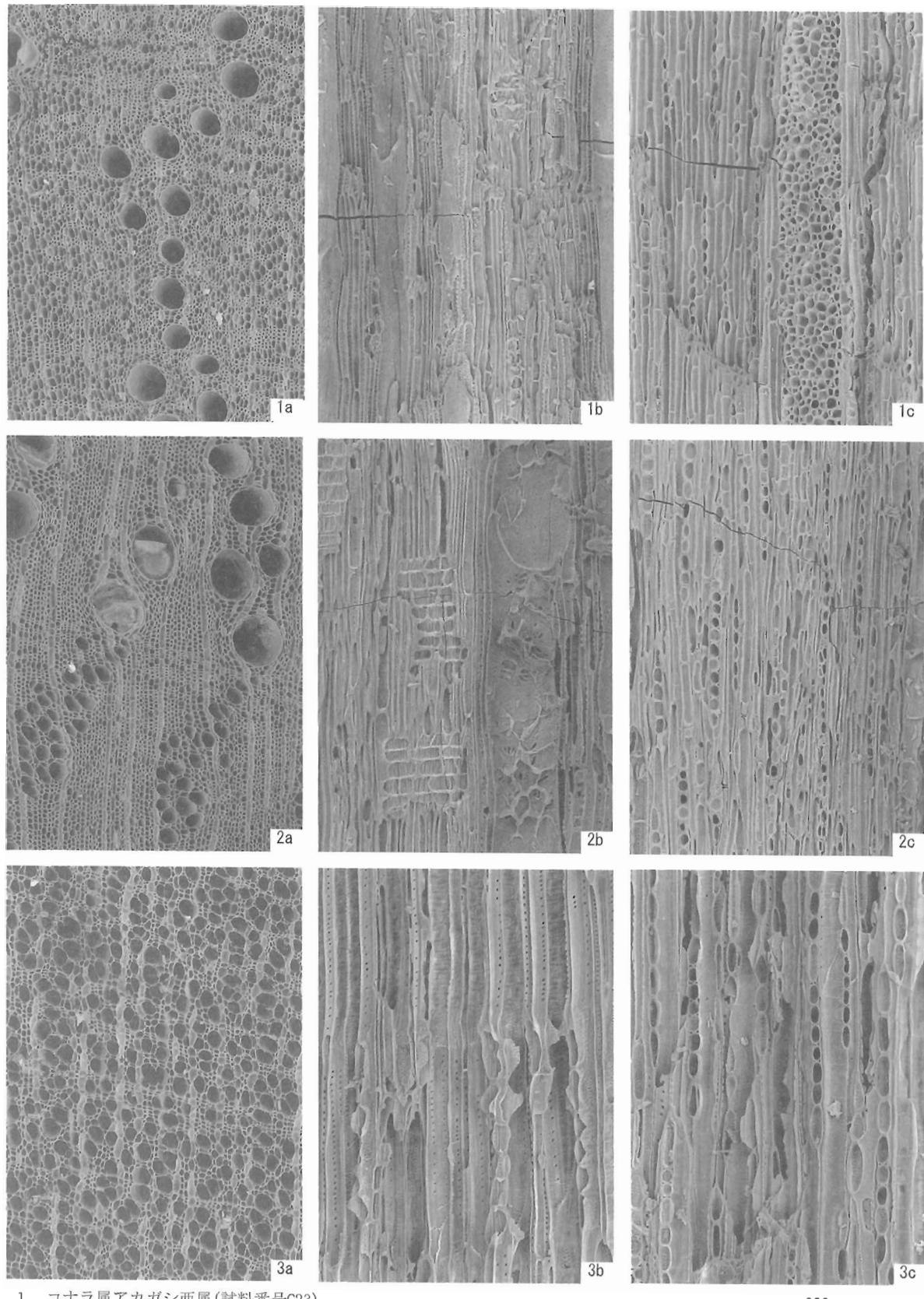
確認されたアカガシ亜属、スダジイ、サカキ、ムクロジ、サクラ属など、比較的重硬で強度の高い木材が多く見られるが、比較的軽軟なキハダ、シラキ、トチノキも認められ、強度の高い木材を中心に様々な木材が利用されていたことが推定される。キヅタは、ツル性木本であることから、部材の結束等に利用された可能性がある。また、タケ亜科は、萱材等の一部に由来する可能性がある。

本地域周辺では、沼津市豆生田遺跡の古墳初頭とされる住居跡出土の炭化材（垂木か）にカゴノキ属が確認されている（パリノ・サーヴェイ株式会社1989）。また、沼津市尾崎遺跡では、弥生時代後期～古墳時代初頭の住居構築材と考えられる炭化材がシキミに同定されている（パリノ・サーヴェイ株式会社2000）。いずれも暖温帯常緑広葉樹林を構成する種類が利用されている点では、今回の結果と調和的である。

引用文献

- 林 昭三 1991 『日本産木材 顕微鏡写真集』 京都大学木質科学研究所
- 伊東隆夫 1995 『日本産広葉樹材の解剖学的記載 I 木材研究・資料』 31 京都大学木質科学研究所 81-181頁
- 伊東隆夫 1996 『日本産広葉樹材の解剖学的記載 II 木材研究・資料』 32 京都大学木質科学研究所 66-176頁
- 伊東隆夫 1997 『日本産広葉樹材の解剖学的記載 III 木材研究・資料』 33 京都大学木質科学研究所 83-201頁
- 伊東隆夫 1998 『日本産広葉樹材の解剖学的記載 IV 木材研究・資料』 34 京都大学木質科学研究所 30-166頁
- 伊東隆夫 1999 『日本産広葉樹材の解剖学的記載 V 木材研究・資料』 35 京都大学木質科学研究所 47-216頁
- パリノ・サーヴェイ株式会社 1989 「炭化材同定」『豆生田遺跡発掘調査報告書』（沼津市文化財調査報告書第44集）
沼津市教育委員会 146-147頁
- パリノ・サーヴェイ株式会社 2000 「尾崎遺跡の自然科学分析」『尾崎遺跡発掘調査報告書』（沼津市文化財調査報告書第73集）沼津市教育委員会 付編1-8頁
- 島地 謙・伊東隆夫 1982 『図説木材組織』 地球社 176p.
- Wheeler E. A., Bass P. and Gasson P. E. (編) 1998 『広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト』
(伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩(日本語版監修) 海青社 122p [Wheeler E. A., Bass P. and Gasson P. E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification])

※本測定は、当社協力会社 パリノ・サーヴェイ（株）にて実施した。



1. コナラ属アカガシ亜属(試料番号C23)

2. スダジイ(試料番号C55)

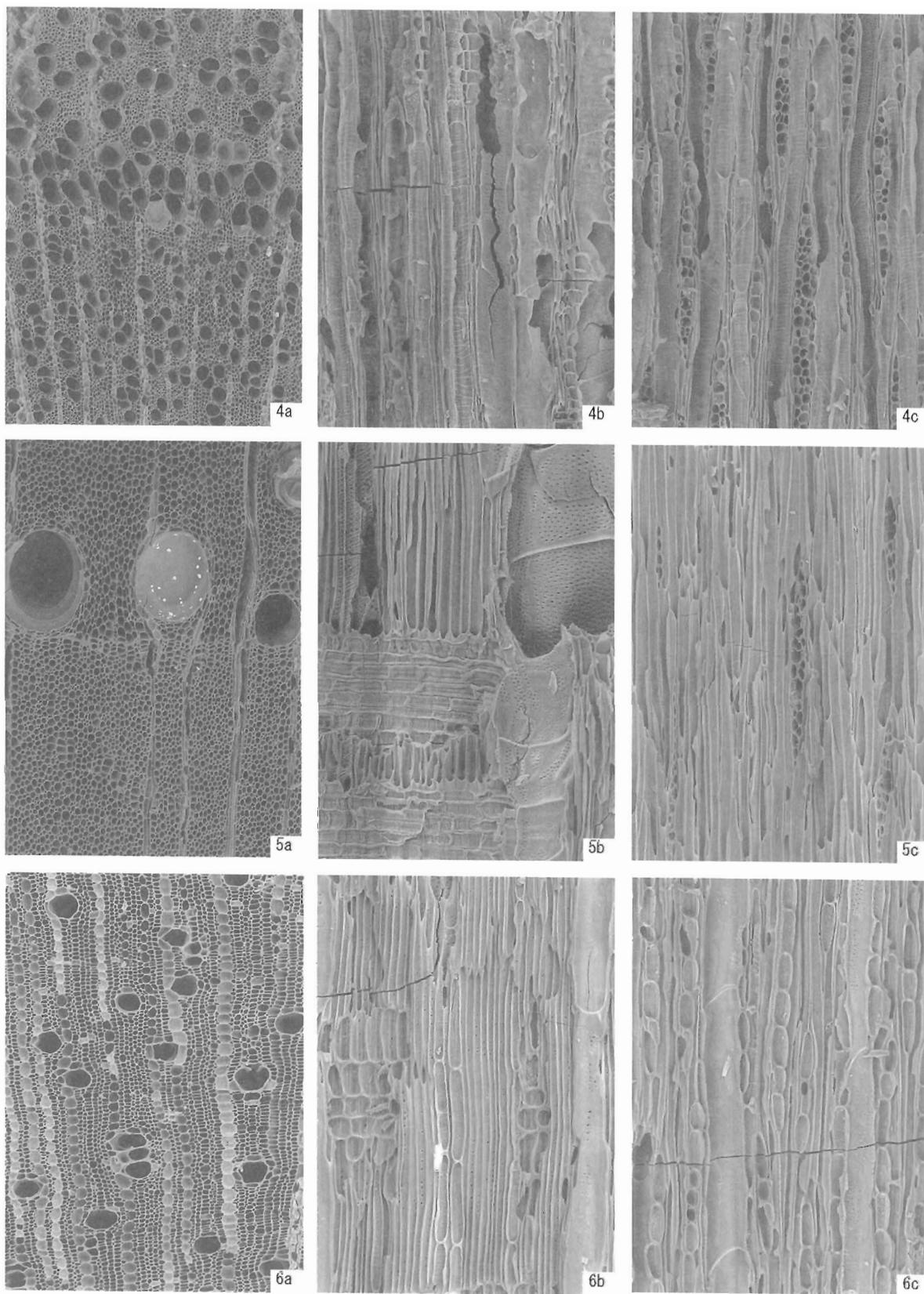
3. サカキ(試料番号C01)

a:木口, b:柾目, c:板目

200 μm:a

200 μm:b, c

写真41 平椎遺跡SH05出土炭化材①



4. サクラ属(試料番号C14)

5. キハダ(試料番号C61)

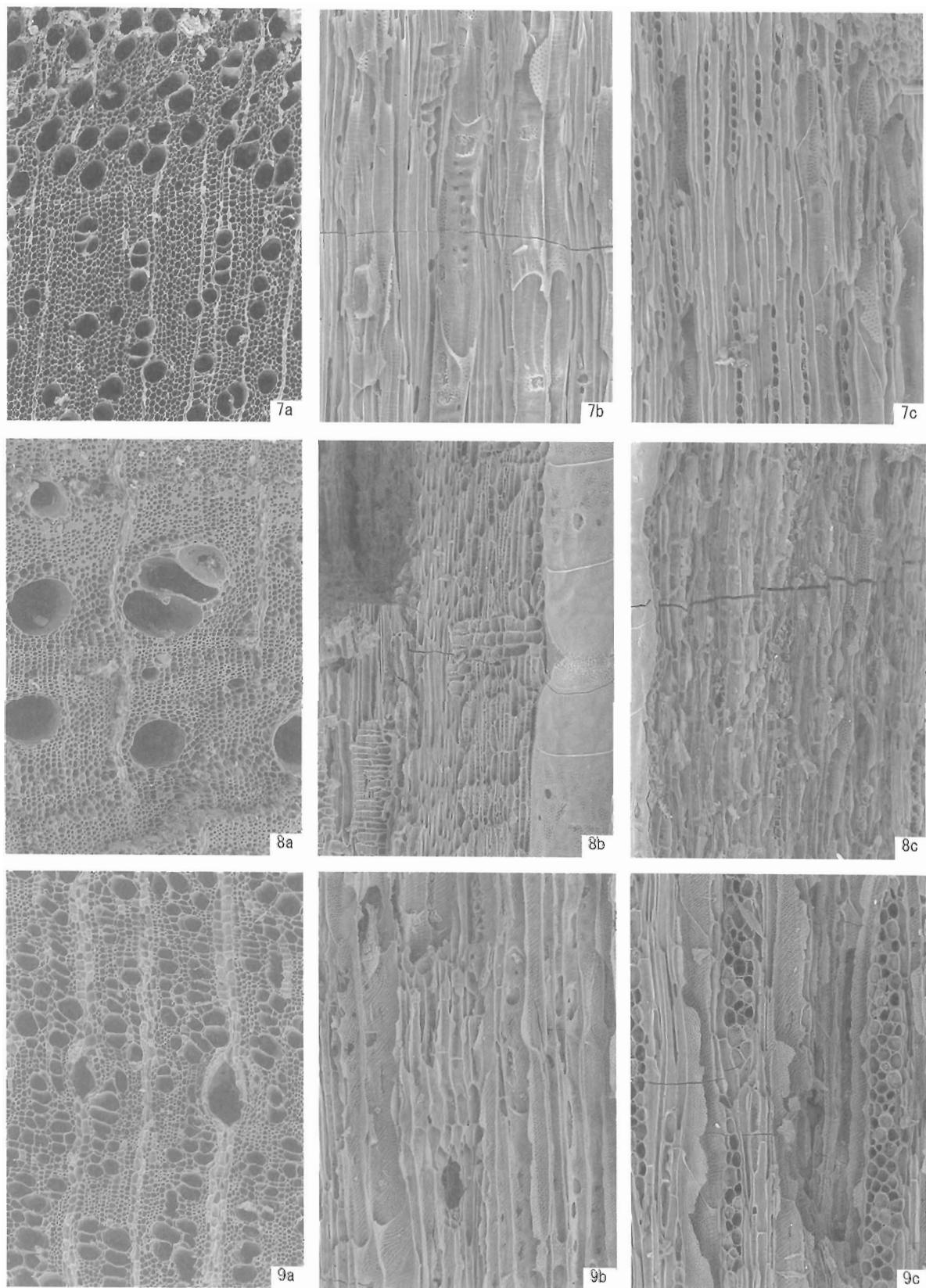
6. シラキ(試料番号C07)

a:木口, b:極目, c:板目

200 μm:a

200 μm:b, c

写真42 平椎遺跡SH05出土炭化材②



7. トチノキ(試料番号C30)

8. ムクロジ(試料番号C24)

9. キヅタ(試料番号C64)

a:木口, b:柾目, c:板目

200 μm:a

200 μm:b, c

写真43 平椎遺跡SH05出土炭化材③

第10節 平椎遺跡の評価

本書を閉めるにあたり、平椎遺跡から出土した弥生土器の位置づけを行った上で、東駿河地域における平椎遺跡の集落の意義について考えておきたい。

I. 平椎遺跡から出土した弥生土器について

(1) 弥生土器からみた平椎遺跡の時期区分について（第77図）

平椎遺跡では、16軒の竪穴建物、2条の溝（SD02は環濠・条濠の可能性がある）、6基の土坑などが確認され、多くの遺構から弥生時代後期前半～弥生時代末（・古墳時代初頭）にかけての土器が出土した。ここでは時期的な位置づけを行うものであるため、弥生時代末か、古墳時代初頭かの議論は行わず、東駿河地域の土器編年の中での位置づけをもとに、平椎遺跡の時期区分を行いたい。

第5節の土器の報告でも論じたが、遺構出土の弥生土器の編年的位置づけを簡単にまとめて、それとともに平椎遺跡の時期区分を行う。

なお、編年的位置づけについては、報告文と同様、渡井英誉氏の編年案である「雌鹿塚式」、「大廓式」を採用するが、他地域とのおよその時期的な関係について第25表に示す。

第25表 東駿河地域と周辺地域の土器編年対応表

近畿	伊勢湾岸		西遠江	東遠江	西・中駿河	東駿河
	尾張	三河				
畿内V様式	山中式I	山中式I	後期初頭	菊川式（古）	雌鹿塚I式	雌鹿塚II式
	山中式II	山中式II	山中式I			雌鹿塚III式
庄内式	廻間I	欠山式I	欠山式I	菊川式（中）	雌鹿塚IV式	雌鹿塚IV式
		欠山式II	欠山式II			大廓I式
布留式	廻間I/II	欠山式III	欠山式III	菊川式（最新）	大廓II式	大廓III式
	廻間II	元屋敷式（古）	元屋敷式（古）	三沢西原式（古）		
	廻間II/III	元屋敷式（新）	元屋敷式（新）	三沢西原式（新）		

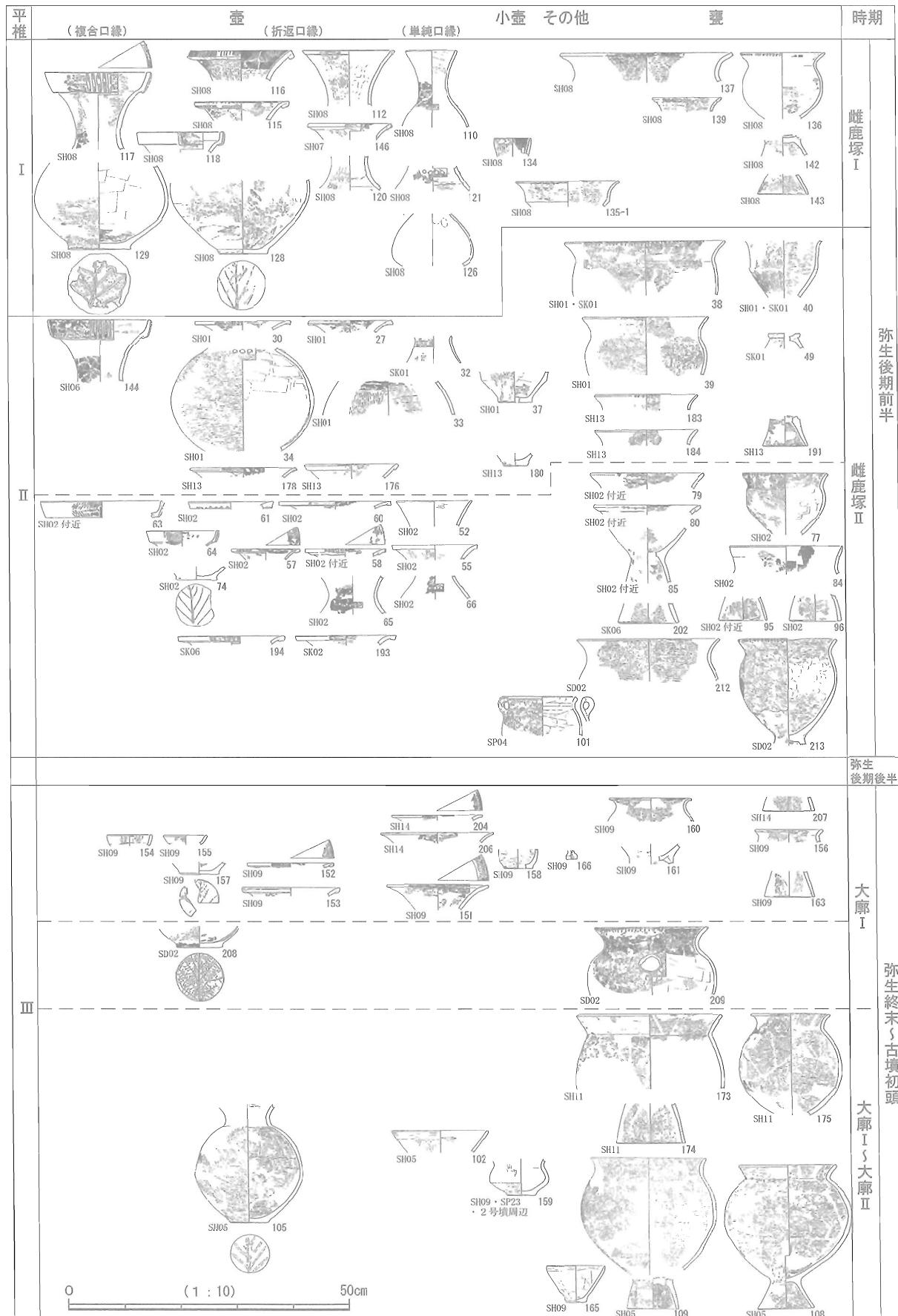
※およその編年の対象表である。

※渡井1997a・b、中嶋1997、加納・石黒編2002の編年表を参考に作成。

平椎遺跡は、以下で述べるとおり出土土器の特徴から3時期（期）に区分することができる。

平椎遺跡Ⅰ期（平椎Ⅰ期）～集落の開始期～ 平椎遺跡で最も古く位置づけられるのは、SH08出土土器である。SH08では複合口縁壺、折り返し口縁壺、台付甕などが出土しているが、単純口縁の長頸壺（110）は「雌鹿塚式」の中でも古い時期しか出土せず（渡井1997a）、沼津市御幸町遺跡SD01出土土器と同様の特徴を有し、頸部が長く細い特徴を有する。複合口縁壺（117）は頸部まで羽状縄文を施し、口縁部外面、口唇部にも縄文を巡らせるなど古い特徴を有し、渡井氏が「雌鹿塚II式」に設定する沼津市雌鹿塚遺跡遺構外出土の複合口縁壺よりも頸部が細く長い。また、台付甕137・138など口径が胴部最大径を上回る特徴を有するなど、「雌鹿塚II式」よりも古い特徴を示していることから、「雌鹿塚I式」に位置づけてよいと考える（渡井1997aほか）。

この点を補強するのは外来系土器である。伊勢湾岸系で天竜川以西から搬入された直口壺や高坏は、山中式の前半段階（山中式古段階=山中I～II式前半、西遠江V-I様式=篠原2002b）に位置づけることができる。また、東遠江からの搬入品と想定できる折り返し口縁壺（116）は、口縁部内面に羽状縄文が施される点などの特徴から菊川式古～中段階（中嶋1988）、東遠江東部V-2様式（篠原2002c）に位置づけられる可能性が高い。



第77図 平椎遺跡出土土器の時期区分

したがって、SH08出土土器は「雌鹿塚Ⅰ式」に位置づけられる可能性が高く、平椎遺跡の中では最も古い弥生時代後期の竪穴建物となる。この時期を平椎遺跡Ⅰ期とし、平椎集落の開始段階として評価できる。

なお、平椎遺跡の周囲には弥生時代中期に遡る遺跡は現状では確認されていないことから、この時期に平椎遺跡が位置する増川地区以外から新たに移住し、形成された可能性が高い。

平椎遺跡Ⅱ期（平椎Ⅱ期）～集落の盛期～ SH06などではSH08よりも頸部が短くなり、台付甕の最大径が胴部と口縁部がほぼ同じであるなど、渡井氏の「雌鹿塚Ⅱ式」の特徴を有する土器群が確認できる。この土器群をもって平椎遺跡Ⅱ期としたい。

この時期には、SH02、SH06、SH07など、該当する竪穴建物が多く、平椎遺跡Ⅰ期で始まった集落が竪穴建物の数を増加させ、安定した経営を行っていたと評価できる。

また、条濠（環濠）と推測するSD02の中層下位（溝底からやや浮いた位置）から「雌鹿塚Ⅱ式」の特徴を有する土器が出土しており、その位置が溝底ではなく、やや浮いた位置からの出土であることから、SD02は「雌鹿塚Ⅱ式」と同時期あるいはそれ以前に掘削された可能性が高い。雌鹿塚Ⅱ式以前に掘削されていたとすれば、集落が成立した当初から、SD02のような断面V字形の溝（条濠）を有する集落であった可能性が高まる。

平椎遺跡Ⅲ期（平椎Ⅲ期）～集落の再興期～ 平椎遺跡では、「雌鹿塚Ⅲ式・Ⅳ式」（後期後半）の特徴的な土器様式・型式が確認できず、平椎遺跡Ⅱ期の集落が営まれた後、一旦集落としての機能を失ったと想定できる。

一方、SH05やSH11などで「雌鹿塚式土器」には確認されない球胴を意識した壺や甕、く字形甕の出現、壺の無文化、台付甕における口唇部刻みが消失したものの増加、台部がハ字形に直線的に開く甕が出現するとともに、伊勢湾岸系の土器に見られる口縁部の横位のナデ調整など、「雌鹿塚式土器」の調整には認められない新しい技法で製作された土器が出土する。また、一旦外側に円形の輪を作った後その内側を充填し底部を形成する土器なども出現している。このように弥生時代末（～古墳時代初頭）の「大廓Ⅰ式」段階に位置づけることができる土器が出土しており、この土器群をもって平椎遺跡Ⅲ期に位置づけたい。この段階に再度集落が形成されたといえる。

この時期では、SH05、SH11、SD02中層上位出土土器などが挙げられ、雌鹿塚式土器の伝統を保持する集団で、新しい土器の形態的、技術的情報を有する集団が集落を形成したと考えられる。また、SH05のように竪穴建物の平面形態も隅丸方形へと変化しており、土器情報だけではなく、建物の形態や構造についても新しい情報を得ていた集団と考えられよう。

平椎Ⅲ期は「大廓Ⅱ式期」まで一部の竪穴建物（SH05など）などが存続していたと考えられるが、「大廓Ⅲ式期」以降の古式土師器は確認できない。平椎集落は現状では「大廓Ⅱ式期」で弥生集落は廃絶したと考えられる。

以後、古墳時代後期後半から終末期に平椎古墳群が築造されるまで、この場所には人為的な営為は確認できなくなる。

(2) 平椎遺跡出土の外来系土器について（第78図）

平椎遺跡では、東駿河以外からの搬入品や、外部からの強い影響を受けた土器が確認できる。ここでは、それらの土器をまとめておきたい。

第76図には、東駿河以外からの搬入品や技術的・形態的な影響を受けた外来系土器を掲載した。

まず、西からの影響が確認できるものみておきたい。SH08出土の西遠江（伊勢湾岸）からの搬入品である山中様式系（伊場式）の直口壺（134）・高坏（135-1・135-2）や、SK01出土の台基部に突帯を貼り付ける台付壺（49）や、庄内式土器の影響を受けたと考えられるSH09出土の鉢（165）や、口縁部を横ナデする壺の影響を受けたSH05出土の台付壺（108）などがある。

また、東遠江の菊川式土器の搬入品の可能性が高いSH08出土の折り返し口縁壺（116）や胴下部に明瞭な屈曲を有する壺（127）があり、SH09出土の小型壺（159）も菊川式土器の影響と考えられる。

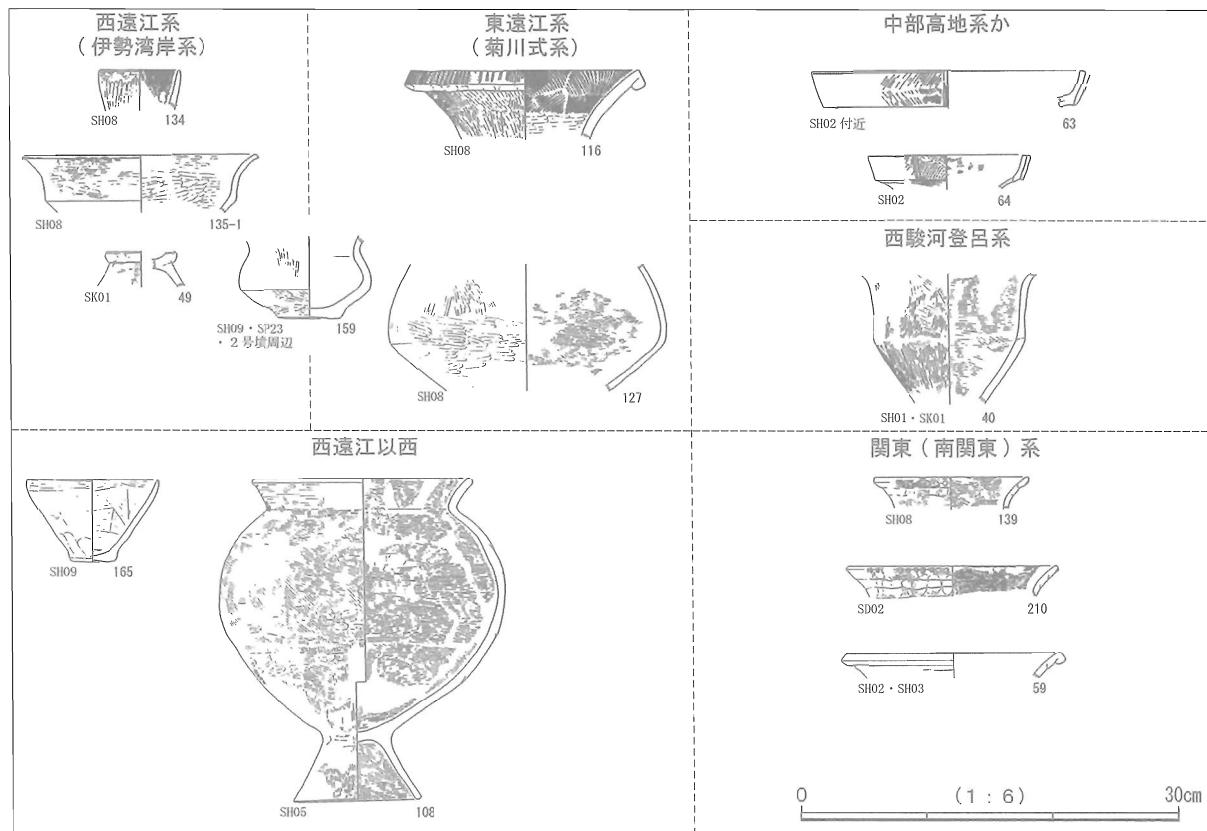
また、西駿河の登呂式土器の影響を受けたSH01・SK01出土の壺（40）がある。中部高地系としたSH02出土の複合口縁壺（63・64）は、この西駿河を介しての影響の可能性もある。

一方、東駿河以東の影響もみられる。南関東系の輪積痕を残す壺・壺（59・139・210）がある。

SH08は平椎遺跡Ⅰ期、SH02は平椎遺跡Ⅱ期、SH05・SH09は平椎遺跡Ⅲ期であり、それぞれの時期に周辺地域からの影響を受けていたと考えられる。

したがって、平椎遺跡成立当初から、東駿河の「雌鹿塚様式」のみで形成されたわけではなく、西遠江（伊勢湾岸）系、東遠江（菊川様式）系の土器の影響を受けるとともに、関東（南関東）系の影響を受けていたと考えることができ、さらには中部高地や近畿地方の影響も受けていたことがわかる。平椎遺跡は、浮島沼周辺の尾崎遺跡や、愛鷹山麓の先端に形成された宮添遺跡、祢宜ノ前遺跡などよりも山麓の奥まった位置に所在するが、平椎遺跡を営んだ集団が他地域との交流をもち、影響を受けていたことを想定することができるだろう。

（大谷）



第78図 平椎遺跡出土の主な外来系土器

2. 平椎集落の変遷

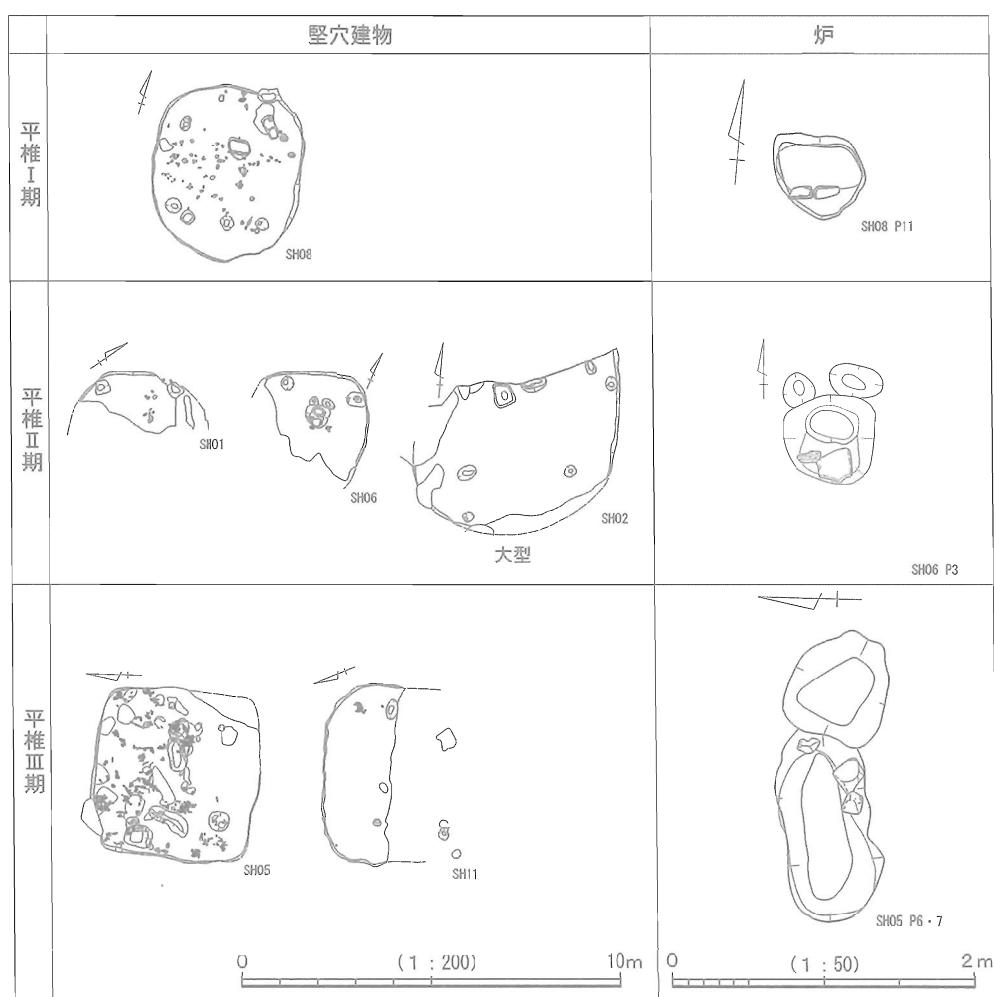
出土遺物の検討によって、平椎集落（平椎遺跡の集落跡）の形成時期には弥生時代後期前半と弥生時代末（～古墳時代初頭）の2段階が把握でき、3つの時期（平椎遺跡Ⅰ期、平椎遺跡Ⅱ期、平椎遺跡Ⅲ期、以下、「遺跡」を除いて平椎Ⅰ期などとする）に大別できるとした。ここでは、その検討結果から集落を構成する主要遺構の時期と変遷を把握し、集落の形成過程について検討したい。

（1）平椎集落の主要遺構（第79・80図）

平椎集落は、主に竪穴建物によって構成されている。

竪穴建物について 竪穴建物の中で、6軒（SH01・02・05・06・08・11）は出土遺物によって時期を示すことができる。SH05・06・11は、竪穴建物に伴うことが明らかな土器があり、SH05・11は平椎Ⅲ期、SH06は平椎Ⅱ期に位置づけできる。SH01・02・08は、出土土器の中に残存率の良いものがあり、SH01・02は平椎Ⅱ期、SH08は平椎Ⅰ期に位置づけできる。

この6軒の竪穴建物の特徴について、次のように時期別に整理することができる。平椎Ⅰ期のSH08は、長軸4.5m程の楕円形を呈し、中央北寄りに置石を伴う炉が配置されている。掘方は中央が低くなる。平椎Ⅱ期のSH01・06も、SH08と似た規模の楕円形を呈し、SH06では置石を伴う炉が確認できる。ただし、平面形は各辺の直線化が認められ、柱の配置は壁際に寄る。また、床構築土は全体に薄いもの



第79図 平椎集落における竪穴建物の変遷

になる。一方、平椎II期には大型の竪穴建物（SH02）が認められる。楕円形を呈するが、炉は焼土が薄く置石もない。平椎III期のSH05・11は、一辺4.5m程の隅丸方形を呈する。掘方は周縁部が深くなる。SH05では、中央東寄りに炉、西縁部北寄りに貯蔵穴が設けられている。炉には置石を伴うが、SH06・08とは炉の形態や置石の用い方に違いがある。

平椎I期から平椎II期の竪穴建物は、基本的に平面楕円形で置石炉を伴う点で共通するが、直線化する平面形や壁際に寄る柱配置といった傾向の変化も把握できる。さらに、大型建物の出現という変化の可能性が考慮される。平椎III期に至っては、平面形が隅丸方形へと大きく変わり、建物方向（炉の位置）や炉の構造についても変化を確認することができる。

その他の竪穴建物の時期は、散在的に出土している土器片や切り合い関係のほか、把握した竪穴建物の変遷との比較によって判断する必要がある。SH03は、切り合い関係からSH02より古く、平椎I～II期のものと判断できる。SH04・07・10・14は、平面形から平椎I～II期のものと判断でき、SH14は切り合い関係からSD02よりも古い。さらに、SH04・10の形態はSH01・06（平椎II期）よりもSH08（平椎I期）に近い。SH12は、切り合い関係と平面形から平椎I～II期のものと判断でき、さらに大型に復原できることから、平椎II期に該当する可能性が評価できる。SH13は、出土土器と平面形から平椎III期の可能性が評価できる。SH09は、平椎III期の土器が出土しているが、小破片が散在する状況であった。大型建物であり、平面形に丸味があることから、平椎II期の可能性も考慮される。しかし、隅丸方形に該当する可能性もあり、主軸方向がSH05・11と平行していることから、平椎III期の可能性を指摘しておきたい。

SD02について SD02は断面V字の溝であり、尾根を横断する条濠である可能性が指摘できる。出土土器から平椎II期に設けられ、埋まりながら平椎III期まで存続したと把握できる。また、切り合い関係からSH14の後に設けられたことが判明しており、集落形成の開始期から設けられたわけではないことがわかる。もちろん、今回の検出が一部であることから、SD02の性格や時期の詳細を断定することはできない。しかし、集落北縁を区画する条濠を伴う可能性が指摘できる遺構として、注目に値する。

（2）集落形成について（第80図）

平椎集落は、弥生時代後期前葉にはじまる（平椎I期）。長軸4.5m程の平面楕円形の竪穴建物が設けられるが、置石を伴う炉などの構造も備わっている。なお、大型の竪穴建物があったかは不明である。また、集落北縁を区画する条濠は設けられていなかった可能性がある。

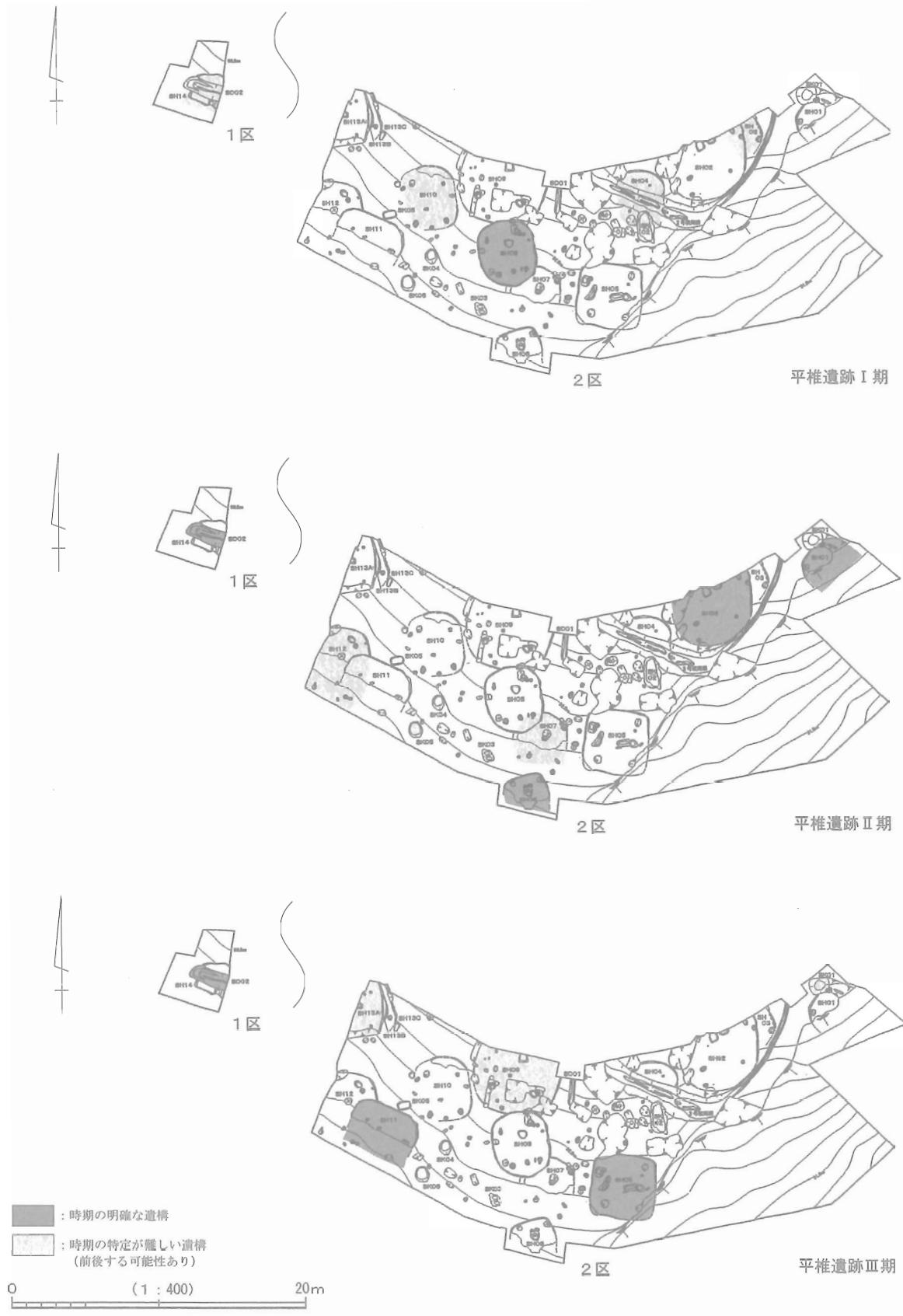
平椎集落の営みは弥生時代後期中葉まで継続する（平椎II期）。竪穴建物の変化は緩やかであり、基本的な形態・構造は平椎I期から引き継がれていると評価できる。ただし、集落の北縁に丘陵を横断する条濠を設けた可能性が指摘できる。また、今回の調査範囲だけでは断定できないが、大型の竪穴建物がこの時期に出現した可能性も考慮する必要がある。

今回の調査では、弥生時代後期後半の営みは確認できない。調査区外の遺構・遺物は不明であるが、弥生時代後期中葉に平椎集落の形成が途絶える可能性を考慮する必要がある。

平椎集落は、弥生時代末（～古墳時代初頭）においても営まれる（平椎III期）。これまでと同様に竪穴建物を主体とする集落であるが、その平面形は隅丸方形になり、主軸方向や炉の構造も平椎I・II期とは異なる。なお、条濠は半分ほどが埋まった状態で存続していた可能性がある。 （田村）

3. まとめ

今回の調査は、第二東名高速道路建設の工事用道路のためのものであり、調査範囲は遺跡の極一部に限られている。しかし、弥生時代後期前半～古墳時代初頭の集落の存在が明らかとなり、その様相を把



第80図 平椎集落の変遷



第81図 沼津市八兵衛洞遺跡の条濠

握する上で興味深い成果も得ることができた。

平椎集落の形成について、弥生時代後期後半が空白期になる可能性が指摘できる。平椎遺跡内において居住範囲が変異した可能性のほか、遺跡外に移動した可能性もある。南南西約600mには宮添遺跡があり、弥生時代後期～後期末・古墳時代初頭の集落跡が把握されている。地域内の各遺跡の消長を考慮して集落の形成過程を理解する必要があると思われる。

平椎集落は竪穴建物を主体とするが、集落の北縁にあたる場所（山側）に条濠を設けた可能性が指摘できる。東駿河地域では、弥生時代中期中葉の沼津市西通北遺跡をはじめとして環濠集落が形成されるが、愛鷹山麓に立地する沼津市八兵衛洞遺跡では、弥生時代後期～古墳時代前期の集落跡の北縁（山側）に丘陵を横断する条濠が設けられている（第81図）。平椎集落との共通点が指摘でき、東駿河地域の丘陵上集落の特質を探る上でも重要な要素になると考える。

出土遺物について、集落形成開始期（平椎Ⅰ期）では、関東地方の特徴を伴う土器や西遠江以西の土器があり、集落出現の背景に外地からの伝播・交流があつ

たことが指摘できる。また、弥生時代末～古墳時代初頭（平椎Ⅲ期）では西遠江以西の土器が出土している。南東約500mには前方後方墳である浅間古墳がある。前方後方墳の築造においても地域間交流の様相は注目されることから、その前後の周辺集落の動向としても重要な成果になると考える。（田村）

図の出典

第81図（高尾1999）より

第11節 結語

今回の調査は、第二東名高速道路建設の工事用道路のためのものであり、調査範囲は遺跡の極一部に限られている。しかし、弥生時代の竪穴建物ほか、古墳1基（平椎第2号墳）、縄文土器などが出土し、予想以上の新知見を得ることができた。

以下に、平椎遺跡および平椎第2号墳の調査成果をまとめて、結語としたい。

縄文時代 遺構は明確ではないが、早期の清水柳E類、縄文時代前期末～中期初頭の五領ヶ台式土器と併行する土器群と石器が出土した。土器は小片のため位置づけが難しいが、東海系、関東系など系譜関係が若干異なる土器が出土した。出土土器の数量によると縄文時代早期に何らかの人為が及び、前期末中期初頭に集落が形成された可能性が高く、この時期のみ集落として機能していた可能性が高い。

弥生後期～弥生時代末（古墳時代初頭） 弥生時代後期前半（平椎I・II期）と弥生時代末（～古墳時代初頭、平椎III期）の2時期にわたり竪穴建物を中心として集落が営まれていたことが判明した。特に弥生時代後期前半の早い時期に集落が形成され始めたことが明らかになった点は、富士市域では様相が不明確であった時期だけに、今後の富士市の歴史を考えていく上で重要な発見となった。集落が盛期を迎える後期前半には、竪穴建物の数が増加し、集落の北側には条濠が掘削された可能性が高いことも判明した。

しかし、後期後半には一旦集落が廃絶するようで、この時期の遺構・遺物は確認されていない。

弥生時代末（～古墳時代初頭） に竪穴建物の造営が再開し、集落が再び営まれたが、その後古墳時代前期（大廓III式以降）の遺構・遺物はなく、この時期になると完全に廃絶したようである。

平椎遺跡の盛衰と関係して、南側に位置する宮添遺跡（富士市教委2008a・2009・2010）との関係が重要となる。宮添遺跡は平椎遺跡の集落が一旦停止する後期後半に造営が開始され、平椎遺跡が再興する弥生時代末に中断し、平椎遺跡が廃絶する古墳時代前期に再開する可能性が高いことが判明している。同一の集団が移動していたのか明確ではないが、遺跡間で遺跡の消長が補完関係にある可能性が想定できることは興味深い。

今後は土器の詳細な比較検討や竪穴建物の構造などの比較を通じて、両遺跡の関係について明らかにしていく必要がある。

平椎第2号墳 平椎第2号墳は北側にある第1号墳とともに平椎古墳群を形成する。第2号墳の存在が今回初めて明らかになったため、他にも削平され茶畑下に埋没した古墳が数基あると想定できるが、平椎古墳群は10基に満たない群集墳である可能性が高い。

平椎第2号墳は、愛鷹山南麓の緩斜面、標高93m付近に立地し、南側に位置する大規模古墳である浅間古墳や、数基で構成される増川古墳群が所在する場所からは500m以上奥まった位置に築かれており、古墳数が非常に少ない地域である。こうした状況の中で横穴式石室を埋葬施設とする古墳が確認された意義は大きい。埋葬施設の破壊が著しく詳細は不明であるが、馬具などが副葬されていたことが明らかとなった。尾根の奥まった位置まで開発がなされたことを意味するといえよう。

古代以降 古代以降に帰属する遺構は確認できないが、灰釉陶器、土師器甕、銅錢「寛永通寶」などが出土した。遺物が示す時期に何らかの人為が及んでいることは明らかではあるが、その性格については明らかにすることはできない。

(大谷)

参考文献

【報告書・図録等】

- 静岡県教育委員会 2001 『静岡県の前方後円墳』
 静岡大学考古学研究室 1998 「静岡県富士市国指定史跡浅間古墳測量調査の成果」『静岡県の重要遺跡』 静岡県教育委員会
 濑戸市埋蔵文化財センター 2002 『江戸時代の瀬戸窯』
 沼津市教育委員会 1979 『八兵衛洞遺跡発掘調査報告書』
 沼津市教育委員会 1989 『雄鹿塚遺跡発掘調査報告書』
 沼津市教育委員会 1990 『雌鹿塚遺跡発掘調査報告書』
 沼津市教育委員会 2000 『尾崎遺跡発掘調査報告書』
 沼津市教育委員会 2004 『八兵衛洞遺跡発掘調査報告書』
 富士市教育委員会 1986 『富士市の埋蔵文化財（遺跡編）』
 富士市教育委員会 2008a 『宮添遺跡I』
 富士市教育委員会 2008b 『祢宜ノ前遺跡』
 富士市教育委員会 2009 『宮添遺跡II』
 富士市教育委員会 2010 『宮添遺跡III』
 富士宮市教育委員会 1981 『月の輪遺跡群II』
 富士宮市教育委員会 1989 『渋沢遺跡』
 富士宮市教育委員会 1991 『丸ヶ谷戸遺跡』
 富士宮市教育委員会 1994 『月の輪遺跡群IV』
 富士宮市教育委員会 1997 『滝戸遺跡』
 富士宮市教育委員会 2001 『丸ヶ谷戸遺跡II』
 富士宮市教育委員会 2005 『富士宮市の遺跡III』
 富士宮市教育委員会 2007 『滝戸遺跡II』
 富士宮市教育委員会 2009 『東田遺跡』

【論文】

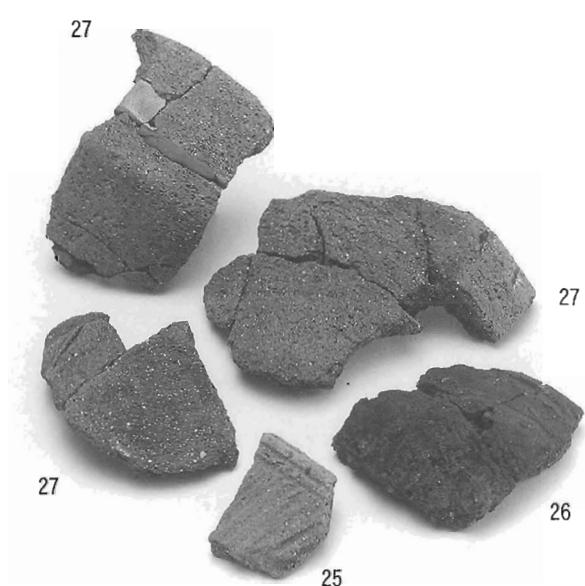
- 岩本 貴 2002 「弥生時代集落の概観－東部地域－」『静岡県における弥生時代集落の変遷』 静岡県考古学会
 岩本 貴 2004 「集落の区画について」『静岡県考古学研究』36号 静岡県考古学会
 植松章八 2008 「東駿河の奈良・平安時代の遺跡と土器」『祢宜ノ前遺跡』 富士市教育委員会
 加納俊介・石黒立人編 2002 『弥生土器の様式と編年』 木耳社
 篠原和大 2002a 「東駿河第V様式」『弥生土器の様式と編年 東海編』 木耳社
 篠原和大 2002b 「環濠－静岡県における弥生後期環濠集落の理解に向けて－」『静岡県における弥生時代集落の変遷』 静岡県考古学会
 篠原和大 2002c 「西遠江第V・VI様式、東遠江V様式」『弥生土器の様式と編年 東海編』
 篠原和大 2006 「登呂式土器と雌鹿塚式土器」『静岡県考古学研究』38 静岡県考古学会
 鈴木敏則 2001 「湖西窯古墳時代須恵器編年の再構築」『須恵器生産の出現から消滅 補遺・論考編』 東海土器研究会
 鈴木敏則 2004 「静岡県下の須恵器編年」『有玉古窯』 浜松市教育委員会
 高尾好之 1999 「大規模土坑群を伴う環濠-八兵衛洞遺跡群-」『平成11年度静岡の原像をさぐる発掘調査報告会』 静岡県埋蔵文化財調査研究所
 田村隆太郎 2009 「まとめ」『綱掛山古墳群・片瀬遺跡』 静岡県埋蔵文化財調査研究所
 中嶋郁夫 1988 「いわゆる菊川式と飯田式の再検討」『転機』2号 転機刊行会
 中嶋郁夫 1993 「東海地方東部における後期弥生土器の『移動』・『模倣』」『転機』4号（『東海系土器の移動から見た東日本の後期弥生土器』 転機刊行会
 中嶋郁夫 1997 「東海東部の古式土師器」『静岡県史研究』13号 静岡県
 萩野谷正宏 2002 「東駿河第III様式・第IV様式」『弥生土器の様式と編年 東海編』 木耳社
 藤澤良祐 1995 「古瀬戸」『概説中世の土器と陶磁器』 真陽社
 藤澤良祐 1998 「近世瀬戸村の連房式登窯」『瀬戸市史』陶磁史篇六 瀬戸市
 丸杉俊一郎 2008 「都田川流域における弥生時代中期の諸問題」『井通遺跡II』 静岡県埋蔵文化財調査研究所
 山下峰司 1995 「灰釉陶器・山茶碗」『概説中世の土器と陶磁器』 真陽社
 渡井英吾 1996 「東駿河における布留式併行期の様相（前）」『静岡県考古学研究』28号 静岡県考古学会
 渡井英吾 1997a 「土器編年」『滝戸遺跡』 富士宮市教育委員会
 渡井英吾 1997b 「東駿河における布留式併行期の様相（後）」『静岡県考古学研究』29号 静岡県考古学会
 渡井英吾 2001 「出土土器の編年的位置」『丸ヶ谷戸遺跡II』 富士宮市教育委員会
 渡井英吾 2002 「ムラと墓」『静岡県における弥生時代集落の変遷』 静岡県考古学会
 渡井英吾 2005 「弥生時代集落の動向」『大中里坂下遺跡』 富士宮市教育委員会
 渡井英吾 2007 「まとめ」『滝戸遺跡II』 富士宮市教育委員会
 渡井英吾 2009 「まとめ」『東田遺跡』 富士宮市教育委員会

写 真 図 版

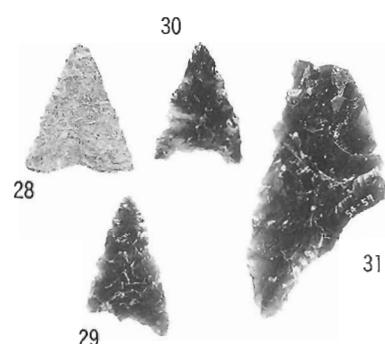
図版1 確認調査



24



27



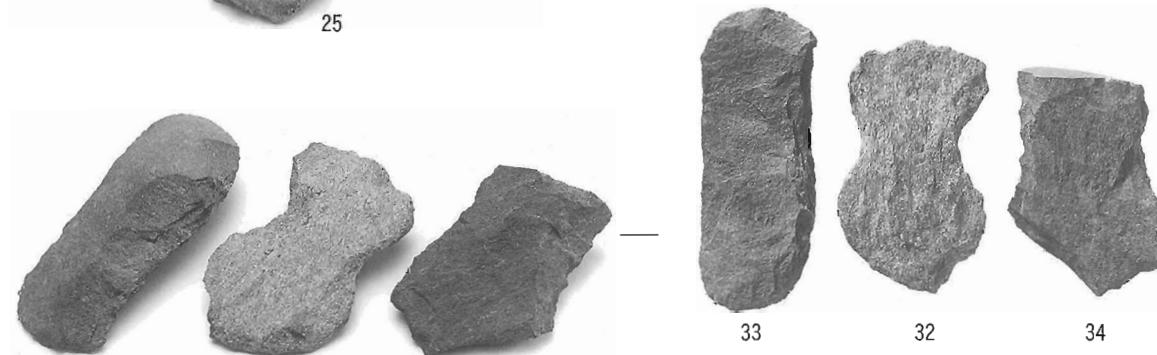
28

30



31

29



33

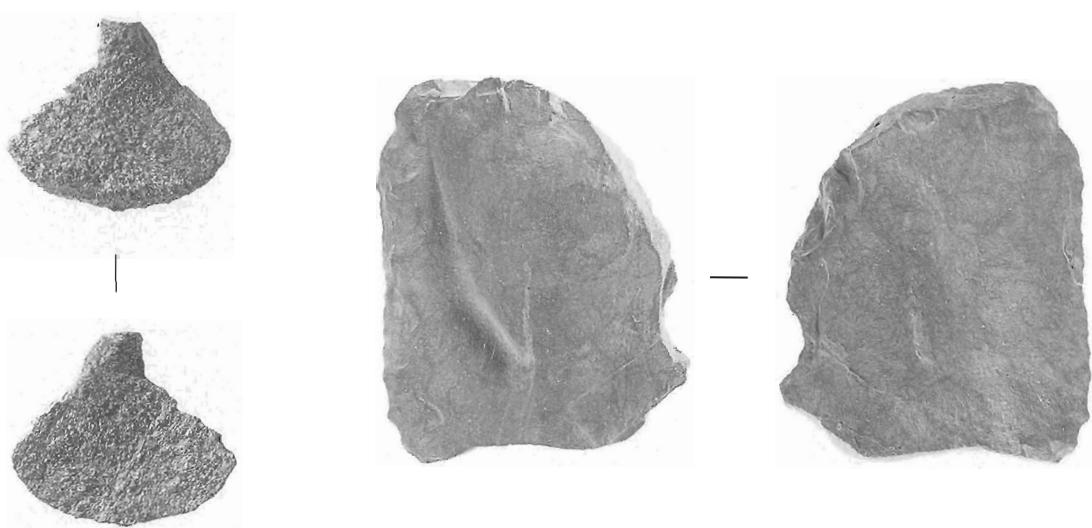
32

34

No54地点の確認調査による出土遺物①



1. No54地点の確認調査による出土遺物②



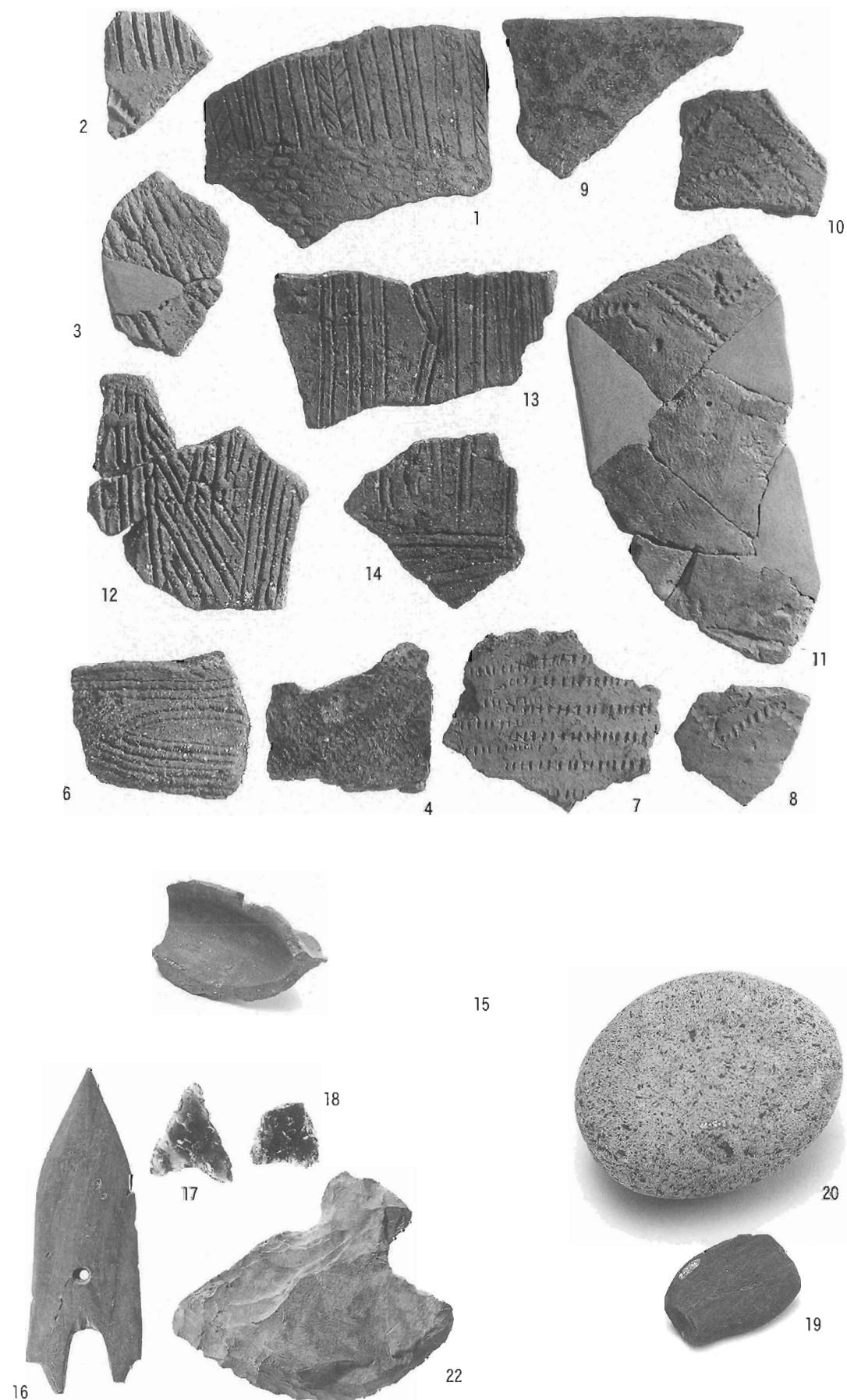
41

40

2. No54地点の確認調査による
出土遺物③

3. 各地点の確認調査による出土遺物①

図版3 確認調査



各地点の確認調査による出土遺物②

富士岡中尾遺跡 図版4



1. 富士岡中尾遺跡の遠景（南東から）



2. 調査区全景（西から）



3. 北端部の遺物出土状況（南西から）

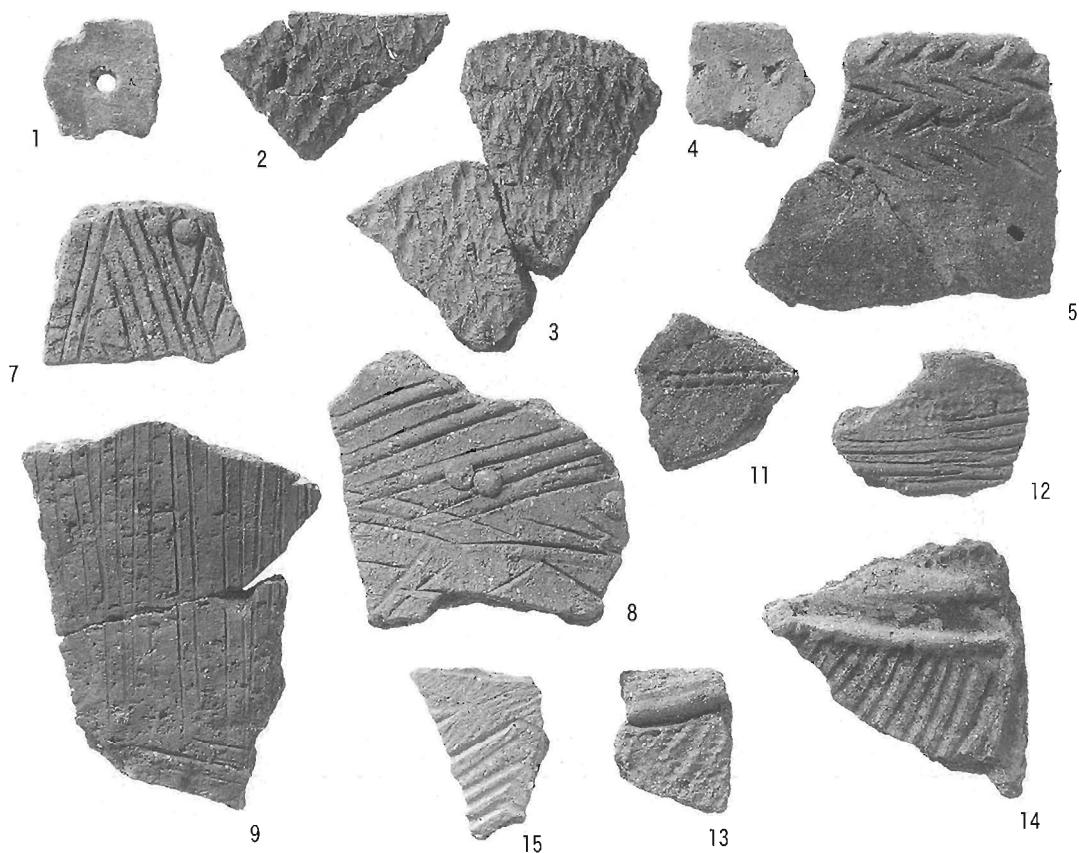


4. 調査区全景（北から）



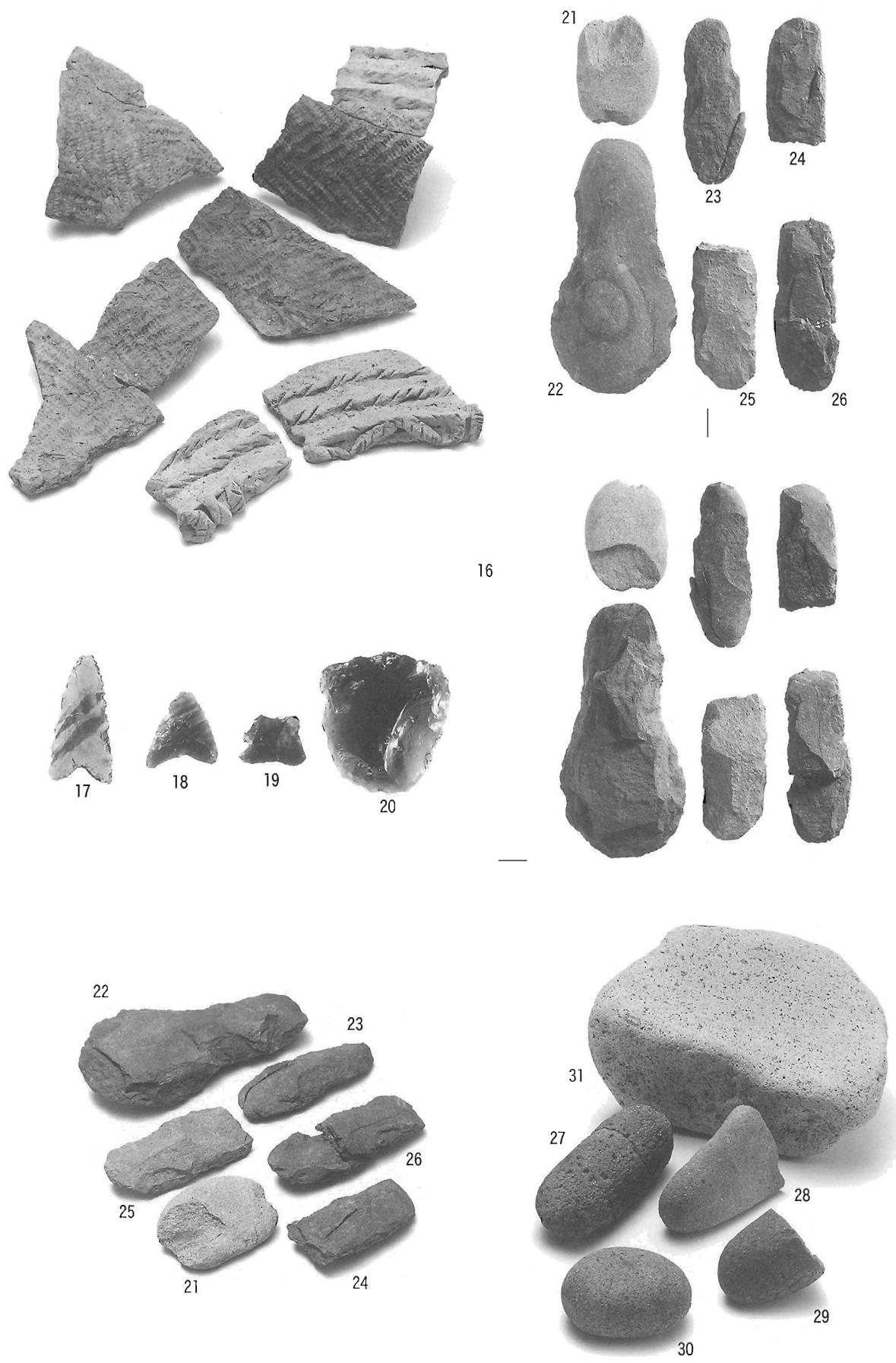
5. 北端部の遺物出土状況（北西から）

図版5 富士岡中尾遺跡



出土遺物①

富士岡中尾遺跡 図版6



出土遺物②

図版7 平椎遺跡

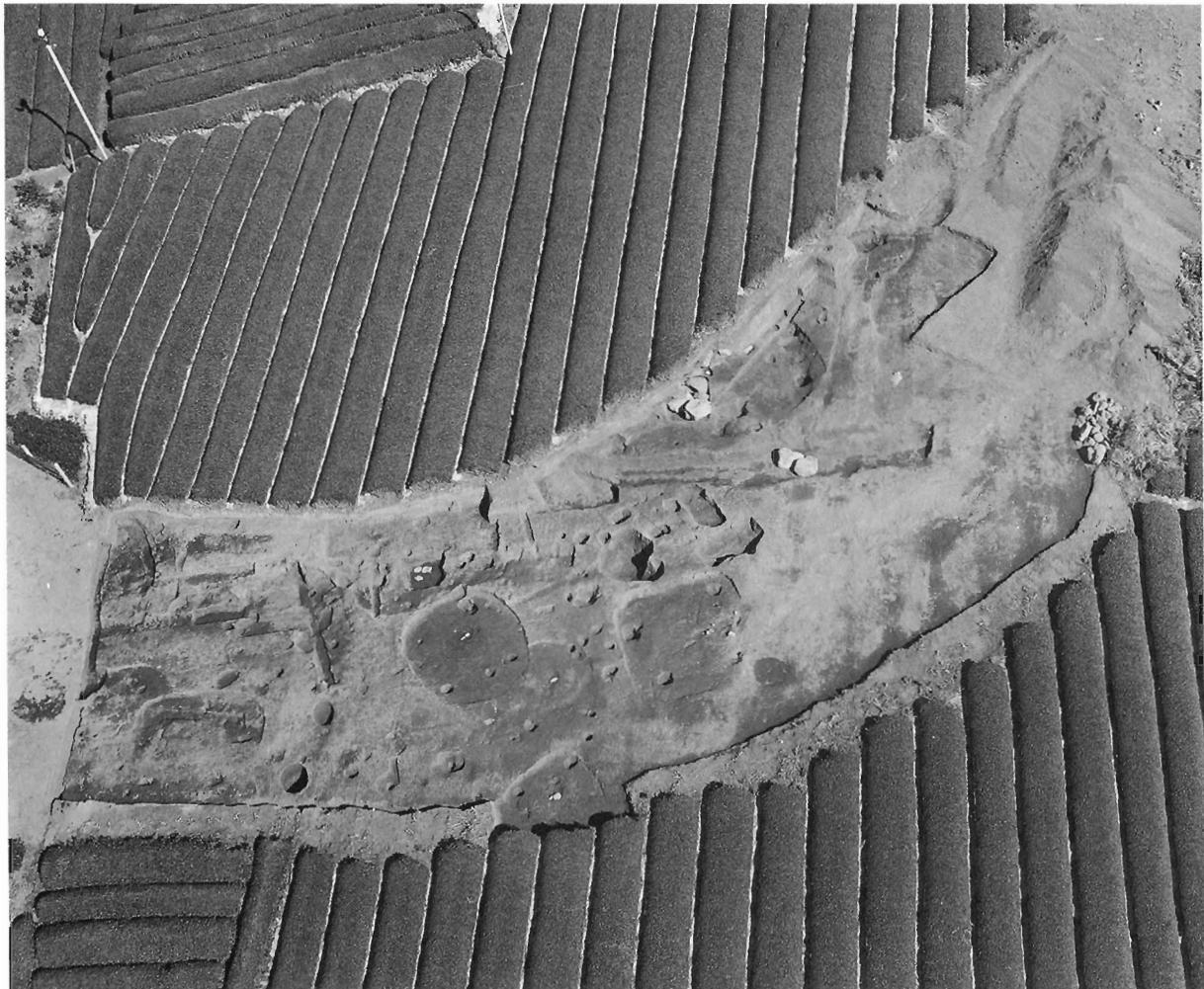


1. 平椎遺跡の遠景（北東から）



2. 平椎遺跡全景（西から） 茶畑の中央にあるのが平椎第1号墳

平椎遺跡 図版8



1. 調査区（2区）全景（南から）



2. 調査区（1区）全景（西から）

図版9 平椎遺跡



1. SH01・SK01遺物出土状況（南東から）



2. SH01・SK01（東から）

平椎遺跡 図版10



1. SH02・03の掘方（南西から）



2. SH04の掘方（南西から）

図版11 平椎遺跡



1. SH05炭化材・遺物出土状況（西から）



2. SH05（西から）

平椎遺跡 図版12



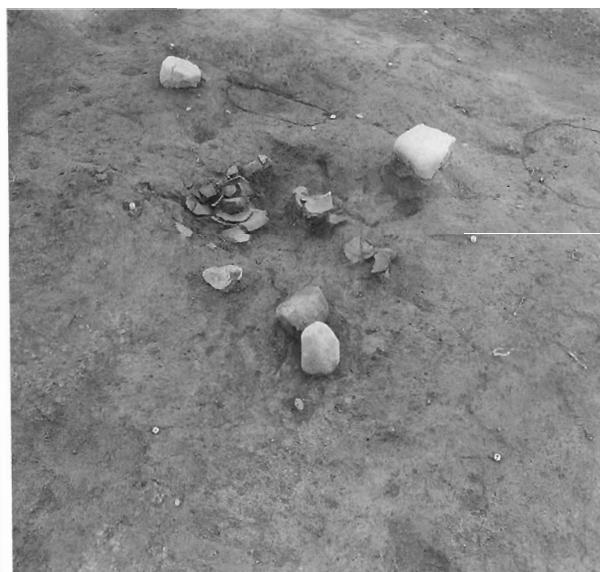
1. SH05北西部の炭化材出土状況（北西から）



2. SH05北東部の炭化材出土状況（北西から）



3. SH05炉上の炭化材出土状況（南から）

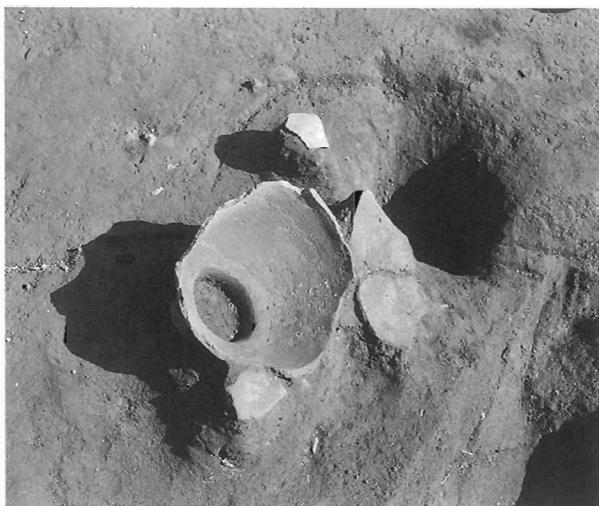


4. SH05炉の検出状況（西から）



5. SH05北西部の遺物出土状況（南東から）

図版13 平椎遺跡



1. SH05 P 5 付近の遺物出土状況（南西から）



2. SH05 P 4・P 5（南から）



3. SH05北西縁の遺物出土状況（西から）



4. SH05西縁の礫破片出土状況（東から）



5. SH05の掘方（西から）

平椎遺跡 図版14



1. SH06 (東から)



2. SH06炉 (東から)



3. SH07炉 (南西から)

図版15 平椎遺跡

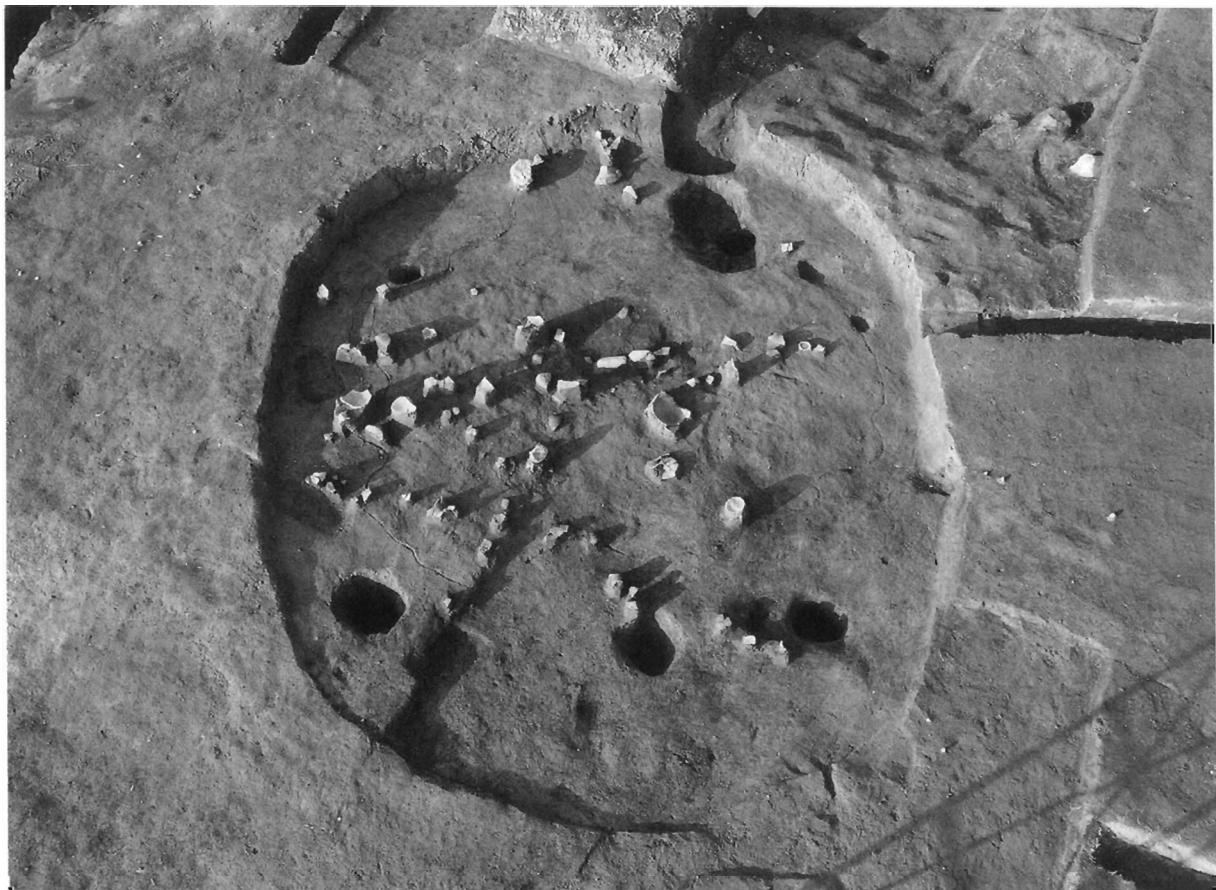


1. SH07 (西から)

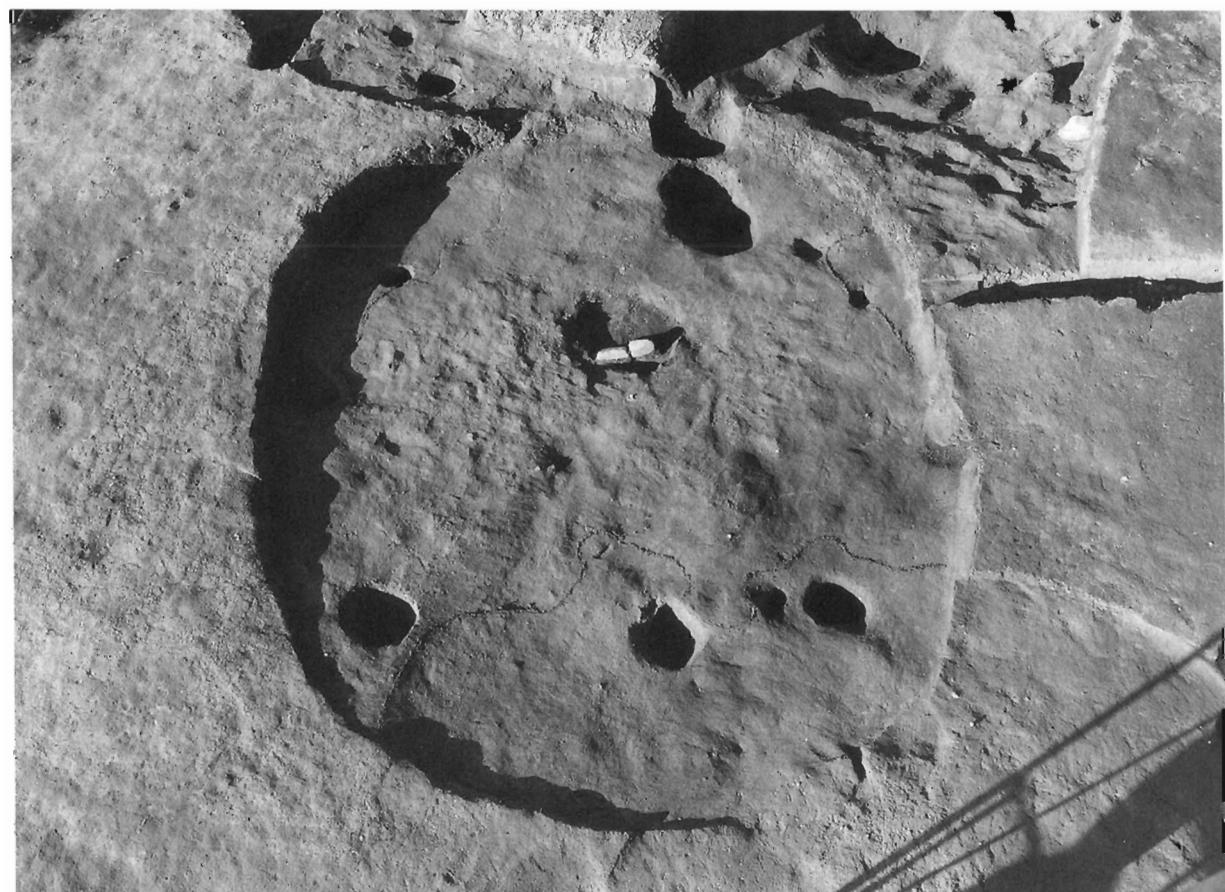


2. SH07の掘方 (南東から)

平椎遺跡 図版16



1. SH08遺物出土状況（南から）



2. SH08（南から）

図版17 平椎遺跡



1. SH08北縁の遺物出土状況（南東から）



2. SH08の掘方（南東から）



3. SH09（南から）

平椎遺跡 図版18



1. SH10 (南から)



2. SH13A～C (南西から)



3. SH11北東部の遺物出土状況 (南西から)

図版19 平椎遺跡

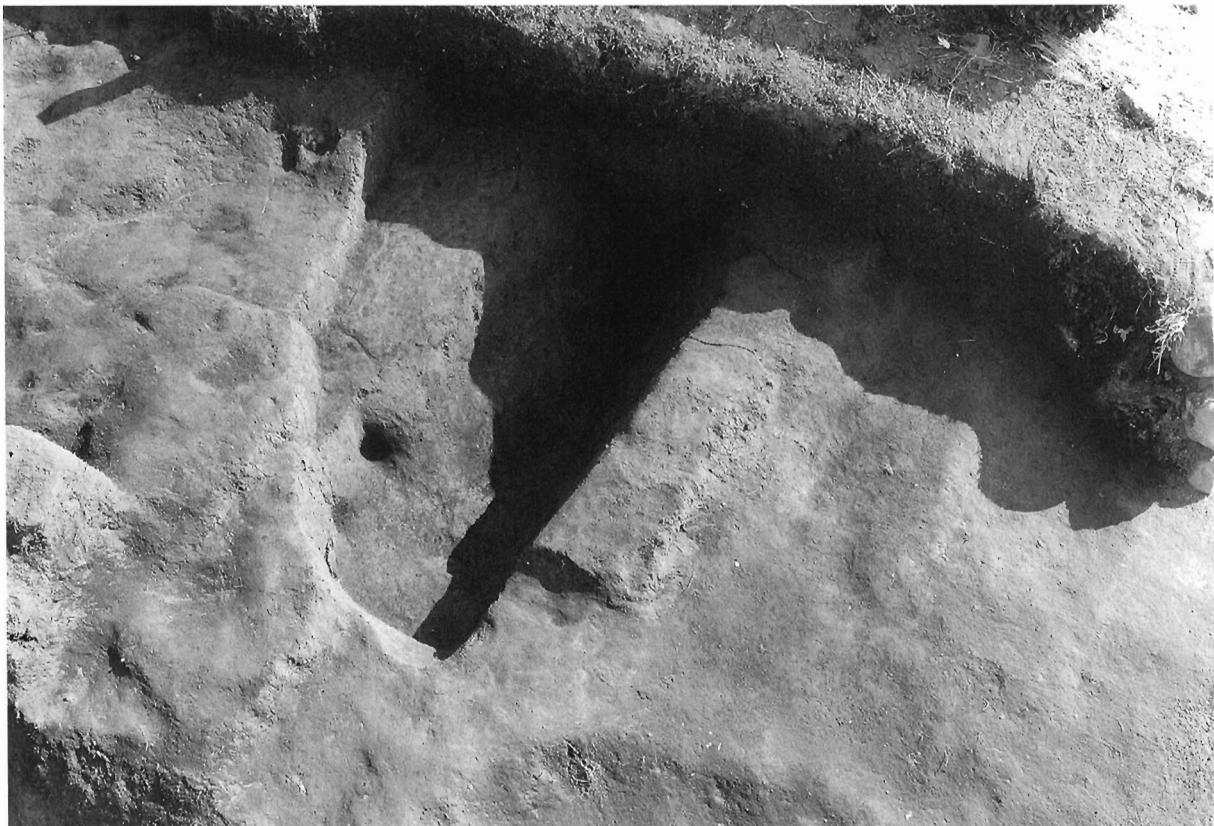


1. SH11の掘方（南東から）



2. SH12（東から）

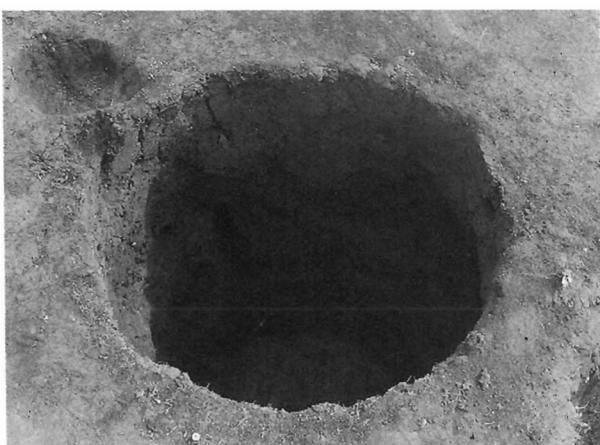
平椎遺跡 図版20



1. SH14 (南西から)



2. SD02 (東から)



3. SK06 (南西から)



4. SD02中層上位の遺物出土状況 (北から)



5. SD02中層下位の遺物出土状況 (北上方から)

図版21 平椎第2号墳



1. 平椎第2号墳 検出状況（南西から）



2. 平椎第2号墳 列石検出状況（南西から）

平椎第2号墳 図版22

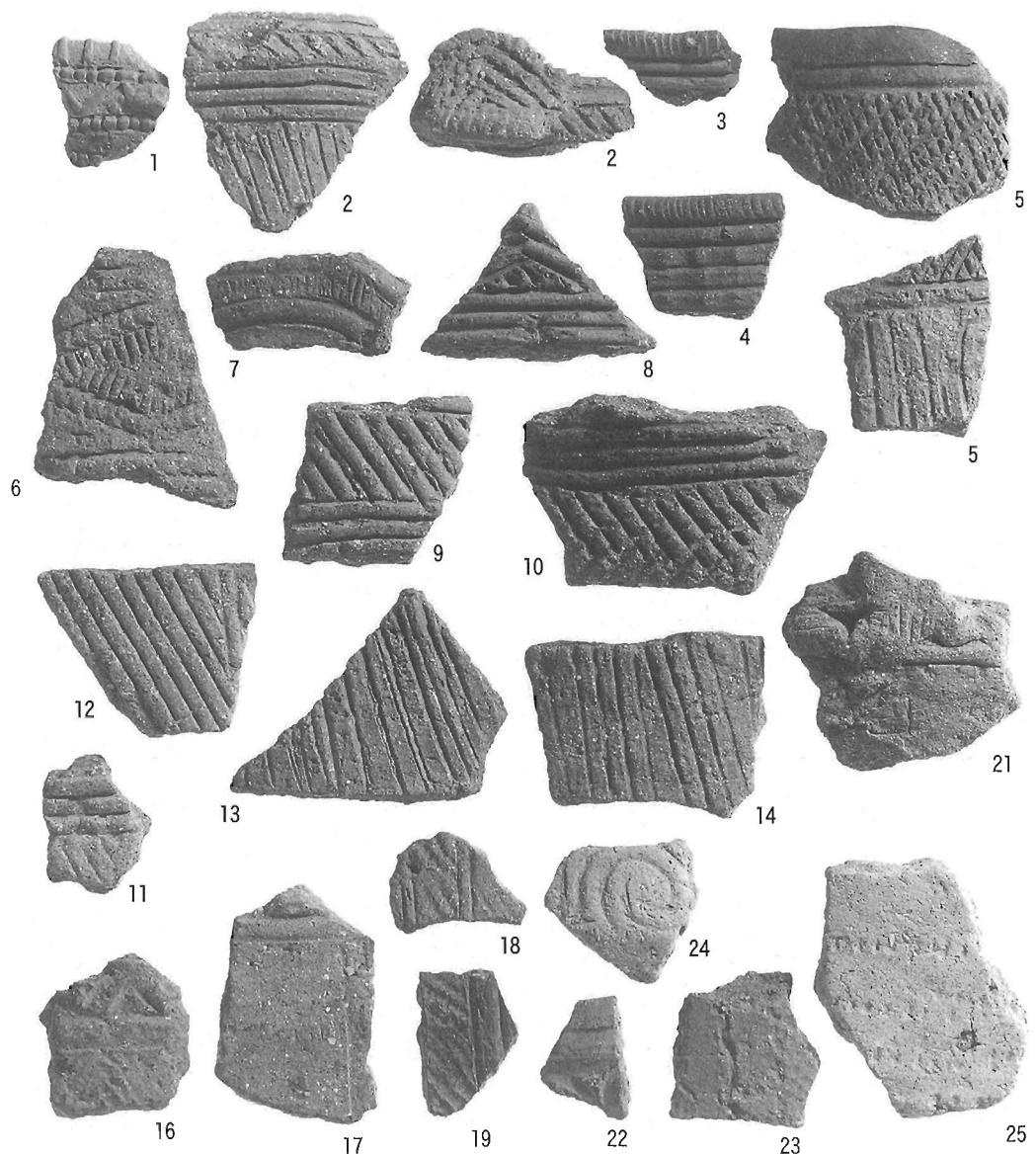


1. 石室残存状況（南西から）



2. 石室完掘状況（東から）

図版23 平椎遺跡



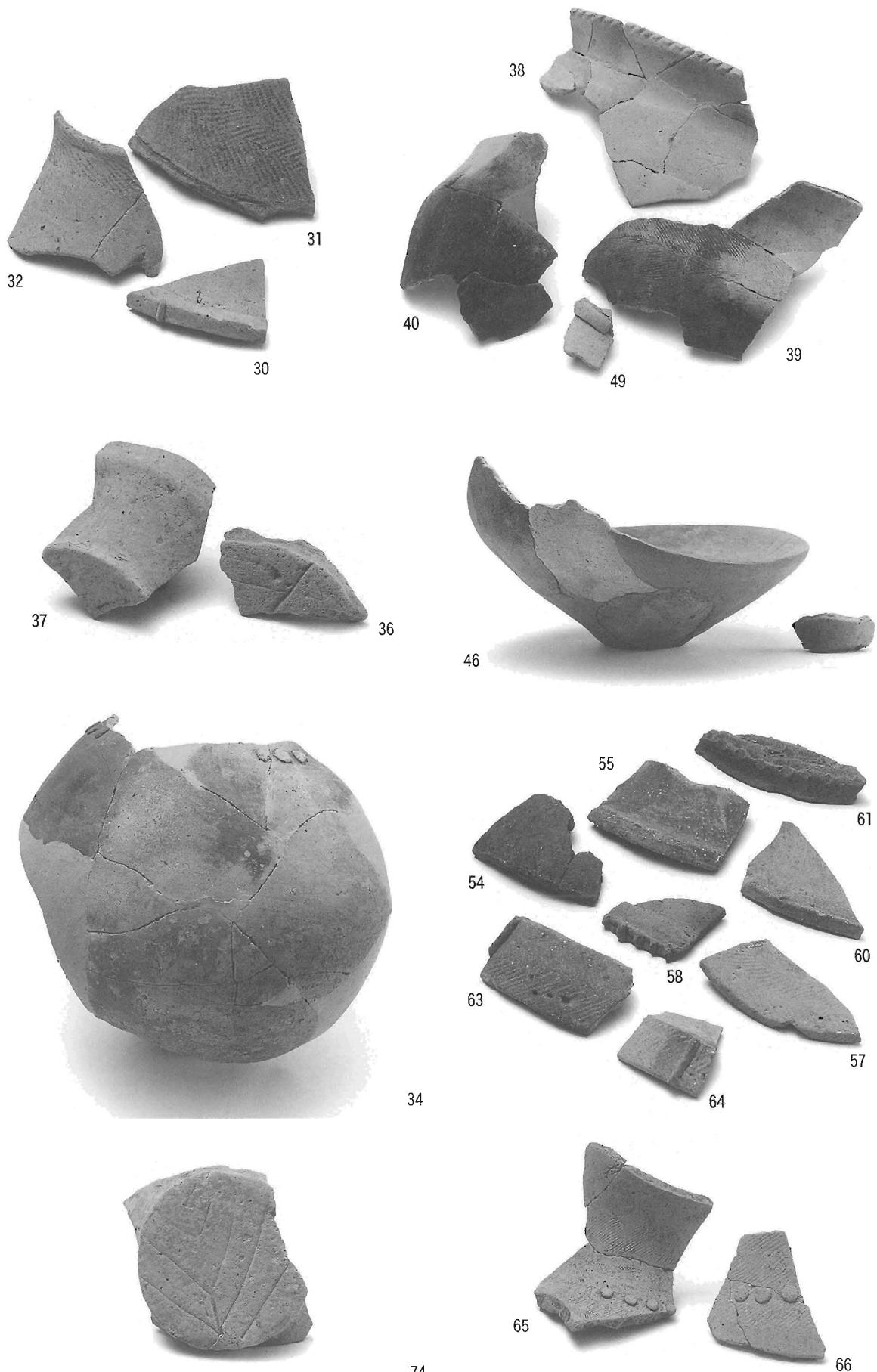
15



20

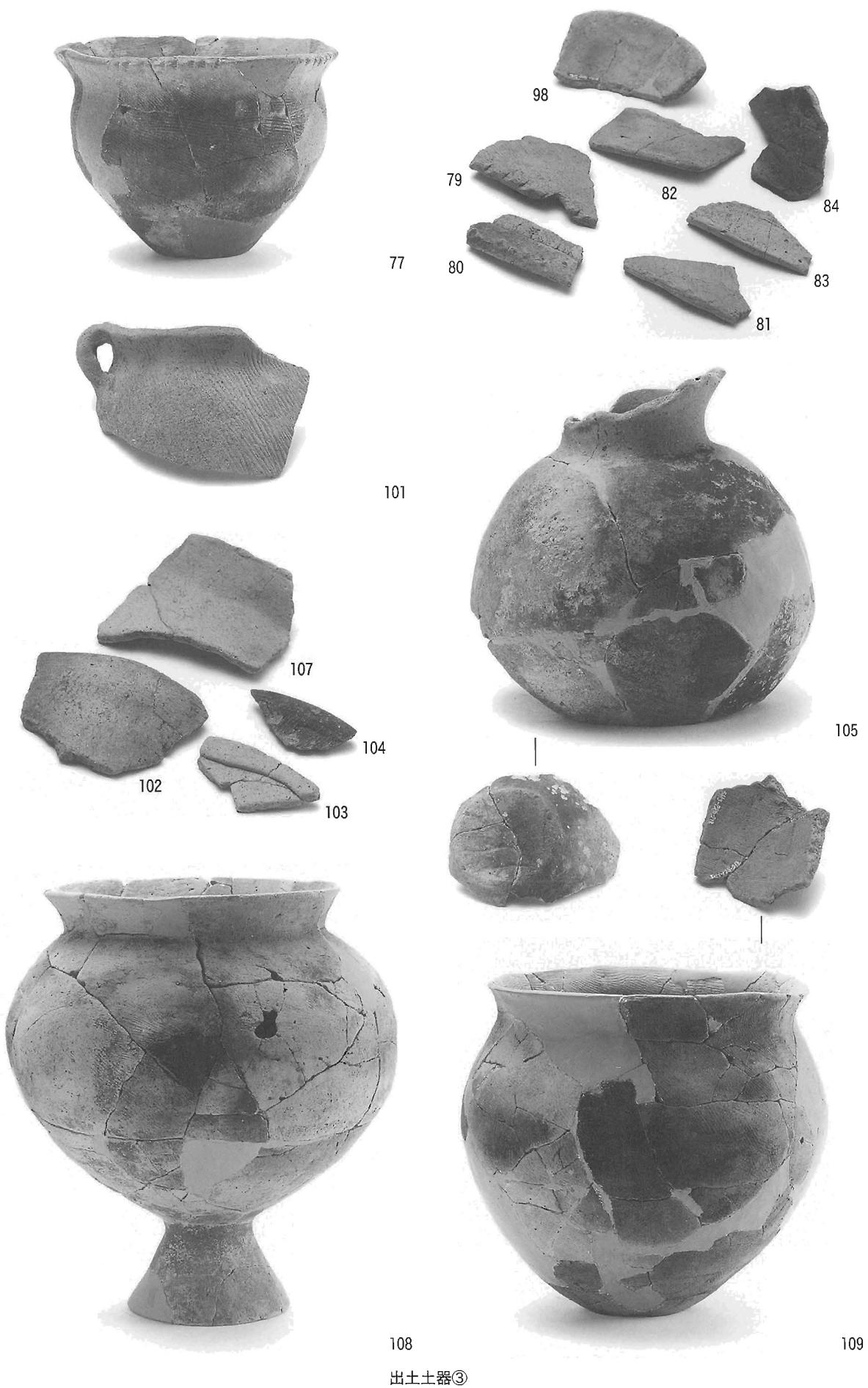
出土土器①

平椎遺跡 図版24



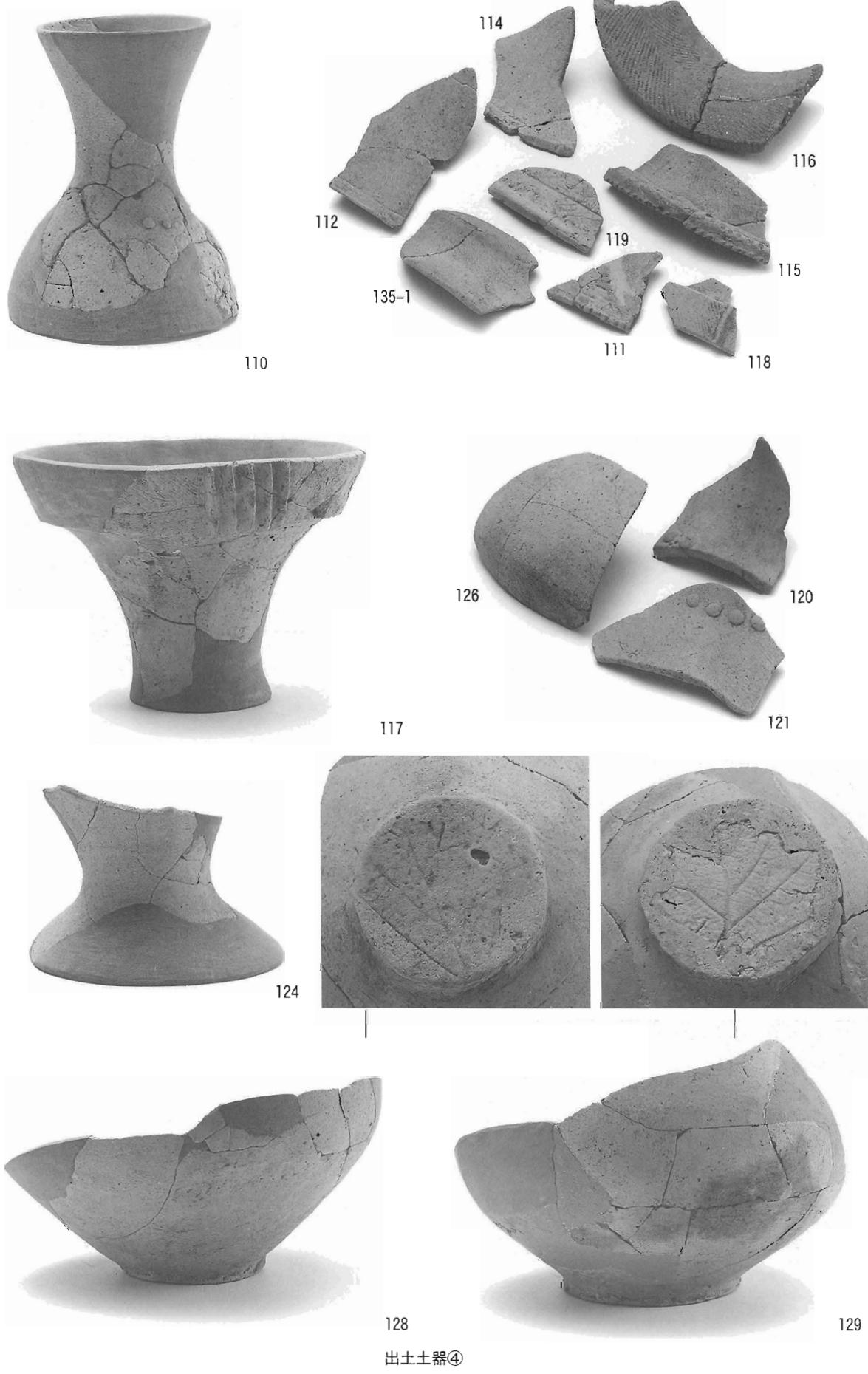
出土土器②

図版25 平椎遺跡



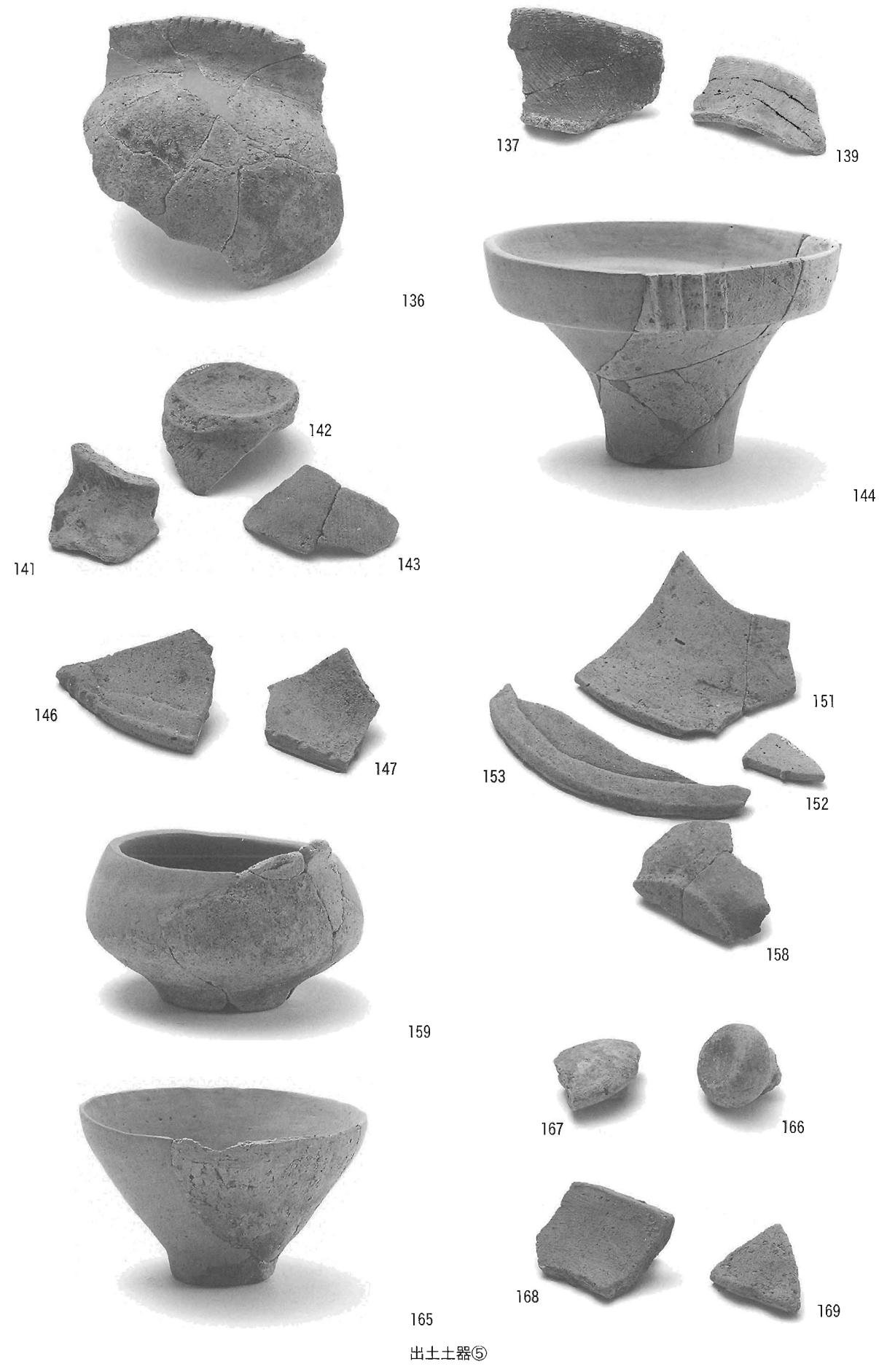
出土土器③

平椎遺跡 図版26



出土土器④

図版27 平椎遺跡



平椎遺跡 図版28



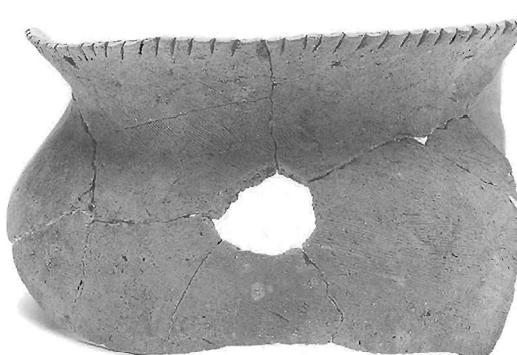
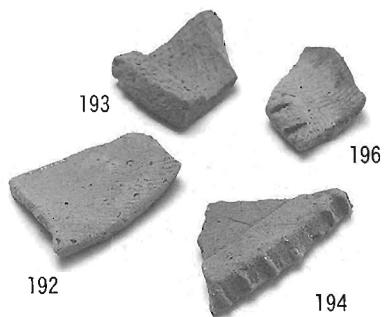
173



175



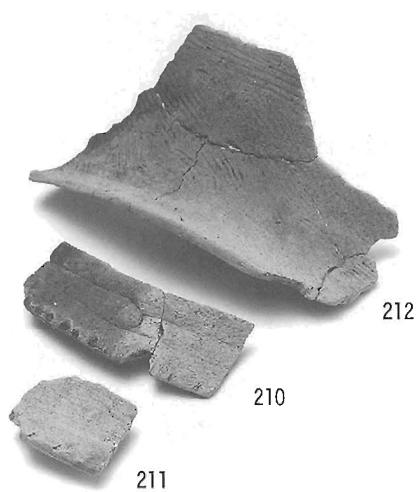
191



209



208



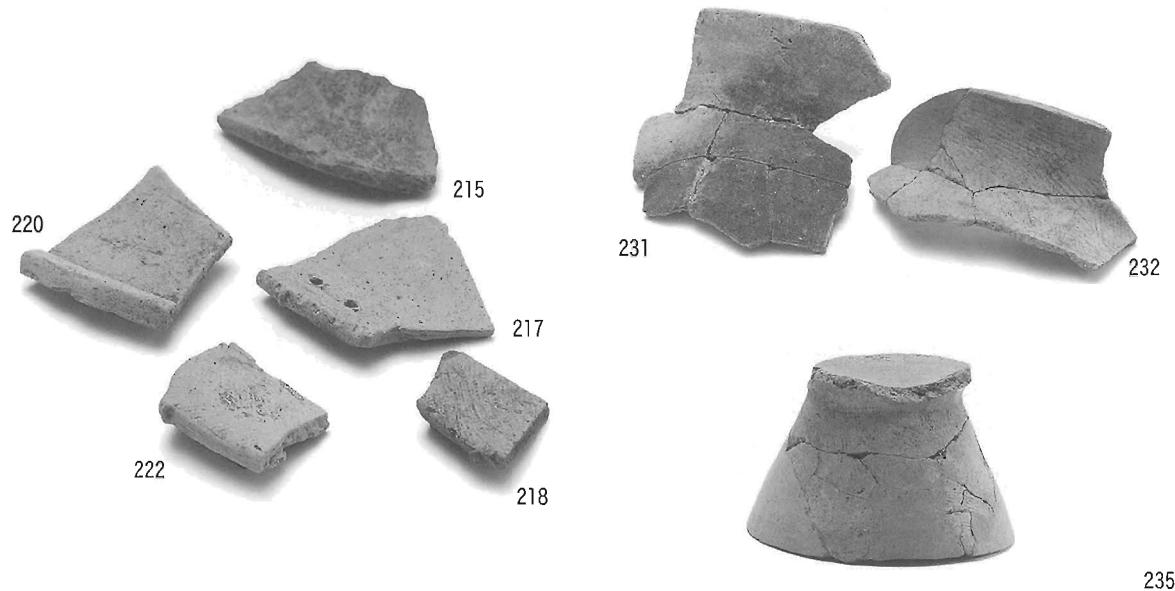
212



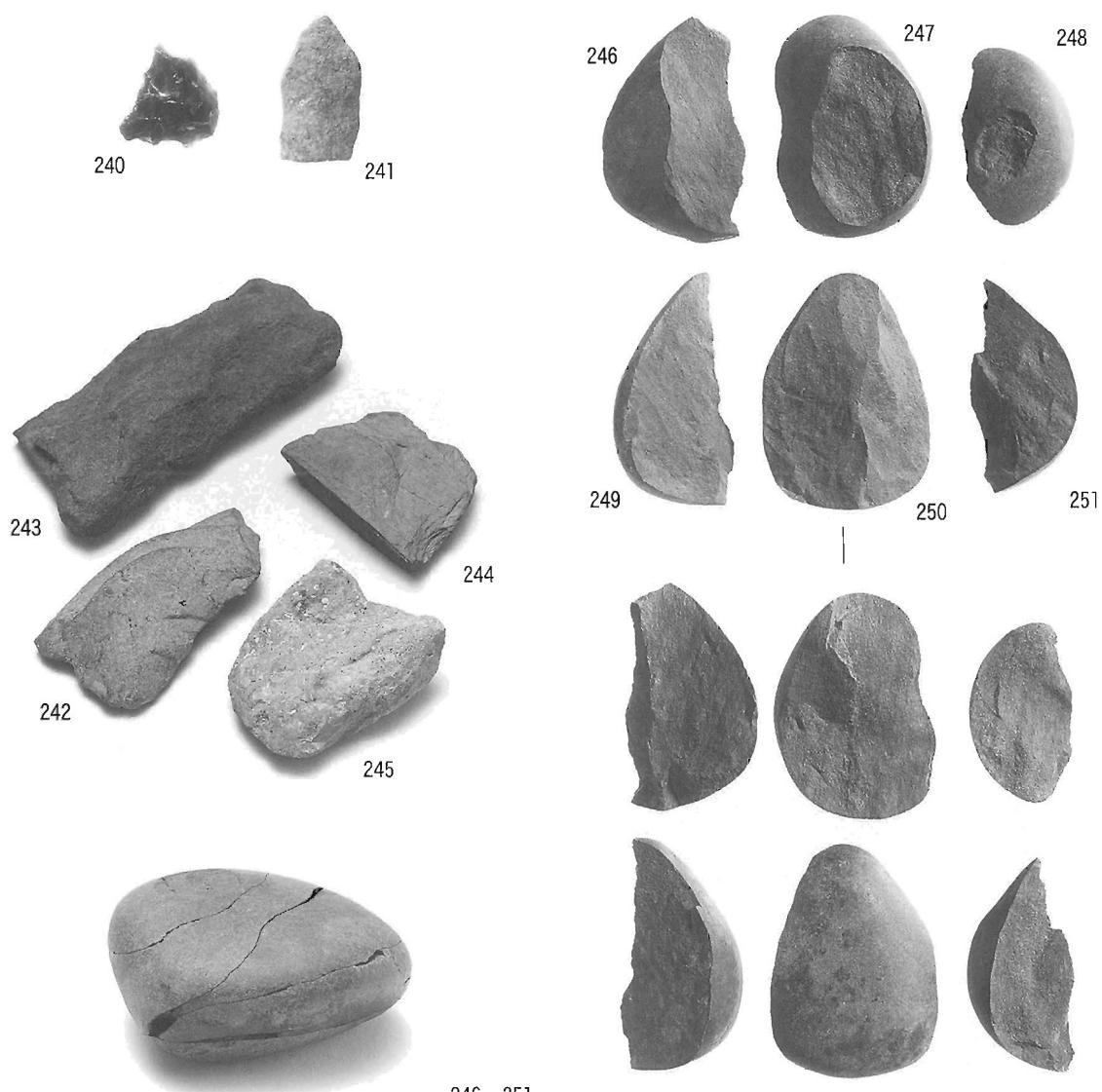
213

出土土器⑥

図版29 平椎遺跡



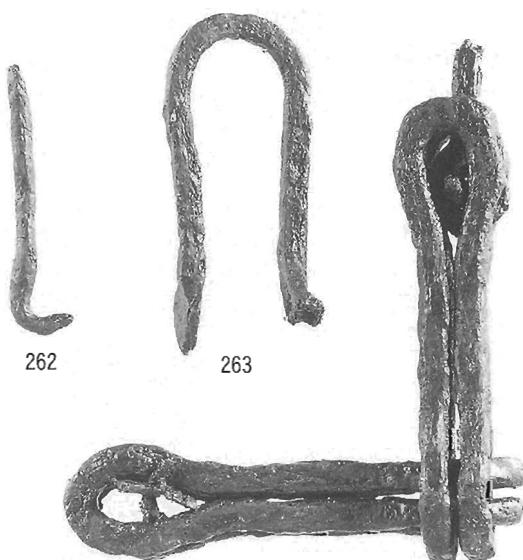
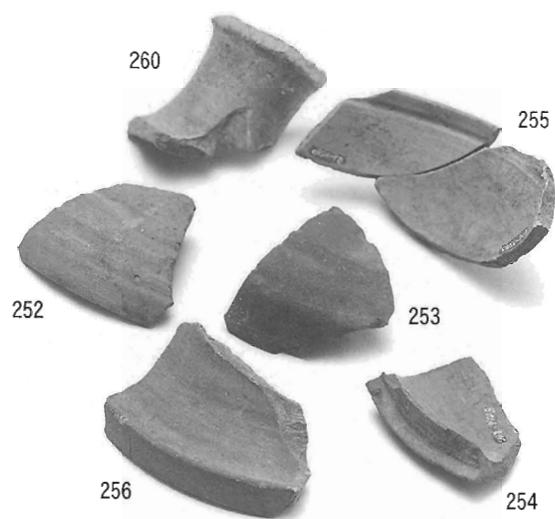
1. 出土土器⑦



246~251

2. 出土石器

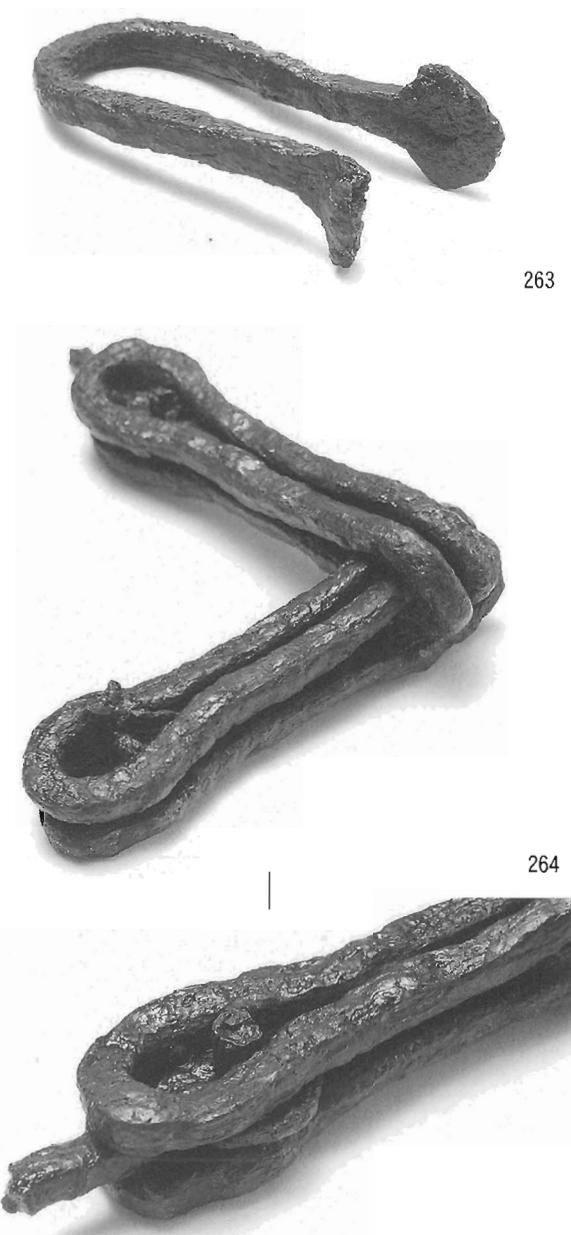
平椎第2号墳 図版30



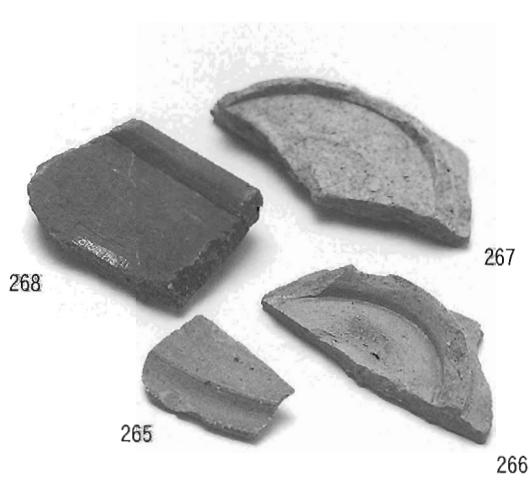
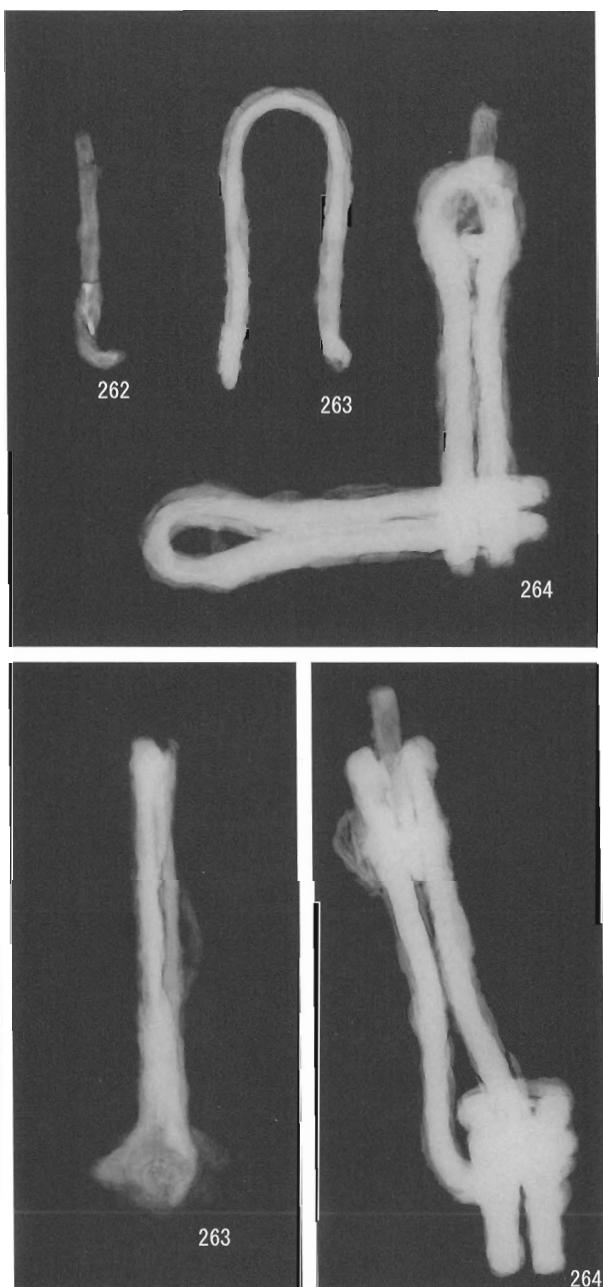
257

平椎第2号墳出土遺物①

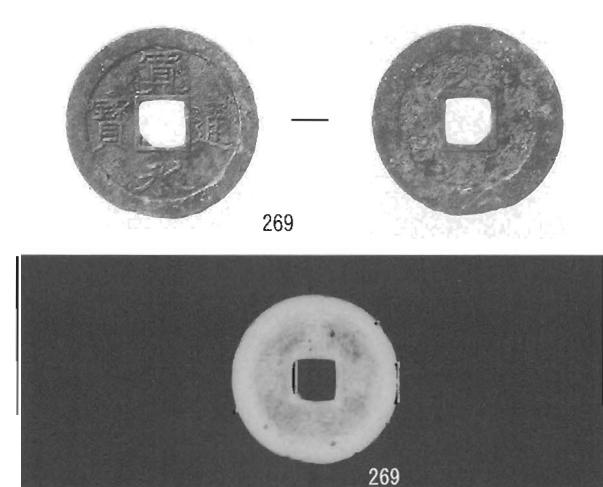
図版31 平椎遺跡・平椎第2号墳



1. 平椎第2号墳出土遺物②



2. 古代以降の遺物



報 告 書 抄 錄

ふりがな	ふじさん・あしたかさんろくのいせき
書名	富士山・愛鷹山麓の遺跡
副書名	第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	富士市-3
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告
シリーズ番号	第230集
編著者名	田村隆太郎・大谷宏治（編集・執筆）、柴田亮平・（株）加速器分析研究所（執筆）
編集機関	財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
所在地	〒422-8002 静岡県静岡市駿河区谷田23-20 TEL 054-262-4261（代）
発行年月日	2010年11月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		経緯度 (世界測地系)		発掘期間	発掘 面積	発掘 原因
		市町村	遺跡 番号	北緯	東經			
ひらじいせき 平椎遺跡 平椎古墳群	しづおかけんふじし 静岡県富士市 ますかわあざひらじ 増川字平椎 924ほか	22210		35° 9' 55"	138° 45' 6~7"	19981125~ 19990410	487.5 m ²	記録保存 (第二東名 高速道路建 設に伴う埋 蔵文化財発 掘調査)
ふじおかなかおいせき 富士岡中尾遺跡	ふじおかあざなかお 富士岡字中尾 2390-1	同 22210		35° 00' 35"	138° 44' 16"	19980911~ 19990129	470m ³	
所収遺跡名	種別	主な年代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
富士岡中尾 遺跡	散布地	縄文早期～ 後期（、弥 生中期？）	溝状遺構 (自然流路) 1条	縄文土器・石器 (石鏃・スクレイ パー・石斧・石 錐・磨石・敲 石・台石)	縄文時代早期の野島式、前期の諸磯式、清水 ノ上式、前期末～中期初頭の五領ヶ台式、後 期の型式不明の土器のほか、前期の北白川下 層式が出土。また、弥生時代中期の可能性が ある土器片が出土した。			
平椎遺跡 平椎古墳群	集落	弥生後期～ 古墳前期	竪穴建物16 軒、溝2条、 土坑6基ほ か	弥生土器・石器 (焼礫)	弥生時代後期前半の竪穴建物と後期末～古墳 時代前期初頭の竪穴建物が出土。特に弥生時 代後期前半の竪穴建物からは豊富な土器が出 土した。また、後期前半の断面V字形の溝が 確認でき、条濠（環濠）である可能性が高い。			
	古墳	古墳終末期	古墳1基 (平椎第2号 墳)	須恵器・馬具 (鏡吊金具)	古墳時代終末期の横穴式石室を埋葬施設とす る平椎第2号墳を発見。残存状況は良好では ないが、馬具と須恵器が出土した。			
	散布地	縄文早期・ 前期末～ 中期初頭	なし	縄文土器・石器 (石錐・スクレイ パー・尖頭器・ 打製石斧・磨製 石斧)	縄文時代早期の清水柳E類および前期末～中 期初頭の五領ヶ台式土器ならびにその併行期 の土器・石器			
		平安～江戸	なし	陶器・銅錢（「寛 永通寶」）	平安時代（10世紀代）の灰釉陶器、駿東型甕、 江戸時代の輪禿皿、銅錢が出土。			

平椎遺跡は、これまで様相の不明確であった愛鷹山南麓の弥生時代後期に位置づけられる集落であり、条濠（環濠）を伴っていた可能性が高い。堅穴建物は弥生時代後期前半（雌鹿塚I・II式期）と弥生時代末～古墳時代初頭（大廓I・II式期）に位置づけられる。この間の後期後半の堅穴建物や遺物は確認できなかったため、弥生時代後期前半に集落が成立した後、後期後半に一旦集落が機能を停止し、再び弥生時代末に集落の形成が行われたことが判明した。

弥生時代後期前半の竪穴建物は平面積円形で、弥生時代末～古墳前期初頭のそれは方形あるいはそれに近い隅丸方形の建物で、主軸方位や炉の特徴も異なっている。

出土した弥生土器は、基本的に東駿河地域の土器様式であるが、中には南関東系、伊勢湾岸系の土器が確認でき、平椎遺跡の集落を造営した集團が広い交流範囲をもっていたことが想定できる。

平塚第2号墳は、古墳時代終末期の横穴式石室墳であるが、周囲に古墳があまり確認されていない地域であり、古墳時代の丘陵地開発における重要な資料となる可能性が高い。

富士岡中尾遺跡は、縄文時代早期～後期に亘り断続的に人為が及んだ遺跡である。近畿地方の北白川下層式土器が搬入された可能性が高く、近畿地方との交流も持った集団が存在した可能性が高いことが判明した。

要 約

出土した弥生土器は、基本的に東駿河地域の土器様式であるが、中には南関東系、伊勢湾岸系の土器が確認でき、平椎遺跡の集落を造営した集団が広い交流範囲をもっていたことが想定できる。平椎第2号墳は、古墳時代終末期の横穴式石室墳であるが、周囲に古墳があまり確認されていない地域であり、古墳時代の丘陵地開発における重要な資料となる可能性が高い。富士岡中尾遺跡は、縄文時代早期～後期に亘り断続的に人為が及んだ遺跡である。近畿地方の北白川下層式土器が搬入された可能性が高く、近畿地方との交流も持った集団が存在した可能性が高いことが判明した。

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第230集

富士山・愛鷹山麓の遺跡

第二東名No.48・CR20地点

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

富士市-3

平成22年11月30日

編集・発行 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
〒422-8002 静岡県静岡市駿河区谷田23-20
TEL (054)262-4261(代)
FAX (054)262-4266

印 刷 所 松本印刷株式会社
〒421-0303 静岡県榛原郡吉田町片岡2210
TEL (0548)32-0851(代)

